少年叢書
漢文學講
義廿四編

日本外史講義

三

特105
910

始

少年鼓吹書

漢文學講義

定價各册金五十錢

壹編 增訂 十八史略講義 上
二編 增訂 正文章軌範講義 全
三編 增訂 續文章軌範講義 全
四編 增訂 十八史略講義 下
五編 增訂 四書講義 全
六編 增訂 唐宋八家文講義 一
七編 增訂 史記列傳講義 一
八編 增訂 史記列傳講義 二
九編 增訂 史記列傳講義 三
十編 增訂 史記列傳講義 四 附項羽本紀列傳
十一編 增訂 唐宋八家文講義 二
十二編 增訂 唐宋八家文講義 三
十三編 增訂 唐宋八家文講義 四 附用字格

十四編 增訂 老子莊子講義 全
十五編 春秋左氏傳講義 一
十六編 春秋左氏傳講義 二
十七編 春秋左氏傳講義 三
十八編 春秋左氏傳講義 四
十九編 三體詩唐詩選講義 全
二十編 易經書經講義 全
廿一編 詩經講義 全
廿二編 日本外史講義 一
廿三編 日本外史講義 二
廿四編 日本外史講義 三
廿五編 日本外史講義 四
廿六編 韓非子講義 全
廿七編 武經七書講義 全

特105
910

日本外史講義卷之十一

賴襄子成原著　興文社編輯所講義

足利氏後記

武田氏

上杉氏

武田氏。源義光裔也。義光子義清。稱武田冠者。從父受射。傳伯父義家之旗。及無楯之甲。世居甲斐。義清孫信義。及子信光等。從源頼朝起。數有戰功。與逸見小笠原氏。分領甲斐。頼朝移小笠原氏於信濃。以加藤氏代之。以及足利氏之時。信光後十餘世。曰信滿。上杉禪秀之亂。信滿以與之連婚。爲逸見所讒。自殺。二子信重。信長。信重與族父信元逃爲僧。信長依加藤氏。與逸見鬬。足利持氏伐而降之。欲以其邑盡附逸見。將軍義持不肯。賜之於信元。信元死。子幼。其將跡部專國。招信重爲假主。結城之役。

大正 3. 12. 1 内交

信重有功。新充守護。乃誅跡部。逸見。加藤皆臣屬焉。

【字解】【源義光】……新羅三郎と稱す。義家の弟なり。【裔】……音エイ。後裔、末孫。【無楯之甲】……楯無しの鎧。源家に傳へしところの八甲の一。【信義】……武田太郎。【信光】……武田大膳大夫。【源頼朝】……征夷大將軍。【逸見】……或は邊見に作る。上總介光長。信義と孿生の子なり。按ずるに逸は邊の草書の誤りしならんか。【加藤】……加藤景廉。【上杉禪秀之亂】……禪秀は卽ち氏憲なり。應永中、足利滿隆とともに、足利持仲を擁して、足利持氏を攻めしを云ふ。事は足利記に見ゆ。【小笠原氏】……左京大夫長清。【信重】……太郎。【信長】……六郎。【族父】……父の從弟、父のまたいとこ。【跡部】……上野介。【專國】……ひとり國政を取り捌く。【結城之役】……永享年中に、持氏誅せられ、結城清朝、其遺孤春王、安王を奉じて、亂を作し、結城城に據る、將軍義教伐ちて之を誅す。事は足利記に見ゆ。この役に信重功あり、甲斐守護に充てらる。

【講義】武田氏は、新羅三郎源義光の後裔である。義光の子義清は、武田冠者と稱して、父に就いて射術を習ひ受け、又、伯父八幡太郎義家の旗と楯無の鎧とを讓られて、代々甲斐國に居つた。義清の孫信義、及び子信光等は、源頼朝に從つて起り、度々戰爭の手柄があつて、逸見、小笠原氏とともに、甲斐國を分けて領地として居つたが、頼朝は、小笠原氏を信濃國に移し、加藤氏をその代りとして甲斐の一部分を領せしめ、かくて、足利氏の時代に及んだ。信光の後十餘代にして、信滿といふ者があつたが、上杉禪秀入道の變亂の時に、信滿は禪秀入道と緣者のつゞき合ひであるので、逸見に讒言されて、その爲めに自殺した。信滿には二人の子があつて、信重、信長と云つた。信重は、父信滿の又いとこなる信元とともに、逃げて坊主となつた。信長は、加藤氏にたよつて、逸見と闘つたが、足利持氏が征伐して、之を降參させ、その領地をば殘らず逸見に與へやうと思うたけれども、時の將軍義持が承知せず、之を信元に賜はつた。信元が死んだときに、その子は幼少であつたので、その部下の大將跡部といふ者が、主君の幼少なるを無いがしろにして自分勝手に一國の政治を取り捌き、信重を呼び寄せて、假の主君として置いた。結城の戰役に、信重は、手柄があつて、新に甲斐の守護職となされたので、そこで、跡部を誅殺した。逸見、加藤は、いづれも皆、家來として附き從つた。

信重後五世。曰信虎。與駿河豪傑久島某。戰而勝之。以是日生男。因名勝千代。長曰晴信。沉毅多權變。信虎愛少子信繁。欲廢晴信。晴信故爲癡騃狀。以自晦。與信繁角材技。輒出其下。或佯墮馬。爲人扶起。諸將皆侮晴信。晴信獨與駿河國主今川義元相結託。義元。其女兄夫也。天文五年。義元爲奏請。以晴信爲嫡嗣。加首服。任大膳大夫。兼信濃守。

【字解】【信虎】……左京大夫と稱す。【久島某】……上總介。一に福島に作る。【沉毅】……音チンキ。落ちついて辛棒づよく能く事に堪ふること。【權變】……機權變數。いつはりの計。【信繁】……二郎と稱す。天文二十二年、川中島に於て戰死す。【故】……ことさらに、わざと。【癡騃】……音チガイ。癡は不慧なり、騃は無知なり。おろかなること。【自晦】……みづから〳〵らます。自分で自分の才能器量をかくしつゝむ。以て忌害を免るゝ也。【角材技】……材能技藝をくらべる。【結託】……互に結び親む。互に結びつきたよる。【女兄夫】……姉むこ。【天文】……後奈良帝の時の年號。【加首服】……元服する。【大膳大夫】……大膳職は諸國より獻上する雜物御膳諸食物等の司なり。大夫は其長官なり。

【講義】信重の後五代目を信虎と曰つたが、駿河の豪傑久島某と戰爭して、之に勝ち、其日に男子を生んだので、それで、勝千代と名づけ、成長してから、晴信と曰つた。晴信は、おちついて辛棒づよく、謀略に富んで居つたが、父信虎は、幼少なる子信繁を寵愛して、長子の晴信を廢嫡しやうと思うた。そこで、晴信は、わざと、馬鹿者の樣子をして、自分で自分の器量材能をつゝみかくして居つた。信繁と、材能技藝をくらべるときは、いつでも、其下に出で、かつて一度も勝利を得たことは無く、あるひは、いつはつて馬から落ち、人に扶け起して貰つたりなどした。諸將は皆、晴信を侮つて居つた。晴信は、たゞ駿河の國主今川義元と、互に親み結んでたよつて居つた。義元は、晴信の姉婿である。天文五年に、義元は、晴信の爲めに、朝廷に奏上して請うて、晴信を以て跡嗣となし、元服して、大膳大夫に任ぜられ、信濃守に兼任せらるゝことになつた。

十一月。信虎出兵信濃。攻海口城。城主平賀源心善戰。信虎以兵八千攻之。踰月不能拔。會大雪。諸將議曰。時已窮臘。請班師。敵亦必不尾也。信虎從之。晴信請自殿。信虎笑曰。敵必不尾。而請殿。如二郎。必不然也。晴信固請。以兵三百殿。後大軍數里。止舍。親警其兵曰。勿釋甲。勿卸鞍。食於馬。而後食。五更卽發。唯吾所嚮是視。兵皆竊嗤之曰。風雪如此。何警爲。五更。晴信卽發。還向海口。與三百騎冒雪馳。昧爽抵城。源心已散遣其兵。獨與百人留守。晴信分兵爲三。自以一隊入城。二隊揚幟城外。應之。城兵不測其衆寡。不戰而潰。乃斬源心。以其首歸獻。一軍大驚。信虎

不レ賞曰。舍レ城而歸怯也。諸將心服ニ晴信。而不ニ敢稱ニ其功。晴信仍有ニ愚色。

【字解】【源心】……入道。【窮臘】……音キウラウ。窮は極なり。臘は建丑の月なり。十二月のこと。【班師】……班は還すなり。軍勢を引きかへす。【不尾】……尾擊せざる也、あとをつけて追ひ擊つことをせぬ。【殿】……しんがり。軍行に後に在るを殿と云ふ。【二郎】……信繁を云ふ。【如二郎必不然也】……信繁なれば、きつと左樣な事を言はぬ。【止舍】……とゝまげ宿る。【勿釋甲】……鎧をぬいではならぬ。釋は解く也、ぬぐ。【勿卸鞍】……鞍をおろすな。【五更】……寅の時、卽ち午前四時頃。一夜を五つに分くるときは、初更(一更とも甲夜とも云ふ)は、戌の時、卽ち午後八時。二更(乙夜とも云ふ)は、亥の時、卽ち午後十時。三更(丙夜とも云ふ)は、子の時、卽ち午後十二時。四更(丁夜とも云ふ)は丑の時、卽ち午前二時。五更(戊夜とも云ふ)は寅の時、卽ち午前四時頃なり。【嗤】……笑ふ。【昧爽】……音マイサウ。夜明け方のまだ暗い時。【抵】……至る。【怯】……臆病。【不敢稱其功】……晴信に心服して居りながらも信虎に遠慮して功をほめ立てしも也。晴信時に年十六。【仍】……なほ、矢張。【有愚色】……馬鹿な顏付をして居る。

【講義】十一月に、信虎は、兵を信濃に繰り出して、海口城を攻めた。城主平賀源心入道は、戰爭することが上手であつたので、信虎は、八千人の兵を引き連れて之を攻めたけれども、月を越えて十二月になつても、攻め落すことが出來なかつた。折しも、大雪がふつたので、諸將は、相談して曰ふには、今はもはや十二月になりましたことなれば、どうぞ軍勢を引きかへしたいと思ひます。いま軍勢を引きかへしましたとても、敵も亦、屹度、後をつけて追つかけて來ることは御座りますまいと曰つた。信虎は、此言に從ふことにした。そこで、晴信は、自ら殿(シンガリ)することを請うた。すると、信虎は笑つて曰ふには、敵があとから追つかけて來て擊つことはきつと無いのであるに、御前は殿をしたいと請ふが、二郎などは、そんな事を申し出すことは、屹度無いのであると曰つた。晴信は、是非にと請うて、三百人の兵を引き連れて殿し、本隊におくれること數里の處で、止まり宿つて、自身に、其部下の兵を警戒して曰ふには、鎧をぬいでは相成らぬ。馬から鞍を解きおろしては相成らぬ。先づ馬に秣を食はせて、その後に兵糧を食へよ。寅の刻に出發するが、どこへ行かうとも、唯吾が向つて行くところを見よと曰つた。兵士は、皆、ひそかに笑つて曰ふには、風が吹き雪が降ることかくの如くであるに、何も警戒するには及ぶまいと曰つた。かくて、寅の刻頃になると、晴信は出發し、引き返して、海口の方へ向つて、三百騎の兵と、雪中をかまはず馳せて、夜明け方に、城に到著した。源心は、武田氏の軍勢はすでに退却したので、已に其軍勢を解散して立ち去らしめて仕舞つて、たゞ三百人の兵とともに留まり守つて居つた。そこで、晴信は、自分の兵を分つて、三隊となし、自身に一隊を引き連れて、城に討ち入り、他の二隊は、幟を城外に揚げて、之に應援したので、諸將は、相兵は、敵の多いか少いかを測りかねて、戰爭をせずして、くづれた。そこで、晴信は、源心を斬り、其首を以て、歸つて差し出した。信虎の軍中皆、驚いた。然るに、信虎は、格別其功を褒めずして曰ふには、一旦敵の城を攻め落しながら、それを捨てゝおいて引き返して來たのは、臆病であると曰つた。諸將どもは、心から晴信に感服して居つたけれども、信虎の氣をかねて、しひて其功をほめたゝへることをしなかつた。晴信は、矢張、馬鹿な樣子をして居つて、以前と少しも變つたところは見えなかつた。

信虎狂暴。賞罰無レ常。國人苦レ之。晴信陰與ニ老臣飯富兵部。板垣信形ニ謀。益結ニ今川義元。義元素病ニ信虎。強亢。欲ニ助ニ晴信ニ而擅ニ其國。信虎不レ覺也。七年。

五月。信虎欲レ逐ニ晴信於ニ駿河。因託ニ之於ニ飯富氏。而自適ニ駿河。計ニ之義元。義元留ニ信虎ニ不レ返。而晴信自立於ニ甲斐。諸宿將莫レ不ニ頫レ首聽ニ命。而鄰國聞レ變。欲レ乘ニ其隙。信濃士民。多去附ニ村上義清。六月。諏訪城主諏訪頼茂。深志城主小笠原長時。合ニ兵一萬ニ來攻。晴信令ニ騎將原加賀留守。而自以ニ六千人。出拒ニ韮崎。加賀聚ニ府中農商。得ニ五千人。人執ニ一紙旗。鼓譟而出。敵乃退走。

【字解】【狂暴】……物狂はしく亂暴なること。【飯富兵部】……虎昌。俗に飯を誤りて飯となす。【強亢】……音キヤウカウ。強くして屈せぬこと。【適】……ゆく。【宿將】……故老の大將。【頫首】……頫は俯と同じ。頭をたれゝ也。【諏訪】……信濃に在り。【深志】……卽ち今の松本。【騎將】……騎兵隊の將。【原加賀】……國房。【韮崎】……甲斐に在り。

【講義】信虎は、物狂はしくあらくしく、人を賞罰するに、常のきまり無く、心の狂はしきときは、罰すまじき者をも罰し、機嫌のよいときは賞すまじき者をも賞すると云ふ有樣で、國人悉くこれに閉口した。晴信は、ひそかに、家老の飯富兵部、板垣信形と相談して、まづ今川義元に結託した。義元は、もとから、信虎がわる強くしてなかなか思ふやうに成らぬことを厄介に思うて居つたので、晴信を助けてそして自分が其國を勝手にしやうと思つて居つたのであるが、信虎は、その事を感付かなかつた。天文七年の五月に、信虎は、晴信を駿河に放逐しやうと思うて、そこで、晴信を飯富氏に預けておいて、そして自分は駿河に行つて、此事を義元に相談した。すると、義元は、信虎をとゞめとらへて、其國に返さなかつた。そして、其間に、晴信は、甲斐に於て自立して領主となつたが、諸々の故老の大將どもの、頭を垂れて晴信の命を聽かぬものは無かつた。しかるに、隣國にては、この事變を聞き及んで、其隙間に付け込んで何事かをしやうと思ひ、又、信濃の士民は、去つて村上義清に附き從ふものが多かつた。六月に、諏訪の城主諏訪頼茂、深志の城主小笠原長時が、兵一萬を合はせて、來り攻めたが、晴信は、騎兵隊の大將原加賀をして留まり守らしめて置いて、自身は、六千人を引き連れて、出かけて韮崎において之を拒いだ。加賀は、府内に居住せる農民商人を集めて、五千人を得たので、人ごとに一本づゝの旗を持たせて、大鼓を打ち鳴らし喊の聲を揚げて、打つて出でたので、敵は、そこで、之を大軍と思うて、驚いて、退却して走つた。

晴信寖驕恣。耽ニ宴樂ニ。喜ニ詩賦ニ。不レ視ニ國政ニ。群臣莫ニ敢諫ニ。板垣信形稱レ病。潛

延一僧善詩者於家。學詩數旬。乃出侍宴。請賦詩。晴信不信。強請而可。立就五題。晴信大喜曰。汝何遽能如此。信形因大諫曰。先君唯無道。故爲君所逐。今君復如此。得不復有如君者乎。晴信感悟。遂厲精爲政。

【字解】【寖】……やゝ、やうやく、いつとなく。【驕恣】……心おごりて我が儘勝手なること。【喜】……このむ。【延】……呼び入れる。【數旬】……旬は十日なり。【立】……たちどころに、卽座に。【就】……成す。【得不復有如君者乎】……君が先君を逐ひしが如く君を逐ふもの無からんや。【厲精】……精力をはげます。

【講義】晴信は、いつとなく、心たかぶり我が儘勝手を振舞ふやうになり、酒盛をして樂しむことにはまり込み、詩を作ることを好んで、國の政治を視ぬやうになつた。多くの臣下どもは、しひて之を諫言するものは無かつた。板垣信形は、病氣であると申し立てゝ、人知れず、一人の詩を作ることの上手な坊主を、自分の家に呼び寄せて、詩を作ることを稽古すること數十日にして、そこで、出かけて、晴信の宴席に侍し、詩を作りましやうと申し出でたが、晴信は、信形の言を信用しなかつたので、是非にと願つて、やつと許され、そこで、卽座に、五題の詩を作り上げた。すると、晴信は、大に喜んで曰ふには、汝は、どうして、俄にこんな事が出來るやうに成つたかと問うた。信形は、そこで、大に諫めて曰ふには、先殿樣は、たゞ無道であらせられた爲めに、それ故に、貴方に逐はれなされたので御座ります。今、貴方が、矢張り無道であらせらるゝこと此の如くで御座りますれば、ふたゝび貴方の樣な者が出かけて貴方の爲された樣に貴方を放逐いたす者が無いとも限りませぬ。どうぞ御氣をつけなされよと曰つたので、晴信は、ふかく其言に感じて、自分の非を悟り、とうとう、精を出して國政を執り行ふやうになつた。

十一年。三月。義清。長時。賴茂。與木曾義高。擧信濃兵來攻。諸將皆懼。晴信曰。四人合從。議必不一。可一戰而破也。乃佯浚溝高壘。四人以爲怯。進入境內。晴信夜發。乘霧雨逼擊。大敗之。四人再擧。至平澤。又擊破之。自是連年相攻。晴信每勝。

【字解】【木曾義高】……當に義昌に作るべし。蓋し木曾義仲の子義高に渉りて誤りしならん。下文は義昌に作る。【合從】……音ガツショウ。和睦して力を合はすこと。【議必不一】……相談が、屹度、一致せずしてまちくであるに相違ない。【浚溝】……溝をさらひ深くす。【平澤】……信濃に在り。

【講義】天文十一年の三月に、義清、長時、賴茂は、木曾義高とともに、信濃の軍勢を擧げて、來つて攻めやうとした。武田方の諸將は、皆、懼れた。しかるに、晴信は曰ふには、義清、長時、賴茂、義高の四人が連合したのであるから、其評議は、屹度、一致せずしてまちくになるに相違ない。一戰して破ることが出來るのであると曰つて、そこで、溝をさらひ深くし、とりでを高く築いて、用心堅固にして、專ら守備の計を取つた。四人は、晴信を臆病であると思うて、進んで境內に討ち入つた。すると、晴信は、夜出發して、雨降り霧深く立ち籠めたるときに附け込んで、逼り近づいて、大に之を破つた。四人は、再擧して、平澤まで來たが、又、擊つて之を破つた。是れより、年々引きつゞいて互に攻め合つたが、晴信が、そのたびごとに、勝つた。

晴信擧山本勘助。勘助三河人。眇目痿躄。嘗學兵於尾形某。以干今川氏。駿河舊臣皆侮易之。義元不奇也。勘助寄食數年。板垣信形聞其名。薦之晴信。晴信召見與語。大悅之。卽日與二百貫邑。賜名晴行。十一月。晴信以晴行計。取信濃九城。十三年。以信形計。誘殺諏訪賴茂。而納其女爲妾。明年。生男勝賴。稱四郎。晴信有長男義信。以爲嫡嗣。使勝賴承賴茂後。十四年。五月。與小笠原長時。及伊奈氏。戰于鹽尻嶺。破之。

【字解】【山本】……入道道鬼。【眇目】……音ベウモク。目つかち。【痿躄】……音ヰヘキ。痿は行くこと能はざる也、躄は兩足俱に廢るゝ也。あしなへ。【干】……求む。官祿を求むるを云ふ。【侮易】……音ブイ。あなどり輕んずる。【不奇】……格別すぐれた者と思はぬ。【寄食】……人の處に厄介になつて居ること。かゝり人となること。【二百貫】……鎌倉幕府以後、所領の田數を計るに貫高を用ひたれども、時勢の變遷と土地の遠近に關して、自ら差異あり。幾貫の所領は幾町幾段の田地にして、近世の幾石にあたること、定め難し。町段の數に分錢高を記したる書類を參考するに、一貫文畠地一段半に當るあり、田地二段に當るあり、或は三段に、或は四段半に、或は五段又五段半に當るありて、各地の收納錢高同じからず。又、貫高を以て石高に引き合はせたる諸說を參考するに、一貫文五斗にあたるあり、一石に當るあり、或は二石、或は二石五斗、或は二石七斗七升餘、或は四石、或は四石四斗餘、或は五石、或は五石五斗餘、或は十石、或は十五石餘、或は二十石、或は百石に當るあり云々と田制篇に見ゆ。されば、今こゝに、二百貫とあるも、或は八百石に當ると云ひ、或は二千石に當るといひ、諸說一定せず。【誘殺】……おびき寄せて殺す。【承】……うゝ、繼ぐ也。【鹽尻嶺】……信濃にあり。

【講義】晴信は、山本勘助といふものを取り立てゝ用ひた。晴信は、三河の人で、目つかちで、あしなへであつたが、嘗て兵法を尾形某に學んで、學成りて、今川氏に奉公せんと思うたが、駿河の舊臣どもは、皆、勘助の風采の擧らざるを見て、之を輕んじあなどり、義元も亦、之を格別す

られたる者とは思はなかつた。勘助は、か〳〵て、駿河にかゝり人となつて居ること數年であつたが、板垣信形が、その名を聞いて、之を晴信に推薦した。晴信は、そこで、勘助を召し寄せて面會して、與に談をして見て、大に氣に入り、すぐにその日に、二百貫の領地を與へ、名を晴行と賜うた。十一月に、晴信は、晴行の計略を以て、信濃の九城を取つた。天文十三年に、信形の計略を以て、諏訪頼茂をおびき寄せて殺し、そして其娘を入れて妾となし、明〳〵る年に、男子勝頼を生み、四郎と稱した。晴信には、長男の義信といふ者があつたので、之をば跡取りとなし、勝頼をして頼茂の後を繼がせることにした。十四年の五月に、小笠原長時及び伊奈氏と、鹽尻の峠に戰つて、之を破つた。

十五年。三月。攻二戸石城一。村上義清將二兵六千一來援。我先鋒甘利備前。横田備中等皆敗死。我軍將潰。晴行說曰。敵鋒不レ可レ遏。使二之右顧一則克。晴信曰。我兵且不レ從レ令。曷能使二敵如一我意一。晴行請假二後隊兵一。左旋而出。義清軍右顧。晴信軍氣復振。進擊破レ之。晴行以レ功食二八百貫邑一。乃往二駿河一謝。前嗤笑者。交レ口稱譽。義元悔レ之。

【字解】【戸石城】……信濃に在り。【甘利備前】……昌達。【横田備中】……忠量。【遏】……とゞむ、防ぎ止むる。【右顧】……右の方をふりかへり見る。【左旋】……音サセン。左の方へまはる。【嗤笑】……音シセウ。嘲り笑ふ。【交口稱譽】……口々に譽めそやす。

【考】天文十五年の三月に、晴信は、戸石城を攻めた。村上義清が、六千人の兵士を引き連れて、來つて戸石城を援けた。我が武田方の先陣の大將甘利備前、横田備中等は、皆、負けて討死したので、我が軍勢は、將に總崩れになろうとした。すると、晴行が說いて曰ふには、進んで來る敵の鋒先は、勢盛にして、とても防ぎ止めることは出來ませぬ。けれども、この敵をして右の方へふりむかせましたならば、我が軍が勝ちましやうと曰つた。晴信が曰ふには、我が軍勢でさへも、なか〳〵思ふやうにならぬのに、どうして敵の軍勢をして我が思ふやうにならしめることが出來やうぞと曰つた。そこで晴行は、請うて、後隊の兵士を借り受けて、左の方からまはつて打つて出ると、義清の軍勢は右の方へふりかへり見た。そこで、晴信の軍はまた勢盛んになつて、進み擊つて、義清の軍を破つた。晴行は、手柄があつたので、八百貫の領地を有することになり、そこで、駿河に行つて、以前に長い間寄食して居つた禮を述べた。以前に嘲り笑つて居つた者共が、口々に晴行をほめそやした。義元は、智謀ある晴行を用ひずして遂に隣國に失つたことを後悔した。

上杉氏將士。聞二甲斐兵弊一於二戸石一。以二一萬騎一踰二碓氷嶺一。晴信遣二信形一拒焉。而自繼レ之。九月。擊破二上杉氏軍一。眞田幸隆。及子昌幸皆有レ功。晴信又用二幸隆計一。誘殺二村上義清精兵五百一。十六年。八月。晴信取二志賀城一。義清出軍二上田原一。板垣信形將二前軍一。戰勝不レ備。義清窺二其怠一。悉二甲襲一殺之。晴信赴援。義清率二死士一。突二入其麾下一。與接レ刃墮レ馬。終大敗。

【字解】【上杉氏】……民部大輔憲政。【碓氷】……上野に在り。【精兵】……すぐり抜きの兵。【志賀】……信濃に在り。【上田原】……信濃に在り。【悉甲】……軍勢を殘らず繰り出す。【死士】……命知らずの兵士。【接刃】……打ち合ふ。

【考】上杉氏の將士は、甲斐の武田の軍勢が戸石に於て大分損害を受けたといふ事を聞いたので、兵二萬騎を引き連れて、碓氷峠を踰えて攻め入つた。晴信は、信形を派遣して之を拒がしめ、そして、自分は、あとから繼いで出かけ、九月に、擊つて上杉氏の軍を破つた。眞田幸隆及びその子昌幸は、皆、手柄があつた。晴信は、又、幸隆の計略を用ひて、村上義清のすぐり抜きの兵士五百人をおびき寄せて殺した。天文十六年八月に、晴信は、志賀城を攻め取つた。義清は、出かけて上野原に陣取つた。板垣信形は、味方の前軍の大將であつたが、戰に勝つて備をして居らなかつた。義清は、信形が怠つて居るのを窺ひ知つて、軍勢を殘らず繰り出して、之を不意擊して殺した。晴信は、出掛けて援けた。義清は、決死の士を引き連れて、晴信の旗下に突き入り、大將同志打ち合ひをしたが、義清は馬から落ちて、とう〳〵大に負けた。

十八年。八月。晴信略二地上野一。又與二小笠原長時一。戰レ于二諏訪原一。走レ之。十九年。三月。復略二上野一。聞二長時復出一而還。

【考】天文十八年の八月に、晴信は、土地を上野に侵略し、又、小笠原長時と、諏訪原に戰つて、之を敗走させた。十九年の三月に、ふたゝび、上野を侵略したが、長時がふたゝび諏訪原に出かけて來たと云ふことを聞いて、引き返した。

時今川義元與二相模國主北條氏康一婚。爲二氏康一來請二晴信一曰。氏康與二上杉氏一戰。將レ取二上野一。願君勿レ先焉。晴信乃與二氏康一。義元一連和。

【考】この時に、今川義元は、相模の國主北條氏康と、緣組をして、氏康の爲めに、來つて晴信に請うて曰ふには、氏康は、上野氏と戰つて、まさに上野を取ろうとして居るから、どうぞ、貴公、氏康に先を越して上野を取つてくれるなと曰つた。晴信は、そこで、氏康、義元と、連合和睦して、互に助け合ふ約束をした。

是歲。晴信削レ髮。稱二信玄一。信玄引レ鏡自視曰。吾貌類二不動佛一。乃使二畫史爲

己像。執劍及索。曰。我死。四鄰襲入。視吾像。不敢加無禮也。

【字解】【引鏡】……鏡を引きよせて見る。【不動佛】……不動明王を云ふ。【畫史】……畫工。【執劍及索】……不動明王は、右手に大智劍を取り、左手に三昧繩を取る。今之に彷ひ以て威力を示すなり。

【事略】この歳に、晴信は、髪を剃つて坊主姿となつて、信玄と稱した。信玄は、鏡を引き寄せて、自ら其容貌をつくづくと見て曰ふには、吾が容貌は、不動明王に似て居ると曰つて、そこで、畫工をして自分の肖像を畫かせ、劍と繩とを持たせて曰ふには、われが死んでから、四方の隣國から不意擊して攻め入つて來ても、わが肖像を見たならば、むざとは無禮を加へぬであらうと曰つた。

信玄連攻村上義清。又攻高梨。須田。島津氏。二十二年。盡略河中島四郡之地。義清等不能支。相共計以爲。可敵信玄者。唯上杉謙信。乃往投之。

【字解】【連】……しきりに、引き續いて。【高梨】……播磨守政頼。【須田】……若狹守親滿。【島津】……淡路守規久。【河中島四郡】……筑摩川の沿岸の平原、高井、水内、埴科、更科を云ふ。

【事略】信玄は、引きつゞいて村上義清を攻め、又、高梨、須田、島津氏を攻め、天文二十二年に、河中島の四郡の地を殘らず切り取つた。義清等は、支へることが出來ずして、相ともに相談して曰ふには、信玄に敵對してひけを取らぬ者は、たゞ上杉謙信だけであると曰ひ、そこで、出かけて行つて、謙信に身を寄せて萬事を頼み込んだ。

上杉氏。本長尾氏。平良文裔也。良文後十世。曰景政。居鎌倉。稱權五郎。以勇著東國。大庭氏。梶原氏。皆出於景政。景政後五世。曰景弘。始稱長尾氏。長尾氏嗣絶。養上杉藤景爲嗣。藤景本藤原氏。藤原重房從皇子宗尊。適東國。食丹波上杉邑。因氏焉。子孫爲足利氏外戚。管領東國。藤景其庶曾孫也。後臣屬於上杉氏。散處越後。上野。伊豆諸國。

【字解】【平良文】……葛原親王の曾孫。【以勇著東國】……著は表著なり、あらはる。有名なること。源義家の後三年の役に、景政、鳥海彌三郎を射殺せし等の事あり。【景政後五世】……景政、景經、景忠、景義、景弘。【宗尊】……後嵯峨帝の皇子、鎌倉の將軍なり。【適】……ゆく。【食】……はむ、領地とする。【外戚】……母方の親類。【庶曾孫】……妾腹の曾孫。【散處】……あちらこちらに散らばつて住居する。

【事略】上杉氏は、もと、長尾氏で、平良文の末孫である。良文の後十代目を、景政といひ、鎌倉に居つて、權五郎と稱し、武勇を以て、關東諸國に有名であつた。大庭氏、梶原氏は、いづれも皆、景政から出でたるものである。景政の後五代目を、景弘と曰ひ、はじめて長尾氏と稱した。その後、長尾氏は、跡嗣が絶えたので、上杉藤景を養つて跡嗣とした。藤景は、もと藤原氏である。はじめ藤原重房が、皇子宗尊親王に從つて、關東に行き、丹波の上杉村を領地として居つたので、それに因つて上杉を氏とし、その子孫は代々足利氏の外戚となつて、關東の諸國を管領して居つたのであるが、藤景は、その妾腹の曾孫である。その後、上杉氏に臣下として從屬し、その末々は、越後、上野、伊豆の諸國のあちらこちらに散らばつて住居して居つた。

自藤景而後十二世。曰爲景。爲景輔上杉房能于越後。後以事相隙。擧兵鬬。房能終死于雨溝。時永正三年也。房能兄顯定爲管領。六年。顯定與子憲總。率上野兵。來討爲景。爲景敗。走越中西濱。顯定留徇越後。越後士民不服。顯定推高梨某爲將。去歸爲景。七年。六月。爲景與高梨合兵。擊憲總于椎屋。破之。憲總走。保妻有莊。隨而圍之。顯定赴援。戰于長森。敗死。憲總走歸上野。爲景乃立上杉氏庶孽定實。妻以其女。置之上條城。奉之。而己居越中府內。徇越後。盡下之。長尾氏始大。天文十一年。一向賊起加賀。與州豪族椎名泰種。神保良衡連兵。叛爲景。爲景自往擊之。至栫檀野。賊將江波某佯降。設穽于路。迎爲景。陷而殺之。

【字解】【房能】……或は房義に作る。【相隙】……互に仲が惡くなる。【雨溝】……越後に在り。【永正】……後柏原帝の時の年號。【徇】……となふ。觸れまはつて地を取る。【高梨某】……攝津守。【椎屋】……越後に在り。【長森】……上野にあり。【庶孽】……音ショゲツ。妾腹の子孫。【上條】……信濃に在り。【天文】……後奈良帝の時の年號。【一向賊】……淨土眞宗の門徒を云ふ。【栫檀野】……越中に在

り。【江波某】……五郎。【穽】……音セイ。おとし穴。

講義 藤景より後十二代目を爲景と曰つた。爲景は、上杉房能を越後に於て輔佐して居つたが、その後、或る事件の爲めに、互に仲が惡くなつて、兵を擧げて鬪ひ、房能は、仕舞に、雨溝に於て死んだ。その時は永正三年であつた。房能の兄の顯定は、管領であつたが、六年に、顯定は、その子の憲總とともに、上野の兵を引き連れて、來つて爲景を討つた。爲景は、敗戰して、越中の西濱に逃げ走つた。顯定は、留まつて越後を觸れまはつて平定したが、越後の士民は、顯定に歸服せずして、高梨某を推して大將となし、去つて爲景に附いた。七年の六月に、爲景は、高梨と、兵を一處にして、憲總を椎屋に擊つて之を破つた。憲總は、逃げ走つて、妻有莊に立て籠つた。爲景等は、又、つゞいて之を圍んだ。顯定は、出かけて行つて援け、長森に戰つて、敗れて死んだ。憲總は、逃げ走つて上野に歸つた。爲景は、そこで、上杉氏の妾腹の子孫なる定實を立て、之に妻はすに自分の娘を以てし、之を上條城に據ゑ置いて、之を奉じて主君とし、そして、自分は、越中の府内に居つて、越後を觸れまはつて、殘らず、皆之を下した。長尾氏は、こゝに於て、始めて强大となつた。天文十一年に、一向宗の一揆が、加賀に起つて、加賀の豪傑なる椎名泰種、神保良衡と、兵を連合して、爲景に叛いた。爲景は、自身に出掛けて行つて之を擊つて、栴檀野に至つたが、賊の大將江波某が、いつはつて降參して、おとし穴を路にこしらへて置いて、爲景を迎へ、穴の中に落して之を殺して仕舞つた。

爲景有四男。長晴景。次景康。次景房。季曰景虎。景虎。幼字虎千代。爲繼妻出。甫八歲。精悍有膽略。爲景不愛也。逐之椽尾。欲以爲僧。景虎不肯學僧事。及爲景死。諸將多屬意景虎。而大臣胎田常陸者。自爲景時有權寵。利晴景庸暗。與二子黑田秀忠。金津某及三條城主長尾俊景謀。立晴景。殺景康等。景房出走。追殺之貳城門中。景虎時年十三。亦走。門者爲匿之簀床下。逮夜。發而出之。則熟眠矣。喚起。潛出入春日山寺。寺僧挈之逃椽尾。匿乳母夫本莊慶秀家。慶秀與宇佐美定行。盡心保護。定行者。上杉氏世將。好讀書。通天文兵法。謂景虎可輔也。深相結託。既而景虎聞賊搜索己。不置也。則出避之。同從士十四人。爲行脚僧狀。行滕穿鞋而出。上米山。瞰視府内。曰。吾他日起兵復國。必陣于此。遂至栴檀野。泣且拜曰。兒必夷滅仇敵。以慰冤魂。於是經歷北陸。東山諸國。周視山川城池形勢。圖寫齎歸。有告賊以景虎所在。遣甲來捕。景虎與慶秀。定行謀。起兵修椽尾城。據之。聽命於上杉定實。

字句解 【甫】……はじめて、やつと。【精悍】……音セイカン。强勇の意。心剛にしてかひ〻しきを云ふ。【膽略】……膽太く〻して謀略あること。【椽尾】……越後に在り。【胎田】……一に昭田(テルタ)に作る。【利】……自分の爲めに都合よしとする。【庸暗】……音ヨウアン。庸は愚なり。おろかにして譯の分らぬこと。【金津某】……伊豆守。【三條】……越後に在り。【貳城】……外城なり、卽ち二の丸。【門者】……門番、山本六助といふ者也。【簀床】……簀は音サク。すのこの床(ユカ)。【逮夜】……夜分になつて。【春日山】……越後に在り。【寺僧】……門察と號す。【挈】……たづさふ、連れる。【保護】……もり立て、世話をする。【世將】……代々の大將。【行脚僧】……諸國を遊歷する僧を云ふ。【行滕】……音カウトウ。むかばき、卽ち今の脚絆(キヤハン)なり。【穿鞋】……鞋は音アイ。草鞋(ワラジ)をはく。【米山】……越後に在り。【瞰視】……瞰は音カン。俯視を瞰と云ふ。見おろす。【仇敵】……江波五郎等を指す。父爲景は江波五郎の爲めに欺かれて栴檀野に死す。【慰冤魂】……恨あつて浮ばれぬ父爲景の魂を慰める。亡父の遺恨をはらす。【圖寫】……繪圖にうつし取る。【齎】……もたらす。【告賊】……賊とは胎田常陸、黑田秀忠、長尾俊景等を指す。【甲】……甲兵。【聽命】……下知をうける。

講義 爲景には、四人の男子があつて、長男は晴景、次は景康、その次は景房、末子は景虎と云つた。景虎は、幼少の時の名は虎千代と云ひ、爲景の後妻の生んだもので、その年やつと八歲のときに、心たけくきかぬ氣であり、膽太く策略があつたが、爲景は之を愛せずして、椽尾に放逐して、坊主にしやうと思うたけれども、景虎は、坊主の仕事を稽古することを承知しなかつた。かくて、爲景が死するに及んで、諸將は、多く、景虎に心を寄せて居つた。しかるに、家老の胎田常陸と云ふ者は、爲景の時から、權力があつて御氣に入りであつたが、晴景の愚にして事理に通ぜざるを、自分の爲めに都合好しと思うて、二人の子なる黑田秀忠、金津某、及び三條の城主なる長尾俊景と相談して、晴景を立て跡を嗣がしめ、景康等を殺した。景房は、出でゝ逃げ走つたが、追つかけて行つて、之を二の丸の門の内で殺した。景虎は、その時に、年十三歲であつたが、亦逃げ出すと、門番が、之をすのこの床の下にかくれさせて置き、夜分になつてから、床を上げて之を外に出でさせやうとすると、すや〳〵とよく眠つて居つた。そこで、喚び起して、そつと出させて、春日山の寺に入れた。春日山の寺の坊主は、景虎を連れて、椽尾に逃げ、乳母の夫なる本莊慶秀の家に匿れて居つた。慶秀は、宇佐美定行とともに、心を盡して景虎をいたはり世話をした。定行は、代々上杉氏の大將であつて、書物を讀むことが好きであつて、天文學、兵法に通達して居つたが、景虎は年は幼少であるが天晴な人物で輔佐して大事を成さしむるに足ると思うたので、深く互に心を結び相たのみ合うた。とかくする中に、景虎は、賊が自分をさがし索めて棄て置かぬと云ふ事を聞いたので、そこで、外に出でゝ之を避けやうと思うて、從士(トモビト)十四人とともに、行脚坊主の風體をなし、脚絆に草鞋をはきしめて、出掛けて、米山に上り、府内を見おろして曰ふには、吾は、後日、兵を起して領國を取りかへさうとするときには、屹度、こ

一こに陣取りましやうと曰つた。かくて、とう〳〵梅檀野に至り、父爲景の殺された事を思ひ出でゝ、泣きながら禮拜して曰ふには、私は、屹度、あだかたきをたひらげ滅ぼし盡して、父上の御無念をはらし奉りましやうと曰つた。こゝに於て、景虎は、北陸、東山道の諸國を經めぐり、山や川や城や堀の樣子を視めぐり、繪圖にうつして、持つて歸つた。すると、景虎の居る所を賊に告げた者があつたので、賊は、甲兵を派遣して來つて景虎を捕へやうとしたので、景虎は、慶秀、定行と相談して、兵を起し、椽尾の城を修復して、之に立てこもり、そして、上杉定寶の命令を受けることにした。

十三年。春。俊景。秀忠將兵來攻。景虎防戰。大破之。斬俊景。走秀忠。十四年。遣神餘昌綱赴京師。請討賊詔旨。十五年。賊數來攻。景虎每戰輒勝。十六年。晴景遣族政景大擧來攻。定行欲出戰。景虎上城望之曰。敵遠來無輜重。非久留者。俟其將引去。擊之可也。夜半。政景果卻。景虎以三千騎開門出。戰于下濱。走之。及米山。景虎按兵止。敵過嶺。鼓衆追擊。又大破之。定行謂諸將曰。諸君知主公按兵止故乎。曰。不知也。曰。敵迫險急之則返擊。聽其過嶺。乘高下擊。敵不能支。主公年少。臨機制變如此。豈吾輩所企及哉。於是。政景降。晴景窮蹙自殺。

【字解】【政景】……越前守。【輜重】……音シチヨウ。小荷駄。卽ち軍糧兵器等。【下濱】……越後に在り。【按】……おさへる也。【急之】……急いで之を追ひ擊つ也。【聽】……ゆるす、まかす、向ふの思ふ樣にして置く。【企及】……企は踵を擧げて望む也。つま立ち足をしてとゞくを云ふ。【窮蹙】……音キウシユク。身の置き所も無いほど、せつぱつまるを云ふ。

【講義】天文十三年の春に、俊景、秀忠は、兵を引き連れて來り攻めた。景虎は、防ぎ戰つて、大に之を擊ち破り、俊景を斬り、秀忠を敗走させた。十四年に、景虎は、神餘昌綱を派遣して、京都に行かしめ、賊徒を征伐するの詔勅を請ひ受けしめた。十五年に、賊は度々來り攻めたが、景虎は、戰爭するたびごとにいつも勝つた。十六年に、晴景は、一族なる政景を派遣し、大兵を擧げて攻め寄せて來た。すると、定行は、城から打つて出でゝ戰はうと思うたが、景虎は、城に上つて之を望み見て曰ふには、敵兵は遠方から來て居りながら、兵糧軍需品等の用意が無いから、これは久しく留まつて居る者ではない。されば、敵が將に引き上げて去らうとするときを待つて、之を擊てば宜しいのであると曰つた。夜半に、政景は、果して、退卻したので、景虎は、三千騎を引き連れて、城門をさつと開いて出で、下濱に戰つて、之を敗走させた。之を追つかけて、又、大に之を破つた。定行は、諸將に向つて曰ふには、諸君は、主公（卽ち景虎）が兵を止めて仕舞ひなされた譯を知つて居られるかと曰つた。諸將が曰ふには、如何いふ譯か分りませぬと曰つた。すると、定行が曰ふには、敵が險阻なるところに差し迫つたときに、手きびしく之を追擊するときは、敵軍は、進退谷まつて、引き返して來て戰つて、事が面倒になるであらう。敵が峠を越ゆるまゝにして置いて、我は高い處から下り擊つときは、敵は支へることが出來ないのである。主公は、御年は御若いけれども、機會に臨んで變に應ずる處置をなされること此の如くである。どうして、吾々共が足をつまだてゝも追ひつくところであらうぞと曰つた。こゝに於て、政景は降參し、晴景は、せつぱつまつて、自殺して仕舞つた。

十八年。國人請景虎入府內。胎田等猶據三條不下。十九年。景虎攻三條拔之。誅胎田賊以餘兵保新山。黑瀧二城。欲遂攻之。會上杉定實卒。不果。二十年。遣將高梨貞賴攻拔新山。誅黑田秀忠。宇佐美定行拔黑瀧。誅金津。越後盡定。二十一年。諸將士共欲推景虎爲主。景虎曰。吾迫於上下之意。與兄抗兵。不料其自死。而吾主越後。世謂吾簒也。今國內略定。別擇主可也。吾逃爲僧以明吾志。遂削髮。號曰謙信。將赴高野山。諸將士連署。請其止治國。謙信曰。置君將用其令也。不用令無君可也。自今吾所令莫敢或違。則吾肯止耳。乃與諸將誓而入。明日。出令。收專命大臣十六人。賜死于林泉寺。諸將股栗。五月。任彈正少弼。敘從五位下。謙信曰。坐受官爵。非人臣義也。二十二年。二月。假路諸國。率兵二千。經北

陸。入京師。先詣闕。遂謁將軍義輝。五月歸。

【字解】【三條】……越後に在り。【新山】……越後に在り。【黑瀧】……越後に在り。【迫於上下之意】……上の人と下の人との意見に迫られて。上は上杉定實より、下は臣民より、迫られて、止むを得ずして、兄と敵對したとの意。【兄】……晴景なり。【不料其自死】……兄晴景が自殺しやうとは思ひも寄らぬことであつた。【簒】……うばふ。【略】……ほゞ、大方。【明吾志】……越後を簒奪するにあらざる志を明にすること。【高野山】……紀伊に在り。【連署】……連名連判する。【林泉寺】……越後に在り。【股栗】……音コリツ。足震慄する也、おそれて足がふるふ。【彈正少弼】……彈正臺にて大弼の次の官。內外を巡察し非違を糺彈するを掌る。【假路諸國】……通路を諸國に借る。戰國の世にて往來自由ならざるを以て、前以て使者を遣はして通行の許可を得置くなり。【闕】……音ケツ。御所。

【講義】天文十八年に、越後の國人は、景虎に請うて、府內に入らしめたが、胎田などは、まだ三條に立て籠つて居つて、下らなかつた。十九年に、景虎は、三條を攻めて、之を攻め落し、胎田を誅殺した。すると、賊徒は、殘兵を引き連れて新山、黑瀧の二つの城に立て籠つたので、景虎は、遂に之を攻めやうと思うたが、折しも上杉定實が死んだので、中止した。二十年に、景虎は、部下の大將高梨貞賴を派遣して、新山を攻め落し、黑田秀忠を誅殺し、宇佐美定行は、黑瀧を攻め落し、金津を誅殺したので、越後は盡く平定した。二十一年に、諸の將士たちは、相共に、景虎を推し戴きて國主としやうとした。すると、景虎が曰ふには、われは、上は上杉定實より、下は臣民よりの意見に迫られて、已むを得ずして兄晴景と兵を擧げて攻め合つたのであるが、兄が自殺致されやうとは思ひも寄らぬことであつた。然るに、今若し吾がこの越後の領主となつたならば、世間の人々は、吾をば、兄の國を奪ひ取つたものであると謂ふであらう。今や、この越後の國內は、大方、平定したのであるから、別に領主を擇ぶが宜しいのである。吾は、逃げて坊主となつて、そして、はじめより國を奪はうとする意の無かつた吾が志を明にしやうと曰つて、とう〳〵髮を剃つて坊主姿となり、謙信と號して、まさに高野山に往かうとした。諸の將士たちは、連判の書面を差し出して、高野山に行くことを思ひとゞまつて、この國に止まりて、この國を治めて下されと願ひ出でた。すると、謙信が曰ふには、君主たる者を置くのは、もと其命令を聽き用ひんとするためである。若し其命令を聽き用ひぬならば、君主たる者は無くても宜しいのである。今より後、吾が命令するところの事には、敢て違背することは無いと云ふならば、吾は高野山に行くことをやめて、この國にとゞまることに致さうと曰つた。そこで、諸將とともに誓を爲して奧に入り、その明くる日に、命令を出し、君命を專にして政事に私曲多き家老十六人を召し取りて、林泉寺に於て切腹させたので、諸將は、足も震ふほどに恐れた。五月に、彈正少弼に任ぜられ、從五位下に叙せられた。謙信が曰ふには。居ながらにして官職位階を貰ふのは、人臣たる者の義理では無いと曰つて、二十二年の二月に、諸國に道路通行の許可を得て置いて、兵二千人を引き連れて、北陸道を經由して、京都に入り、先づ第一番に御所に參內し、遂に將軍義輝に謁見し、五月に、國に歸つた。

村上義清。與高梨政賴。須田滿親。島津規久等。自信濃來投。請謁謙信。言曰。僕等爲武田信玄所侵掠。容身無地。側聞公威名。願賜一下手救援。謙信曰。諸君豈爲人下者。而來託於我。是知我也。我今略定內亂。念賀越吾父讐。常欲屠此二國。遂樹幟京畿。是吾素志耳。雖然遇知我者。而不爲出力。非丈夫也。因問義清曰。信玄用兵如何。曰。信玄行軍不貪程頓。每戰要勝於後。謙信曰。彼要後勝。意在拓地也。吾則不然。遇敵輒戰。要不枉其鋒耳。於是下令國內。以十月十二日。治兵小田濱。將八千騎。入信濃。放火武田氏屬城。十一月。朔。進陣河中島。

【字解】【侵掠】……掠は一に凌に作る。【側】……仄なり。ほのかに。【念】……願念なり、思ひ出せば。【賀越吾父讐】……加賀越中の國人は、吾が父は道程なり、頓は止舍なり。不貪程頓とは、道を急がぬこと、卽ち十里行く可くして五里にして止舍するが如きを云ふ。兵の疲勞せんことを恐るればなり。【要勝於後】……一旦の勝には目をかけずして、最後の勝を求める。【拓地】……拓は斥開なり、ひらく。土地を切り開く。【要不枉其鋒】……其兵のほこ先のなまちぬやうにする。【治兵】……勢揃すること。調練すること。合戰の行列、金鼓のあいづ、坐作進退の節制等を習はすこと。【小田濱】……越後に在り。【河中島】信濃に在り。【十一月朔進陣河中島】河中島第一回の戰。

【講義】村上義清は、高梨政賴、須田滿親、島津規久等とともに、信濃から、長尾氏のところへ逃げ込んで來て、謙信に面謁せんことを請ひ、そして謙信に向つて曰ふには、私共は、武田信玄の爲めに領地を侵し掠め取られ、今は、身を容るゝに地なき有樣に立ち至りました。ほのかに、貴殿の武威名聲を聞き及びましたので、こゝに參りましたので御座りますが、どうぞ、一たび手を下して救ひ援けて下さることを願ひますと曰つた。謙信が曰ふには、諸君は、もと、それ〳〵國主であるから、どうして人の下風に立つことをいさぎよしとせらるゝ者であらうぞ。然るに、今や、態々來つて私に御依賴なされるのであるが、これは、私の知己といふべきもので御座る。私は、今、ざつと國內の變亂を平定したところで御座るが、思ひまはせば、加賀、越中の國人は、わが父を殺せる仇敵で御座るので、私は、常に、此二國を滅ぼして父の無念を晴らし、それから進んで、旗を京都地方に立てゝ霸業を爲したいと思うて居ります。是れが私の平生の志望で御座る。されば、實は、人の爲めに盡力するなどの暇は無いわけで御座るが、然れども、知己とも云ふべき人に遇ひながら、その人達の爲めに力を出さないのは、これは男では御座らぬから、一肌脫いで盡力しましやうと曰ひ、そこで、義清に問うて曰ふには、信玄が兵を用ふるのは、どんな風で御座るかと曰つた。義清が曰ふには、信玄が軍勢を進めまするのは、路を急いでむやみに進むことを致しませぬ。また、戰ふ度毎に、一時の勝には目をかけずして、終局の勝利を得やうと致して居りますと曰つた。すると、謙信が曰ふには、彼れ信玄が、終局の勝利を得やうとして居るのは、これは、其心、土地を切り開かうとするのである。私は左樣では御座らぬ。敵に遇ふときは、いつでも直に戰つて、つまり我が軍勢の鋒先を鋤らせないやうにしやうとするので御座ると曰つた。こゝに於て、命令を國內に下し、十月十二日を以て、小田濱に於て勢揃ひをして、八千騎の

兵士を引き連れて、信濃の國に打ち入り、武田氏の所屬の城に火を附け、十一月の朔には、進んで河中島に陣取つた。

信玄聞之。請援於今川氏。將步騎二萬。出雨宮渡。使山本晴行等四人覘之。返報曰。北軍銳甚。君宜厚集其陣。不戰屈之。信玄從之。兩軍夾水而陣。謙信挑戰。信玄不出。相持二十七日。謙信遣使者。言曰。吾聞。公用兵所嚮無留陣。而何獨不與我決乎。我於公非有怨仇。特爲義清輩。敢問。公何以奪彼地。公不欲與吾戰。則還地於彼。不欲還地。則與吾戰。信玄答曰。公庇義清。眞爲高義。雖然。晴信而未死。公不能成志也。公欲戰則自公始。謙信曰。諾。乃決議。約詰朝會戰。即夜。傳發。以七隊合爲圓陣。平明度橋而進。信玄勒十四隊迎戰。自卯至未。爭橋相逐。勝敗不決。謙信分兵渡上流。出甲斐軍後。甲斐軍顧之退去。横田源助。板垣三郎等。及駿河七將皆死。而越後兵亦多死傷。引兵歸。

字解【雨宮渡】……信濃に在り。【覘】……うかゞふ、伺ひ見させる。【北軍】……謙信の軍を云ふ。【厚集其陣】……諸の軍勢を一處に集め置くこと。軍兵を陣所にまとめ置くこと。【夾水】……千曲(チクマ)川を夾むなり。【相持】……互に睨み合つて戰はぬこと。【無留陣】……陣を留めて駐屯して居ること無くして、討ち込むこと。【庇】……かばふ、おほふ、おほひ助ける、保護する。【高義】……人にすぐれたる義俠。【詰朝】……音キッテウ。明朝。【傳發】……命令を軍中に傳へて出發する。史記の淮陰侯列傳に、夜半傳發とあり。【平明】……夜の引き明け頃。【度】……わたる、渡る也。【勒】……音ロク。勢揃へする。【卯】……午前六時頃。【未】……午後二時頃。【相逐】……逐ひつ逐はれつする。互に逐ひ合ふ。【駿河七將】……今川氏よりの援兵。

[illegible] 信玄は、此事を聞いて、援兵を今川氏に請ひ、步兵、騎兵二萬人を引き連れて、雨宮渡に打つて出で、山本晴行等四人の者をして敵の樣子を伺ひ見させると、返つて報告して曰ふには、北軍(卽ち謙信の軍勢)は、その鋒先が甚だ鋭う御座りますから、我が君には、軍勢を厚く陣所に集めて、散らさぬやうにして、戰爭を爲さずして、敵兵を屈伏せしめるやうになされるが宜しう御座りますと曰つたので、信玄は、此言葉に從ふことにした。かくて、兩軍は、筑摩川を夾んで陣取つた。謙信は戰を仕掛けたけれども、信玄は出でず、互に睨み合つて戰はずに居ること、二十七日であつた。そこで、謙信は、使者を派遣して、信玄に言はしめて曰ふには、わが聞き及ぶところでは、貴殿が兵を用ふるや、何處に向つても、陣を留めて駐屯することは無いと云ふことで御座るが、然るに、どうして、たゞ、吾とばかりは、勝負を決せられぬので御座るか。我は、貴殿に對して、何の怨も仇もあるわけでは御座らぬ。たゞ、義清などの爲めに、わざ〳〵兵を起したので御座るが、敢て承りたいのは、貴殿は、何故に義清等の地を奪ひ取られたので御座るか。貴殿、若し吾と戰爭することを欲しないならば、土地を彼等に御返し下さい。若し土地を返すことを欲せられぬならば、吾と戰爭なされよと曰つた。すると、信玄が答へて曰ふには、貴殿が義清等をかばひ保護せられるのは、實に、世にも稀なる義俠で御座る。然れども、われ晴信にして、未だ死なないうちは、貴殿は、思ひ通りに成らぬで御座らう。貴殿が戰爭したいと思はれるならば、貴殿から御始めなさるが宜しいと曰つた。謙信が曰ふには、宜しい、承知しましたと曰ひ、そこで、評議を決定して、明朝出遇つて戰爭することを約束し、直に其夜に、號令を傳へて出發し、七隊を合はせて一隊となし、以て圓陣となへの陣と爲し、夜の引き明け頃に、筑摩川の橋を渡つて進んだ。信玄は、十四隊の兵を勢揃へして、迎へ戰つた。かくて、卯の刻から未の刻に至るまで、橋を爭うて、互に逐ひつ逐はれつして、勝負が付かなかつた。すると、謙信は、兵を分つて上流を渡り、甲斐の軍勢の後に出たので、甲斐の軍勢は、ふり回つて見て、驚いて、退き去り、横田源助、板垣三郎等、及び駿河の今川氏から援けに來た七人の大將は、皆、討死した。しかし、越後の軍勢も、亦、死んだ者や傷ついた者が多かつたので、やがて、兵を引き上げて歸つた。

先是。謙信數出兵越中。而未得志。是歲。使使招降能登國主畠山義則。以女兄妻之。取其弟義春子養之。稱彌五郎。實質之也。是時。所管佐渡及莊內。會津盜起。遣兵擊平之。二十三年。五月。信玄與小笠原長時戰于桔梗原。勝而降之。長時終出奔京師。信玄以女爲北條氏康婦。爲長子義信娶今川義元女。於是。二國相共翼武田氏。以扞謙信。而信濃客將樂岩寺。布下。和田等。陰通謙信。謙信出兵清野。縱火鼠子驛。聞客將事覺被誅。乃還。

字解【畠山義則】……修理大夫、後、入庵と改む。【女兄】……姉なり。【賞】……音チ。人賞とする。【所管】……領地。【莊内】……今の羽後に在り。【會津】……今の岩代に在り。【二十三年】……甲陽軍鑑には、二十一年に係る。【桔梗原】……信濃に在り。【婦】……子の妻、卽ち氏政の妻。【翼】……助く。【扞】……拒ぐ。【客將】……客分の大將。【樂富寺】……右馬助。【布下】……名稱詳ならず。【和田】……名稱詳ならず。【清野】……信濃に在り。【鼠子驛】……信濃に在り。

講義　これより先に、謙信は、たび〳〵兵を越中に繰り出したけれども、思ふ樣にならなかつた。この歲に、使を遣はして、能登の國主畠山義則を招き降し、自分の姉を以て、義則に妻はせ、義則の弟義春を呼び取つて、之を自分の子として養つて、彌五郎と稱したが、實は之を人質として置いたのである。この時に、謙信の嘗轄して居るところの佐渡及び、莊内、會津に、一揆が起つたので、兵を派遣して、擊つて之を平定した。天文二十三年の五月に、信玄は、小笠原長時と、桔梗原に戰つて、勝つて之を降參させた。長時は、とう〳〵京都に逃げ奔つた。信玄は、その娘を以て北條氏康の嫁（卽ち氏政の妻）となし、自分の長男義信の爲めに、今川義元の娘を娶つた。こゝに於て、北條、今川の二國は、相共に、武田氏を助けて、謙信を拒いだ。しかるに、信濃（卽ち武田氏方）の客分の大將なる樂富寺、布下、和田などは、ひそかに謙信に內通したので、謙信は、兵を清野に繰り出し、鼠子驛に火を附けたが、客分の大將どもがその事が露顯して誅せられたといふ事を聞いたので、そこで、引きかへした。

八月。謙信復以八千騎入信濃。曰。吾此行。必與信玄親戰。決雌雄耳。進渡犀川陣。既望。信玄以二萬人出。與之對。固壘不出。閏日。謙信使村上義清等夜伏兵。而曉出采樵者。近甲斐壘。甲斐兵出追之。陷伏皆死。諸隊隨出。乃大戰。終日十七合。迭有勝敗。信玄潛下令。張絙犀川而渡。伏旗幟。徑蘆葦中。直襲謙信麾下。麾下潰走。信玄乘勝而進。宇佐美定行等。以手兵橫擊破之。擠之於河。信玄與數十騎走。有一騎。黃襖騮馬。以白布裹面。拔大刀來呼曰。信玄何在。信玄躍馬亂河。將逃。騎亦亂河。罵曰。豎子在此乎。擧刀擊之。信玄不暇拔刀。以所持麾扇扞之。扇折。又擊斫其肩。甲斐從士欲救之。水駛。不可近。隊將原大隅槍刺其騎。不中。擧槍打之。中馬首。馬驚。跳入湍中。信玄纔免。武田信繁聞信玄危。返之。呼騎索戰。戰死之。是日。兩軍死傷大當。而信玄被創。夜收兵退。後獲越後捕虜。言嚮騎乃謙信也。

字解【決雌雄】……勝敗を定める、勝負をつける。史記の項羽本紀に、願與漢王挑戰決雌雄とあり。また、孟嘗君列傳に、雌雄之所在未可知也とあり。【犀川】……信濃に在り。【既望】……音キバウ。十六日をいふ。日月相望むを望と云ひ、期は陰曆十五日にして、既はすでに過ぎたるの義なり、故に既望は十六日なり。書經に、惟二月既望とあり。【閏日】……一日を隔つるを云ふ。【采樵】……音サイセウ。樵は薪なり。軍中にてたきゞを取る者。【迭】……たがひに。【張絙】……絙は音コウ。大索なり。渡る者をして此大索に取りついて溺るゝこと無からしめんが爲めの用心なり。【旗幟】……音キシ。旗さし物。【徑】……よぎる、行き過ぐる、通り抜ける。【麾下】……音キカ。旗もと。【潰走】……音クワイサウ。陣を亂して逃げ走る。【手兵】……手勢、その部下の兵。【擠】……おしおとす、追ひまくる。【河】……音クワウ。【黃襖】……音クワウアウ。鬱金（ウコン卽ち黃色）の陣羽織。【騮馬】……音リウバ。鹿毛馬（カゲウマ）、赤馬にして黑き斑ある者。【裹】……包む。【豎子】……音シユ。小わつぱ。信玄を指す也。【麾扇】……音キセン。軍配團扇なり。うちはを扇と云ふは、支那語に取る。ある支那人、かの富士山を詠じたる白扇倒懸東海天の句を見て、富士山をばうちはをさかさまにしたる如く思ひしと云ふ笑話あり。【扞】……ふせぐ。【斫】……きる、斬りつける。【駛】……疾なり。はやし。水流のはやきを云ふ。【湍】……音タン。急流、早瀨。【呼騎索戰】……その騎士を呼び返して戰はんことを求める。【大當】……大抵同じ位なること。互角の勝負なるを云ふ。【嚮】……さき。

講義　この年の八月に、謙信は、ふたゝび、八千騎の軍勢を引き連れて、信濃に入り込んで、そして曰ふには、此度こそは、是非とも、信玄と自身に關つて、勝負をつけるであらうと曰つて、進んで犀川を渡つて陣取つた。この月の十六日に、信玄は、二萬の軍勢を引き連れて、打つて出で、謙信の軍勢と相對して陣取つたが、壘（トリデ）を固く守つて、出で戰はなかつた。一日を隔てゝ（卽ち十八日に）、謙信は、村上義清等をして、夜、兵を伏せしめて置いて、そして、夜明け方に、薪（タキヾ）を取る者を出して、わざと、甲斐の軍勢（卽ち信玄方）の壘に近づかしめた。すると、甲斐の軍勢は、出で來つて之を追つかけたが、伏兵に陷つて皆死んだ。そこで、諸の部隊は、引きつゞいて出で、そこで、大に戰つた。朝から晩まで終日の內に、十七度までも、打ち合つて、互に勝つたり負けたりした。信玄は、そこで、ひそかに、命令を下して、繩を犀川に張り渡して、兵士は之に取りついて向うの岸に渡り、旗さし物を伏せ隱して、蘆や葦の中を通りぬけて、直に謙信の旗もとを不意擊させた。謙信の旗もとは、隊伍を亂して逃げた。信玄は、勝つた勢に乘じて進んだ。すると、宇佐美定行などが、手勢を引き連れて、橫合から突き出で擊つて、之を破り、之を御幣川の中に追ひまくつた。信玄は、數十騎とともに逃げ走つた。すると、一人の騎士があつて、鬱金の陣羽織を著て、鹿毛の馬に乘り、白い布を以て顏を包み、大刀を拔いて、來り呼ばはつて曰ふには、信玄は何處に居るぞと曰つた。信玄は、之を聞いて、馬を躍らせ河を渡つて、まさに逃げやうとした。その騎士も亦河を渡つて、追っかけ來り、罵つて曰ふには、あの野郎奴は此處に居るのかと

曰つて、刀をあげて斬つてかかつた。信玄は、刀を拔く暇が無く、手に持つて居つた軍配團扇を以て之を拒いだ。その團扇が折れた。その騎士は、又、斬つてかかつて、信玄の肩を斬つた。甲斐の從士は、信玄の危きを見て、之を救はうと思うたけれども、何分にも、水の流が早くして、近づくことが出來なかつた。武田氏の一隊の將なる原大隅が、槍を以てその騎士を刺さうとしたけれども、うまく中らず、そこで、槍をあげて、之をたたくと、馬の頭に中つたので、馬は驚いて、跳(ハ)ね上つて、早瀨の中にかけ込んだ。そこで、信玄は、やつとの事で、免れた。武田信繁は、信玄が危急であると云ふことを聞きつけて、引き返して來つて、その騎士を呼び返して、戰はんことを求め、共に戰つて、そこで討死した。この日に、兩軍の死んだ者や傷いた者は、大抵同じ位で、互角の勝負であつた。けれども、信玄は、創を被つたので、夜、兵士を引きまとめて、退却した。その後に、越後の軍勢の捕虜を得たが、その言ふところによれば、さきの騎馬武士こそは謙信であつたと云ふことである。

【參考】左に川中島五度合戰次第を抄錄して以て參考に資す。

川中島五度合戰次第

一天文廿三年八月十八日の曉、越後陣所より草苅ども二三十人、未明より出で驅け廻り候所に、甲州の先手高阪陣より、足輕百計懸け出で、彼の草苅を追ひまはし候處に、兼てたくみし故、越後方、村上義清、高梨政頼が足輕大將小定平九郎、安藤八郎兵衞、二三百人、夜の中より道に伏せ居て、高阪が足輕を引包み、洩らさず討ち取りしを見て、高阪彈正、落合伊勢守、布施大和守、室賀出羽介陣より百騎餘乘り出し、喚き叫んで、越後方の足輕を追つ立て〳〵、上杉先手の守護まで推し寄せ候所を、義清、政頼、兩家の軍兵、一度に突いて出で、追討に打ち候程に、武田衆百騎の兵共、一騎も殘らず討取申候、高阪、落合、小田切、布施、室賀、一の守護を破られて、元の陣さして引き退き申候、武田方は、先手打ち負け追ひ立てられ候を見て、眞田幸隆、保科彈正、清野常陸、市川和泉守、二の見より突いて出で、勝に乘りて追ひ亂したる上杉勢を追つ返し、追討に打ち立て、陣の木戸口迄付入にして、義清、政頼も既に危く見え候所、二の見より越後の侍川田對馬守、石川備後守、高梨源五郎、三頭、其外浮武者の內より、新發田尾張守、其子因幡守、杉原壹岐守、各五頭の備、其勢二千計にて鬨を上げ掛け出で、武田勢を追ひ散し、逃ぐるを追うて、武田が陣後詰の者に迄散々に切て廻り、頭數百計取り、勝凱を作り、本陣へ引き退き候所に、保科、眞田、清野、市川取つて返し、上杉勢を追つ立つれば、川田、石川、本莊、高梨、杉原、新發田、村上義清、高梨政頼も、一手に成つて、追つ返し推し戻し、追ひまくりつ戰ひ申候、甲州、越後の軍兵共、互に名乘り合ひ、火花を散〻戰ひ申候、其中眞田彈正幸隆は、手負ひ引き除き候所を、上杉方高梨源五郎頼治と名乘り、眞田とむづと組んで推し伏せ、鎧の脇板の透間を二刀刺し申候內に、保科彈正取つて返し、眞田討たすな者共、とて戰ひ申候、眞田が家人細谷彦助折り合ひて、高梨源五郎が草摺のはづれ膝の上より打ち落し、主の敵を討ち取り候、是より保科を鎧彈正と申候由、保科も其時越後方の大勢に取籠められ、既に危く見え候を、後詰の侍海野、望月、矢代、須田、井上、根津、川田、仁科、九人の侍是を見て、保科討たすな人々とて、同勢一度に鬨を上げ、追ひ散し、越後の本陣近き所まで切つて掛り候所、越後の後詰の陣所より、齋藤下野守頼信、柿崎和泉守景家、北條安藝守、毛利上總介、大關阿波守、三千餘騎、鬨の聲にて切つて出で、追ひ返し推し戻し戰ひ申候、敵味方手負死人算を亂して數知れず候、謙信も、紺地に日の丸、白地に毘の字の旗、二本推し立て、原の町に備を立てられ候、其合戰時を移し候、其內に、晴信の下知にて、犀川に大綱を幾筋も張り渡し、武田旗本の大勢、彼の綱に取り付き、向の岸に上り、大野蘆荻の茂りたる中の細道より、旗差物を伏せ、忍び出で、謙信の旗本へ鬨の聲にて切つて入り候故、越後勢謙信旗本一度にどつと敗軍仕候を、武田方勝に乘つて追討に仕候、晴信勇み悅んで、旗を進められ候處に、大塚村に備を立て申候、越後方宇佐美駿河守定行三千許、横鎚に突きかゝり、晴信旗本を御幣河へ追ひ入れ候所へ、越後の侍渡部越中守五百餘懸け著き、晴信旗本へ切つて懸り、宇佐美駿河守と揉み合ひ、信玄旗本を立て挾みて討取申候、武田勢人馬川水に流るゝ輩、又は討たるゝ者數を知らず候、謙信旗本勢も取つて返し、晴信旗本を討取申候、越後方上條彌五郎義春、長尾七郎、元井日向守、沼野掃部、小田切治部、北條丹後守、山本寺宮千代丸、春川十郎、安田掃部已下、輝虎同前に御幣川へ乘り込み、鎚を合はせ、太刀打高名仕候、其外手柄の侍多く、又討死の者も多く御座候、信玄も三十許にて川を渡し引き除き候所を、謙信川中へ乘り込み、晴信を二太刀迄切り付け申候、信玄も太刀を合はせ戰はれ申候を、近習の武田の侍共、謙信を中に取り籠め候へども、謙信切り拂ひ、中々近づくべき樣無之候、其中に晴信と謙信と閒きれ致候、其刻謙信に懸り候武田近習の侍十九人切り付けられて、謙信は人閒の擧動にてはなく、只鬼神にて候と申候、其砌は謙信は知らず、甲州方にては越後の侍荒川伊豆守にて候と取沙汰仕候由、後に輝虎と承り、打ち止むべきものを殘多しと皆々申候由、信玄御幣川を渡り、生萱山土口を志し、先陣後陣一つに敗軍にて候、甲州勢は鹽崎の方へ遁るゝもあり、又貝津の城へ逃るゝも御座候、中條越前守は、小荷駄を警固仕候所へ、鹽崎百姓數千起り、小荷駄を奪ふ故、中條是を切り拂ひ、散々に戰ひ候、此時上杉武田の兩軍入り亂れ、散々に戰ひ候故、敵味方手負死人數を知らず數百討たれ候、信玄手負ひ申され候を聞いて、其仇を討ち止め申すべしと尋ねられ候、其時は、謙信川の向の岸へ著かれ候を、左馬助大音聲を上げ、夫れへ引き取り申され候は、大將輝虎と見候、是は武田左馬助にて候、兄の當の敵にて候閒、返して勝負せられ候へと呼ばはり申され候、謙信乘り戻し、是は輝虎が郎等甘糟近江守と申者也、貴殿の敵には不足なりと申捨て、川岸へ乘り上り候、左馬助は主從十一騎打ち揃ひて渡り申候、謙信は川岸に馬を立て待ちかけ候、左馬助は左右を睨み、敵は一騎にて候間、信繁も一騎にて勝負すべし、皆々跡へ下り候へと下知して、眞先に渡し候を、輝虎も川へ馬を乘り入れ、左馬助と切り結ぶ、左馬助運や盡きけん、左の高股を打ち落され、川へ逆樣に落ち入り候、謙信は向の岸へ乘り上り、宇佐美駿河守が七百餘騎にて備へ候中へ馳せ入り申され候、甲州方にては、信玄二個處まで深手を負ひ申され、左馬助信繁は討死なり、板垣駿河守、小笠原若狹守、皆二個所三個所づゝ痛手を負ひ候故、遂に敗軍なり、越後勢も旗本を切り崩され敗軍しけるが、宇佐美駿河守と渡邊越中守とが、横鎚にて、信玄旗本を突き崩し候を以て力を得、甲州勢を追ひ返し、本の陣所芝居に旗を立て、鶴翼に陣を張り候、此時の戰、天文二十三年甲寅八月十八日卯の刻より終日十七度の合戰なり、信玄方二萬六千の內手負二千八百五十九人、討死二千二百十六人なり、越後方も手負千九百七十九人、討死三千百十七人なり、扨又十七度の合戰、十一度は謙信の勝軍、六度は信玄の勝軍なりと申傳へ候、謙信旗本を破られ候へども、追ひ返し本の芝居を取り返し、陣を張り申され候、武田方は、信玄深手負ひ申され、左馬助討死、板垣駿河守、小笠原若狹守を始め、武田大將分手負ひ候故、此陣叶はず、夜に入り陣引き拂ひ、引き退かれ候、謙信も翌日引取申され候、是は二十三年八月十八日川中島合戰の次第に御座候、同十九日には、謙信は善光寺に逗留し、手負を先へ除き、手柄高名の軍兵共に感狀證文を出し、二十日に、善光寺を引き拂ひ、越後へ歸陣に候、

弘治元年。四月。信玄攻降木曾義昌。以女妻之。二年。信玄取伊奈郡。於是盡定信濃。以高坂昌宣守貝津城。以備謙信。謙信爲武田氏强敵第一。諸將因榮昌宣也。

字解【弘治】……後奈良帝の時の年號。【伊奈】……信濃に在り。【貝津】……一に海津に作る。即ち今の松代なり。【榮】……光榮とする、名譽とする。

講義 弘治元年の四月に、信玄は、木曾義昌を攻めて降參させて、自分の娘を以て之に妻はせた。二年に、信玄は、伊奈郡を取つた。こゝに於て信玄は、殘らず信濃を平定し、高坂昌宣を以て、貝津城を守らせ置き、それで以て、謙信の來攻に備へた。謙信は、武田氏の强敵の第一等に位するものであつたので、諸將は、昌宣が此大任に當つたのを名譽とした。

三月。信玄。謙信。復對壘河中。信玄與山本晴行等。謀曰。我分兵遶出越後軍後。鼓譟逼之。而以本軍夾擊。必大得志。乃令信濃客將保科彈正等。以兵六千。夜度戶神山。時月黑。迷失道。不能達。謙信見甲斐軍夜爨。人馬有聲也。潛起擐甲傳令。擧八千騎出。五鼓詣信玄牙營。會天大霧。謙信自霧中。直斫營而入。營驚潰。斬山本晴行等六將。而天明矣。客將兵達上杉氏營。營無隻騎。顧聞河中戰聲如雷。則還渡筑摩河。出北軍後。甲斐軍望見。乃返。夾擊北軍。北軍敗走。追逼之犀川。北軍輪轉返戰。包追兵。將麾之。甲斐後軍橫擊救之。北軍乃倒隊而退。宇佐美定行植幟渡口護之。盡濟。甲斐兵疲。不復追擊。

字解【復對壘河中】……對壘は、對陣する也。河中島第二回の戰なり。【遶出】……遶は繞と同じ、旋る也。めぐり出づる。【客將】……客分の大將。【戶神山】……信濃に在り。【月黑】……月が黑雲に蔽はれて夜暗きこと。【爨】……音サン。かしぐ、飯をたく、兵糧をたく也。【擐甲】……擐はクワン、つらぬく。鎧を著る也。【五鼓】……五更、今の午前四時頃。【牙營】……音ガエイ。本陣。【隻騎】……音セキキ。一騎。凡そ物單なるを隻とす。【戰聲】……ときの聲、及物を打ち合はす音などを云ふ。【筑摩河】……信濃に在り。【犀川】……信濃に在り。【輪轉返戰】……車輪の廻轉するが如く、めぐるりと廻りて引き返して戰ふ。【麾】……音アウ。皆殺しにす。【倒隊而退】……後陣より前繰りに退く。【植幟渡口護之盡濟】……めじるしの旗を渡し場に立て、渡る者を擁護して無事に盡くわたらす。

講義 三月に、信玄と謙信とは、ふたゝび、河中島に對陣した。信玄は、山本晴行等と相談して曰ふには、われ、兵を分つて、一軍はぐるりと廻りて越後の軍勢の後に出で、攻め太鼓を打ち、喊の聲をあげて、之を逼り近づき、そして、本軍を以て挾み擊ちにするならば、屹度、思ふ存分にすることが出來るであらうと曰ひ、そこで、信濃の客分の大將なる保科彈正等に言ひ附けて、六千人の兵士を引き連れて、夜中に、戶神山を越えて越後の軍勢の後に出でさせることにした。けれども、その時に、黑雲が月を蔽うて夜暗く、保科彈正等は、その爲めに、迷うて道を取り違へて、目的の地に到著することが出來なかつた。謙信は、甲斐の軍勢が夜中に飯を炊き人や馬の聲がするのを見たので、そつと起き上りて、鎧を著、命令を傳へて、八千騎の兵を殘らず引き連れて打つて出で、五更(即ち午前四時頃)に、信玄の本陣に到達した。折しも其時に大に霧が立ち込めたので、謙信は、霧の中から、直に本陣に切り込んだ。信玄の本陣は、その不意なるに驚いて、崩れ散じた。かくて、山本晴行等六人の大將を斬つた。そして、夜が明けた。客分の大將なる保科彈正等の引き連れたる軍勢は、上杉氏の陣營に到著したが、その陣營の中は、一人の騎兵も殘つて居らなかつたが、あとを振り向いて耳をすませば、河中島の方面に於て、合戰の聲が雷の轟くが如くであるのを聞き付けたので、そこで、引き返して、筑摩川を渡り、北軍(即ち越後の軍勢)のうしろに出でた。すると、甲斐の軍勢は、味方の旗幟が敵の軍勢のうしろにあらはれたのを望み見て、そこで、引き返して、北軍を挾み擊ちにした。北軍は支へきれずして敗走した。甲斐の軍は、之を追ひかけて、犀川に押しつめた。すると、北軍はぐるり〳〵と向き變つて引き返して戰ひ、追ひかけて來る敵兵を包みこんで、まさに、之を皆殺しにしやうとした。甲斐の後軍が、横合から擊つて之を救うた。北軍は、そこで、隊をさかさまにし、先陣を後陣にして退軍した。すると、宇佐美定行は、旗を渡し場に立て、之を護衛して、總軍勢殘らず河を渡つて仕舞つた。甲斐の軍勢は、疲勞して、もはや追ひ擊たうとはしなかつた。

八月。謙信復出河中。使村上義淸等營舊戰處。而自進過河。背水陣。信玄知其志在必死。不敢出戰。其候騎報曰。北軍積薪如山。信玄令諸將曰。敵中夜有火擧。愼勿進擊。進擊者族。及暮。候騎又報曰。北軍掃營。荷擔將去。諸將爭請追擊。信玄曰。謙信豈迫暮掃營者。擊之必敗。其夜。北軍火起。甲斐軍不動。天明。望見北軍疏行首。嚴陣而待。諸將乃服信玄。信玄謀設伏兩山閒。挑戰佯敗。誘敵入山。瞰射殲之。乃夜設覆。而明縱馬入北軍中。

出輕卒追之。謙信不出。信玄慮兵老有變。乘夜退入上野原。謙信擧軍追擊。信玄返戰。殺傷相當。交收兵歸。甲斐。越後兵連不解。兩國士民患之。皆願講和。今川義元爲周旋之。謙信將有事於關東及越中。於是和成。

【字解】【八月謙信復出河中】……河中島第三回の戰。【營】……屯營する、陣取る。【背水陣】……川をうしろにして陣取る。韓信の背水の陣にとる。【候騎】……候は斥候なり。物見の騎兵。【族】……罪、一族を誅殺する。【掃營】……陣所を引き拂ふ。【荷擔】……音カタン。荷物をになひかつぐこと。【追暮】……日暮に推しせまる、日暮になりかゝる。【天明】……夜明けがた。【疏行首】……疏は開通の義。陣前に戰の道を開くために營壘を開くこと。左傳の成公十六年の語。杜預云はく、陣前に當り、營壘を決開して、戰道を爲す也と。【嚴陣而待】……嚴重に陣を構へて敵の來り攻むるを待ち受ける。【嚮射】……音カンシャ。上から見おろして射る。【殲】……つくす、皆殺しにする。【覆】音フ。伏兵。【輕卒】……身輕に出で立ちたる士卒。【兵老】……兵つかる、長陣に退屈する。【周旋】……世話をする。

【講義】この年の八月に、謙信は、また、河中島に打つて出で、村上義清等をして、もとの戰場に陣取らしめて置き、そして自分は進んで河を渡りて向うの岸に至り、川をうしろにして陣取つた。信玄は、謙信の志は必死を期して居るといふ事を知つたので、むざとは出でゝ戰はなかつた。信玄の物見の騎兵が報告して曰ふには、北軍（謙信方の軍）は、薪（タキヾ）を積み上げること、山の如くで御座りますと曰つた。すると、信玄は、諸の大將ども に命令して曰ふには、敵の陣中に於て、夜分に火が燃えあがるとがあつても、愼んで、進み擊つことがあつては相成らぬ。若し我が命令にそむいて進み擊つ者は、その罪、一族を誅殺するぞと曰つた。日暮れがたに至つて、物見の騎兵が、また、報告して曰ふには、北軍は、陣營を引き拂つて、荷物をになひかついで、將に立ち去らうといたして居りますと曰つた。そこで、諸將は、先を爭うて、北軍を追ひ擊たうと請うたけれども、信玄が曰ふには、謙信もさる者であるから、彼れは、どうして、日暮れにさしせまつて陣屋を引き拂つて立ち去るやうな事を致さうぞ。いま、之を擊つたならば、屹度、味方が敗北するに相違ないと曰つた。その夜、北軍に火が燃えあがつたけれども、甲斐の軍（信玄方の軍勢）は、ぢつとして居つて、動かなかつた。夜明け方になつて、北軍を望み見ると、北軍は、陣の前に戰ふべき道を開いて、嚴重に陣取つて、敵兵が攻め來るを待つて居つたので、諸の大將共は、そこで、信玄が遠き慮あるに感服した。信玄は、伏兵を山と山との間に設けて置いて、戰を仕かけて、いつはつて負けて、敵をおびき寄せて、山に入らせて、上より見おろして弓や鐵砲を射て、之を皆殺しにしやうと思うて、そこで、夜の間に、伏兵を設けて置いて、そして、夜が明けて、わざと、馬を放つて、越後の勢の中に入らしめ、輕裝せる兵卒を出して、之を追ひかけさせた。けれども、謙信は、その計略を感付いたと見えて、出でゝ來なかつた。信玄は、そこで、餘りの長陣の爲めに、兵士が退屈して、何か變事でも起りはせぬかと心配して、夜のくらきに乘じて、退却して、上野原に入つた。謙信は、總軍勢を以て、追つかけて來て擊ち、信玄は、引き返して戰ひ、殺された者や傷つけられた者の數が、雙方、同じ位であつた。かくて、雙方共に、兵を引きまとめて歸つた。かくの如く、甲斐と越後との二國は、戰が打ちゞいて、なかなか解けなかつたので、兩國の人民は、無益の戰鬪が限りなく引きつゞくことを患へて、皆、和睦をすることを願ひ、今川義元が、兩國の爲めに、其中間に立ち入つて其扱をなした。謙信は、此時に關東及び越中に於て仕事をしやうと思うて居つて折柄であつたので、こゝに於て、兩國の和睦の相談が纏つた。

永祿元年。三月。謙信自將入越中。越中。加賀將士。交請降。許之。」先是。上杉憲政。數與北條氏康戰。每戰輒敗。關東盡屬氏康。憲政欲請援於謙信。是歲秋。憲政走。入越後。求見謙信。謂之曰。吾管領八州。十二世於此。卒爲一氏康傾覆。求四鄰可報氏康者。獨有公與晴信。而晴信。氏康方親。吾是以捐怨以歸公。公能爲我復仇。謙信曰。敢不竭力。當是時。謙信未得志於信濃。加賀。越中亦未服。而許於憲政者。欲以掩爲景之惡也。乃築館北川。以賓之。憲政與謙信約爲父子。謙信於是稱上杉氏。又授以其職號。謙信辭曰。事成受之。未晚也。於是。會將士議。使人諜北條氏。聞氏康每戰用奇。曰。彼用奇。吾用正也。十月。將兵入上野。陷厩橋。沼田等五城。復平井。據之。發使京師。告東伐事。且請攝家一人爲關東主。而己輔之。如北條氏故事。二年。四月。再入京師。營于坂本。五月朔。詣闕。天子賜酒。侑以寶劍。名五虎。請前關白前嗣東下。見許。又謁將軍。命管領關東。比三管領。許乘篋輿執朱柄麾。賜己偏諱。改名輝虎。

【字解】【永祿】……正親帝の時の年號。【傾覆】……音ケイフク。かたむけくつがへす、國の滅亡せしを云ふ。【四鄰】……四方の隣國。【捐怨】……捐は、棄つる也。永正年中に、房能及び其兄顯定、並に、謙信の父爲景に殺されたり。かくて、上杉氏は、長尾氏に對して遺恨あれども、今や其

舊き遺恨をすて、謙信に依頼するとの意。【未得志於信濃】……村上義清等の依頼を果さゞるを云ふ。【掩爲景之惡】……父爲景の惡逆の名をおほひかくす。【寘】……置く。【職號】……關東管領といふ官職の名稱。【晚】……おそし。【諜】……音テフ。うかゞひさぐる、間諜を遣はして其樣子をさぐる。【用奇】……奇兵を用ふる。奇拔なる計略を用ふ。【用正】……正兵を用ふる。正々堂々の戰爭をする。【廐橋】……上野に在り。【沼田】……上野に在り。【復】……取りかへす。【東伐之事】……北條氏康を伐つこと。【攝家】……音セツケ。五攝家、卽ち九條、一條、二條、近衞、鷹司。【如北條氏故事】……承久元年正月に將軍源實朝薨ぜし後、北條義時、藤原道家の子賴經を請うて鎌倉の主となせし先例。【坂本】……近江に在り【侑】……すゝむ、酒間に引出物として送ること。【將軍】……義輝。【三管領】……斯波、細川、畠山。【箋輿】……音ベッヨ。綱代輿(アジロゴシ)。板輿に次ぎて晴の時に用ふる輿にして、青竹のあじろにて、外を張りつけ、黑塗の押緣を打つ。【朱柄麾】……シュヘイノキと讀む。朱塗りの柄の采配。【偏諱】……音ヘンキ。偏は半なり。將軍義輝その名乘の一字を賜はりしなり。

解說 永祿元年の三月に、謙信は、自身に大將となつて、越中の國に打ち入つた。すると、越中、加賀の將士どもが、かはる〴〵來つて降參することを請うたので、謙信は之を許した。これより以前に、上杉憲政は、たび〳〵北條氏康と戰ひ、戰ふたびごとに、いつでも敗北し、關東は、殘らず皆、氏康に附いて仕舞つたので、憲政は、援を謙信に請はうと思うて居つた。かくて、この年の秋に、憲政は、出走して、越後の國に入り、謙信に面會することを求めて、謙信に向つて曰ふには、われは、關東八州を管領すること、此に十二世の久しきに至つて居るが、つひに、一人の氏康の爲めに國を亡ぼされた。そこで、われは、近隣の諸國の中で氏康に此怨の返報をすることの出來る者を求めるに、たゞ、貴殿と晴信との二人があるだけである。然るに、晴信と氏康とは、今や丁度、親密なる間柄であるので、これに賴むわけには行かぬ。そこで、われは、舊い遺恨を棄てゝ貴殿に賴み込むのである。貴殿はどうぞ、わが爲めにその仇を復して下さいと曰つた。謙信が曰ふには、已に此御依賴を受けたからには、どうして力を盡さないで居りましやうぞと曰つた。是時に當りて、謙信は、未だ信濃の國に於て其目的を果すことが出來ず、加賀、越中の諸國も亦、未だ歸服して居らぬのであるが、しかるに、憲政からの依賴を承知したわけは、憲政の爲めに盡力して、それで以て、父爲景が曾て房能等を殺せる惡逆の名を掩ひかくさうと思うたからである。そこで、謙信は、北川に屋敷を作つて、其處に憲政を置いた。かくて、憲政は、謙信と約束して、父子となつた。謙信は、こゝに於て、上杉氏と稱した。憲政は、又、謙信に、自分の官職の名卽ち關東管領といふ稱號をも與へやうとした。すると、謙信は辭退して曰ふには、此事が成就した後に、それを頂戴いたしましても、遲くは御座りませぬと曰つた。こゝに於て、謙信は、將士を寄せ集めて相談し、人をして北條氏の樣子をうかゞひさぐらしめた。かくて、謙信は、氏康が戰爭するたびごとに、奇計を用ふるといふ事を聞いて、曰ふには、彼れ氏康は奇兵を用ふるが、吾は之に反して、正兵を用ふるのであると曰つた。十月に、謙信は、兵を引き連れて、上野に打ち入り、廐橋、沼田などの五つの城を攻め落し、平井を取りかへして、其處に立て籠り、使者を京都に發足せしめて、東の方北條氏康を征伐することを申告し、其上に、五攝家の中の一人が關東の主人となられて、そして自分が之を輔佐すること、北條氏の時の先例の樣に致したいと願ひ出でた。二年の四月に、謙信は、ふたゝび京都に入朝せんとして、先づ坂本に陣營を布いた。五月の朔(ツイタチ)に、御所に參內した天子樣(卽ち正親町天皇)は、謙信に、酒を賜はり、且つ引出物として、五虎と名づくる寶劍を賜はつた。謙信は、前の關白前嗣公が關東に下向せられることを願ひ出でゝ、之を御聞き入れになつた。謙信は、又、將軍足利義輝に謁見した。將軍は、謙信に命じて、關東を管領せしめることにし、室町の三管領と同樣に取り扱ひ、あじろ輿に乘り朱塗りの柄の采配を持つことを許し、自分の名乘の一字を賜はつて、謙信の名景虎を改めて、輝虎と名乘らせることにした。

三年。五月。謙信自將攻和田城。未下。遣長尾政景。侵武藏。九月。前嗣來。

館于至德寺。於是。謙信發二萬騎。陣泉福寺。北條氏康大擧禦之。本莊繁長以所部爲先鋒。接戰。相模軍卻。諸隊繼進。謙信以麾下自中路進。與氏康戰。大破之。關東豪傑響應。乃報捷越後。迎憲政。居之廐橋牙城。而自居其郭。四年。正月。關東將士賀正廐橋。遣兵攻古河。拔關宿。河越諸城。三月。謙信部七十六將。兵凡十一萬。進入相模。太田三樂。小幡憲重等居前。建牙于高麗山下。北條氏遣死士。狙擊謙信。謙信覺。捕之。縱還。遂圍小田原。氏康不敢出。謙信脫冑。穿白布幘。騎白馬。執朱柄麾。馳入諸隊。指揮軍事。關東將士竊指目語曰。此公視吾曹如蟲蟻。寧可終戴乎。

字解 【和田】……信濃に在り。【館】……宿る、旅館とする。【至德寺】……越後に在り。【泉福寺】……越後に在り。【所部】……部下の兵士。【郭】……しりぞく、退却する。【旣橋】……上野に在り。卽ち今の前橋。【牙城】……音ガジヤウ。本丸。【郭】……音クワク。外郭、二の丸。【賀正】……年賀を申し述べる。【古河】……下總に在り。【關宿】……下總に在り。【河越】……武藏に在り。【部】……部署する、手分する。【太田三樂】……資正入道。【建牙】……牙は牙旗、大將の旗なり。大將の旗を建てる。【高麗山】……相模に在り。【死士】……決死の士。【狙擊】……音ソゲキ。ねらひ擊つ。【覺】……さとる、感づく。【縱還】……音ショウクウン。はなつてかへらしむ。許して還らせる。謀のあらはれたるを知らせんが爲めなり。【穿】……きる、被る也。【白布幘】……幘は音サク。頭をつゝむ巾なり、俗に之を頭巾といふ。白ゝ布の頭巾。【指目】……指さし見る。【吾曹】……わがともがら。【如蟲蟻】……蟲けらの如く思うて馬鹿にする。

解說 永祿三年の五月に、謙信は、自身に大將となつて、和田城を攻めたが、未だ攻め落すことが出來なかつた。又、長尾政景を派遣して、武藏を侵略せしめた。九月に、前嗣が來つて、至德寺といふ寺院を旅館として居つた。こゝに於て、謙信は、二萬騎の軍勢を繰り出して、泉福寺に陣取つた。北條氏康は、謙信が來り攻むると云ふ事を聞いて、大に兵を擧げて、之を禦いだ。本莊繁長が、其部下の軍勢を引き連れて、先鋒となつて、相模の軍勢(卽ち北條氏方)と、打ち合ひ、相模の軍勢が退却したので、上杉の諸隊は、之につゞいて進み、謙信は、旗本を引き連れて、中路から進み、氏康と戰つて、大に之を破つた。關東の豪傑は、響の聲に應ずるが如く、謙信に附いた。謙信は、そこで、勝利を得たことを越後に報告し、憲政を迎へて、之を旣橋城の本丸に居らしめ、そして自分は其外郭に居つた。四年の正月に、關東の將士どもは、廐橋に來つ

て、年賀を申し述べた。謙信は、又、兵を派遣して、古河を攻め、關宿、河越などの諸の城を攻め落した。三月に、謙信は、七十六人の大將を手分して、兵凡そ十一萬人で、進んで相模に打ち入つた。太田三樂、小幡憲重などが、前陣に居つて、大將の旗を高麗山下に建てゝ、陣營を布いた。北條氏は、決死の士を遣はし、謙信をつけねらつて擊たうとしたが、謙信は、それを感づいて、之を捕へたけれども、しかし之を殺さずして、ゆるして小田原に還らしめた。かゝて、謙信は、とう〳〵小田原城を圍んだけれども、氏康は、むざとは城から出で、戰はなかつた。謙信は、冑をぬいで、白き布の頭巾を以て頭をつゝみ、白い馬に乘り、例の朱塗りの柄の采配を執つて、馳せて諸隊に入り、軍事を指圖した。關東の將士は、竊に之を指ざし目くばせして、語り合つて曰ふには、此殿は、吾々を視ること、小さい蟲や蟻を見るが如くで、一向に禮儀がない。こんな人をば、どうして、長く推ー戴いて居ることが出來やうぞと曰つた。

當是時。信玄在輕井澤。飯富兵部說曰。謙信威燄如此。北條氏必亡。則我亦危矣。君宜及小田原未陷。引兵出三增嶺。直當越後中軍。得勝大善。卽不勝。亦足以伸義天下。信玄曰。不可。謙信用兵迅速。得之天資。而無老成之計。關東將士。必不能堪。終當歸氏康。汝暫待之。宇佐美定行說謙信曰。城堅。我深入久頓。恐有變。宜及今收兵。從之。新發田治長年少。爲近習。自請爲殿。氏康不敢尾擊。乃入鎌倉。詣鶴岡祠。觀源氏。北條氏舊圖。索故物小八葉車。載前嗣。而謙信騎從焉。關東將士擁衞前後。小幡憲村操刀從。千葉國胤。小山政朝。門閥最高。爭坐次不決。訴於謙信。謙信判曰。在八州之士。千葉氏可爲首。小山氏不可爲尾。二人不能爭。忍城主成田長泰。稱源賴義故事。立馬祠前。以待。從士曳長泰。下馬拳之。長泰慚恚奔歸。諸將叛歸者相繼。謙信還。至武藏府。長泰與北條氏兵尾擊之。謙信令委棄輜重於道。敵爭取之。因蹂躪而過。入平井。四月。以憲政歸越後。

【字解】【輕井澤】……信濃に在り。【威燄】……威勢の盛んなること火焰の如くにして寄りつかれぬを云ふ。【三增嶺】……信濃に在り。【卽】……もし。【迅速】……音ジンソク。迅は疾なり。すばやきこと。【天資】……天性、生れつき。【老成之計】……始終の安全を計る物なれたる計。【久頓】……久しくとゞまる、久しく軍をとゞむること、累日止舍する也。【殿】……しんがり。【尾擊】……後から追つかけて擊つ。【小八葉車】……八葉とは、綱代に八曜星の形を編みて飾となしたるものにして、葉は借字にて、實は曜の字なり。其車の大小によりて、其紋に大小あり、大八葉、小八葉の別あり、大臣以上の乘車をり。桃花蕋葉等に見ゆ。【操】……とる。【門閥】……音モンバツ。家柄。【坐次】……席次。【判】……裁判する、取りさばく。【八州】……關東八州。【千葉氏可爲首小山氏不可爲尾】……兄たり難く弟たり難しの意。【忍】……武藏に在り。【成田長泰稱源賴義故事】……下總守成田長泰は、其祖、源賴義と姻戚なりしとて、其時の事を言ひ立てる。【下馬拳之】……馬から引きずりおろして、拳骨を以てなぐりつける。拳とは、拳（コブシ）を以て之を拊つ也。【委棄】……音キ。すつる。【輜重】……音シチヨウ。荷物車、小荷駄。

【蹂躪】音ジウリン。ふみにじる。敵が小荷駄を爭ひ取らんとするうちに、ふみにじりて通りし也。【平井】……上野に在り。

【講義】この時に當りて、信玄は、輕井澤に居つたが、飯富兵部が、信玄に向つて說いて曰ふには、謙信の勢の盛んなること、あの通りで御座りますれば、北條氏は屹度亡びるで御座りましやう。さうなるときは、我が武田氏も亦、危くなるで御座りましやう。されば、我が君には、小田原城が未だ攻め落されないうちに、軍勢を引き連れて、三增嶺に出で、直ちに越後の中軍（卽ち大將の本陣）を衝き擊たれるが宜しう御座います。さうして、勝利を得ましたならば、まことに此上も無い事で御座りますし、若し不幸にして勝利を得ませぬとても、亦、信義あることを廣く天下に知らしめることが出來るで御座りましやうと曰つた。信玄が曰ふには、それは宜しくない。謙信が兵を動かすことのすばやいことは、全く生れ付きであるが、しかしながら、物なれて萬事にあやまり無き計略の無い人であるから、關東の將士は、とても、いつまでも堪へ忍んで、其下風に立つて居ることは出來まい。仕舞には、氏康に從ふことに成るべき筈である。汝暫く之を待つて居れと曰つた。一方では宇佐美定行は、謙信に向つて說いて曰ふには、この小田原の城は堅固にして容易に攻め落すことが出來ないのに、我が軍が深く敵地に入り込んで、久しく留まつて居るときは、恐らくは變事が起るかも知れませぬ。されば、今のうちに軍勢を取りまとめて引き上げるが宜しう御座りますと曰つた。謙信は、此言に從つて軍勢を引き上げることにした。新發田治長は、年が若くして、謙信の側近く仕へて、近習と云ふ役を務めて居つたが、自ら請うて、殿（シンガリ）となつた。氏康は、むざとは之を追ひ擊たうとしなかつた。そこで、謙信は、鎌倉に入つて、鶴岡の八幡宮に參詣して、源氏北條氏時代の古い繪卷物などを觀て、其時代の古い物で小八葉車と云ふ者をさがし索めて、前嗣を載せ、そして、謙信は、騎馬にて之に從ひ、關東の將士どもは、その前後を取り卷き護衞し、小幡憲村は、刀を持つて之に從つた。この時に、千葉國胤と、小山政朝とは、家柄が一番高い人々であつたが、この二人が、席順の前後を爭うて、なかなか決定しなかつたので、之を謙信に訴へ出でた。すると謙信は之を裁決して曰ふには、關東八州の武士の中では、千葉氏は首座たるべきもので、小山氏は末席となる譯にはなるまいと曰

ひ、二人は之を爭ふことが出來ずして、どうやら收まつた。忍の城主なる成田長泰は、源頼義の時の先例であると申し立て、、馬を八幡宮の前に立て、、待つて居つて、謙信が來ても、馬から下りなかつた。そこで、謙信の從士は、長泰を馬から引きずりおろして、拳骨を以て之をなぐつた。長泰は、此恥辱を與へられたることを愧ぢ怒つて、走り歸り、諸將の之が爲めに叛いて歸る者が、續々として引きも切らなかつた。かくて、謙信は、引き返して、武藏の國府に至ると、長泰は、北條氏の兵とともに、之を追つかけて擊つた。謙信は、命令して、軍食兵器雜具等を積み載せたる輜重車を道に棄てしめた。敵兵は、多くの分捕物を得やうとて、先を爭うて之を取らうとした。かく敵兵がさわざ亂れて居るにつけ込んで、之を馬足にかけてふみにじつて通り過ぎて、やがて上野の平井城に入り込み、四月に、憲政を引き連れて越後に歸つた。

六月。關東諸將復附氏康。來攻平井。謙信聞報卽發。潛軍由梭師谷出。比曉擊北條氏軍。待前軍戰半。自以牙兵旁出。橫擊中堅。使別將遶出其背。氏康敗走。復白井。廐橋諸城而歸。

【梭師谷】……上野に在り。【比曉】……あくるころ。【牙兵】……音ガヘイ。麾下の兵。【中堅】……中軍。大將、中軍に居りて、堅鋭を集めて、自ら守る、故に中軍を中堅と云ふ。【白井】……上野に在り。【廐橋】……上野に在り。

【評曰】六月に、關東の諸將は、ふたゝび氏康に附き從ひ、來つて平井を攻めた。すると、謙信は、この事の報知を聞いて、卽座に出發し、軍勢をひそめて、梭師谷から打つて出で、夜の明ける頃に、北條氏の軍勢を擊ち、先陣の戰半ばなるを待つて、謙信は、自身に、旗もとの兵を引き連れて、橫合から、北條氏の中軍を擊ち、別の大將をして、ぐるりと廻つて北條氏の軍勢の後に出でさせたので、氏康は敗軍して走つた。謙信は、そこで、白井、廐橋などの諸城を取りもどして歸つた。

謙信之攻小田原也。北條氏使使請信玄。北侵越後。以牽其勢。信玄乃令高坂昌宣焚掠疆上。謙信大怒。四年。八月。復出信濃。壘于西條山。堰水爲池。以備貝津敵。信玄與義信將二萬騎。來陣雨宮渡。以絶其歸路。越後將士說曰。利在速戰。謙信不肯。居三日。信玄收兵。入貝津。以瞰謙信歸。謙信自若也。信玄謀曰。謙信蓋待吾變。不動其軍也。吾伏兵河中。而別軍自貝津。直往攻西條。則謙信無勝敗。必引兵北歸。而吾承敝襲戰。謙信可擒也。越後諜者報曰。甲斐軍出貝津南行矣。謙信召諸將問計。直江實綱曰。彼國內有變。故乘夜引去耳。當邀擊之。宇佐美定行。齋藤朝信曰。不然。彼蓋爲二軍。欲及吾踰河。夾擊之也。語未畢。諜者又報曰。甲斐軍渡廣瀨。上河中陣矣。謙信謂二人曰。如汝言。吾將出其意外也。乃置疑兵山上。而全軍啣枚縛馬舌。涉雨宮渡。遇武田氏斥騎十七人。盡斬之。進壓信玄軍而陣。使本莊繁長。色部長實等將二千騎。陣筑摩河岸。甲斐別軍已向西條山。信玄俟報至曉。曉未辨人色。見謙信牙旗在前。將士皆失色。越後軍鼓而進。聲震地。信玄不暇易其陣。以弓銃力拒。謙信常憾向斫信玄而不遂也。欲必決死。自抽牙兵。前逼信玄麾下。麾下潰亂。赴犀川。荒川伊豆逼擊信玄。信玄脫走。謙信追之。義信以二千騎尾謙信後。甘糟景茂等。擊走義信。謙信旣克。休止傳餐。義信又以殘兵返襲。敗之。斬越後將志田義時以下數十人。謙信執槍親鬪。本莊繁長等來援。復擊走義信。或說。貝津敵夜出乘我疲。宜急收兵。謙信不肯。背犀川陣。次善光寺。

三日。遣使信玄。欲再決戰。甲斐將士又有請焉者。信玄皆弗聽。

【字解】【率】……音ケン。率制なり、引きおさへて自由にさせぬこと。越後の方へ氣をまはさせて、小田原の方の勢をひきおさへるを云ふ。【焚掠】……音フンリヤク。家を燒き物をかすめ取る。【疆上】……音キヤウジヤウ。國境の近邊。【四年】……疑ふらくは衍ならん。【西條山】……信濃に在り。【堰水】……水を壅ぎて堤を爲すを堰と云ふ。流れる水をせきとめること。【貝津敵】……高坂昌宣を指す。貝津は、一に海津に作る。【雨宮渡】……信濃に在り。【不肯】……がへんぜず、承知せぬ。【厭】……うかゞふ、つけねらふ。【自若】……平氣で居ること。【承敵】……その弊を待ち設けて、そのやぶれ目に付け込んで。【麋戰】……音アウセン。必死の戰なり、一騎も殘さず討ち取らんとて奮戰するなり。【諜者】……音テフシヤ。まはし者。【意外】……意想外の處。氣の付かぬ處。【疑兵】……寡を衆に見せかけ又は弱を强に見せかけて、すべて敵を疑はしむる兵。【山上】……西條山の頂。西條山の上に兵ありと見せかける也。【啣枚】……枚は音バイ。其形、箸の如く、之を横に口にくはへて、言語を發せぬやうにする也。【縛馬舌】……馬の舌をくゝりつけて嘶かぬやうにする。【斥騎】……音セキキ。物見の騎兵。【壓信玄軍】……信玄の軍をおし塞ぎて陣取る。【人色】……人の顏や物の色。【牙旗】……音ガキ。大將旗。【易】……かふ。【向】……さきに。【抽】……拔く也。【牙兵】……旗もとの兵。【前】……すゝんで。【麾下】……音キカ。旗もと。【潰亂】……音クワイラン。崩れ亂れる。【尾】……あとをつける。【傳餐】……餐は音サン。傳餐とは、兵糧をつかふ也。【志田】……一に志駄に作る。【親】……みづから。【次】……やどる。止宿する。【善光寺】……信濃に在り。

【講義】謙信が、小田原を攻めたときに、北條氏は、使者を遣りて、信玄に請ひ、北の方越後を侵略し、それで以て謙信の兵勢をひきつけおさへて、專一に小田原を攻撃せぬやうにしてくれよと賴んだ。信玄は、そこで、高坂昌宣をして、越後の國境の近傍を焚き拂つて民の物を掠め取らしめた。そこで、謙信は、大に怒つて、永祿四年八月に、また、信濃に打つて出で、西條山に取手を作り、水をせき止めて池となして、貝津の敵に備へた。信玄は、その子義信とともに、二萬騎の兵士を引き連れて、來つて雨宮の渡に陣取つて、謙信の軍の歸路を絶ち切つた。すると、越後の將士たちは、いづれも皆、謙信に說いて曰ふには、味方の利益は早く戰を始めるにありますと曰つたが、謙信は承知しなかつた。かくて三日立つと、信玄は、兵士を引きまとめて、貝津に入り、そして、謙信が歸るのをうかゞつて居つたが、謙信は、平氣で居つて、一向に歸りさうにもしなかつた。そこで、信玄は謀計を運らして曰ふには、謙信は、大體、我が軍に異變の生ずるを待つて居るので、それで、其軍を動かさぬのであらう。さすれば、われは、兵を河中島に伏せて置き、そして、別軍は、貝津から出でゝ直に往きて西條山を攻めることにしやう。さうするときは、謙信は、勝つにしても負けるにしても、屹度、其軍勢を引きまとめて北に向つて歸るであらう。そこで、われは、彼のやぶれ目を待ち受けて、それに付け込んで、必死になつて戰ふときは、謙信を滅にすることが出來るであらうと曰つた。一方では、越後の忍びの者が、歸つて報告して曰ふには、甲斐の軍勢は、貝津を出でゝ南に向つて進みましたと曰つたので、謙信は、諸將を召し寄せて、其計略を問うた。すると、直江實綱が曰ふには、彼れは、其本國の內に變事が起つたので、それ故に、夜の間に乘じて引き去るので御座りましやうから、之を迎へ擊つが宜しう御座りますと曰つた。宇佐美定行と齋藤朝信とが曰ふには、左樣では御座らぬ。彼は、大體、軍を分けて二隊となして、味方が河を渡るのを待つて挾み擊ちにしやうとするので御座りましやうと曰つた。その言葉の畢らないうちに、しのびの者が又報告して曰ふには、甲斐の軍勢は、廣瀨といふところを渡つて、河中島に上つて陣取りましたと曰つた。すると、謙信は、宇佐美、齋藤の二人に向つて曰ふには、貴樣達が言つた通りであつた。されば、われは、彼の思ひがけぬ事を致して、其膽をひしいでくれやうと曰つた。そこで、謙信は、西條山の上に軍勢が澤山に居るやうに見せ掛けて置き、そして總軍勢は、枚を口にくはへ、馬の舌をしばりつけて、少しも聲の出ぬやうにして、雨宮の渡を從渉（カチワタリ）し、武田氏の物見の騎兵十七人に出遇つて、殘らず之を斬り殺し、進んで信玄の陣を押しつけるやうにして陣取り、又、本莊繁長、色部長實等をして、二千騎を引き連れて筑摩河の岸に陣取らせておいた。この時に、甲斐の別軍は、すでに西條山に向つて出掛けたので、信玄は、其報告の來るを待つて、夜明け方に至つた。夜の明け方に、未だ人の顏や物の色を見分けることの出來ない時頃に、謙信の大將旗が我が陣の前に立つて居るのを見て、甲斐の將士は皆、驚いて顏色をかへた。越後の軍勢は、攻太鼓を鳴らして進み、その聲は、大地に震ふばかりであつた。そこで、信玄は、其陣立を換へる暇も無く、弓と鐵砲とを以て力を盡して拒ぎ戰つた。謙信は、此以前の河中島第二回の戰に於て、信玄を斬り付けたが、思ふ存分にすることが出來なかつたことを、平生、殘念に思うて居つたので、此度は、是非とも、信玄に出遇つて決死の戰をなさうと思うて、自身に、旗もとの兵を引きつれ、すゝんで、信玄の旗もとに逼つた。信玄の旗もとの者共は、謙信の勢におしつけられて、崩れ亂れて、犀川の方へ赴いた。荒川伊豆が、逼つて信玄を擊つた。信玄は、身を脫して逃げ走つた。謙信は之を追つかけた。すると、信玄の長子の義信が、二千騎を引き連れて、謙信の後をつけて追つかけて來た。甘糟景茂等が、擊つて義信を敗走させた。謙信は、既に勝利を得たので、休息して、辨當をたべて居つたが、義信が、又、殘つて居る軍勢を引き連れて、引き返して來てその不意を擊ち、之を敗り、越後の大將志田義時以下數十人を斬つた。そこで、謙信は、槍を執りて、自身に鬪つて居つたが、本莊繁長等が來り援けたので、また擊つて義信を敗走させた。ある人が說いて曰ふには、貝津の敵が、夜に乘じて、出で來つて、我が軍の疲勞したるに付け込んで攻め寄せるで御座りましやう。急に兵を引きまとめて退却するが宜しう御座りますと說いたけれども、謙信は承知せずして、犀川を背にして陣取り、善光寺に止舍すること三日に及び、使者を信玄の所に派遣して、ふたゝび決戰せんことを申し込んだ。甲斐の將士の中にも、又、決戰することを信玄に請うた者があつた。けれども、信玄は、どちらも皆聞き入れなかつた。

五年。三月。北條氏康請信玄。合兵攻松山。松山。太田三樂屬城也。三樂與長尾謙忠。在厩橋。令上杉憲政庶子憲勝守之。告急於謙信。甲斐卒將甘利氏臣。有米倉丹後者。束竹爲楯。以扞銃丸。諸隊倣之。遂陷松山。降憲勝。而謙信方至厩橋。問三樂曰。松山何如。曰。陷矣。謙信大怒。瞋目按刀而跽曰。汝以怯夫守城。使吾不及事。是辱我武也。吾寧與汝死。三樂慴伏。不知所出。乃上松山糧仗籍。及憲勝質子一人。謙信左手捽一人髮。而右手斬之。收刀復問曰。敵軍幾何。曰。五萬人。將帥誰某。曰。信玄。義信。氏康。

氏政。謙信笑曰。與吾敵者二人而已。如氏政。義信。吾直以刀背一擊足矣。抑近地有敵城可攻乎。曰。私市城距此十里許。謙信曰。可攻也。卽親將赴攻。三樂從之。綴舟濟刀根川。旣濟。毀舟。過信玄。氏康軍前。遣使言曰。二公攻松山。而僕不及援。僕深愧之。不敢徒歸。今往攻私市。二公幸見要。不答。乃傅城。四面齊登。一晝夜拔之。斬城將小田朝眞。鏖三千人。以志田春義代守。還。遣使二氏軍曰。僕拔城而還。猶可以一戰。二公豈有意乎。甲斐軍鼓譟。謙信免冑下馬。徐行而還。至廐橋。召長尾謙忠曰。三樂從我。汝何不從。拔刀斬謙忠。屠其衆二千。使北莊丹後代守。然後歸。氏康謂信玄曰。公何以不戰。曰。吾與公敵。一謙信。雖勝可愧也。信玄從容與氏康語。因問之曰。河越之戰。公以一軍克兩上杉氏。願得聞其詳。氏康曰。公在焉。僕何敢言。信玄固請曰。欲使兒聞之。氏康乃談其戰略。信玄稱善。還至其營。謂馬場信房曰。氏康手段。吾得之矣。

【松山】……武藏に在り。【長尾謙忠】……彈正入道。【廐橋】……上野に在り。【憲勝】……新藏人と稱す。【卒將】……侍大將。【甘利氏】……左衞門晴吉。【米倉】……正房。【束竹】……竹をつかぬ、竹を編む。【扞】……ふせぐ。【銃丸】……鐵砲の玉。【傲】ならふ、眞似する。【跽】……ひざまづく、兩膝を地に著けて身を立つる也。【怯夫】……音ケフフ。臆病者、憲勝を斥す。【不及事】……間に合はぬ。【慴伏】……音セフフク。おそれふす。【不知所出】……どうして善いか分らぬ。【糧仗籍】……兵糧と武器との數を記したる帳面。【質子】……音チシ。人質。【捽】つかむ、頭髮をつかむ也。【刀背】……刀のむね。【私市】……武藏に在り。【距】……去る。【綴】……つゞる、つなぎ合はせる。【濟】……わたる。【毀】こぼつ、こわす。【要】……要擊なり、さへぎり擊つ。【傅城】……傅は、著く、せまる也。城ぎはまで攻め寄せること。【齊】……ひとしく。【鏖】……みなごろしにす。【免】……ぬぐ。【河越之役】……天文十五年のこと。後北條記に詳なり。【兩上杉氏】……山內、扇谷。【兒】……せがれ、義信を指す。【手段】……手だて、しかた。

事實 永祿五年の三月に、北條氏康は、信玄に請うて、兵を合はせて松山城を攻めた。松山城は、太田三樂の附屬の城であつた。三樂は、長尾謙忠とともに、廐橋に居つて、上杉憲政の妾腹の子なる憲勝をして、之を守らしめて置いたが、此事を聞いて、危急なることを謙信に報告した。甲斐の侍大將なる甘利氏の家來に、米倉丹後といふ者があつて、此人が工夫して、竹を編んで楯となし、それで以て鐵砲玉を拒ぐことにし、諸隊も之を眞似して、進み攻めて、とう〳〵松山城を攻め落し、憲勝を降參させた。然るに、謙信は、丁度其時に、廐橋に到著して、三樂に問うて曰ふには、松山城の樣子は如何であるかと問うた。三樂が答へて曰ふには、落城いたしましたと曰つた。すると、謙信は、大に怒つて、目をむき出し、刀のつかに手をかけて、膝を立て直して曰ふには、汝は、あの臆病なるつまらぬ者をして城を守らせて置いて、吾をして合戰の間に合はしめぬやうにしたので、これは、吾が武威を辱しめたるものである。吾は、いつそ、汝と果し合ひをしやうと曰つた。三樂は、ふる〳〵と恐れてひれ伏し、どうして善いやら分らずして、そこで、松山城の兵糧と兵器との數を記錄したる帳簿、及び上杉憲勝の人質二人を差し出した。謙信は、左の手に二人の人質の髮のたぶさをつかんで、右の手を以て之を斬り、刀を鞘に收めて、また問うて曰ふには、敵軍は幾人であるかと曰つた。三樂は答へて曰ふには、五萬人で御座りますと曰つた。すると、謙信は笑つて曰ふには、われと匹敵する者は、二人だけである。樂が答へて曰ふには、信玄、義信、氏康、氏政で御座りますと曰つた。三樂が曰ふには、私市城といふのが、こゝを去ること十里ばかりで御座りますと曰つた。謙信が曰ふには、これ攻め擊つべき敵の城があるかと曰つた。三樂が曰ふには、私市城といふのが、こゝを去ること十里ばかりで御座りますと曰つた。謙信が曰ふには、これ攻め擊つべきであると曰つて、卽座に、自身に大將となつて、赴き攻めることにし、三樂は之に從ひ、舟をつなぎ合はせて利根川を渡り、すでに川を渡り終ると、悉く其舟をこわして仕舞ひ、以て城を攻め落さずんば復た還らずとの決心を示し、信玄、氏康の陣營の前を通り過ぎ、使者を遣はして言はしめるには、御兩人は、松山城を攻められたが、而るに、拙者は、之を救援することが間に合はなかつたので、拙者は、深く之を愧づかしく思ふので御座る。そこで、敢て手を空しうして歸ることを致しかねて、今、出掛けて行つて、私市を攻めやうと致すので御座る。御兩人、どうぞ、遮り擊たれよと曰はしめたが、信玄、氏康等は、何とも答へなかつた。そこで、謙信は、私市の城壁の下まで攻め寄せ、四方から一齊に上り、僅に一晝夜にして之を攻め落し、城の主將小田朝眞を斬り、三千人を皆殺しにし、志田春義をして代つて此城を守らしめて置いて、引き返した。其歸路に、また使者を信玄、氏康の陣營に遣はして曰ふには、拙者は、私市の城を攻め落して只今引き返すところで御座るが、まだ、一勝負出來るだけの餘勇は御座らぬかと曰つた。すると、甲斐の軍勢は、太鼓を鳴らし、喊の聲をあげて、將に打つて出でんとする模樣を示した。然るに、謙信は、わざと冑を免ぎずして、馬から下りて、そろ〳〵と歩いて還り去つた。かくて、廐橋に至つて、長尾謙忠を召し寄せて曰ふには、三樂は、われに從つて私市まで行つたのに、汝は、どうして、われに從はなかつたのであるかと曰つて、刀を拔いて謙忠を斬り、其部下の衆二千人を屠り殺し、北莊丹後をして、代つて廐橋の城を守らせて置いて、然る後に、國に歸つた。氏康は信玄に向つて、貴殿は、どうして、謙信と戰はれなかつたのであるかと曰つた。すると、信玄が曰ふには、われと、貴殿と、兵を合はせて、一人の謙信に敵するのであるから、たとひ勝利を得たとても、あまり感心した事でないからで御座ると曰つた。この時、信玄は、ゆつくりと物靜に、氏康と物語り、その序に氏康に問うて曰ふには、先年、河越の戰に於て、貴殿は、一手の軍勢を以て、兩上杉氏合併の

大軍に打ち勝たれたが、あれは如何なる計略を用ひられたか、願はくは、其詳細なる事情を承はりたいと曰つた。氏康が曰ふには、貴殿の如き老成の名將の前では、拙者が、どうして御話いたすことが出來ましやうぞと曰つた。すると、信玄は固く請うて曰ふには、せがれ義信をして後學の爲めに之を拜聽させたいと思ひますと曰つた。氏康は、そこで、其合戰の計略を詳しく說き明かした。信玄は、至極尤もで御座るといつて、之を褒めた。かくて、信玄は、還つて、其陣營に至つて、馬場信房に向つて曰ふには、氏康の手なみは、すつかり分つたと曰つた。

六年。信玄出兵上野。取蓑輪。松枝諸城。又略飛驛。降其豪族江間常陸。而白谷氏納欵於謙信。謙信於是與信玄分領飛驛。謙信自將入越中。拔松倉。小出。獲嘗殺爲景者江波氏。合其族十六人盡誅之。梟首栫檀野。祭告爲景。是歲。謙信入上野。取伊勢崎。四月。入下總。攻臼井。與北條氏援軍戰。走之。先是。常陸小田氏治屬謙信。已而歸款北條氏。謙信怒。七年。正月。朔。冒雪發越後。入常陸。攻陷小田城。二月。攻佐野昌綱於上野。五月。北條氏康來援。逆擊走之。降昌綱。會足利氏使者來。傳敕旨。諭上杉。武田。北條三家。講和息兵。

字解【白谷氏】……筑前守。【納款】……款は音クワン。一味する。【江波氏】……五郎。【祭告】……祭をなして其次第を告げる。【歸款】……歸は、おくる也。一味する。【息兵】……戰爭をやめさする。

講義 永祿六年に、信玄は、兵士を上野に繰り出して、蓑輪、松枝などの城を攻め取り、又、飛驛を切り取り、その豪族の江間常陸といふ者を降參させた。しかるに、白谷氏は、謙信に一味した。謙信は、こゝに於て、信玄と、飛驛を分ち領地とした。謙信は、自身に大將となつて、越中に攻め入り、松倉・小出を攻め落し、以前爲景を殺せし者なる江波氏を生捕り、その一族の十六人を一所にして、殘らず之を誅殺し、その首を栫檀野に獄門にかけてさらし、爲景の御祭を爲して事の次第を告げた。この歲に、謙信は、上野に打ち入り、伊勢崎を取り、四月に、下總に打ち入り、臼井を攻めて、北條氏から加勢に來た軍勢と戰つて、之を敗走させた。これより前に、常陸の小田氏治は、謙信に附き從つて居つたが、とかくするうちに、北條氏に味方したので、謙信は怒つて、七年の正月朔に、雪をおかして越後を出發し、常陸に打ち入り、攻めて小田城を落城させた。二月に、佐野昌綱を上野に攻めた。五月に、北條氏康が、來つて佐野を援けたが、謙信は、迎へ擊つて之を敗走させ、昌綱を降

參させた。折しも、足利氏からの使者が、來つて、詔勅を傳へて、上杉、武田、北條の三家に諭して、和睦して戰爭を止めさせやうとした。

八月。謙信自巡視信濃境上。信玄亦出對營。兩家諸將交說其君曰。君以四郡故。與強敵構兵十二年。多喪士卒。祇爲四鄰之幸。無爲也。二人然之。乃約。各撰一力人使鬬。勝者取河中。上杉氏力士鬬勝。信玄乃獨取貝津一城。其餘盡屬謙信。謙信乃復村上義清。高梨政賴等。按其故邑。

字解【交】……こもごも、かはるがはる。【四郡】……河中島の四郡なり、前に見ゆ。【喪】……うしなふ。【祇】……まさに、たゞ。【力人】……上杉氏の力人は、家老齋藤朝信の臣長谷川與五左衞門基連、武田氏の力人は、安間彥六なり。間は一に馬に作る。【按其故邑】その もとの領地に據らしめる。

講義 八月に、謙信は、自身に、信濃の國境の近傍を巡回して視察した。信玄も亦、出掛けて來て、對ひ向つて陣營を布いた。上杉、武田の兩家の諸將が、かはるがはる其主人に說いて曰ふには、わが君には、河中島四郡を爭ふの故を以て、强敵と兵を構へて戰爭すること十二年の久しきに及び、實に多くの士卒を失ひなされたが、結局は、たゞ、隣國の諸侯の幸福となるだけの事で御座ります。かゝる無益の事は、なされぬが宜しう御座りますと曰つた。信玄、謙信の二人は、此言を成程尤であると思うて、そこで、約束するには、各一人の力あるものを選び出して、相鬬はしめて勝負を決し、そして勝つたる者の方が河中島を取ることにしやうと約束した。しかるに、上杉氏の力士が、鬬つて勝つたので、信玄は、そこで、たゞ貝津の一城だけを取り、そのほかは、殘らず皆、謙信に附屬することになつた。謙信は、そこで、村上義清、高梨政賴等を、もとにかへして、その舊領地に據らしめることにした。

謙信築精舍于春日山。號不識庵。盡牌將士殉難者。自弔祭之。先是。謙信使長尾政景守上田。備信玄。已而忌之。有告其謀叛者。乃召諸親信。密議誅之。宇佐美定行諫曰。政景叛狀未著。誅之。恐招騷擾。上田要害。折入武田氏。君又負殺姉夫之名。謙信不聽。使定行圖之。定行乃歸其邑野尻。招政景。觀漁湖中。以漏船迎載。捉政景同溺。宣言私憾相殺。因沒

入定行邑。而陰祿其子。收養政景子景勝。令鐵安朝代守上田。

【字解】【精舍】……音シヤウジヤ。佛院、寺。【不識庵】……この不識の庵號は、梁の武帝、達磨大師に問うて、如何なるか是れ聖諦第一義と曰はれしかば、達磨は、廓然無聖と答へ、武帝又、朕に對する者は誰ぞと問はれしかば、達磨答へて、不識と曰ひしと云ふ故事に據りしなるべし。【牌】……音ハイ。位牌に姓名を書きしるすこと。【殉難】……殉は、音ジユン、したがふ。國家の大事の爲めに死する。【弔祭】……音テウサイ。追善供養。【上田】……信濃に在り。【要害】……險阻の處、我に在りては要用の地にして、敵の爲めには大害の所なりとの義なり。【姉夫】……あねむこ。【野尻】……越後に在り。【漁】……漁獵。【漏船】……音ロウセン。舟の底に穴をあけて、その穴を栓にて塞ぎ、その栓を抜くときは水入りて沈むやうに仕掛けせし舟。【宣言】言ひふらす。【私憾】……私の遺恨。【沒入】……取り上げる。【陰】……ひそかに。【收養】……取り上げて養育する。【鐵安朝】……上野介。

【講義】謙信は、寺を春日山に立てゝ、不識庵と名づけ、國家の大事の爲めに討死した將士たちの姓名を、殘らず、位牌に書きつけて、自身に、その追善供養をした。これより先に、謙信は、長尾政景をして上田城を守つて、信玄に備へしめて置いたが、とかくする中に、之を忌み嫌つて居つた。すると、政景が謀叛を企てゝ居ると告げた者があつたので、謙信は、そこで、諸の親近し信用する者共を集めて、ひそかに、之を殺さんことを相談した。宇佐美定行が諫めて曰ふには、政景が謀叛の證跡は、未だはつきりと分りませぬのに、今、之を誅殺いたしたならば、恐らくは將士の騷動を引き起すことにもなりましやう、又、上田の要害の土地は、武田氏の領分に入り込むことにもなりましやう、わが君も、又姉婿を殺しなされたと云ふ惡名を御受けなされることにもなりましやうと曰つた。けれども、謙信は、聞き入れずして、定行をして、之を殺すことを圖らしめた。定行は、そこで、自分の領地の野尻に歸り、政景を招き寄せ、野尻湖に於て漁獵を見物することにし、水の漏る船を以て政景を迎へ載せ、政景をつかまへたまゝで、一處に溺れて死んで仕舞つた。そこで、謙信は、定行、政景の兩人、私の遺恨を以て殺し合つたのであると言ひふらし、因つて、定行の領地を取り上げて仕舞ひ、そして、人知れず、定行の子に食祿を與へて置き、又、政景の子の景勝を取り上げて養育し、鐵安朝をして代つて上田を守らせることにした。

【參考】左に翁草の一章を抄錄して以て參考に資す。

宇佐美定行忠死の事

（上略）然るに、謙信は、政景を六かしく思ひて、永祿七年甲子五月五日、宇佐美定行を呼びて、政景を討つ可しとの密談あり。宇佐美云はく、親しき御一門と云ひ、見えたる事も無きに、誅伐あらんこと、世の聞え末代の謗も如何なり。思ひ留まり給ふべし。其上、政景を討ち給はゞ、上田皆敵に成り、信玄と手を合はせ候はん。旁々以て由々しき大事に候と、涙を流し異見すれども、謙信更に承引無し。宇佐美、此上は是非に及ばず、さあらば、上田も起ちず、世の批判も無きやうの手立を以て、政景を討ち申す可しと肯ひ、夫れより居城柏崎琵琶島の城に立ち寄り、六月中逗留し、下旬に野尻へ歸る。城下に辨財天池とて、湖水あり。常に魚を漁り網を引く。定行僞りて船遊と稱し、政景と共に此湖水に船を浮べて逍遙す。船の底に穴を明けて栓をさし、沖へ出て彼の栓を抜く、水涌き入りて船沈みければ、政景を始め、各浮きつ沈みつ周章する内に、宇佐美は、政景を水底へ引き込みたりと見えて、死後までも政景に組み付きて共に死す。時に政景三十九歲、定行七十六歲、永祿七年甲子七月五日生害なり。定行、一封の遺書あり。其趣ほ、政景を御誅伐候ては、末代の誹謗遁れがたく、其上、上田領皆敵に成り候はんと存じ、種々諫を奉ると雖も、御承引なき上は、是非に及ばず、政景を打ち果し候は、定行が逆心か、又は當座の遺恨かと世上へ御申立、某が跡目御潰しなされ、伴藤三郎勝行は御暇を下さるべし。さなく候はゞ、政景家士ども堪忍仕らず、亂の基たるべく候。兎に角に、科をも不義をも、定行一人に歸せられ、然る可く候との書置なり。謙信も、十六歲より定行を賴まれ、越後へ歸城本望を遂げられし事、偏に渠が功なれば、此書置を見て、さこそ心底には深く惜むらめ、されども此事露顯しては、宇佐美が忠死も徒になり、第一忽ち國の騷亂たれば、萬づ定行が遺書に任せ、其跡目を潰され、藤三郎は涙人す。凡そ士の忠義を琢く者多しといへども、身を捨て、子孫を絕ち、其事をなす者、古今類を聞かず、此定行一人に止まれりと、此密事を傳へ聞く者は感涙を流すとかや。

河中島之役。謙信爲武田義信所襲敗。曰。吾乃輸小兒。本莊繁長。長尾藤景。有救援之功。又竊笑之。謙信惡之。誅藤景。繁長自危。叛據其邑。遣兵討之。作距堙圍守。數年而降。義信勇敢善戰。將士歸心。信玄忌之。恐其倣己也。勝賴以庶子陰有奪嫡之志。乃與飯富兵部之弟昌景謀。使人誣告義信教兵部就軍陣圖信玄。昌景證之。信玄囚義信。盡誅其親信。賜兵部死。屬其部兵於昌景。改氏山縣。終令義信自殺。歸義信妻於駿河。今川氏始惡於武田氏。武田氏既不慮上杉氏。而其兵西出矣。

【字解】【輸】……音シユ。負ける也。俗に、勝負を輸贏と云ふ。【距堙】……音キヨイン。稍高く土を積みて城を見おろして攻むるもの。城攻めの築山。【恐其倣己】……倣は、ならふ、眞似する也。信玄、嘗て父信虎を逐ふ、故に義信が、之を眞似て、己を逐ひ出さんことを恐るゝ也。【庶子】……妾腹の子。【奪嫡】……家督を奪ひ取る。【誣告】……音フコク。無實の事をこしらへて讒言する。【證】……證據立てる。【歸義信妻於駿河】……義信の妻は、駿河の今川氏の女たれば也。【不慮】……おもんぱからず。心配せぬこと。

【講義】河中島の戰に於て、謙信は、武田義信に不意擊ちされて敗軍させられたことがあるので、謙信が曰ふには、われは、あの時には、小兒に負けたと曰つた。本莊繁長と長尾藤景とが、その時に謙信の危かつたのを救ひ援けた手柄があつたので、この二人は、又、ひそかに、謙信が義信に敗られたことを笑つた。謙信は、之を怨んで、藤景を誅殺した。すると、繁長は、自分で危險に思うて、謀叛をして、其領地に立籠つたので、謙信は、兵士を派遣して之を征伐し、城攻の築山を作り、圍み守ること數年にして、やうやく降參させた。武田義信は、勇氣があり決斷が善くして、戰爭することが上手であつて、將士共は、自然と心を傾けて歸服して居つた。しかるに、信玄は之を忌み嫌つて、義信が以前に自分が爲した事を眞似して自分を逐ひ出すことがありはせぬかと恐れて居つた。こゝに又、武田勝賴は、信玄の妾腹の子であるのに、人知

れず、家督を奪ひ取らうと思うて居つたので、そこで、飯富兵部の弟なる昌景と相談して、人をして、義信は、兵部に言ひ附けて、戰陣の間に於て、信玄を殺させやうとしたと、無實の事を拵へて讒言させ、昌景が之を證據立てた。そこで、信玄は、義信を囚へて、殘らず義信が親近し信用して居る吾共を誅殺し、兵部をして自殺せしめ、その部下の兵士を昌景に附屬することにし、氏を山縣と改めさせ、とう〳〵義信をして自殺せしめ、義信の妻をば、其里方なる駿河の今川氏に送り還した。今川氏は、始めて武田氏と仲が惡くなつた。武田氏は、もはや、上杉氏と和睦して、此方は最早心配するところが無かつたので、そこで、その軍勢は、西の方へ打つて出ることに成つた。

初信玄。謙信共欲伸武於中原。而兵結不解。未暇及焉。謙信之再入京師也。三好長慶。權勢方熾。家臣松永久秀專政。其吏徒途遇謙信。不禮。謙信命從士斬之。因密啓將軍義輝。請除長慶。久秀。義輝雖不能決。心倚賴之。久秀等頗聞之。懼。八年。義輝密使使召謙信。久秀等大懼。欲及其未來行大事。遂弑義輝。義輝弟義昭逃走近江。九年。以書來託謙信以興復。議不輒成。義昭遂依織田信長於美濃。信長擁義昭入京師。遂略定近畿。頓致強大。顧恐謙信。信玄議其後。又自知非一人敵也。乃傾意結信玄。以控謙信。使幣相踵於甲斐。信玄知其意。動輒敗約。欲西其兵。信長患之。乃送其季子勝長爲質。以女妻勝賴。生信勝。及義信死。立信勝爲嫡嗣。而勝賴護之。信勝母死。信長又請爲其子信忠取信玄女。信玄與織田氏婚。遂與今川氏絕。

【字解】【伸武於中原】……武威を畿内近傍に伸ばし耀かす。【方】……まさに。【熾】……音シ、さかんなり。火の盛んなるを云ふ。【吏徒】……役人ども。【密啓】……啓は白なり、まをし上げる。人に知られぬやうにひそかに申し上げる。【倚賴】……音イライ。たよりにする。【行大事】……將軍を弑するを云ふ。【興復】……再興する。倒れんとしたるを再び起し、もとのやうにする。【輒】……たやすく。【擁】……もり立てる。【近畿】……音キンキ。京都畿内近傍。【頓】……遽なり、にはかに。【議其後】……其うしろに居りて彼れ是れと評議する。後から攻め寄せるを云ふ。【敵】……相手、力の匹敵する者。【傾意】……深く心を寄せること。【控】……音コウ。引きとめて手を出さぬやうにする。【使幣】……幣は、幣帛なり。使者と進物。【相踵】……あひつゞき、絶えず引きつゞく。【動】……やゝもすれば。【季子】……末子。【質】……音チ。人質。【護之】……後見をする。

【講義】はじめ、信玄と謙信とは、いづれも皆、武威を京都近傍に伸ばしかゞやかして、天下を爭はうと思うて居つたのであるが、しかるに、兩家は互に戰爭して解けなかつたので、未だそんな事をするの暇がなかつた。謙信が、再び、京都に入つたときは、三好長慶の權威勢力が、丁度盛んな折柄であつて、その家來の松永久秀が、政事を自分が思ふ存分に取りはからつて居つた。その手下の役人が、途中に於て謙信に出合つたけれども、別に禮をしなかつたので、謙信は、隨從の者に言ひ付けて、之を斬り棄てさせた。謙信は、それに付けて、ひそかに、將軍足利義輝に申し上げて、長慶と久秀とを殺し除かんことを請うた。義輝は、決心して此事を實行させることは出來なかつたけれども、心の内では、謙信をたよりに思うて居つた。久秀等は、ほゞ、此事を聞き及んで、懼れて居つた。永祿八年に、義輝は、ひそかに、使者を遣はして謙信を呼び寄せることにした。久秀等は、大に懼れて、謙信が未だ京都に到著しないうちに將軍弑害の大事を行はうと思うて、とう〳〵義輝を弑して仕舞つた。そこで、義輝の弟の義昭は、逃げ去つて近江に走り、九年に、使者に書面をもたせて來らせて、謙信に賴んで、足利家を再興してくれよと賴んだけれども、その相談が、直にはまとまらなかつた。そこで、義昭は、とう〳〵、美濃に行きて、織田信長に身をよせた。信長は、義昭をもり立て、、京都に入り、とう〳〵、京都畿内近傍を切り取り平定して、にはかに、勢力強く領地廣大なる者となつたが、しかし振りかへつてあとを見れば、謙信と信玄とが其あとから攻め寄せて來ることも有らうと恐れ、又、武略に於ては、二人の相手では無いと云ふことを、信長自身に承知して居つたので、そこで、心を傾けて、信玄に結託し、それで以て、謙信を引きとめて、働かせぬやうにしやうといふので、使者と幣物とが、甲斐國に引き續いて絶えざるほどであつた。けれども、信玄も、さる者で、信長の心を能く承知して居つたので、やゝもすれば、すぐに約束を敗つて、その軍勢を西の方京都に向はせやうとした。信長は、これを心配して、そこで、末子の勝長を信玄に送つて人質とし、又、其娘を以て勝賴に妻はせ、信勝を生んだ。信玄の長子義信が死するに及んで、信勝を立てゝ、跡嗣となし、そして、勝賴が、之を擁護することにした。信勝の母、卽ち信長の女が死んだので、信長は、又、其子信忠の爲めに信玄の娘を娶りたいと請うた。そこで、信玄は、織田氏と婚親を結びて、とう〳〵今川氏と絶交することにした。

先是。今川義元與信長戰敗死。其子氏眞暗弱。任嬖臣三浦義鎭。國人不服。我德川公嘗屬今川氏。亦去屬織田氏。兵力日強。是時。信虎猶在。流寓信濃。使人言於信玄曰。駿河亂。將爲德川氏所有。汝宜先取之。信玄不

答。

【字解】【暗弱】……暗は不明なり。暗愚柔弱、道理にくらくして怯弱なること。【我德川公】……德川家康。【流寓】……所々をさまよひ假り住居する。

【講義】これより以前に、今川義元は、織田信長と戰つて、敗軍して討死して仕舞ひ、其子の氏眞は、事理に明かならず且つ怯弱にして、氣に入りの家來の三浦義鎭に萬事を任せて置いたので、駿河の國人は服從しなかつた。我が德川家康公は、以前に今川氏に附いて居つたが、亦去つて織田氏に屬することになつて、その兵力は日ましに强大となつた。この時に、信玄の父信虎は、まだ生きて居つて、信濃國をあちらこちらとうろついて居つたが、人をして信玄に言はしめるには、駿河國は亂れて居つて、まさに德川氏の所有するものとならうとして居る。汝は德川氏に取られぬ先に之を取つて仕舞ふが宜しいと言はしめた。けれども、信玄は何とも返答しなかつた。

信玄國不濱海。仰鹽於東海。氏眞與北條氏康謀。陰閉其鹽。甲斐大困。謙信聞之。寄書信玄曰。聞氏康困君以鹽。不勇不義。我與公爭。所爭在弓箭。不在米鹽。請自今以往。取鹽於我國。多寡唯命。乃命賈人平價給之。

【字解】【不濱海】……海岸では無い。海にそうて居らぬ。【仰鹽】……鹽を送つてもらふ。【陰】……ひそかに。【閉】……塞ぐ也、さし止めて送らせぬこと。【自今以往】……今後。【賈人】……音コジン。商賣人。【平價給之】……價を貪らずして之を供給す、正當なる價を以て之を仕送る。

【講義】信玄の領地なる甲斐は、海岸でないので、鹽をば東海道から仕送つてもらつて居つた。今川氏眞は、北條氏康と相談して、ひそかに、其鹽を差し止めて送らせぬやうにした。甲斐國では、大に閉口した。すると、謙信は、此事を聞き及んで、書面を信玄に送つて曰ふには、聞く所によれば、氏康と氏眞とは、鹽を以て貴殿を困しめるさうで御座るが、これ實に勇にあらず義にあらざることで御座る。拙者は、貴殿と爭うて居るけれども、その爭うて居るところは、弓矢の上の事であつて、決して米や鹽などの上の事では御座らぬ。されば、今日以後、鹽をば我が國から御取り寄せなさるが宜しい。多く買はるゝも少く買はるゝも唯貴殿の御命令のまゝに從ひましやうと曰つた。そこで、商賣人に言ひ附けて價を正當にして鹽を仕送らせることにした。

信玄使間者伺駿河。曰可取也。陰招國人。約爲內應。十一年十二月。引兵南入駿河。軍八幡坂。氏眞擧兵拒清見寺。軍潰。走歸府中。遂走掛川。信玄欲隨攻之。而慮氏康來救。乃止軍府中。取諸降附任子。送致甲斐。聞庵原某嘗與山本晴行交。召問要地可城者。以久能及興津答。乃城之。氏康果以大兵來。爭駿河。以復氏眞爲名。信玄留兵守府中。而自軍興津。氏康軍薩埵山。相持未戰。信玄曰。氏康數與兩上杉戰。用兵遲緩。易與也。因飲將士酒。問曰。猶寒乎。曰。寒。信玄曰。我陣平地。飲酒而猶寒。彼陣山上。寒可知矣。必下在其麓也。令人伺其陣。陣果無人。乃奪其糧仗返。後數挑戰。不決。至四月。信玄問計諸將。馬場信房曰。臣嘗見啄木啄蟲。欲出蟲於前。先啄其後。信玄默然。曰。然。夜收軍歸。氏眞遂走相模。三浦義鎭爲德川氏所誅。

【字解】【間者】……しのびの者、まはし者。【內應】……裏切りする。【清見寺】……駿河に在り。【掛川】……遠江に在り。【任子】……質子、人質。【庵原某】……彌兵衛。【要地】……要害の土地。【久能】……駿河に在り。【興津】……駿河に在り。【薩埵山】……駿河に在り。【遲緩】……遲は久なり、緩は舒なり。手ぬるきこと。【易與】……くみしやすし、相手にし易い。【糧仗】……兵糧と武器。【返】……一に還に作る。【挑】……いどむ。【啄木】……音タクボク。きつゝき、鳥の名。【啄】……音タク。ついばむ、くちばしにてつゝく。【收軍】……一に收兵に作る。

【講義】信玄は、しのびの者を派遣して、駿河國の樣子を伺はしめて、曰ふには、駿河國は攻る取めことが出來るのであると曰つて、ひそかに駿河の國人を呼び寄せて、裏切りをすることを約束させ、かくて、永祿十一年の十二月に、兵士を引き連れて、南の方駿河國に討ち入り、八幡坂に陣取つた。今川氏眞は軍勢を殘らず引き連れて、清見寺に拒ぎ戰つたが、その軍勢はくづれ亂れて、逃げ走つて、府中、卽ち今の靜岡）に歸り、とうゝ掛川に逃げ走つた。信玄は、あとを追うて付いて往つて之を攻めやうと思うたけれども、北條氏康が來て今川氏を救はんことを氣遣つて、そこで、軍勢を府中に止めて、諸の降參して附き從つた者共の人質を取つて、甲斐に送り屆けた。又、信玄は、庵原某が以前に山本晴行と交際して軍學に通じ友情至つて厚かつたことを聞いて、呼び寄せて、近傍の要害の地で城をきづくことの出來る處を問ふゝ、庵原某は、久能と興津とが其地で御座りますと答へたので、そこで、信玄は、こゝに城をきづいた。すると、氏康は、案の通り、大軍を引き連

れて來り、武田氏と駿河を爭ひ、氏眞をもとにかへすと云ふことを名目とした。信玄は、兵を留めて府中を守らせて置き、そして、自分は興津に陣取つた。氏康は薩埵山に陣取つた。かくて、信玄と氏康とは、睨み合つて居つて、未だ戰はなかつた。信玄が曰ふには、かれ氏康は、たびく兩上杉氏と戰つたが、それによつて觀ると、兵を用ふることがまことに手ぬるいから、相手にし易いのであると曰ひ、因つて將士に酒を飲ましめ、そして問うて曰ふには、これでもまだ寒いかと曰つた。將士が曰ふには、寒う御座りますと曰つた。すると、信玄が曰ふには、われは平地に陣取つて居つて、その上に、酒を飲んでも、それでもまだ寒いのである。して見ると、彼れ敵は、山の上に陣取つて居ることであるから、寒いことは知れ切つて居る。されば、敵は、屹度、山を下つて其麓に居るであらうと曰つて、人を遣して敵の陣營を伺はしめると、その陣中に、案の通り人が居なかつたので、そこで、敵の兵糧兵器を奪ひ取つて返つた。その後、度々戰をしかけたけれども、勝負が決しなかつた。かくて、四月に至つた。信玄は計略を諸將に問うた。すると、馬場信房が曰ふには、私は、嘗て、啄木鳥が蟲をつゝき出して食ふのを見ましたが、蟲を前の方に出さうとするときは、必ず先づ其後の方をつゝきますと曰つた。すると、信玄は、默然として物を言はず、やゝ暫くく考へて居つたが、さて曰ふには、いかにも左樣であると曰ひ、夜、軍を引きまとめて歸國した。かくて氏眞は、とうく、相模國に逃げ走つた。三浦義鎭は、德川氏に誅殺せられた。

十二年。六月。信玄出駿河。遂入伊豆。軍鳴島。會大雨。流潦侵陣。引返。於是氏康兵專防西面。在小田原者甚寡。信玄諜知。議攻之。高坂昌宣諫曰。彼已懲謙信。講戰守。必悉。君深入之。一有蹉跌。前功悉廢。而謙信將乘其後。不聽。九月。下兵八王子。攻敵城邑不下者。過而南。入小田原。縱火城下。十月。引還。遇北條氏二萬兵三增嶺。召諸將。命內藤昌豐掌輜重。昌豐辭。信玄曰。前謙信唯失輜重。故敗於小田原。是重職也。設八伏。及兵交。夾擊破之。歸。謂昌宣曰。何如。昌宣曰。是僥倖耳。信玄嘉其忠讜。相模兵戍駿河者。聞難棄守返救。信玄瞰之。十一月。急出駿河。拔九城。獨蒲原不下。信玄宣言赴府中。伏兵城傍山中。而西。敵空城追之。伏起。取城。遂陷府中及諸城。與德川氏。割大井河爲界。織田信長以書來請曰。松平家康。僕所最眷顧者。公幸指教之。家康介弟在今川氏。公宜取以爲質。關東北陸諸國。皆使使賀戰捷。於是。信玄國傳南海。謙信國傳北海。以橫絕海內。北條氏在其東。織田氏在其西。織田氏求援於信玄。北條氏求援於謙信。而謙信未之肯也。

【字解】【鳴島】……伊豆に在り。【流潦】……音リウラウ。潦は水だまり。路の上を流れる雨水。【侵陣】……陣營の中へ流れ込む。【諜知】……間諜を遣はして此事を知る。【講戰守】……戰爭と防守との策を相談する。【悉】……つゝす。【蹉跌】……音サテツ。足をふみはづしてつまづくことにして、失敗するを云ふ。【廢】……すたる。【八王子】……武藏に在り。【三增嶺】……相模に在り。【掌】……つかさどる。【輜重】……音シチヨウ。小荷駄。【重職】……重要なる職分。【設八伏】……八箇所に伏兵を置く。【僥倖】……まぐれ幸。【嘉】……よみす。【忠讜】……音チウタウ。讜は直言なり。忠誠にして直言をなし、飾らざること。【戍】……まもる。【返救】……返は一に還に作る。【瞰】……うかゝふ。【蒲原】……駿河に在り。守將は北條綱重なり。【宣言】　言ひふらす。【大井河】……駿河と遠江との界に在り。【松平家康】……德川家康のこと。【眷顧】……音ケンコ。眷は顧念なり。目をかけていたはる。【介弟】……音カイテイ。介は大なり。大切なる弟の義。家康の異父弟久松源三郎康俊を指す。【質】……音チ。人質。【傳】……つく、至る。【橫絕】……橫に絕ち切る。【肯】……がへんず、承知する。

【講義】永祿十二年の六月に、信玄は、駿河に出で、とうく伊豆に入り、鳴島に陣取つたが、折しも、大雨が降つて、路の上を流れる雨水が陣營に流れ込むほどであつたので、引き返した。こゝに於て、氏康の兵士は、專ら西の方面ばかりを防いで居つて、小田原に殘つて居る者は、甚だ少數であつた。信玄は、間者を遣つて此事を承知したので、其虛につけ込んで小田原を攻めやうと相談した。すると、高坂昌宣が、諫めて曰ふには、彼れ北條氏は、已に、先年謙信に攻められたことがあるのに懲りて居りますから、合戰と防守との道を研究すること、きつと十分に盡してあることで御座りましやう。そこへ、あなたが、深く其地に入り込みて、一たび失敗を御取りになることでもありましたならば、これまでの功勞は、悉くすたれてしまふで御座りましやう。さうして、謙信は、將に其あとに附け込んで兵を出すことにも成りましやう。御止めに成つた方が宜しう御座りますと曰つた。けれども、信玄は、承知しなかつた。かくて、信玄は、九月に、兵士を八王子に下向せしめ、敵北條氏の城邑の未だ落城しない者を攻め、それより、其處を通り過ぎて南に向つて行き、小田原に打ち入り、城下に火を放つて焚き拂ひ、十月に、兵を引き上げて還つた。其途中なる三增嶺に於て、北條氏の二萬人の軍勢に出遇つたので、信玄は、諸將を召し寄せ、內藤昌豐に言ひ附けて、小荷駄を掌らしめることにすると、昌豐は、小荷駄などの事を掌るはつまらぬ事であると思うて、此役目は他人に仰せ付けられるやうに願ひますと曰つて、辭退した。すると、信玄が曰ふには、以前に、謙信は、小荷駄を失つたばかりで、それ故に、小田原に於て敗軍したのである。この小荷駄を掌るは、重要なる役目である。それで、汝に命ずるのであると曰つた。かくて、信玄は、伏兵を八箇所に設け置き、合戰

になると、兩方から夾み擊ちして、敵兵を破つた。かくて歸つて後、昌宣に向つて曰ふには、汝は、わが勝利を得るとは六つかしからうと言つたが、今、かく勝利を得たのは、どうであるかと曰つた。すると、昌宣が曰ふには、これは、まぐれ幸で御座りますと曰つた。そこで、信玄は昌宣が忠義にして直言して憚らざるを賞美した。この時に、相模の兵士で駿河に往つて守つて居つた者どもは、小田原の危いことを聞いて、自分々々の守り場所を棄てゝ、引き返して小田原を救うた。信玄は、此事をうかゞひ知り、十一月に、急に駿河に討つて出で、九城を攻め落したけれども、たゞ、蒲原だけは、落城しなかつた。そこで、信玄は、府中に往くのであると言ひ觸らして、城の近傍の山中に伏兵を設けて置いて、そして西の方に向つて行つた。すると、城兵は、之に欺かれて、城内をからあきにして、之を追つかけた。そこで、伏兵が起つて、城を取つて仕舞つた。かくて、信玄は、とうく府中及び諸城を攻め落して、德川氏と、大井河を以て境界となした。すると、織田信長が、書面を以て來り請うて曰ふには、松平家康は、私が最も目を掛けていたはつて居るところの者で御座りますから、貴殿、何卒、よきやうに引きまはして其行き屆かざる所を指ざし敎へてやつて下されよ。家康の弟は、今川氏に居りまするから、貴殿は、之を取つて人質となさるが宜しう御座りますと曰つた。信玄が駿河を平定したので、關東、北陸の諸國は、皆、使者を遣はして、大勝利を得たことを祝賀せしめた。こゝに於て信玄の領國は、南方の海に至り、謙信の領國は、北方の海に至り、二氏の兩國を以て、日本を横に絶ち切つて居つた。さうして、北條氏は其東に居り、織田氏は其西に居つた。織田氏は、援を信玄に求め、北條氏は、援を謙信に求めた。けれども、謙信は、未だ北條氏の請をば承諾しなかつた。

是歲。春。謙信攻陷武藏。下野諸城。秋入越中。攻神保長純。會畠山義則不能治其下。能登亂。遣上杉義春治之。立義則子義隆而還。當是時。謙信連略加賀。越中。而時出關東。兵行神速。敵不能測。每懸軍横行八州。八州諸城聞其來。震慴不敢出。聞其還上三國嶺。然後相告解。嚴如雷雨過者。元龜元年。佐野昌綱族據飯盛城。與昌綱鬬。北條氏政以四萬騎助攻之。昌綱告急於謙信。正月。謙信卽發。晝夜兼行。聞氏政將分其兵當己。而急攻拔城也。謂諸將曰。饒令我戰勝氏政。而不救城陷。無益。吾當獨身入城堅守。汝等推義春爲將繼進。乃獨與八十騎。過氏政陣前而入城。謙信穿黑綿衣。不被鎧。提十字槍。騎行。敵軍指目曰。謙信也。而大驚。不敢遮擊。諸將尋至。北條氏軍潰走。謙信遂屠飯盛。徇下野。下總。入麻橋。北條氏康聞氏政敗。將二萬騎出援。陣河越。相持。三月。使使請和。質其季子三郎。謙信與諸將議。聽之。會見于富田大中寺。攜三郎歸。授其故名曰景虎。四月。氏康入駿河。攻深澤。不下。又請謙信出兵上野。信濃間。以糜信玄。信玄自將出拒。交綏而退。

【字解】【連】……しきりに、つゞけざまに。【兵行】……兵を進退すること。【神速】……至つてすばやい、不思議とすべきほど早い。【每】……つねに、いつでも。【懸軍】……軍を出して遠征するときは其勢懸絶す、孤に懸軍と云ふ。あとにつゞく兵なくして深く敵地に入ること。【震慴】……音シンセフ。身をふるはしてちゞみ上つて恐れる。【三國嶺】……上野、信濃、越後三國の境に在り。【解嚴】……解は散ずる也。備へたる兵を引き上げること。【元龜】……正親町帝の時の年號。【晝夜兼行】……夜を日に繼いで二日に行くべき道程を一日に行く。【饒令】……たとひ。【穿】……著る也。【黑綿衣】……黑き木綿の衣。【十字槍】……十文字の鎗。【尋】……ついで。【屠】……ほふる。誅殺する所多きを云ふ。【徇】となふ。觸れまはつて降附せしむる。【質】……音チ。人質とする。【故名】……もとの名。【糜】……音ビ。繫ぐ也。信玄をして遠くに出づること。能はざらしむるを云ふ。【交綏】……音カウスヰ。交は互なり、退軍を名づけて綏と云ふ。互に退軍する。

【講義】この年の春に、謙信は、武藏、下野の諸の城を攻め落し、秋に、越中に入つて、神保長純を攻めた。折しも、畠山義則が、其部下を治めることが出來ずして、能登が騷ぎ亂れたので、謙信は、上杉義春を派遣して、其騷動を治めしめ、義春は、義則の子の義隆を立てゝ、引き返して來た。この時に當りて、謙信は、つゞけざまに、加賀、越中を切り取り、そして、其間には、時々、關東に出掛けて行くが、その兵を進退すること、不思議といふべきほどすばやくて、敵は之を測り知ることが出來ず、いつでも、あとに引き續く軍勢を無き孤軍を以て、關東八州を氣まゝに威張りあるき、關東八州の諸城は、謙信が來たと聞くと、ちゞみあがつて恐れて、城中に引きこもつて居つて、敢て城より出でることをせず、謙信が引き返して三國峠にかゝつたと聞いて、そこで始めて安心して相告げて、軍備をやめると云ふくらゐで、ちやうど、雷雨の過ぎ行く樣であつた。元龜元年に、佐野昌綱の一族が飯盛城に立て籠つて、昌綱と鬬ひ、北條氏政が、四萬騎を引き連れて、昌綱の一族を助けて、昌綱を攻めた。昌綱は、危急なることを謙信に報告した。すると、正月に、謙信は、卽座に出發し、夜を日に繼いで、二日の道程を一日に行くと云ふ位で、大急ぎで進軍した。謙信は、氏政が、その兵を分つて、一軍を以て自分に當らしめ、そして、一軍を以て、急に攻め立てゝ、城を攻め落さうとして居ると云ふことを聞いたので、そこで、諸將に向つて曰ふには、たとひ、われ合戰して氏政に勝つとても、城が攻め落されるの

を救はなかつたならば、何の役にも立たぬことである。されば、吾は、一人で城の内に入り堅く守ることにすべきである。汝等は、義春を推し戴きて大將となし、あとから引きつゞいて進み來れよと曰つて、そこで、たゞ八十餘騎の兵士とともに、氏政の陣營の前を通過して、城の内に入つた。この時に、謙信は、黑木綿の衣を著て、別に鎧を著ずして、十文字の槍を手に持つて、馬に乘つて行き過ぎた。敵北條氏の軍勢は之を指さし見て曰ふには、謙信であると曰つたが、大に驚いて、敢て遮り擊たうともしなかつた。そのうちに、諸將は、それに繼いで至つた。北條氏の軍勢は、崩れ亂れて逃げ走つた。かゝて、謙信は、とう〳〵飯盛を攻め落して、大に其兵士を殺戮し、下野、下總をふれまはつて下し平げ、廐橋に入つた。北條氏康は、氏政が敗戰したといふことを聞いて、二萬騎の兵士を引き連れて、出掛けて救援に赴いたが、互に睨み合つて居つて、戰はなかつた。三月に、氏康は、使を遣はして和睦することを請はしめ、その末子なる三郎を人質にすることにした。謙信は、諸將と相談して、之を承知し、富田の大中寺に於て會見し、かゝて、三郎を引き連れて國に歸り、自分の舊名を與へて、景虎といふことにした。四月に、氏康は、駿河に入り、深澤を攻めたが、落城しなかつた。そこで、又、謙信に請うて、軍勢を上野、信濃の間に繰り出してもらひ、以て、信玄をつなぎとめて、遠くに出掛けることの出來ないやうにした。信玄は、自身に、出掛けて之を拒いだが、そのうちに、相引にして退いた。

十一月。德川氏質子遁去。於是。信玄與德川氏絕。而織田氏聘問益厚。時氏康病卒。氏政請和信玄。將士皆說勿許。乘喪擊之。盡取其地。雖謙信不能支也。信玄曰。吾夙欲出兵東海。竝海而西。建旗鼓于京師。則吾雖死不憾矣。前有醫人。診我脈。謂當罹篤疾。吾經營關東。而中道疾作。志不可成也。信長乘吾輩不西。以家康當我西面。而陰助之。其計可憎。我欲與氏政和。西治信長。十二月。遂納氏政質。使逐氏眞。氏眞走。倚德川氏。時信長與義昭相隙。義昭以書諭信玄。謙信來圖之。

字解【質子】……音チシ。上に云へる康俊を指す。【聘問】……音ヘイモン。諸侯が大夫をして諸侯を問はしむること。使者を遣はして音信を通ずること。【支】ささふ。持ちこたへる。【夙】つとに。【竝海】……海に沿うて。【憾】うらむ。殘念に思ふ。【診】……音シン。脈を候ふ也、診察する。【罹】……かゝる。【篤疾】……音トクシツ。重き病氣。【作】……おこる。【治】……攻める、片づける。【相隙】……仲が惡い。

訓解　十一月に、德川氏の人質なる康俊は、遁れ去つた。こゝに於て、信玄は、德川氏と絕交した。しかるに、織田氏が使者を派遣して音信を通ずることは、一層手厚くなつた。此時に、北條氏康は病氣で死んで仕舞つて、その子の氏政が、信玄に、和睦することを請うた。すると、諸の將士たちは、皆、信玄に說き勸めるには、氏政が和睦を請ふのを御許しなされてはいけませぬ。彼れの父氏康の無くなつた喪中に付け込んで之を擊つて、殘らず、其領地を取つて御仕舞ひなされ。さうすると、流石の謙信といへども、支へとゞむることは出來ますまいと說き勸めた。信玄が曰ふには、吾は早くから、兵士を東海道に繰り出し、海に沿うて西に向つて進み、旗や大鼓を京都に建てやうと思うて居つた。さうするときは、吾は、死んでも、殘念に思はぬのである。しかるに、先達て、醫者が、我が脈を診察して、曰ふには、重い病氣に罹るであらうと曰つたことがある。吾は、關東を取り治めやうとして、その中途で、病氣がおこつて起つことが出來ないことにもなつたならば、吾が兼ねての志望を成就することは出來ないのである。信長は、吾々が西の方に向つて進まないのに附け込んで、家康を以て、吾が西の方面に當らしめ、そして、ひそかに之を助けて居るのであるが、信長の計略は、實に憎むべきである。されば、我は、氏政と和睦して、先づ西の方信長を片づけて仕舞はうと思ふのであると曰ひ、十二月に、とう〳〵氏政の人質を受け取り、今川氏眞を逐つ拂はしめた。氏眞は、逃げ走つて、德川氏にたよつた。その時に、信長は、將軍義昭と仲が惡かつたので、義昭は、書面を以て、信玄と謙信とに諭して、京都に來つて、信長を滅ぼすことを圖らせやうとした。

二年。二月信玄引兵東出。至遠江。攻高天神城。四月。入三河。陷八城。德川氏出援。覩甲斐陣嚴整不可犯。不敢接戰。信長聞義昭招謙信。信玄。懼甚。乃益媚事信玄。以書謝曰。家康密邇貴國。恐有違失。僕當訓督之。幸勿見尤。信玄答曰。老夫不知也。德川氏發兩使。通好於謙信。載誓書。請夾擊信玄。村上義清子國清寓越後。力贊成之。三年。四月。謙信將萬人出信濃。縱火長沼。以遙爲德川氏聲援。勝賴在伊奈。聞警。以兵八百赴拒。謙信曰。彼敢以寡兵當我。不愧信玄兒。吾成其勇也。引兵而還。入越中。夷椎名。神保氏。

字解【高天神城】……遠江に在り。城主小笠原長重。【嚴整】……音ゲンセイ。嚴重にして整うて居ること。【不可犯】……攻め込むべき隙間が無い。【密邇】……音ミツジ。比近なり、密接して近きに居ること。德川氏は遠江の濱松に在り。【違失】……過失、信義に違ひ禮節を失ふの振舞。

【訓督】……教訓監督してその違失を責めたゞす。【尤】……とがむ。【載誓書】誓約書を認め、起請文を認める。【寓】……寄寓する、假住居する。【力】……つとめて。【聲援】……音セイエン。遠くより加勢することを言ひ鳴らして勢をつけること。【伊奈】……信濃に在り。【聞警】警戒の報告を聞く。【成其勇】……その武勇の名を成さしめる。【夷】……たひらぐ、攻め亡ぼす。【椎名】……肥前守。【神保】……安藝守。

【講義】元龜二年の二月に、信玄は、兵士を引きつれて、東の方に向って、打って出で、遠江に至り、高天神の城を攻め、四月に、三河に打ち入り、八つの城を攻め落した。德川氏は、援けに出掛けて來たけれども、甲斐の陣立が嚴重にして整うて居つて、攻め込むべきすきまが無いのを見て、敢て近づき鋒を交へて戰はなかつた。又、信長は、義昭が謙信、信玄を呼び寄せるといふことを聞いて、大變に懼れた。そこで、ます〳〵信玄に媚び事へ、書面を以て信玄に詫び入つて曰ふには、家康が、貴殿の御領分の國に密接して近くに居りまして、恐らくは過失があつて貴意に背くの所行がありましやうが、拙者は十分に之を教訓監督し其過失を責めて貴意に戻らぬやうに致しましやうから、何卒、御咎め下さらぬやうに願ひますと曰つた。すると、信玄は答へて曰ふには、拙者は、左樣な事をば一向存じませぬと曰つた。德川氏は、使者二人を發足させ、好を謙信に通じ、誓約書を認めやりて、信玄を兩方から夾み擊ちにしたいと請うた。村上義清の子の國清は、此時に、越後に寄留して居つたが、つとめて之を贊成した。三年の四月に、謙信は一萬人の兵士を引き連れて、信濃に打つて出で、長沼に火を放つて燒き拂ひ、それで以て、遙かに德川氏の聲援をなした。勝頼は此時伊奈に居つたが、この事變の警報を聞いて、わづかに兵士八百人を引き連れて、出かけて行つて拒いだ。すると、謙信が曰ふには、彼れ勝頼は、敢て、八百といふ少數の兵士を引き連れて、我が一萬といふ大軍に當らうとするのは、實に信玄が子たるに愧ぢない。吾は、その武勇の名を成さしめてやらうと曰つて、兵士を引きまとめて、還り、それから、越中に入り、椎名神保の二氏を攻め亡ぼした。

十月。信玄計謙信阻雪不能出。則復出遠江。拔二股城。信長潛遣兵援德川氏。十二月。信玄進陣三形原。以薄濱松城。縱火城下。挑戰。城兵不出。信玄佯退。城兵大出。上原能登謂小山田昌行曰。德川氏之陣單。織田氏之旗動。可敗也。昌行以告信玄。信玄乃返旆。昌行與勝頼。及山縣昌景。馬場信房。爲先鋒。昌行。昌景先合而卻。勝頼。信房承之。衝其麾下。信玄乃遣米倉丹後。自間道橫擊。大破之。諸將請遂攻濱松。高坂昌宣曰。不可。我攻之。二旬不拔。信長必大擧來援。相持數月。而謙信出信濃。則我不得不返救。信長則曰。我能卻武田氏矣。是損威名也。信玄乃退。次刑部。是役。獲織田氏將平手汎秀。送其首於信長。讓而絕之。信長猶分疏不已。

【字解】【阻】……へだてらる。【三形原】……遠江に在り。【薄】……迫る。三形原は濱松城の北に在り。故に云ふ。【濱松城】……遠江に在り。【挑】……いどむ。【陣單】……後詰なきこと。【旗動】……旗動きて靜肅ならず、陣中の一致せざるを云ふ。【旆】……音ハイ。はた。將帥の建つるところの旗なり。【先合】……第一番に打ち合ふ。【承之】……直ぐ其あとを引き受けて、入り代つて戰ふ。【間道】うら道。【二旬】二十日。【相持】……にらみ合つて居ること。【刑部】……遠江に在り。【讓而絕之】……讓は責むる也。信長がうらはらなるを詰責して交を絕つ。【分疏】……條を分ちて敷陳する也。言ひわけすること。

【講義】十月に、信玄は、謙信が積雪に妨げられて出かけて來ることの出來ないことを計り、そこで、ふたゝび、遠江に打つて出で、二股城を攻め落した。信長は、ひそかに兵士を繰り出して、德川氏を援けた。十二月に、信玄は、進んで三形原に陣取り、それで以て濱松城の間近まで押し寄せ、城下に火を放つて、戰を仕かけた。けれども、濱松城の兵士は出かけなかつた。そこで、信玄は、佯つて退却して見せた。すると、城兵は多勢で出かけて來た。上原能登が、小山田昌行に向つて曰ふには、德川氏の陣は單獨にして、後詰の軍勢無く、織田氏の旗は動いて、陣中一致して居りませぬから、打ち敗ることが出來ましやうと曰つた。すると、昌行は、此言を以て信玄に告げた。信玄は、成る程と思うて、そこで軍旗を引き返してかけ合はせた。昌行は、勝頼及び山縣昌景、馬場信房とゝもに、先鋒となつて先づ進んだ。昌行と昌景とが、先づ敵と打ち合つて退却すると、勝頼と信房とが直ぐ其あとを引き受けて、敵の旗もとを衝擊した。信玄は、そこで、米倉丹後を派遣して、うら道から進んで、横合から擊つて、大に之を破つた。諸將は、なほ進んで遂に濱松城を攻めやうと請うた。すると、高坂昌宣が曰ふには、それは宜しく御座らぬ。若し我が軍が之を圍み攻むること二十日にして落城させることが出來なかつたならば、信長が屹度大兵を引き連れて來て援けるで御座らう。かくて互に睨み合つて勝負のつかざること數月に及んで、謙信が信濃に打つて出でることにも成らば、我が軍は、是非とも引き返して信濃を救はなければならぬで御座らう。すると、信長は、自分が力で武田氏の軍勢を退却させたと曰ふで御座らう。これは、我が軍の武威名聲を損するので御座るから、濱松を攻めることは止めるが宜しう御座ると曰つた。信玄は、そこで、退却して、刑部に止まり舍つた。この戰役に、織田氏の大將の平手甚左衞門汎秀を討ち取つたので、その首を信長に送つて、信長の不信をきびしく責めて、絕交した。信長は、それでもまだ、言ひわけして止まなかつた。

天正元年。正月。信玄拔野田城。疾作而歸。信長請將軍義昭。諭信玄弭兵。信玄辭之。訴信長五罪。二月。使秋山晴近誘降岩村城。城將妻。信長之姑也。晴近奪而納之。京畿將士多來送款者。三月。信玄疾愈。復發。曰。此行必

入京師也。部兵三萬出美濃。信長以萬人出拒。山縣昌景以八百騎馳之。信長不戰而走。乞和益力。信玄不聽。轉入三河。次平谷。四月。疾復作。自度不起。召諸將處後事。使勝頼攝衆。以俟信勝長。誡之曰。汝愼勿佳兵以亡我國。吾死。天下獨有一謙信而已。汝請援以國託之。彼一受汝託。必不與鄰國合以侵汝也。言畢惛迷。已而呼山縣昌景曰。明日樹汝旗于瀨田。乃卒。年五十三。諸將以遺命秘喪。以信玄弟信綱貌肖信玄。輿載之歸。曰。信玄有疾歸國。以昏夜延見四方使者。信玄又豫具空頭花押數百紙。以備書問。以故無來犯者。信玄居常略涉書志。嘗以孫子語書其旗。曰。不動如山。侵掠如火。其靜如林。其疾如風。馬場信房問曰。風雖疾哉。非倏起倏止者乎。信玄曰。兵鋒貴疾耳。苟止矣。則吾以麾下繼之。信房曰。君要第二合之勝也。其君臣講究武事。皆此類也。四鄰頗聞信玄死。北條氏政馳使告之謙信。謙信方食。舍箸而歎曰。失吾好敵手矣。世復有此英雄男子乎。因潸然流涕者久之。

【天正】……正親町帝の時の年號。【野田城】……三河に在り。【疾作而歸】作は、おこる也。信玄、音を好む、夜、城外に至り、笛聲を聽く。敵の銃丸、頰に中り、馬より墮つ。故に疾作と云ふ也。德川記に詳なり。【弭】……やむ。【岩村城】……美濃に在り。城將は、遠山內匠助なり。【姑】……しばらく。【部兵】軍勢を手分けする。一本に、此上に、三月の二字あるは、衍なり。【力】……つとむ。【次】……やどる、止舍する。【度】……はかる。【處】……處置する、處分する。【攝衆】……攝は總持なり。部下の將士を取り締ること。【俟兵】……佳は善くする也。戰爭を好むこと。佳兵の二字、老子に見ゆ。【惛迷】……音コンメイ。昏睡狀態に陷りたる也、心神うつとりとすること。【曰明日樹汝旗于瀨田】……瀨田は近江に在り。これ惛迷して守を失ふの言なり。はじめ、三月、兵を發するときに、此行必ず京師に入らんと曰ひしが、而るに今、危篤にして、素志遂げざるを以て遺憾となす、故に、惛迷中、早や京都の近くに攻め入りしやうの心地して、斯く言ひしなるべし。【秘喪】……わざと死んだことを包みかくす。【肖】……似る。骨肉相似たるを肖といふ。【昏夜】……夕方。【延見】……呼び入れて面會する。【豫】……あらかじめ、前以て。【空頭花押】……花押は音クワアフ、書き判。紙の上頭を空しくして花押を紙尾に畫く也。書き判のみを書きたる白紙。【居常】……平生。【涉書史】いろ〳〵なる書籍に目を通す。信玄、色を遠ざけ財を輕んじ、以て群士を總攬し、好んで書を讀み、和漢の歌詩を善くす。嘗て、松間の花を詠ずるの歌あり、云はく、「立ちならぶかひこそかけれ山櫻松に千年の色はならはで」と。後人以て信玄亡ぶるの讖となせりと云ふ。【孫子語】……孫子は、兵書の名にして、支那春秋のとき、孫武の作りし書。こゝに引用せるは、その軍爭篇の語なり。【不動如山】……鎭定持重して妄りに動かざること山の如し。【侵掠如火】……敵境を侵し掠むることは猛火の原野を燒きて遺草なきが如し。【其靜如林】……敵に未だ乘ずべき隙間あらざるときは、徐々として進み行くこと、林の森然として亂れざるが如し。孫子には、其徐如林とあり。【其疾如風】……敵に乘ずべき隙間あるときは、疾速なること、風の迅速なるが如し。【倏】……たちまち、忽ち。【貴疾】……手早きことを第一に必要とする。【要第二合之勝】……二度目の勝利を取りとめんとする也。【講究】……研究する。講習して義理を推しきはめる。【四鄰】四方の隣國、近隣の諸國。【方】まさに、丁度其時に。【舍箸】……箸を下に置く。【好敵手】……よい相手。【英雄男子】……英雄なる男子、千萬人にすぐれたる英雄といふべき男子。【潸然】……音サンゼン。潸涙の流るゝ貌。さめ〴〵と泣くこと。

本文　天正元年の正月に、信玄は野田城を攻め落したが、病氣が起つたので國に歸つた。信長は、將軍義昭に請うて、信玄に說諭して、戰爭をやめさせやうとしたが、信玄は、これを斷わつて、信長の罪五箇條を訴へ出でた。二月に、信玄は、秋山晴近をして、岩村城を誘ひ降參させた。城將遠山內匠助の妻は、信長の叔母であつたが、晴近が、奪ひ取つて之を引き込んで自分の妻とした。京都畿內の將士どもで、來つて武田氏によしみを送る者が多かつた。三月に、信玄は病氣が全快したので、ふたゝび出發した。そして曰ふには、今度こそは、是非とも京都に攻め入ちうと曰つた。そこで、三萬人の兵士を手分けして、美濃の方面に出でた。信長は、一萬人の兵士を引き連れて出かけて之を拒いだ。すると、山縣昌景は、八百人の騎兵を引き連れて、之に馳せ向つて戰はうとした。すると、信長は戰爭をせずして逃げ走り、和睦を乞ふこと益々つとめたけれども、信玄は聞き入れなかつた。信玄は、それより路をかへて三河に入り込んで、平谷に止まり舍つた。四月に、病氣がふたゝび起つたが、自身に、其病氣がとても快復せぬと思うたので、諸將を呼び寄せて、自分が死んだ後の事を處分し、勝頼をして、部下の衆士を取り締つて、跡嗣たる信勝が成長するのを待たしめることにした。そして、信玄は、勝頼を誡めて曰ふには、汝は、愼んで、戰爭することを善い事として好んでをれで以て我が國を亡ぼすやうな事を致してはならぬ。吾が死するときは、天下に恐るべきものは、たゞ一人の謙信があるばかりである。されば、汝は、救援を謙信に請うて、わが領國を以て、萬事御頼み申し上げると言へよ。彼れ謙信が、一たび汝が委託を引き受けたならば、彼れは義理の堅い人であるから、屹度、鄰國と共同して汝が領地を侵略するやうな事は有りはせぬと曰ひ、言ひ畢つて、昏睡狀態に陷つた。そのうちに、山縣昌景を呼んで曰ふには、あした、汝が旗を瀨田に立てよと曰ひ、丁度、まさに京都に打ち入ちうとして居るつもりであつた樣である。そこで、死んで仕舞つた。その年は五十三歲であつた。諸將は、信玄の遺言したる命令によつて、信玄が死んだことを包みかくして、信玄の弟の信綱の容貌が信玄に似て居るので、信綱を乘物に載せて、信玄の樣に見せかけて、國に歸つた。そして曰ふに

は、信玄は、病氣に罹つたので、國に歸ると曰つた。そして、夕方の暗い時に、四方の使者を召し入れて面會した。信玄は、又、前以て、上の方には何事をも記載して無くあとの方に「書き判」を書きたる白紙數百枚を用意して置いて、以て書面にて往復するときの用に供した。さう云ふ譯であるから、信玄を死んだと思ふものは無く、來つて武田氏の領地を犯し攻める者は無かつた。信玄は、平生、大抵な書物に目を通して居つて、嘗て、孫子の軍爭篇の語を以て、其旗に書き附けて曰ふには、動かざること山の如く（能く落ちつきて動かざること山の如しとの意）、侵略すること林の如く（敵國を侵略して物を掠め取ることは猛火の炎々として原野を燒き立て一草一木をも殘さぬ如くすとの意）、其靜なること林の如く（敵にすきま無ければ、靜まり返りて居ること林の如くすとの意）、其疾きこと風の如し（敵に乘ずべきのすきまあれば疾風の如く突擊すとの意）、と書き附けた。すると、馬場信房が問うて曰ふには、風は成る程早い者では御座りますけれども、忽ち起つて忽ち止むものでは御座りませぬかと曰つた。すると、信玄が曰ふには、軍勢の鋒先は、素早いことを第一とするものである。苟くも止まりて進まぬことがあつたならば、その時には、吾は、旗もとを引き連れて、後を引き受けて進むのであると曰つた。信房が曰ふには、さすれば、わが君は、第二度目の勝利を肝要とせられるのであると曰つた。その君臣同士、武事を研究することは、皆、こんな風であつた。四方の鄰國は、大分、信玄が死んだ事を聞き込むに至つたので、北條氏政は使を馳せて此事を謙信に報告した。謙信は、その時に丁度、食事をして居つたが、箸を下に置いて嘆息して曰ふには、吾が善い相手を失つた。世間に、これ程なる英雄たる男子は、またと有らうぞと曰ひ、因つて、さめざめと涕を流して悲しむこと、やゝ暫らくの間であつた。

甲斐宿將馬場信房。山縣昌景。內藤昌豐。高坂昌宣四人。交說勝賴。請和謙信。勝賴不聽。勝賴性剛愎自用。長坂調閑。跡部勝資。自信玄時。已被近幸。勝賴益寵之。勝賴欲出兵美濃。四將交言不可。調閑。勝資勸之出。會三河軍圍長篠。乃止。五月。勝賴遣信房援長篠。敵設伏而燔柴爲燒營遁。以誘我。將士欲追之。信房曰。其烟白。非燒營也。使騎往踐之。果有伏。乃退次黑瀨。城陷而歸。昌景向濱松。亦不利歸。二年。二月。勝賴出美濃。陷諸砦。五月。攻陷高天神。歸。宴將士。昌宣。昌豐相謂曰。武田氏之滅。兆於此。宴矣。昌宣說曰。君狃勝不戢。構怨四鄰。非長久計。宜還地二氏。與之連和。稍取東國。厚集其勢。二嬖沮而止。已而二嬖勸勝賴出遠江。濟天龍河。遇敵不戰而返。返至伊奈。信虎在焉。年已八十。乃欲載歸。視其狂暴如故。乃止。

字解【宿將】……故老の大將。【交】……こもごも、かはるがはる。【剛愎自用】……剛は强なり、愎は音フク、戾る也。剛情にして人の言を聞かず我が思ふまゝにすること。【長坂調閑】……左衞門入道。【近幸】……親近愛幸。近づけ寵愛する。【三河軍】……德川氏の軍。【長篠】……三河に在り。【燔】……やく。【次】……やどる。三日以上の宿を次と云ふ。【黑瀨】……遠江に在り。【砦】……音サイ。とりで。【狃】……なれる。【不戰】をさめず。戰は歛むる也、止むる也。左傳の隱公四年の條に、衆仲云はく、兵は猶ほ火のごとし、戢めずんば、將に自ら焚かんとすとあり。【二氏】……織田氏と德川氏とを指す。【連和】……連合和睦する。【二嬖】……嬖は、音ヘイ、身分卑しくして寵愛を受くる者。二人の御氣に入りの者、長坂と跡部とを指す。【不戰而返返至伊奈】……返の字、一に還に作る。

講義　甲斐の故老の大將なる馬場信房、山縣昌景、內藤昌豐、高坂昌宣の四人が、かはるがはる、勝賴に說いて、和睦することを謙信に請ふやうにと勸めたけれども、勝賴は承知しなかつた。勝賴は、その性質、剛情にして人の言ふことを聞き入れず、自分の思ふまゝにした。長坂調閑、跡部勝資の二人は、信玄在世の時より、已に近づけられ寵愛せられて居つたが、勝賴は、ますます之を寵愛した。勝賴は、兵士を美濃に繰り出さうと思うた。前に擧げたる四人の故老の大將は、かはるがはる、それは宜しく御座りませぬと曰つた。之に反して、調閑と勝資とは、勝賴に兵を繰り出すことを勸めた。折しも、三河の德川氏の軍勢が長篠城を圍み攻めたので、止めにした。五月に、勝賴は、信房を派遣して、長篠を援けさせた。敵は伏兵を設けて置いて、そして、實は柴を燒いて、陣營を燒き拂つて遁れ去るやうに見せかけて、それで以て、我が兵士をおびき寄せやうとした。我が將士どもは、之を追つかけやうとした。すると、信房が曰ふには、其煙の色が白いから、これは陣營を燒き拂ふのではあるまいと曰つて、騎兵を遣はして、往きて其怪しく思ふ所を踐み試みさせると、案の通り、伏兵があつたので、そこで、退却して黑瀨に止まり舍つたが、長篠城が落城したので、國に歸つた。昌景は、濱松に向つたが、これも亦、勝利を得ずして國に歸つた。天正二年の二月に、勝賴は美濃に打つて出で、諸の壘砦を攻め落し、五月に、高天神を攻めて落城させ、國に歸つて、將士を集め、勝利の酒盛を開いた。昌宣と昌豐とが互に語り合つて曰ふには、武田氏の滅亡は、この宴會に兆キザしして居ると曰つた。昌豐は勝賴に說き勸めて曰ふには、わが君は、勝軍（カチイクサ）に狃れて、いつでも勝利を得られるものだと思うて、長く兵を戢めて戰爭を廢しなされぬときは、怨みを四方の隣國に結ぶことに成りませう。是れは國家長久の計策では御座りませぬ。されば、我が攻め取つたる土地をば、織田、德川二氏に還して、之と連合和睦し、ぼつ〳〵とだん〳〵に東方の諸國を取り込み、厚く一つ所に其兵力を集めて、各所に分散せぬやうにして、土臺を固くするが宜しう御座りますと曰つた。二人の御氣に入りの者、卽ち長坂、跡部が邪魔をしたので、其儘に成つて仕舞つた。とかくする中に、二人の御氣に入りの者が、勝賴に勸めて、遠江に打つて出でさせ、天龍川を渡つたが、敵に遇うて戰はずして引き返した。引き返して信濃の伊奈に至つたが、其處に信虎が猶ほ生存して居つて、年はもはや八十歲であつたので、そこで、乘物に載せて連れ歸らうと思うたけれども、信虎の物狂はしく亂暴なることは、もとの通りであるのを視て、そこで、止めにした。

四鄰覩甲斐兵數不競。知信玄定死。稍窺之。自信玄之死也。信長專意於謙信。卑辭厚禮。事之猶事信玄。以其妹嫁神保長純。長純。上杉義春之兄。屬謙信者。信長因陽結謙信。而陰圖之也。又陰以計招上杉氏諸城。歸款於己。謙信書誚其反覆。信長答書陳疏。謙信不聽。會畠山義隆將游佐彈正等。毒弑義隆。以七尾城降信長。七月。謙信將兵三萬西伐。攻長純木船城。拔之。遂入加賀。屠金澤。移兵攻七尾。以義春爲將。努力復取能登。游佐等乞援信長。信長方攻長島。不能來。九月。城陷。誅游佐等。乃休兵二日。屬十三夕。月色明朗。謙信置酒軍中。會諸將士。酒酣。自作詩曰。霜滿軍營秋氣清。數行過雁月三更。越山并得能州景。遮莫家鄉憶遠征。令將士善歌詩者皆和之。遂爲政國中而歸。信長遣大兵來援。聞城陷引去。信長猶使使謝罪於謙信。

字解【不競】……きそはず。競は強き也。不競とは、振はずと云ふが如し。兵威の引き立たぬこと。左傳に用ひられたる語。【上杉義春之兄】……この下に、一に、也の字あり。【陽】……あらはに、うはべには。【上杉氏諸城】……城は一に將に作る。【歸】：おくる。【誚其反覆】……誚は責むる也。その信義を以て交らざるを叱りつける。謙信に結びながら裏を切りて上杉の諸將を自分の方に引き込まんとする故なり。【陳疏】……音チンソ。言ひわけする。【毒弑】……一に毒殺に作る。【七尾城】……能登に在り。【木船城】：越中に在り。【努力】……勉強する、骨折る、力を盡す。【長島】：伊勢にあり。【十三夕】……九月十三夜のこと。九月十三夜に月を觀ることは寛平法皇に始まると云ふ。【明朗】……音メイラウ。月があきらかにしてほがらかなること。【置酒】……酒宴を開く。【酣】……たけなは。【游行】……行は列なり。【過雁】……飛び過ぐる雁。【三更】……子の時、夜半十二時を云ふ。【越山并得能州景】……越山の景色をも併せ得たる能州の景色と云ふこと。能登にての作なれば、能登が主となるなり。能登の景色のみならず越山の景色をも遙に眺めちるゝとの義。【遮莫】……さもあらばあれ、まゝよ、どうでも宜しいとの意。【家鄉】……故鄉。【和之】……その詩に和韻する。

講義 四方の鄰國は、甲斐の武田氏の軍勢が度々兵威の引き立たぬのを見て、信玄が實際死んだに相違ないことを知り、ぼつ〳〵と、其すきを窺つて何かしやうとして居つた。信玄が死んだときから、信長は、其妹を以て、神保長純に妻はせた。長純は、謙信の養子なる上杉義春の兄であつて、謙信に附き從つて居る者であつた。信長は、そこで、表面には、謙信に結託して居つて、そして、裏面では、之をほろぼさうと〳〵はだてゝ居つたのである。信長は、又、ひそかに、計略を以て、上杉氏に附いて居る諸城將を招き、自分の方に內通せしめるやうにした。そこで、謙信は、書面を送つて、信長が、表裏相異にして信義を以て交はらざるを叱責した。信長は、返書を送りて、色々と言ひわけした。けれども、謙信は聞き入れなかつた。折しも、畠山義隆の大將なる游佐彈正等が、義隆を毒殺し、七尾城を以て信長に降參した。そこで、七月に、謙信は、兵士三萬人を引き連れて、西の方に向つて征伐し、長純を木船城に攻めて、之を攻め落し、とう〳〵加賀に打ち入り、金澤の兵士を大に屠り殺し、之れより、兵士の方向を變へて、七尾城を攻め、義春を以て大將として、力を盡して、また能登を取りもどした。游佐等は、援を信長に乞うたけれども、信長は、その時には長島を攻めて居つたので、來り援けることが出來なかつた。九月に、七尾城は落城し、游佐等を誅殺した。そこで、兵士を休息せしむること二日間であつた。折しも、九月十三夜に當つて居つて、空は隈なく晴れて、月の光は明にほがらかにして、何とも言はれぬ景色であつた。謙信は、軍中に於て酒宴を催し、諸將士たちを寄せ集めた。酒たけなはなるとき、謙信は、自身に詩を作つた。その意味は、霜は軍營にまんべんなく降りて夜白く、秋の氣は身にしみわたるほど淸く、空を仰ぎ見れば、數列の雁が、眞夜中の淸く朗かなる明月の前を、飛び過ぐる。こゝより眺望すれば、この風景よき能州の景色のみならず、遙に越の國の山々が隈なき明月に照されたるをも、眺め見わたすことが出來る。かく愉快なる景色を見て居れば、故鄉の者共は、遠き他鄉に出でゝ征伐に苦勞しつゝある吾々を思ひやみて居るであらうが、吾は、そんな事はどうでもかまはぬと曰ふのであつた。そこで、將士どもの中で、歌や詩を作ることの上手な者に命じて、皆此詩に和して、めい〳〵何か作らしめた。かくて謙信は、とう〳〵國中に政令を施して置いて、本國に歸つた。信長は、大兵を派遣して、來り援けしめたけれども、七尾は既に落城したといふ事を聞いて、引き上げて去つた。信長は、それでも猶ほ、使者をして謙信に謝罪せしめた。

【參考】左に翁草の一章を抄錄して以て參考に資す。

謙信上杉義春不快の事

天正二年甲戌七月、能登國主畠山修理大夫義隆、十八歲にて毒害死去、家臣游佐彈正、溫井備中、長對馬を始として、十一頭人數二千にて、七尾の城に籠り、信長に從ふ。義隆の伯父上杉五郎義春、越後に在りて此亂を聞き、謙信に訴へて、人數一萬三千にて發向、七尾の城を八月二日より攻め圍む。義春粉骨を盡し、九月十一日に攻め落し、城中宗徒の者十餘輩打ち果す。信長より、柴田勝家父子、前田利家、佐々成政、金森五郎八、一萬八千にして、後援の爲め、加賀國御幸塚まで來り候へども、七尾落城を聞き、早々引き返す。落城の三日目、九月十三夜には、謙信諸將を集め、月を賞して、詩歌の宴あり。

霜滿軍營秋氣淸、數行過雁月三更、越山并得能州景、遮莫家鄉憶遠征。

又、連歌に、

月すめば猶ほ靜なり秋の海　謙信

扨、能登國は、畠山代々の本領と云ひ、此度義春の功を以て取り返されたる國なれば、究めて義春へ賜ふ可しとの風聞に仍り、能登一州二十萬石の者共、彌五郎殿歸國あらば、我々世に出づ可しと悅んで、我も〳〵と馳せ來て、彌五郎手に附きしこと夥し。謙信は柴山と云ふ所に陣取り、總人數の押前を見物せんとて、床几に腰を掛けられ、彌五郎も側に畏り居る。能州先方の人數爽なる武具にて押し通る。謙信見咎められ、是は誰が人數ぞと問はるゝに、上杉彌五郎人數と答ふ。次に通るも彌五郎、又其次も同前にて事々しき多勢なり。謙信機嫌あしく、長久しく物をも云はず、其後申さるゝは、いかに彌五郎、三好宗三は、畿内にての取功者の大將なり、宗三常に云はく、人數は遣はれぬ物なり、三百騎より上の勢は遣ひがたしと云ひしと聞けりと申さる。其後は詞なく、謙信死期まで義春を睨付け、言葉をも掛けず、大方勘當同然にて能州をも賜はらず不快なりしとかや。

是歲。信長招降三河將奧平信昌。令守長篠。以備甲斐。三年。四月。三河計吏大賀某。陰送欵甲斐。約爲內應。勝賴往陣榆城。聞大賀謀覺被誅。乃還。五月。勝賴以萬人附昌宣。留拒越後。自以一萬五千。圍長篠。軍道虛寺。令叔父信實守鳶巢壘。德川氏乞援於信長。信長不敢出。使者三反。不許。使者請曰。不援。則納遠江於武田氏。爲之先驅。以取尾張。且信玄已死。公何怖之甚也。信長乃自將來援。兵凡七萬。猶憚甲斐騎兵衝突。植柵三層。守以萬銃。勝賴欲戰。信房。昌景。昌豐等。皆諫曰。敵衆新來。其氣銳。不若且避之。不則疾攻城。雖損我兵。猶可拔而歸也。一戰夷兩敵。在於今日。勿聽老怯計。信房曰。今日之戰。老怯者必死。若公等。乃遁走耳。勝賴遂留室賀行俊。小山田昌行圍城。而自進濟河陣。旦日。敵閒道襲鳶巢。信實敗死。我陣顧而動。敵衆挑戰。昌景爲左先鋒。進犯敵柵。中丸死。信房爲右先鋒。與眞田則幸。土屋直村。破柵而進。則幸。直村亦中丸死。室賀行俊來請曰。圍可解否。勝賴曰。可。言未畢。諸軍大潰。信房使人馳白勝賴曰。君速去。臣請留死之。與八十騎止戰。盡亡其騎。自登高邱。顧視勝賴已遠矣。乃號於敵曰。我馬場美濃也。宜斬以受重賞。敵叢刺之。死。二嬖先遁。昌宣豫慮軍敗也。以兵八千。迎於境上。以歸。因大諫。請與北條氏婚。以拒二氏。勝賴從之。

字解【長篠】……三河に在り。【計吏】……金穀の事を司る役人、會計方。【大賀某】……彌三郎と稱す。內應の謀發覺して誅殺せられしこと、德川記に詳なり。【送欵】……內通する。【內應】……裏切りする。【榆城】……三河に在り。【道虛寺】……三河に在り。【鳶巢】……三河に在り。【三反】……往復すること三回に及ぶ。【先驅】……音センク、先陣、先鋒、さきがけ。【植柵三層】……木柵を三重に立てならべる。【銃】……鳥銃、鐵砲。【二嬖】……長坂、跡部。【夷】……たひらぐ、ほろぼす。【兩敵】……織田、德川を云ふ。【老怯】……怯は畏るゝ也。年寄りて氣の弱きもの。【濟河】……豐河をわたる也。【亡】……うしなふ。【蕃刺】……音ソウシ。叢は聚也。四方よりむらがりさす、槍ぶすまを作つてさす。

講義　この歲に、信長は、三河の大將なる奧平信昌を招き降參せしめて、長篠を守らせて置いて、それで以て甲斐の武田氏の軍勢に備へた。天正三年の四月に、德川氏方の會計役なる大賀某が、ひそかに甲斐の武田氏に內通して、內より擊つて出でゝ應援しやうと約束したので、勝賴は出かけて往つて榆城に陣取つた。大賀の謀が露顯して誅殺せられたといふ事を聞いたので、勝賴は、そこで、引き返した。五月に、勝賴は、一萬人の兵士を昌宣に附屬して、留まつて越後の上杉氏の軍勢を拒がせて置いて、自分は、一萬五千人の兵士を引き連れて、長篠を圍み、道虛寺に陣取り、叔父の信實をして鳶巢の壘を守らしめた。德川氏は、援兵を信長に乞うたけれども、信長は、敢て出でゝ援けやうとしなかつた。德川氏の使者が往復すること三度に及んだけれども、許さなかつた。すると、德川氏の使者が請うて曰ふには、あなたが、若し御援け下さらぬならば、仕方がありませぬから、我が德川氏は、遠江を武田氏に差し出して降參し、其先陣となつて、あなたの領分なる尾張を攻め取りましやう。其上に、信玄は、もはや死んで仕舞ひましたのに、あなたは、どうして、さほどまでに甚しく恐れなさるゝので御座るかと曰つた。信長は、そこで、自身に大將となつて、來り援けることにした。その兵士は凡そ七萬人であつたが、それでもまだ、甲斐の騎兵が突き進んで來ることを畏れ憚つて、木柵を三重に結つて、一萬挺の鐵砲を以て之を守つた。勝賴は戰はうとした。信房、昌景、昌豐等は、皆諫めて曰

ふには、敵の軍勢は、新に來りたるものなれば、其氣力盛鋭で御座りますから、しばら〳〵之を御避けなされるが一番宜しう御座ります。若し左樣なさらぬならば、手きびし〳〵城を御攻めなされ。さうするときは、我が兵士を損じましやうけれども、それでもまだ、城を攻め落して歸ることが出來ましやうと曰つた。二人の氣に入りの者長坂、跡部が曰ふには、一度の戰爭で織田、德川の二人の敵を平らげ滅ぼすのは、今日の一戰に於て、年とつて臆病なる者の計策を御聞き入れになつてはなりませぬと曰つた。すると、信房が曰ふには、今日の戰に於て、年とつて臆病なりと云はれる者は、屹度討死するで御座らうが、あなたなどの如きものは、逃れ走るで御座らうと曰つた。勝頼は、とう〳〵、室賀行俊、小山田昌行を召めて、城を圍ませて置き、そして、自身は、進んで豐河をわたつて陣取つた。明〳〵る日に、敵は、裏道から、蔦巢を不意擊した。信實は敗戰して討死した。我が武田氏の軍勢は、ふりかへつて之を見て、動搖した。かくて、敵の軍勢が戰を仕掛けると、昌景は、左の先鋒であつたが、進んで敵の木柵を犯して、彈丸に中つて討死した。室賀行俊は、味方の危きを見て、來つて勝頼に請うて曰ふには、斯くともに、木柵を破つて進んだ。則幸、直村も亦、彈丸に中つて討死した。信房は右の先鋒であつたが、眞田則幸、土屋直村と破れたれば、長篠を圍み攻むるは無益であると思はれまするが、圍を解いても宜しう御座りますかと曰つた。勝頼が曰ふには、宜しいと曰つた。その言が未だ畢らざるに、味方の諸軍は大に崩れ亂れた。すると、信房は、人をして馳せ來つて勝頼に言上させて曰ふには、わが君には、速に御立退きなされ。私は、こゝに留まつて討死いたしましやうと曰つた。そこで、信房は、八十騎とともに、止まり戰つたが、殘らず、其騎士を無〳〵して仕舞ひ、自身に、高き岡に上り、ふりかへつて見て、勝頼が已に遠く落ち延びたのを見て、そこで、敵に向つて、大聲で呼ばゝつて曰ふには、われは、馬場美濃守である。われを斬つて重き褒美を貰ふやうにするが宜しいと曰つた。すると、敵は、大勢むらがり集つて、之を刺し殺した。二人の御氣に入りの者は、第一番に逃げ出した。昌宣は、前以て、味方の敗軍せんことを氣遣つて居つたので、八千人の兵士を引き連れて、國境の近くに出で迎へ、勝頼を連れ歸り、そこで、大に謀めて、北條氏と緣組して、織田、德川の二氏を拒ぐやうになされと請うたので、勝頼は其言に從つた。

信長既大捷。謂甲斐不足患。所患獨謙信。乃大城安土。移焉。以備北道。柴田勝家爲其最驍將。因守越前。居北莊。八月。謙信將兵入加賀。攻松任城。城將蕪木高秀。乞援於信長。信長將五萬人。來陣御幸塚。勝家爲先鋒。謙信疾攻拔城。斬高秀。齎其首。贈信長。曰。頃攻本城。相公遠來見援。幸甚。然城將已授首。謹此奉贈。公當有一戰以弔之。明早將相見。信長許諾。而乘夜退軍。設八伏以俟。諸將請追擊。謙信曰。信長豈徒歸者。亦引還。

【捷】……勝つ。【安土】……近江に在り。【驍將】……勇將。【北莊】……越前に在り。【松任城】……加賀に在り。【齎】……もたらす。【頃】……このごろ。【相公】……信長を指す。此時、内大臣たり、故に云ふ。

【御幸塚】……加賀に在り。

【評】信長は、すでに大勝利を得たので、おもふには、甲斐の武田氏は、心配するに足らぬのである、心配すべきは、たゞ謙信だけであると思うたので、そこで、大に安土に城をきづいて、引き移つて此處に居り、以て北國からの進路に備へた。柴田勝家は、信長の一番武勇なる大將であつたので、そこで、越前を守つて北莊に居らしめた。八月に、謙信は、軍勢を引き連れて、加賀に打ち入り、松任城を攻めた。城の主將蕪木高秀は、援兵を信長に乞うた。信長は、そこで、五萬人の兵士を引き連れて、來つて御幸塚に陣取つた。勝家が、先陣であつた。謙信は、手きびしく攻めて、城を攻め落し、高秀を斬り殺し、使者をしてその首を持參させて、信長に贈つて曰ふには、この頃、私は此城を攻めたところが、内大臣殿(信長を指す)は、遠方から來つて援けられ、まことに有りがたい事で御座る。然れども、城の主將は、もはや、其首を私に渡しました。謹んでこゝに進呈いたします。貴殿は、一戰爭して諸將の忠魂を弔はるべきで御座る。明日早朝、戰場に於て御目に懸りましやうと曰つた。信長は、承諾しましたといつたが、夜の間に軍勢を引きまとめて退却し、八箇所に伏兵を設けて置いて、そして、謙信の追擊を待つた。謙信方の諸將は、信長の軍が退却するのを追ひ擊たんと請うた。すると、謙信が曰ふには、信長は、どうして、たゞ歸る者であらうぞ、何か仕掛があるに相違ないと曰つて、謙信も亦、兵を引きあげて國に歸つた。

是歲。勝頼使使請和謙信。欲報織田氏。謙信許之。徵其質子。不肯。會德川氏攻二股。城將依田幸成固守不下。乃攻陷諏訪原。遂攻小山。勝頼曰。彼謂我不能復出乎。乃募兵二萬援之。敵解圍去。十二月。幸成死。德川氏復來攻。幸成子信蕃拒之。勝頼命棄城退。岩村又陷。信長手刃其姑。是月。勝頼迎北條氏女。成婚。昌宣退謂人曰。今夕吾始得高枕矣。四年。春。勝頼出兵遠江。與德川氏。相持橫須賀。勝頼欲戰。昌宣諫曰。長篠之役。多失老將。獨有臣存。今又欲殺之乎。勝頼乃退。城相良而歸。越後將士說謙信曰。甲斐兵新敗。可乘也。謙信曰。我與信玄數十戰。不能取。及其死。侮弱

子。乘敗取之。何以對天下。

【字解】【質子】……音チシ。人質。【二股】……遠江に在り。【諏訪原】……遠江に在り。【小山】……遠江に在り。【岩村】……美濃に在り。【其姑】……姑は叔母。按ずるに、秋山晴近が奪ひしところの者にして、蓋し此時岩村に在りしなるべし。【得安枕】……安心して寢られるとの意。昌宣、さきに、北條氏と婚して、織田、德川二氏を拒がんと請ひしが、今、その通りになりたれば也。【横須賀】……遠江に在り。【多失老將】……馬場山縣等の諸老將の戰死せしを云ふ。【相良】……遠江に在り。【弱子】……年の若い子。

【講義】この歳に、勝頼は、使者を遣つて、和睦することを謙信に請はしめて、織田氏に仕返しをしやうと思うた。謙信は、之を承諾し、その人質たるべき者をよこせと云つたけれども、勝頼は承知しなかつた。折しも其時に、德川氏は二股を攻めた。城の守將なる依田幸成は固く守つて下らなかつた。そこで、德川氏は、諏訪原を攻め落し、とう〳〵小山を攻めた。すると、勝頼が曰ふには、彼れ德川氏は、我が再び打つて出でることは出來ないと思うて居るのであるかと曰つて、そこで、兵士二萬人を募集して、小山を援けた。すると、敵德川氏は圍を解いて去つて仕舞つた。十二月に、二股城の守將幸成は死んだ。德川氏は、ふたゝび來り攻めた。幸成の子の信蕃が之を拒いだ。勝頼は、信蕃に言ひ附けて、城を棄て、退却させることにした。岩村城も又攻め落され、信長は手づからその叔母を殺した。この月に、勝頼は、北條氏の娘を迎へ入れて、結婚した。すると、昌宣は退出して人に向つて曰ふには、今晩こそ、われは、始めて枕を高くして安心して眠ることが出來ると曰つた。天正四年の春に、勝頼は、軍勢を遠江に繰り出し、德川氏と、横須賀に於て、對陣した。勝頼は戰はうとした。すると、昌宣が諫めて曰ふには、先般長篠の戰役に於て、多く故老の大將を失ひ、今では、たゞ、私が殘つて居るだけで御座ります。今や、又、勝算も無き戰を始めて、この私を殺さうとなされるので御座りますかと曰つた。勝頼は、そこで、退却して、相良に城を築いて國に歸つた。越後の將士たちは、謙信に說き勸めて曰ふには、甲斐の武田氏の軍勢は、大敗を取つたばかりの時で御座りますから、此機會につけ込む可きで御座りますと曰つた。すると、謙信が曰ふには、われは、信玄と戰爭すること數十回であつたが、取ることが出來なかつたのである。然るに、今、信玄が死んだ時に及んで、若年なる子を輕侮し、負けたところに付け込んで之を取つたならば、誠に男らしく無い事で、何の面目あつて天下の人に會ふことが出來やうぞと曰つた。

三月。謙信入越中。取蓮沼。獲椎名泰種。殺之。令別將入飛驒。夷江馬氏。遂自入加攻小松。織田氏將前田利家等來援。以先鋒擊破之。使川田長親守越中。柿崎景家守能登而還。信長患謙信西向。日夜謀所以禦之。柿崎景家遣人市馬上國。信長喜曰。可以閒也。乃給直十倍。自書謝。更索佳鷹。景家貪其直。數給鷹。後有告其通欵。終被殺。信長陰招能登人長重連。加賀人松任彥紹。誘一向賊北向。五年。重連聚兵據穴水城。小松。安宅。大道山諸城。竝起應之。當是時。筒井順慶。松永久秀等。據大和。遙送欵謙信。請其西上。又西約毛利氏。東西夾攻信長。九月。謙信自將攻穴水。拔之。斬重連。遂攻小松。安宅。信長遣柴田勝家。前田利家等五將。將兵四萬八千來援。而已亦潛來助之。謙信攻拔三城。進至石動橋。距織田氏軍十里而陣。使使約明曉會戰。信長復乘夜而逃。謙信大笑曰。信長巧於走者也。使其猶在。當盡踢墜之水耳。遂進攻金澤。陷之。入越前。行攻織田氏壘寨。盡驅其守兵。焚掠而進。烟塵蔽天。信長退保北莊。遂退入長濱。

【字解】【江馬氏】……常陸介時宣。【遣人市馬上國】……遣は一に使に作る。市は賣る也。上國は、上方。【給】……給與する、わたす。【直】……あたひ。價なり。【穴水】……能登に在り。【筒井順慶】……陽春坊。【石動橋】……越中に在り。【踢墜】……音タウツヰ。踢は蹴なり。墜は落なり。けおとす。【驅】……かる、逐ひ立てる。【長濱】……近江に在り。

【講義】三月に、謙信は、越中に討ち入つて、蓮沼と云ふ所を取り、椎名泰種を生捕り、之を殺し、又、別の大將をして飛驒に打ち入らしめて、江馬氏を夷げ滅ぼし、とう〳〵、自身に、加賀に入り、小松を攻めた。織田氏の大將なる前田利家等が、小松を援けんが爲めに來たが、謙信は、先鋒の軍を以て、擊つて之を破り、川田長親をして越中を守らしめ、柿崎景家をして能登を守らしめて置いて引き返した。信長は、謙信が西の方に向つて攻め上らんことを心配して、夜となく晝となく、どうしてこれを禦がうかと工夫して居つた。ところが、柿崎景家が、人を派遣して馬を上方地方に賣り捌かしめた。すると、信長は喜んで曰ふには、これによつて彼れ君臣の間を離閒することが出來るのであると曰つて、そこで、十倍の價を渡し、自身に禮狀を書いて、良い馬を買ひ得て有難しとの謝意を述べて、更に、佳い鷹を購ひたしと申し送つた。景家はその價の高きを貪り、たび〳〵彼れの需めに應じて、鷹を送つてやつた。其後、景家が織田氏に內通して居ると告げた者があつたので、と〳〵殺された。又、信長は、ひそかに、能登の人長重連、加賀の人松任彥紹を招き、一向宗の一揆を誘ひ、北の方越後の方へ向はしめた。天正五年に、重連は、兵を寄せ集めて、穴水城に立て籠つた。小松、安宅、大道山などの諸の城は、之を好機會として、竝びに兵を起して、之に味方した。この時に當りて、筒井順慶、松永久秀等は、大和に立て籠つて、遙に、謙信に內通して、謙信が速に西の方京都に向つて上らんことを

請ひ、又、西の方、毛利氏と約束して、東と西とから、信長を夾み攻めやうとした。九月に、謙信は、自身に大將となつて、穴水を攻めて、之を攻め落し、重連を斬り殺し、とう〳〵小松・安宅を攻めた。信長は、柴田勝家、前田利家等の五人の大將を派遣して、兵士四萬八千人を引き連れて、來つて小松・安宅を援けしめ、そして、自分も、ひそかに來つて之を助けた。謙信は、攻めて三つの城を攻め落し、進んで石動橋に至り、織田氏の軍勢を去ること十里のところに陣取り、使者をして、明日早朝に出合つて戰はうと約束せしめた。信長は、また、夜の間に附け込んで逃げて仕舞つた。すると、謙信は、大いに笑つて曰ふには、信長は、逃げ走ることの上手な男である。信長が今でも猶ほ居つたならば、盡く之を水の中に蹴落してやるべきであつたと曰つた。謙信は、かくて、とう〳〵進んで金澤を攻めて之を攻め落し、それから越前に入り、行く〳〵織田氏のとりでを攻め、殘らず其守備兵を追ひ立て、火を放つて物を掠めて進んで行き、烟や塵が天を蔽ふばかりであつた。信長は、退却して、北莊に立て籠り、とう〳〵、退却して、近江の長濱に入つた。

謙信以天寒雪下。又聞久秀等已敗死。欲班軍。乃遺書信長曰。信玄既死。公則委四郎於家康。而自居安土。蓋備謙信也。公數與畿內敵樂戰。未觀北人技倆耳。請期明春三月十五日。聊擧八州之卒西上。與公相見。公勿視謙信同皮履都人士。時京師人喜穿皮履。故云。使使齎書。因贈越後布二千端。信長延見使者。言曰。爲吾返報越後公。信長何敢與公角。公來將盡脫刀劍。獨挿扇於腰。單騎迎謁。先導以入都。公義人也。信長所辛苦經營。必不見奪也。使者復命。謙信哂曰。信長奸雄。甘言以怠我耳。聞長篠之役。渠以柵與銃。困甲斐四郎。明年復必以此擬我。我豈墮其計哉。十月。歸越後。閒日傳檄。大發管內八國兵。期以三月五日。加賀以西兵。沿道附從。京畿大震。信長使使告之勝賴。請捐前故。修舊好。曰。謙信西上。我與家康拒之北道。願公直指越後。事克。則其地唯公所取。勝賴不答。六年。三月。北陸諸國兵。應檄雲集。謙信自臨簡閱。申約束。將發。先發二日。疾作。二日。遂卒。年四十九。卒後信玄五年矣。

字解【孰】……還す。【委】……ゆだね、任せる。【四郎】……勝賴を指す。【樂戰】……音ラクセン。おもしろく戰ふ。史記の楚世家に、願王之飭士卒得樂戰とあり。【技倆】……音ギリヤウ。手なみ。【八州】……謙信が領するところの八箇國、卽ち越後、越中、加賀、能登、飛驒、信濃、上野、佐渡。【皮履都人士】……皮ぐつをはいて居る都人。【穿】……はく。【越後公】……謙信を指す。【角】……力くらべする。【經營】……經は量度なり、營は謀爲なり。くみ立てはかりなすこと。【奸雄】……奸智にたけた英雄。【以柵與銃】……かれ。【延】……かれ。【捐】……すつ、除去なり、のぞきすつる。【雲集】……雲の如く多く集る。【簡閱】……音カンエツ。簡は選なり、閱は歷なり。人數車馬を取り調べること。【申】……のぶ。【約束】……軍令。

講義　謙信は、氣候が寒くなつて、雪が降るやうになり、又、松永久秀等はもはや敗軍して討死したといふ事を聞いて、軍勢を引き返さうと思うて、そこで、手紙を信長に送つて曰ふには、貴殿の恐るゝ信玄は既に死んで仕舞つたので御座らう。貴殿は、そこで、四郎勝賴をば家康に任せて置いて、そして、自身は、安土に居られるが、大體、これは、謙信に備へらるゝので御座らう。貴殿は、たび〳〵、畿內の弱い敵を相手に面白く戰はれたが、未だ北國の人の手なみをば御覽にならぬのである。どうぞ、明年の春三月十五日を期日とし、聊かながら、わが領國なる北陸東山八州の士卒を擧げて、西の方に向つて上り、貴殿に御目に懸りたいと思ひます。貴殿は、この謙信をば、皮ぐつをはいて居る柔弱なる都人と同じやうに思うては成りませぬぞと曰つた。この時に、京都の人は、好んで皮履をはいて居つたので、それ故に、かやうに云つたのである。使者をして、此手紙を持參せしめ、それに添へて、越後上布二千反を贈つた。信長は、謙信よりの使者を座に引き入れて面會して、之に向つて曰ふには、私が爲めに、還られたならば、越後殿に次の如く御返事して下され。信長は、どうして、貴殿と力くらべを致さうとしませうぞ。貴殿が、若し御出でになつたならば、私は、將に刀劍を脫ぎ棄て、たゞ、扇子を腰にたばさみ、たゞ一騎にて出で迎へて拜謁し、御案內申して都に入るやうに致すで御座らう。貴殿は、義理のたゞしき人で御座りますから、この信長が多年辛苦して組み立てたところをば、必ず奪ひ取られるやうなことは御座りますまいと申し上げて下されと曰つた。使者は、還つて此旨を申述べた。すると、謙信は、笑つて曰ふには、信長は、性質の善くない英雄であるから、うまい事を言つて、我が兵備を怠らせやうとするのである。聞くところによれば、先年長篠の戰役に於ては、かれ信長は、木柵と鐵砲とを以て甲斐の四郎勝賴を困却させたといふことであるが、來年、また、屹度、此手段を以て我にもあてがふであらうと思はれるが、我はどうして其計略に陷るべきぞと曰つた。かくて、謙信は、十月に越後に歸り、一日おいて、檄文を四方に傳へ、大に、其領內八箇國の兵士を徵發し、三月五日を以て期日となし、加賀より西の兵士は、途筋から附き從はしめることにした。こゝに於て、京都畿內は、大に震ひ怖れた。信長は、使者をして、此事を勝賴に告げしめて、元龜年間以來の怨をのぞき棄て忘れて、むかしの好を修めんことを請うて曰ふには、謙信が西の方に向つて攻め上らうとするについては、我と家康とは、之を北陸道に於て拒ぐことに致さう。貴殿は、どうぞ、直に越後を指して、攻め入られよ。若し勝利を得たならば、其土地はたゞ貴殿の取るが儘に致さうと曰つた。けれども、勝賴は、返答

をしなかつた、天正六年の三月に、北陸道の諸國の兵士は、檄文の募集に應じて、雲の如く愁しく集まつて來た。謙信は、自身に、其場に臨席して、兵士車馬などを取り調べ、軍令を言ひ聞かせ、まさに出發しやうとした。出發に先だつこと二日卽ち三月三日に、病氣が起り、二日たつて、とう〳〵死んで仕舞つた。その年は四十九歳であつた。その死は、信玄の死に後るゝこと五年であつた。

直江兼續。本莊繁長等諸大臣。相共謀曰。三郎非上杉氏胤。胤乃景勝。且親姪。宜立。立三郎。北條氏必因以幷呑北陸。吾輩皆爲之臣僕。於是。遣上杉義春。矯命急迎景勝於上田。來入內城。分親信守諸門。景虎在外城。日夜相鬩。弓銃交發。織田氏細作在越後者。走歸告信長。信長大喜。撫掌曰。天下大定矣。乃令佐久間信盛入加賀。前田利家入能登。佐佐成政入越中。各自略取之。景勝。景虎兵結不解。以故不能拒。景虎終敗。走歸上杉憲政于北川。戶定城主北莊丹後聞變馳至。說景勝曰。兩郎君宜各領四州。共拒信長。不則彼乘釁來侵。先公所百戰而取者。一旦附之敵人。豈不可惜。景勝不聽。北莊怒。去助景虎。數破景勝兵。因軍善光寺。景勝母在上田。肩輿來入城。召諸將士。面勗之。保謙信遺業。將士感激力守。七年。正月。景勝夜潛兵襲景虎軍後。大破之。北莊脫走。景勝將荻田主馬識之。追而刺之。於是。諸城多歸景勝。景虎走保鮫尾。北條氏政聞之。遣兵萬餘援景虎。又請援於武田氏。勝賴出軍飯山。景勝與戰不利。齋藤朝信說景勝。以東上野啗勝賴。先以金萬兩。又厚賂其二嬖。二嬖交說勝賴曰。景虎。君之舅也。雖然。援之而克。則北條氏連屬東北。將及於君矣。是與得東上野金萬兩孰利。勝賴乃與景勝和。合兵攻景虎。景虎與憲政皆自殺。相模兵引去。氏政大怒。與勝賴絕。與織田氏。德川氏約。夾攻勝賴。

【直江兼續】……山城守。【三郎】……景虎。謙信の養子にして、實は北條氏康の子。【景勝】……實は長尾政景の子、謙信の姉の生むところにして、卽ち謙信の外甥、故に親姪と云ふ。姪は音テツ。をひ。【幷呑】……音ヘイドン。あはせのむ、丸呑にする。【矯命】……命をいつはる。矯は詐なり。妄りに上命を託する也。謙信の命令なりと詐る也。【上田】……信濃に在り。【內城】……本丸。【外城】……外廓。【相鬩】……あひせめぐ。互にいさかひをなす。【細作】……音サイサク。間諜、しのびの者。【撫掌】……手をたゝく。【大定】……大略平定する。【各自略取】……銘々に切り取る。【郎君】……若樣。【釁】……音キン。ひま、隙間。【先公】……謙信を指す。【善光寺】……信濃に在り。【肩輿】……轎、かご。【面】……まのあたり。【勗之】……之をつとむ、勸めはげます。【保】……もちこたへる。【鮫尾】……越中に在り。【飯山】……信濃に在り。【啗】……くらはす、餌にかふ。【賂】……まひなふ、まひなひを贈る。【景虎君之舅也】……景虎は勝賴の後妻の兄なり。故に云ふ。

【講義】直江兼續、本莊繁長などの諸の家老達が、相共に相談して曰ふには、三郎景虎殿は、上杉氏の血筋では御座らぬ。上杉氏の血筋といふは、景勝殿で、其上に、謙信公の親しき甥であるから、景勝殿を立てるが宜しい。三郎景虎殿を立てるときは、北條氏が、それにつけ込んで、北陸道を幷せ呑んで仕舞つて、吾々共は、皆、北條氏の家來となるに至るで御座らう。誠につまらぬ事で御座ると曰ふた。こゝに於て、諸の家老達は、上杉義春を派遣して、謙信の命令であると詐り、急に景勝を上田から迎へて、來つて本丸に入らしめ、親密にして信用して居る者共を手分けして諸の門を守らしめた。景虎は、外廓に居つたが、日夜互に爭ひ合つて、弓や鐵砲を雙方から打ち出し、勝負いつ果つべしとも思はれなかつた。織田氏の間諜の越後に入り込んで居つた者が、走り歸つて、此事を信長に告げた。すると、信長は大に喜んで、手をうつて曰ふには、天下は大概平定したと曰ひ、そこで、佐久間信盛をして加賀に入り、前田利家をして能登に入り、佐々成政をして、越中に入り、銘々に其土地を切り取らしめた。けれども、景勝と景虎とは、戰爭が結ばれ合つて解けなかつたので、それ故に、之を拒ぐことが出來なかつた。その內に、景虎は、とう〳〵敗戰して、逃げ走つて北川に行き、上杉憲政の處にたよつた。戶定の城主の北莊丹後は、景勝と景虎との事變を聞き込んで、馳せ付けて來て、景勝に說いて曰ふには、二人の若樣は、各々四州を領地とすることにして、相共に信長を拒ぐやうになさるが宜しう御座ります。左樣で御座らぬならば、彼れ信長は、わが隙間につけ込んで來り侵すで御座りましやう。かくて、先殿樣が百戰して御取りなされたところの土地をば、一朝にして之を敵に渡すことにもなりまするならば、どうして惜まない譯に參りましやうぞと曰つた。けれども、景勝は聞き入れなかつた。そこで、北莊は怒つて、去つて景虎を助け、たび〳〵景勝の軍勢を破り、因つて善光寺に陣取つた。景勝の母は

上田に居つたが、轎(カゴ)に乘つて、來つて城に入り、諸の將士たちを召し寄せて、まのあたり、面會して、之をすゝめはげまし、謙信の遺しておいたところの仕事を持ちこたへて失はぬやうにせよと曰つたので、將士たちは、其言に感じて奮激し、力を盡して堅く守つた。天正七年の正月に、景勝は、夜、軍勢をひそめて、景虎の軍營のうしろを不意擊して、大に之を破り、北莊は身を脫して出で走つたが、景勝の大將なる荻田主馬が、それを見知つて居つたので、追つかけて之を刺し殺した。こゝに於て、諸城は、多く景虎にそむいて景勝に歸服した。景虎は逃げ走つて、鮫尾に立て籠つた。北條氏政は、此事を聞き、萬餘人の兵士を繰り出して、景虎を援け、又、援兵を武田氏に請ひ、勝頼は、軍勢を飯山に繰り出し、景勝は、之と戰つて勝利を得なかつた。齋藤朝信は、景勝に說き勸めて、東上野を以て勝頼にくらはして、餌にかひ、その上に、それよりも先に金萬兩を贈り、又、厚く勝頼の二人の氣に入りの者(卽ち長坂、跡部)に賄賂を贈つた。すると、二人の氣に入りの者は、かはるゞ勝頼に說き勸めて曰ふには、景虎はあなたの舅で御座ります。けれども、今若し景虎を援けて勝利を得ましたならば、北條氏は、東海道と北陸道とを連ねて接續することに相成り、其餘波は、あなたの領分に及んで來ることに相成りましやう。これは、東上野と金一萬兩とを得るのと、どちらが利益で御座りましやうかと曰つたので、勝頼は、そこで、景勝と和睦し、兵を一處にして景虎を攻めた。かゝて景虎と憲政とは、皆自殺して仕舞ひ、相模の北條氏の軍勢は、引き返した。氏政は、大に怒つて、勝頼と絕交し、織田氏、德川氏と約束して、勝頼を兩方から夾み攻めることにした。

七月。勝頼以其妹妻景勝。撤貝津之戍。移於沼津。數出兵上野及駿河。時高坂昌宣既死。莫復諫者。而一嬖益橫。德川氏世子信康居岡崎。其母關口氏有罪廢居。與甲斐醫人減慶通。使減慶來送欵。約爲內應。勝頼許之。事覺。母子皆被殺。九月。勝頼次沼津。氏政以兵四萬軍三島。十月。德川氏踰險入駿河。縱火由井。勝頼使別將當氏政。而西。一嬖故遲其行。至則去矣。八年。六月。德川氏攻高天神。十月。城且陷。城將岡部與行請援勝頼。裨將橫田尹松使言曰。城深在敵地。君不宜來。臣等分當守城死。卽得免走歸亦不難也。將士皆贊其言。勝頼曰。坐不援無以藉口。乃出徇上野。攻膳城。肉薄拔之。九年。二月。與氏政相持于伊豆。氏政將松田憲秀送欵。勝頼。勝頼欲戰。一嬖止之。三月。高天神陷。與行被獲。尹松力戰脫歸。勝頼欲賞之。曰。脫歸被賞。在君爲僭。在臣爲冒。固辭不受。

【字解】【撤貝津之戍移於沼津】……撤は音テツ、除き去る也。貝津は信濃に在り。戍は音ジュ、戍兵、番兵、守備兵。沼津は駿河に在り。嚮に信玄、戍兵を貝津に置き、以て上杉氏に備へたりしが、今や兄弟の國となりたるを以て、沼津に移して、以て北條氏に備ふ。【橫】……ほしいまゝなり。【故】……ことさらに、わざと。【遲其行】……遲く行く。【去矣】……德川氏のすでに去りたるを云ふ。【裨將】……音ヒシャウ。副將。【卽】……もし。【贊其言】……橫田の言を贊成する。【藉口】……言せる。【僭】……音セン。濫なり、不相應なり。【冒】……音バウ。貪なり、利を貪るなり。

【講義】七月に、勝頼は、その妹を以て、景勝に妻はせ、貝津の城の守備兵を除き去り、それを沼津に移しおき、たびたび軍勢を上野及び駿河に繰り出した。この時に、高坂昌宣は、もはや死んで仕舞つて居つたので、もはや勝頼を諫言する者は無く、そして、二人の氣に入りの者卽ち長坂、跡部は、いよ〳〵ます〳〵我が儘勝手を働いた。德川氏の跡嗣なる信康は、岡崎に居り、其生母なる關口氏は、ある罪を以て、本妻たる位地を廢せられて、岡崎に屛居して居つたが、甲斐の醫者なる減慶といふ者と密通し、減慶をして甲斐の武田氏の方に來つて內通せしめ、裏切りすることを約束した。勝頼は之を承諾した。然るに、其事が露顯して母子ともに殺されて仕舞つた。九月に、勝頼は、出でゝ沼津に止り宿つた。氏政は、四萬人の軍勢を引き連れて、三島に陣取つた。十月に、德川氏は、嶮阻を越えて駿河に討つて入り、由井に火を放つた。勝頼は、別の大將をして氏政に當らしめて置いて、そして自分は德川氏に當らんとして西の方に向つて進んだ。然るに、二人の氣に入りの者が、わざと、其進行を遲〳〵させたので、到著して見ると、德川氏は高天神を攻めた。十二月、高天神の城は、まさに落城しやうとしたので、城の主將岡部丹波守與行は、援兵を送られんことを勝頼に請うた。副將の橫田甚五郎尹松は、その使者をして勝頼に言はしめて曰ふには、高天神の城は、深く敵地に入り込んで居りまするから、あなたは、援けに御出でにならぬが宜しう御座ります。私共は、其職分として、此城を守つて討死いたすべき筈で御座ります。若し萬一死を免るゝことが出來ましたならば、走り歸ることも、六かしいことでは御座りますまいと曰つた。甲斐の諸の將士たちは、いづれも皆、この橫田の言に贊成して、救援することゝ勿れと曰つた。すると、勝頼が曰ふには、じつとして安坐して居つて、救援しなかつたならば、人々に對して申譯すべき口實が無い(高天神に出掛けて救援することが出來ぬとしても、このまゝ、じつとして安坐して居つては、甚だ相濟まぬわけであるとの意)と曰つて、そこで、打つて出で、上野を徇へ下し、膳城を攻め立てゝ、ひし〳〵と押し寄せて、之を攻め落した。九年二月に、勝頼は、氏政と、伊豆に於て、對陣して、にらみ合つて居つた。氏政の大將なる松田憲秀は、勝頼に內通した。そこで、勝頼は、戰はうとしたが、二人の氣に入りの者が之を止めた。三月に、高天神はとう〳〵落城し、與行は生捕られ、尹松は、力を盡して戰つて、身を脫して歸つて來た。勝頼は、尹松の功勞を賞せんとした。すると、尹松が曰ふには、身を脫して國に歸つたといふので、賞與を得ては、あなたの方から言へば、與ふまじきを與へる、不相應な

る濫賞で御座りまするし、又、私の方から言へば、貰ふまじきを貰ふ貪冒で御座りますと曰つて、固く辭退して受けなかつた。

勝頼疆土日削。一嬖勸其請和信長。小山田昌辰曰。晩矣。長其侮耳。不聽。返織田氏質子請和。信長答書辭甚倨。穴山信良又說勝頼曰。先公威震四鄰。故所居不設城池。然聞氏康。信長通好謙信。則築岩殿。久能。吾妻三城以備之。謙信不屑從約。以故無事耳。今鄰國無復如謙信者。安可不備。勝頼然之。乃城于韮崎。號曰新府。信良欲娶勝頼女爲婦。武田信豐賂一嬖。乃適信豐焉。信良啣之。終通欵織田氏。諸公族諸將亦多送欵者。木曾義昌爲勝頼妹壻。苦其誅求。陰降信長。請導其兵。有來告之者。二嬖斥爲虛言。已而事覺。十年。正月。勝頼欲討義昌。阿部忠高曰。其地險狹。不可輒往。臣請先往。說紓其計。而君兵稍從其後。可也。二嬖沮之。遂命信豐。將五千人。冒雪赴討。遇義昌鳥居嶺。大敗歸。

【疆土】……音キヤウド。領分。【晩矣】……おそし。最早時期が後れたとの意。【長其侮】……信長の輕蔑の念を增す。【返】……一に還に作る。【質子】　音チシ。人質。【倨】……おごる、横柄なり。【先公】……信玄を指す。【岩殿】……甲斐に在り。【久能】……駿河に在り。【吾妻】……上野に在り。【不屑從約】……屑は潔しとする也。兵を合すを從と云ふ。謙信は、信長、氏康と兵を合し好を結ぶことを潔しとせざりし也。【韮崎】……甲斐に在り。【婦】……よめ、子の妻。【賂】……まひなふ。【適】……ゆく、婦人の出で嫁するを適と云ふ。【啣】……ふくむ、怨む也。【妹壻】……音マイセイ。いもうとむこ、妹の夫。【誅求】……音チウキウ。誅は責むる也。軍役用金をきびしく責めはたる。左傳の襄公三十一年の條に、誅求無時とあり。【斥】……しりぞく、黜くる也。【輒】……たやすく。【紓】……緩なり、ゆるくす。【鳥居嶺】……信濃に在り。

【講義】勝頼の領地は、日に〳〵削られ狹められて、だん〳〵に弱くなつた。二人の氣に入りの者即ち長坂、跡部は、勝頼に、和睦することを信長に請ふやうになされゝ勸めた。すると、小山田昌辰が曰ふには、和睦を信長に請ふには、もはや時期が後れました。今和睦を請ふときは、たゞ、信長の輕侮の念を增すばかりで御座りますと曰つた。けれども、勝頼は、此言を聞き入れずして、織田氏の人質を返して、和睦することを請うた。すると、信長の返答の手紙は、その文句が大層威張つた横柄なものであつた。穴山信良は、又、勝頼に說き勸めて曰ふには、先殿樣信玄公の威勢は四方の隣國を震動して居りましたので、それ故に、其の居らゝ所に、別に、城池を設けられなかつたので御座ります。けれども、氏康、信長が謙信に好みを通じたと云ふことを聞かれたれば、岩殿、久能、吾妻の三つの城を築いて、以て此等の敵に備へられた。しかし、謙信は、彼等と從約を結んで、兵を合はせて、先殿樣を攻むることを、いさぎよしと致して居らなかつた故に、その方面には別に格別の事が無かつたので御座ります。然るに、今や、隣國には、もはや、もとの謙信の如き心の潔白なる者は居りませぬこと故、何時、合從して攻め寄せて來ることが無いとも限りませぬから、どうして備へずには居られませうぞと曰つた。勝頼は、此言を成程尤もと思うて、そこで、韮崎に城を築き、名づけて新府と云つた。信良は、勝頼の娘を娶つて自分の子の妻としやうと思うたが、武田信豐が、二人の氣に入りの者に賄賂を贈つて頼み込んだので、そこで、その娘は、信豐のところに嫁に行つた。信良は、此事を怨み、とう〳〵織田氏に內通した。諸の公族（武田氏の一門を云ふ）及び諸將の中にも、亦、織田氏に內通する者が澤山に有つた。木曾義昌は、勝頼の妹壻であつたが、勝頼から軍用金などの取り立てをきびしく責めはたらるゝを苦しみ、ひそかに、信長に降參し、信長の軍勢を手引きして國內に入れやうと請うた。すると、來つて此事を勝頼に告げ知らせる者があつたけれども、二人の氣に入りの者は、取り上げずして、虛言（ソラゴト）であるとした。とかくする中に、其事が發覺した。天正十年の正月に、勝頼は、義昌を討たうとした。すると、阿部忠高が曰ふには、其土地は嶮岨にして狹く、容易には行くことが出來ませぬから、私、願はくは、先づ出掛けて參つて、義昌に說諭して、其企を緩くして、其事が速かに行はれぬ樣にいたしましやう。そしてあなたの軍勢はぼつ〳〵とだん〳〵に、其あとから入り込む樣にするときは、宜しう御座りましやうと曰つた。けれども、二人の氣に入りの者が、之を妨げた。そこで、勝頼は、とう〳〵、信豐に言ひ附けて、五千人の兵士を引き連れて、雪を冒して出かけて行つて討たしめた。すると、信豐は、義昌に鳥居嶺に出遇ひ、大に敗戰して歸つて來た。

二月。勝頼將兵二萬。出陣諏訪。遣諸將分守要害。而信長已遣長子信忠。引兵十餘萬。自木曾入。瀧川一益。川尻鎭吉等。爲前部。德川氏。北條氏。各大擧應之。下條信氏棄瀧澤走。小笠原信嶺以松尾降。信忠入至桔梗原。勝頼召諸將于諏訪。聚議不決。城昌茂進而請曰。方今之勢。不可一日猶豫。臣與尹松。得假五千兵。爲先鋒。昌幸。昌辰等。以餘兵繼進。敵不復設

柵如長篠之役。我必克之。勝頼問之二嬖。二嬖曰。少年者所言。不可用也。阿部忠高曰。臣遣間覘敵。敵深入客地。離而不整。可襲也。我夜合兵疾進。挫其前部。以破其膽。二嬖不許。已而信良叛。降德川氏。駿河諸城皆解走。獨田中守將依田信蕃不下。先是。德川氏數攻信蕃。不得志。至是。使人說降之。對曰。吾知守城而已。不知外事。乃使信良以書諭之。三月信蕃出歸甲斐。德川氏招以厚祿。辭曰。吾赴國難。未暇謀家。諏訪軍潰。在者僅三千。勝頼乃走歸新府。信忠合兵圍高遠。城將仁科信盛。與小山田昌辰固守。信忠使辨士入說曰。孤城抗大敵。窶粉可待。苟出降。以爲將增其邑。昌辰曰。吾報先公。正在今日。若何爲者。敢來誘我乎。執使者。截其耳鼻。放還之。信忠怒。以信嶺爲導。疾攻。昌辰力戰。數出狙擊信忠。不克城遂陷。與信盛及渡邊某。皆死之。

字解【諏訪】……信濃に在り。【前部】……先手。前備への部隊。【瀧川】……信濃に在り。【松尾】……飛驒に在り。【桔梗原】……信濃に在り。【間】……間諜、しのびの者。【覘】……窺なり、うかゞふ。【客地】……他國。【離而不整】……陣立が離れ〳〵に成りて、整頓して居らぬ。【謀家】……一家の利益を謀る。【高遠】……信濃に在り。【窶粉】……音サイフン。粉碎する、粉微塵になる。【先公】……信玄を指す。【若】……なんぞ。【何爲者】……なんする者ぞ、なんすれの者ぞ、何者なるぞ。【截】……きる、切り落す。【導】……案内者。【狙擊】……音ソゲキ。ねらひうつ。【信盛】……時に十五歲なりしと云ふ。【渡邊某】……金太夫照。

譯文 二月に、勝頼は、兵士二萬人を引き連れて、出でゝ諏訪に陣取り、諸將を派遣して、要害の地を手分けして守らせた。しかるに、信長は、すでに長男なる信忠を派遣し、兵士十餘萬人を引き連れて、木曾より打つて入り、瀧川一益、川尻鎭吉などが、先備への部隊となり、德川氏、北條氏が、各々大軍を以て之に加勢した。下條信氏は、瀧澤を棄てゝ逃げ走り、小笠原信嶺は、松尾を以て降參し、信忠は、入つて桔梗原に到著した。勝頼は、諸將を諏訪に呼び寄せ、聚り會して相談したけれども、なか〳〵決定しなかつた。城昌茂が、進み出でゝ請うて曰ふには、只今の形勢は、一日といへどもぐづ〳〵して暇取ることは出來ませぬ。私は、尹松とともに、五千人の兵士を拜借いたしまして、先陣となり、昌幸、昌辰などが、その餘の兵士を引き連れて、あとから引きつゞいて進むことに致したいと思ひます。さうするときは、敵軍は、復た木柵を設けおくこと長篠の戰のときのやうに致しませぬならば、我が軍が必ず勝利を得るで御座りましやうと曰つた。勝頼は、此事を、二人の氣に入りの者(卽ち長坂、跡部)に問うた。すると、二人の氣に入りの者が曰ふには、血氣にはやる年若い者の申しまする事は、取り用ふることは出來ませぬと曰つた。阿部忠高が、一策を獻じて曰ふには、私、しのびの者を派遣して敵の樣子を窺ひさぐりましたが、敵軍は深く他國に入り、ちり〳〵に離れ〳〵になつて居つて、陣立が整頓して居りませぬから、不意擊することが出來ます。味方は、夜の間に、兵を一處にして、早く進んで、敵の先手を挫いて敵の膽玉を破つてやりましやうと曰つた。けれども、二人の氣に入りの者が、承知しなかつた。とかくする中に、信良は叛いて德川氏に降參した。駿河の諸城は、皆守備を解いて、逃げ走つた。たゞ田中の守將なる依田信蕃のみが、下らなかつた。これより先に、德川氏は、たび〳〵信蕃を攻めたけれども、思ふ樣にならなかつたが、こゝに至つて、德川氏は、使者をして降參することを說き諭さしめた。信蕃が答へて曰ふには、拙者は、主命を奉じて城を守ることを知つて居るばかりで御座る、其他の事をば存じませぬと曰つた。そこで、德川氏は、信良をして手紙を以て之を諭さしめた。三月に、信蕃は、城を出でゝ甲斐に歸つた。德川氏は、大祿を與ふべしといつて依田信蕃を招いた。すると、信蕃は、斷わつて曰ふには、拙者は、國の急難に赴かうとする折からで、自分の家の利益を謀るの暇は御座らぬと曰つた。かくて、諏訪の軍勢は、ちり〳〵になつて崩れ散じ、殘つて居る者は、わづかに三千人であつた。勝頼は、そこで、走つて新府に歸つた。織田信忠は、兵を合はせて高遠城を圍み攻めた。城の守將なる仁科信盛は、小山田昌辰とゝもに、固く守つて下らなかつた。信忠は、辯舌の上手な者をして城に入つて二將に說き諭さしめて曰ふには、孤立して援くる者無き一つの城に立て籠つて大敵に手向ふときは、粉微塵にせらるゝことは問も無い事である。若しも貴殿等が城を出で、降參せられるならば、貴殿等を大將となし、領地を增し與へるで御座らうと曰つた。昌辰が曰ふには、吾が、先殿樣信玄公の恩德に報ゆるは、正に今日のごとき危急存亡の時に在るのである。汝は、何者なれば敢て來つて我を誘ふのであるか。不屈至極の奴であると曰つて、使者をつかまへて、その耳と鼻とを切り落し、之を放ち還した。すると、信忠は、怒つて、信嶺を以て案内者となし、手きびし〳〵攻め立てた。昌辰は、信盛及び渡邊某とゝもに、いづれも皆、そこで討死した。

於是敵兵四面來薄。而新府城壁未全。勝頼欲徙避之。嫡子信勝慷慨曰。事已至此。何之而免乎。當焚旗與無楯。徐自裁而已。勝頼未答。小山田義國欲誘執勝頼。以市織田氏也。說曰。臣邑岩殿險可保。眞田昌幸曰。弗

若臣邑吾妻險有積粟。請以死奉君。勝頼乃令昌幸先歸。二嬖曰。昌幸新。義國故。去故就新。奈何。勝頼遂徙岩殿。令義國先歸待己。於是。焚殺諸叛臣質三百人。召死節者質十人。頒與金各百兩。散遣之。收其重器。以殘兵五百。赴岩殿。顧望二府。君臣相顧泣下。至柏尾。待義國來迎。七日不至。走入駒飼民家。即夜。義國使人襲取其質。乃絶關拒勝頼。不知所出。乃走入天目山。兵僅四十人。土屋昌恆。秋山光次牽其馬。阿部忠高。溫井常陸。擔槍從之。小宮山友信單騎來從。友信初數諫勝頼。請除二嬖。又與小山田將監者。爭事並訴。將監厚結二嬖。勝頼遂廢錮友信。友信於是赴難。追及於田野。就昌恆言曰。君嘗擯我。而我赴君難。是傷君之明也。然不赴缺我義。與缺我義。寧傷君明耳。因問。調閑何在。曰。昨逃矣。問勝資。曰。亦逃。問將監。曰。逃已十日矣。友信曰。咲。吾知有今日久矣。勝頼俛首而已。已而山僧與村民謀。導敵索勝頼。勝頼乃使其配北條氏奔相模。對曰。妾何顏見阿兄乎。又使信勝間道奔陸奥。信勝曰。大人宜奔耳。兒辱冢嗣。義當死于此。勝頼曰。然則吾與汝共死。顧汝未行。擐甲禮。當行禮而死。乃請秋山光次爲賓。被信勝以無楯。比禮畢。敵兵奄至。衆飢不能起。勝頼以白布約髮。拔刀親戰。信勝以槍。昌恆以弓翼之。卻敵三次。山縣氏卒辻某聚叛人。自後山瞰射。我兵皆斃。昌恆矢盡。且拔刀。敵叢槍擬之。勝頼走。救昌恆。爲敵刺喉及腋。死。年三十七。信勝亦死。年十六。昌恆。友信。光次等皆死之。武田氏滅。

【字解】【薄】……せまる。城さはまで攻め寄するを云ふ。【慷慨】……音カウガイ。激昂の意。いきどほりなげく貌。後漢書の齊武王縝傳に、性剛毅慷慨ト有リ。【焚旗與無楯】……宗家傳來の旗と、無楯（タテナシ）の甲とを焚き棄てゝ人手にわたさぬやうにする也。【徐】……おもむろに、ゆつくりと、しづかに。【自裁】……音ジサイ。自殺する。【市】……うる、うりつける。相要するに利を以てすること市道の如きを云ふなり。勝頼を執ちへて織田氏に引き渡して恩賞を得ゝとする也。【邑】……領地。【積粟】……蓄積したる澤山の兵糧。【新】……新に附き從へる家來。昌幸の父幸隆始めて信玄に事へたり。故に新と云ふ。【故】……譜代の臣下。【徙岩殿】……徙は一に從に作る。【質】……音チ。人質。【頒與】……音ハンヨ。分ち與へる。【重器】……大切なる寶物。【顧望】……ふりかへつて望み見る。【二府】……舊府と新府と。【泣】……なみだ。【柏尾】甲斐に在り。【駒飼】……甲斐に在り。【民家】……百姓家。【絶關】……關所を塞ぐ。【不知所出】……どうして善いか分らぬ、途方にくれる。【天目山】……甲斐に在り。【廢錮】……音ハイコ。出仕を禁じて押し込める。【田野】……甲斐に在り。【君嘗擯我云々】……擯は斥くる也。傷君之明也とは、君の御目がねの誤りしことを示すなりとの意。君の明を以て嘗て我を擯斥して以て不忠と爲されたり。然るに、我今君の難に赴くときは、不忠に非ざれども、是れ君の鑑識の誤れることを示す也となり。【咲】……音アイ。あゝ。歎き恨みて聲を發する也。【俛首而已】……言も無くして愧ぢ入りて首を垂れてうつむく。【配】……配耦。妻を云ふ。【配北條氏】……勝頼の後妻は、北條氏政の妹なり。勝頼、秋山紀伊守を遣はし、妻北條氏を諭し、小田原に逃げしめんとす。北條氏、即ち書を作り、髪を斷ち、歌を賦して曰く、「黑髮の亂れたる世ぞはてしなき、思ひに消ゆる露の玉の緒」と書し、使者を還し、竟に自盡せりと云ふ。【間兄】……北條氏政を云ふ。【間道】……うら道。【陸奥】……信長譜には、武州に作る。【冢嗣】……音チャウシ。冢は大なり。總領、跡取。【顧】……おもふに。【擐甲禮】……鎧著の儀式。擐は音クワン。【賓】……烏帽子親。【奄至】……一杯になつて至る。奄は、たちまちと訓ず。【翼】……たすく。付き添うて輔ける。【三次】……三度。【辻某】……彌兵衛。【瞰射】……俯視を瞰と云ふ。見おろして弓を射る也。【叢】……あつむ。【擬】……あてがふ、將に衝かんとする也。【腋】……音エキ。脇腹。

【講義】こゝに於て、敵の軍勢は、四方から來つて新府の城に迫つた。然るに、新府の城は、普請が未だ全く出來上らずして、城壁等も未だ十分ではなかつた。そこで、勝頼は、他所に徒つて敵を避けやうと思うた。すると、嬶子の信勝が、いきどほりなげき奮激して曰ふには、事が已に此樣な情態に立ち至つたからには、何處に行つたとても免れることが出來ましやうぞ。先祖傳來の軍旗と楯無しの鎧とを燒き棄てゝ敵の手

に渡らぬやうにして、ゆつくりと自殺すべき筈で御座りますと曰つた。勝頼は未だ何とも返事しなかつた。小山田義國は、勝頼を欺き生捕りて織田氏に賣り付けて重き恩賞を得やうと思うて居つたので、そこで、勝頼に說き勸めて曰ふには、私の領地なる岩殿は、險阻にして要害善く、立て籠つて居ることが出來ましやうと曰つた。すると、眞田昌幸が曰ふには、それよりも、私の領地なる吾妻が、險阻にして要害善く、又、積みたくはへたる兵糧のあるのが、すぐれて居ります。私は、どうぞ、死を以てわが君をこゝに守り奉りたいと思ひますと曰つた。勝頼は、そこで昌幸をして先きに其領地に歸つて準備させることにした。すると、二人の氣に入りの者（卽ち長坂調閑・跡部勝資）が曰ふには、昌幸は新に附き從つた臣下で、義國は譜代の家來で御座ります。然るに譜代の家來の方をすて、、新に附き從つた臣下の方に行かうとなされるは、どうしたもので御座りますかと曰つた。勝頼は、とう〳〵岩殿に徒ることにし、義國をして先づ岩殿に歸つて準備をして自分を待つて居らしめることにし、こゝに於て、諸の叛き去つたところの臣下の人質三百人を燒き殺して仕舞ひ、節義の爲めに討死した臣下の人質十人を召し寄せて、めい〳〵に、黃金白兩づゝを分ち與へ、之をして散じ去らしめ、武田氏の重要なる寶器を取りまとめ、殘つて居る兵士五百人を引き連れて、岩殿に行くことにした。ふりかへつて新府と舊府とを望み見て、勝頼等君臣相互に見合つて涙を流した。かくて、勝頼等は柏尾に到著して、義國が迎へに來るのを待つて居つたが、七日の閒待つたけれども、迎へに來なかつたので、そこで止むを得ず、勝頼等は逃げ走つて、駒飼と云ふ所の百姓家に入つた。其夜に、義國は、人をして、不意擊して自分が兼ねて主家に入れおきし人質を取り去らしめ、そこで、關所を塞いで、勝頼を拒ぎ止めた。勝頼は、こゝに至つて、如何ともすることが出來ずして、そこで、天目山に逃げ込んだ。その時、兵士は僅に四十人であつて、土屋惣藏昌恒、秋山紀伊光次は、勝頼の馬を引き、阿部加賀忠高、溫井常陸氏熙は、鑓をかついで勝頼に隨從した。又、小宮山內膳友信が、たゞ一騎にて來り從つた。友信は、最初に、たび〳〵勝頼を諫めて、二人の氣に入りの者を除き去らんことを請ひ、又、小山田將監と云ふ者と、ある事を爭論して、雙方から訴（出でたが、將監は、厚く二人の氣に入りの者に結托して居つたので、勝頼は、とう〳〵友信の出仕をとゞめて押し込めて置いたのである。友信は、こゝに於て、主君勝頼の難に赴かんとして、其あとを追うて田野と云ふ所で追ひ付き、昌恒に就いて、勝頼に申し上げて曰ふには、わが君は、かつて、私を斥けられましたのに、然るに私が今わが君の難に赴くときは、これ、我が君の御眼鏡の明かならぬことを、世の中に吹聽するやうな者で御座ります。けれども、今若し私がこの度の難に赴きませぬときは、私の臣下たる節義を缺くにあたります。されば、私は臣下たる節義を缺いて不義の人とならんよりは、むしろ、わが君の明を傷つけても構はぬと思うて罷り出でたので御座ります と曰つた。因つて、昌恒に問うて曰ふには、長坂調閑は何處に居りますかと曰つた。昌恒が答へて曰ふには、昨日逃げ去りましたと曰つた。跡部勝資は何處に居りますと答へた。すると、友信が曰ふには、あゝ、私は今日のやうな事があらうとはまさかと問ふと、將監は逃げ去つてからもはや十日に成りますと答へた。將監は何處に居りますかと曰つた。すると、信勝が曰ふには、父上こそ御逃げなさるが宜しう御座ります。私は、久しい以前から承知して居りましたと曰つた。勝頼は、愧ぢ入つて、首を垂れて、うつむいて居つたのみである。とかくする中に、天目山の僧徒は、村の人民と相談して、敵を案內して、勝頼をさがし求めた。勝頼は、そこで、其妻なる北條氏をして、相模に逃げ走つて其兄氏政に身を寄せしめやうとした。すると、其妻北條氏は、答へて曰ふには、私は、今に至つて、何の面目があつて兄樣に會はれましやうぞと曰つた。勝頼は、又、信勝をして裏道より陸奧に逃げ奔らしめやうとした。すると、信勝が曰ふには、私は、武田家の相續人たる位地を辱うして居りますることなれば、義として此處に討死いたすべき筈で御座ります と曰つた。勝頼が曰ふには、左樣ならば、吾と汝と共に死ぬることに致さう。思ひ見れば、汝は、未だ鎧の著初めの儀式を行はないから、此禮を行うて後にいさぎよく死すべきであると曰ひ、そこで、秋山光次を請うて烏帽子親となし、信勝に著させるに、源氏重代の楯無の甲を以てした。其禮の畢つたところに、敵兵が四方から一時に攻め寄せたけれども、皆々は飢ゑつかれて起ちあがることが出來なかつた。勝頼は、白き布を以て鉢卷して頭髮をお

さへ、刀を拔いて自身に奮戰し、信勝は槍を以て、昌恒は弓を以て之に附き添ひ輔けて、奮戰し、三度、敵兵を退却させた。山縣氏の足輕なる辻某が、叛きたる人々を聚め、うしろの山の上から、見おろして弓を射たので、我が武田氏の兵は皆斃れた。昌恒は矢がなくなつて仕舞ひ、まさに刀を拔かうとすると、敵兵が槍ぶすまを作つて、之を刺さうとしたので、勝頼は走り來つて、昌恒を救はんとし、敵兵に喉及び脇腹を刺されて討死した。その時に、年は三十七歲であつた。信勝も亦討死した。その年は十六歲の少年であつた。昌恒、友信、光次などは、いづれも皆、そこで討死した。武田氏は、こゝに於て、滅びて仕舞つた。

織田氏入甲斐。懸令曰。氏族將士出降者復邑。勝頼祖叔父信就。信光。叔父信綱。信龍。弟信貞。從弟信豐。及二嬖。義國等。相率出降。皆爲所誅。獨穴山信良。得領甲斐一郡。上野諸將。非武田氏世臣者。盡隸於瀧川一益。信濃諸將。隸於森長可。與柴田勝家等。相爲掎角。以圖上杉氏。

【懸令】……布令を出す也、處々に立札などをなす故に懸と云ふ也。【祖叔父】……大叔父。【世臣】……譜代の臣下。【隸】……音レイ。附き從ふ。【掎角】……音キカク。前後より夾み擊つの義。其後を繼ぐを掎（アシトル）と云ひ、其前を絓ぐを角（ツノトル）と云ふ。角は角を取る。

織田氏は、甲斐に入り、布令を出して曰ふには、武田氏の一族又は將士にして、出でゝ降參する者は、もとの領地をかへし與へるであらうと曰つた。そこで、勝頼の大叔父信就、信光（二人は信虎の弟）叔父信綱、信龍（二人は信玄の弟）、弟信貞、從弟（イトコ）信豐、及び二人の氣に入りの者卽ち長坂調閑、跡部勝資、義國などが、引き連れ合つて、出でて降參し、皆、誅殺せられた。たゞ、穴山信良のみが、甲斐の一郡を領地とすることを得た。上野の諸の大將にして、武田氏の譜代の家來でない者は、殘らず皆、瀧川一益に附屬し、信濃の諸の大將は、森長可に附屬し、柴田勝家等と協力して前後から押し寄せて、上杉氏を滅ぼさうと企てた。

時北陸訛言。信長兵大敗於甲斐。土寇羣起。景勝遣兵助之。與勝家等。戰于越中。勝家憚越後兵。拒以塹柵。其他諸將侮景勝。出柵外戰。輒見擊破。瀧川一益聞之。遣兵入越後。五月。景勝迎擊一益兵。三國嶺。大破之。自將入越中。拔魚津。轉入信濃。與森長可戰。勝家等復取魚津。

【訛言】……音クワゲン。訛は僞なり。あやまりの風聞。【土寇】……百姓一揆。【堅柵】……音ザンサク。堀と矢來。【魚津】……越中に在り。

その時に、北陸道に於ては、間違つた風聞をして、信長の軍勢は、大に甲斐に於て敗北したと云つたので、百姓一揆が群がり起つた。そこで、景勝は、兵士を派遣して、この一揆を助けて、勝家と、越中に於て戰つた。すると、勝家は、越後の兵士を畏れ憚つて、堀を掘り矢來を結んで、之を拒いだけれども、其他の諸の大將は、景勝を輕んじ侮つて、矢來の外に出かけて戰つたので、すぐに擊ち破られた。瀧川一益は、此事を聞き、兵士を派遣して、越後に打ち入り、景勝のうしろを襲はうとした。五月に、景勝は一益の軍勢を三國峠に迎へ擊つて、大に之を破り、自身に大將となつて、越中に入り、魚津を攻め落し、又、道を轉じて、信濃に入り、森長可と戰つた。その中に、勝家等は魚津を取りもどした。

五月。穴山信良。與德川氏俱入京師。六月。信長爲其將明智光秀所弑。信良走歸。途遇盜。被殺。一益。長可。勝家。聞變皆西走。而武田氏故地大亂。諏訪頼忠。小笠原貞慶。村上國清。皆擧兵欲復先業。景勝自將兵七千助之。七月。景勝入貝津。北條氏。德川氏。各以數萬人來爭。眞田昌幸。高坂源吾。初屬景勝。已而通北條氏。曰。臣爲內應。景勝可獲。景勝覺之。執誅源吾。北條氏不知。以昌幸爲前導。濟筑摩川。以待源吾報。景勝送源吾首請戰。北條氏懼。引去。已而德川氏盡取甲斐。信濃。景勝定河中四郡而歸。

【故地】……もとの領地。【復先業】……父祖のもとの領地を取りかへすこと。【貝津】……信濃に在り。【覺】……さとる、感づく。

五月に、穴山信長は、德川氏とともに、京都に入つた。六月に、織田信長は、その部下の大將明智光秀の爲めに弑害せられたので、信長は、大に驚いて、走つて歸國しやうとしたが、途中にて、盜賊に遇うて殺された。一益、長可、勝家は、信長の殺されたと云ふ事變を聞いて、いづれも皆、西に向つて走つた。そして、武田氏のもとの領地は、大に騷ぎ亂れて、諏訪頼忠、小笠原貞慶、村上國清などは、いづれも皆、兵を擧げて、祖先のもとの領地を取り返さうとした。景勝は、自身に、軍勢を引き連れて、之を助けた。七月に、景勝は、貝津に入つた。北條氏、德川氏は、各々、數萬人の軍勢を引き連れて、來つて此地を爭うた。眞田昌幸、高坂源吾は、はじめ、景勝に附き從つて居つたが、とかくする中に、北條氏に內通して曰ふには、私は內に在つて裏切りいたしましやう。さうするときは、景勝を生捕ることが出來ましやうと曰つた。景勝は、此事を感づいて、源吾をとらへて誅殺した。北條氏は此事ありしを知らずして、昌幸を以て、案內者とし、筑摩川をわたつて、源吾からの報知を待つて居つた。すると、源吾からの報知は來らずして、景勝が、源吾の首級を送つて、戰爭せんことを申込んだ。すると、北條氏は、懼れて、引きかへして去つた。とかくする中に、德川氏は、殘らず甲斐、信濃を取つた。景勝は、河中島の四郡を平定して國に歸つた。

景勝幼有武幹。心誓報謙信恩。以償政景罪。謙信嘗欲誅深澤九鬼者。景勝時年十四。手斬二人。謙信賞賜政景舊邑。數從軍有功。謙信卒而三年。克景虎。將士盡伏。獨柴田因幡者。據新發田不下。景勝常有所內顧。以故不能專營外事。織田氏將筑前守羽柴秀吉。誅明智光秀。略定京畿。與柴田勝家戰。勝而殺之。取加賀。能登。十二年。遣使來通好。曰。吾欲攻佐佐成政。以取越中。願子勿救。景勝曰。吾素與成政仇。而越中本吾地。吾欲先取之耳。乃自將兵入越中。十月。攻宮崎城。一鼓拔之。謂使者曰。越後男子用武如此。返語筑前守。吾於越中。欲取卽取。而不取者。以讓子也。

【武幹】……武勇の器量。【謙信恩】……謙信に收養せられし恩。【政景罪】……政景は景勝の實父にして、さきに叛を謀りたるを以て誅せられる。【柴田因幡】……柴田は當に新發田に作るべし。卽ち新發田因幡治長にして、小田原の役に謙信を諫めし者なり。【新發田】……越後に在り。【內顧】……內輪に心にかゝる事のあること。【營外事】……國外の事を經營する。【羽柴】……一本には豐臣に作る。然れども、按ずるに、豐臣姓を賜はりしは、天正十三年の事なれば、こゝは、羽柴に作るを勝れりとすべきか。【一鼓拔之】……一たび太鼓を鳴らして攻めかけて直に攻め落す。一息に城を落す。

景勝は、幼少の時から、武勇の器量があり、兵に將たる骨柄（コツガラ）を備へて居る人であつたが、謙信が自分を養つてくれた恩義に報い、そして、實父政景が謀叛を企てた大罪を償はんと、心の中に誓つて居つた。謙信は、かつて、深澤某と九鬼某と云ふ者を誅殺しやうと思うて居つたが、景勝は、その時に、年十四歳の少年であつたのに、手づから、深澤、九鬼の二人を斬つたので、謙信は、政景のもとの領地を褒美として賜はつた。その後、たび〳〵戰爭に從つて手柄があつた。謙信が死んで後三年にして、とう〳〵景虎に勝ちおほせたので、諸の將士どもは、殘らず皆、景勝に服從した。たゞ柴田因幡と云ふ者が、新發田に立て籠つて、下らなかつた。そこで、景勝は、常に、國內の事を心配せねばならなかつたので、それ故に、專ら國外の事を經營することが出來なかつたのである。そのうちに、織田氏の大將羽柴秀吉が、明智光秀を

誅殺し、京都畿内をあらまし平定し、柴田勝家と戰ひ、勝利を得て勝家を殺し、加賀、能登を取つた。天正十二年に、秀吉は、使者を遣はして來つて好みを通じて曰ふには、われは、佐々成政を攻めて越中を取らうと致して居るから、何卒、貴殿は、成政を助けてくれるなと曰つた。すると、景勝が曰ふには、吾はもとより、成政とは仇敵の間柄であつて、そして、越中は、もと吾が領地であつたのであるから、吾は、先きに越中を取ちうと思ふのであると曰ひ、そこで、自身に軍勢を引き連れて、越中に討つて入り、十月に、宮崎城を攻めて、一攻めにて之を攻め落し、そして、秀吉の使者に向つて曰ふには、越後の男子が兵を用ふる手なみは此の如き有樣で御座る。返つて筑前守殿に、次の通り言つてくれ。われ、越中の國に於ては、取らうと思ふときは卽座に取つて仕舞ふのであるが、けれども之を取らないで置くのは、此國をば貴殿に讓るからである、どうぞ御遠慮なく御取りなされと言つてくれと曰つた。

十三年。四月。秀吉攻降成政。取越中。五月。秀吉獨率石田三成等三十人。來入越後。自稱使者。至薄氷城。見城將須賀。告以實。欲面見景勝計事。須賀以兵守之。而馳告景勝。請執殺之。景勝不許。曰。彼身司天下權。而踰險入敵國者。蓋恃前約。以吾必不食言也。殺之不義。卽日。與直江兼續等六十餘人。見秀吉。秀吉屏人與語。獨兼續與三成得侍。已而別去。七月。上田城主眞田昌幸。畔德川氏。復屬景勝。送質乞援。景勝遣須田某。本莊某等。將信濃兵六千赴援。兵少利。景勝欲大擧繼之。德川氏兵引去。

【字解】【須賀】……修理亮。【面】……まのあたり。【不食言】……詐を言はぬ。【屏人】……人をしりぞく。人拂ひをする。【畔】……そむく。【質】……音チ。人質。【須田某】……相模守。【本莊某】……越前守。

【講義】天正十三年の四月に、秀吉は、佐々成政を攻めて降參させて、越中を取つた。五月に、秀吉は、たゞ、石田三成等三十人を引き連れて、來つて越後に入り、自身に、秀吉の使者であると申し立てて、薄氷城に至つて、城の守將須賀に面會し、實は吾は秀吉であると、はじめて實をあかし、景勝に面會して萬事を相談したいと云つた。すると、須賀は、番兵を置いて之を守らせ、そして、馳せて景勝に此事を報告し、捕へて之を殺して仕舞ひましやうと請うた。けれども、景勝は之を許さずして曰ふには、彼れ秀吉は、其身、天下の大權を司つて居りながら、其大切なる身を以て、險阻を越えて、敵の領地に入り來つたのは、大體、それは、前日吾が取り結びたる約束を賴みにし、吾が決して詐をいふことが無いからである。然るに、之を殺すは、不義であると曰ひ、直に其日に、直江兼續等六十餘人と、秀吉に遇つた。秀吉は、人拂ひをして、共に語り、たゞ兼續と三成とのみが、其側に侍坐することを得た。とかくする中に、別れて去つた。七月に、上田の城主なる眞田昌幸が、德川氏にそむいて、また、景勝に附き從ふことにし、人質を送り遣はして、援兵を請うた。すると、景勝は、須田某、本莊某等を派遣して、信濃の兵士六千人を引き連れて、出かけて行つて昌幸を援けしめた。けれども、あまりはかゞしい勝利を得なかつた。景勝は、大兵を引き連れて引きつゞいて出掛けやうと思うた。その中に、德川氏の軍勢は、引きあげて去つて仕舞つた。

十二月。秀吉又使使厚贈越後君臣。促其入朝。十四年。五月。景勝入朝。秀吉供帳路次。爲奏敍正四位上。任參議。七月。歸國。是歲。陷新發田。盡定越後。十五年。定佐渡。莊內。十七年。景勝又入京師。進從三位。遷中納言。直江兼續爲四位侍從。藤田。泉澤。安田三臣。皆敍四位。兼續自父實綱。常參謀議。爲仇人刺死。無子。謙信命近士樋口與六爲嗣。是爲兼續。多文武材能。事景勝。尤見寵任。十八年。秀吉東伐北條氏。景勝與前田利家。自東山道進下數十城。北條氏滅。又與利家徇陸奥。出羽。文祿元年。從秀吉伐朝鮮。陣那古耶。二年。景勝將兵入朝鮮。築釜山城而歸。

【字解】【促】……うながす。催促する。【供帳】……供張と同じ。種々の設備をなし、幕などを張るを云ふ。漢書に、供張東都門外とあり。こゝにては、旅館などの手當をするを云ふ。【路次】……道中筋。【藤田】……能登守。【泉澤】……河內守。【安田】……筑前守。【參謀議】……相談にあづかる。【仇人】……怨ある者。【刺死】……さしころす。【文武材能】……兼續、春秋左氏傳の活版を作りしと云ふ。【文祿】……後陽成帝の時の年號。【那古耶】……肥前に在り。

【講義】十二月に、秀吉は、又使者を遣はして、越後の景勝君臣に手厚き贈物をなし、その京都に入朝することを催促した。天正十四年の五月に、景勝は、京都に入朝した。すると、秀吉は、その道中筋に旅館などの手當をなし、大層鄭重なる取扱であり、又、景勝の爲めに、朝廷に奏上して、正四位上に敍せられ、參議に任ぜられることにした。七月に、景勝は、國に歸つた。この歲に、景勝は、新發田を攻め落し、殘らず皆、越後國を平定した。十五年に、景勝は、佐渡及び莊內を平定した。十七年に、景勝は、又、京都に入朝し、從三位に昇進し、中納言に遷された。直江

兼續は、四位の侍從に任ぜられ、藤田、泉澤、安田の三人の家來は、いづれも皆、四位に敍せられた。兼續は、その父の實綱より以來、いつでも謀計評議にあづかつて居つたが、後に、實綱は、怨ある者の爲めに刺し殺されて、跡を嗣ぐべき男子が無かつたので、謙信は、近習の士繩口與六に言ひ附けて、實綱の跡を嗣がせることにしたのが、これが兼續である。兼續は、文學武藝兩道にかけて材能が多く、景勝に事へて、尤も寵愛せられ信任せられて居つた。十八年に、秀吉は、東の方、北條氏を伐つた。その時に、景勝は、前田利家などゝ與に、東山道から進んで數十城を攻め下した。北條氏が滅亡して後、景勝は、又、利家とともに、陸奥、出羽を觸れまはつて降服させた。文祿元年に、景勝は、秀吉に從つて朝鮮を征伐し、那古耶に陣取つた。二年に、景勝は、兵士を引き連れて、朝鮮に打つて入り、釜山城を築いて、歸朝した。

是時。上杉氏所領。歲入可三百萬石。秀吉心畏景勝之能。又度謙信久訓其國。國人皆戴景勝。欲徙其封。嘗從容問之曰。卿國歲入幾何。景勝恐被削。不以實對。曰。七八十萬石耳。秀吉佯驚曰。何少也。因徙之會津。食百二十萬石。賜兼續以米澤地三十萬石。賜越後于堀秀治。景勝大悔之。是歲。慶長二年也。

【字解】【歲入】……一年の收入高。【可】……ばかり。【長惡】……音ヰヲ。おそれにくむ。【訓其國】……國人を訓練して恩威を施せしこと。【米澤】……今の羽前に在り。【慶長】……後陽成帝の時の年號。

【講義】この時に、上杉氏の領して居るところの土地は、一年の收入高が、三百萬石ばかりであつた。秀吉は、景勝が材能あるを長れ惡み、又、先代の謙信が久しく間其國民に訓へ込み、その國民が皆景勝を推し戴いて居つて、其勢力の侮るべからざることを思うて、其領地を取り換へやうと思うて、あるとき、ゆつくりと物靜に、景勝に問うて曰ふには、御前の領地の一年の收入は何程あるかと曰つた。すると、景勝は、餘りに澤山あつて削られんことを恐れたので、わざと、眞實を以て返答せずして曰ふには、七八十萬石で御座りますと曰つた。すると、秀吉は、佯つて驚いたふりをして曰ふには、あまりに少いではないかと曰つて、因つて、景勝を會津に徙して、百二十萬石を食ましめ、又、兼續に賜ふに米澤の土地三十萬石を以てし、越後をば堀秀治に賜はつた。景勝は、大に之を後悔した。この年は、慶長二年であつた。

三年。秀吉有疾。嗣子秀賴猶幼。乃以景勝與德川。前田。毛利。浮田氏。竝稱五大老。與爲盟約。秀吉薨。德川公威權獨熾。四年石田三成與直江兼續謀。勸景勝擧兵。曰。群牧共願推公。爲諸將載書示之。因密定議。七月。與佐竹義宣。皆就國。城香指原。修壘寨。峙糧餉。誘陸奥出羽土兵齊起。又使人招越後遺民。遺民競起應之。堀氏不能制。五年。正月。使藤田信吉賀正於大坂。德川公厚賜之。信吉歸。驟諫景勝。兼續欲殺之。三月。信吉挈家奔歸德川氏。德川氏使伊奈圖書來諭景勝西上。景勝不聽。數德川氏背盟十罪。德川公終決意東伐。令前田。佐竹。伊達。最上氏。四面來擊。伊達氏國會津東境。先衆而至。其將伊達成實。片倉景綱。將兵來侵。景勝遣兵擊卻之。

【字解】【五大老】……德川內大臣家康、前田大納言利家、毛利中納言輝元、浮田中納言秀家、上杉中納言景勝。【熾】……盛んなり。【群牧】……群は衆なり、牧は州長也。こゝにては諸大名を云ふ。【願推公】……あなたを推していたゞきて總大將としやうと願つて居る。【載書】……盟書、ちかひの書附、連判狀。【壘寨】……音ルヰサイ。とりで。【峙糧餉】……峙は、貯ふる也、積む也。糧餉は音リヤウシヤウ。兵糧なり。兵糧を積み貯へる。【土兵】……土地の農兵、百姓一揆。【齊起】……ひとしく起る、一齊に起る。【賀正】……新年の祝賀を申し述べる。【驟】……しば〳〵。【挈家】……家をたづさふ、家族を引き連れる。【數】……數へ立て、責める。【伊達】……左京大夫政宗。【最上】……出羽守義光。

【講義】慶長三年に、秀吉は、病氣になつたが、その跡嗣なる秀賴は、まだ幼少であつたので、そこで、秀吉は、景勝と德川、前田、毛利、浮田氏とを以て、相並んで五大老と稱し、與に、誓を立て、約束を結び、幼君秀賴を輔佐することにした。かくて、秀吉が薨去するに及んで、德川公の威勢權力が、獨り盛んであつて、他の四人は、有れども無きが如きの有樣であつた。四年に、石田三成は、直江兼續と相談して、景勝に、兵を擧げることを勸めた。そして曰ふには、諸の大名たちは、皆、あなたを推し戴いて總大將としたいと思うて居りますと曰つて、諸將の連判狀をつくつて、之を景勝に示し、因つて、ひそかに、相談を決定した。七月に、景勝は、佐竹義宣と與に、皆、其領國に就きて、國政を見ることにし、既に國に歸つてから、景勝は、香指原に城を築き、とりでを修復し、兵糧を積み貯へ、陸奥出羽の百姓一揆を誘うて、一齊に起ちしめ、又、人をして、舊領地越後に遣つて居る人民を呼び寄せしめると、越後に遣つて居る人民は、先を爭ひ起つて之に一味し、新領主なる堀氏は、力を竭して鎭めやうとしても、之を制御することが出來なかつた。五年の正月に、景勝は、藤田信吉をして大坂に行きて新年の祝賀を申し述べ

しめた。すると、徳川公は、信吉に、手厚き賜物を下された。そこで、信吉は、國に歸つて、たび〳〵景勝を諫めた。すると、兼續は、之を殺さうとした。三月に、信吉は、家族を引き連れて、逃げ奔つて、徳川氏に身を寄せた。すると、徳川氏は、伊奈圖書をして來て景勝に諭して、西の方京都に上らしめやうとしたけれども、景勝は承知せずして、反つて、徳川氏が五大老の盟約に背いた罪十個條を數へ上げて責め立てた。そこで、徳川氏は、とう〳〵心を決して東の方景勝を征伐することにし、前田、佐竹、伊達、最上氏をして四方から來つて擊たしめることにした。その中で、伊達氏は、景勝の領地なる會津の東境に領地を持つて居つたので、多〳〵の人々よりも先に、到著した。伊達氏の大將なる伊達上野成實、片倉小十郎景綱が、兵士を引き連れて、來り侵したけれども、景勝は、兵士を派遣して、擊つて之を退却させた。

七月。徳川公統將帥百餘人。至小山。景勝軍長沼。分兵守險以待之。石田三成乃矯秀賴命。與毛利。浮田。島津。小西諸將俱擧兵。至美濃。八月。徳川公使庶長子秀康以萬人守宇都宮。而自引兵西上。直江兼續請悉兵躡之。景勝弗聽。會秀康來請戰。景勝答曰。先人用軍。未嘗乘人危。吾不敢違也。且公年少非我敵。吾待內府返。決戰耳。糧仗如缺乏。當相給焉。乃收歸會津。徳川公之西也。命諸將曰。景勝勁敵也。愼勿與爭鋒。是以四鄰環守。不敢來犯。

【統】……すぶ、統率する。【小山】……下野に在り。【長沼】……又、永沼に作る。今の岩代に在り。【島津】……兵庫頭義弘。【小西】……攝津守行長。【庶長子】……妾腹の長男。【秀康】……結城中納言。【宇都宮】……下野に在り。【躡之】……之をふむ、あとをつけて追ひ擊つ。【先人】……謙信を云ふ。【內府】……徳川家康を云ふ。時に內大臣たり、故にかく云ふ。【返】……一に還に作る。【糧仗】……兵糧兵器。【缺乏】……不足する。【環守】……四方よりぐるりと遠卷に圍む。

講義　七月に、徳川公は、百餘人の大將を統率して、小山に到著した。景勝は、長沼に陣取り、兵を分けて險阻なる所を守つて、徳川氏の軍勢の進擊するを待つて居つた。石田三成は、そこで、秀賴の命令であると僞り稱へて、毛利、浮田、島津、小西の諸の大將とともに、兵を擧げて、美濃に到著した。八月に、徳川公は、妾腹の長子なる結城秀康をして、一萬人を引き連れて、宇都宮を守らせて置き、そして、自分は、三成に當らうと云ふので、兵士を引き連れて、西に上つた。すると、直江兼續は、有りたけの兵士を以て之を追擊せんと請うた。けれども、景勝は承知しなかつた。折しも、秀康が、使者を遣はして戰はんことを申し込んだ。すると、景勝が答へて曰ふには、わが先代謙信が兵を用ふるには、未だ一度も人の危急なる處に附け込んで之を攻擊したことは御座らぬ。われは、敢へて之に背くことをば致さぬので御座る。其上に、貴殿は、まだ年も若くして、わが敵とすべきものでは御座らぬ。吾は、內大臣殿が引き返して來られるのを待つて、勝負を決する一戰を致さうと思ふので御座る。兵糧武器が若し不足であるならば、互に供給することに致さう。御遠慮なく申し越されよと曰ひ、そこで、軍勢を引きまとめて會津に歸つた。徳川公は、西に向つて上らうとするときに、諸大將に言ひ附けて曰ふには、景勝は、手ごはい敵であるから、決して、之と鋒（ホコサキ）を交へて合戰してはならぬぞと言ひ置いた。それ故に、四方の隣國の諸侯は、遠卷にぐるりと取り圍んで、むざと來り犯さうとする者は無つた。

九月。景勝以兵四萬附兼續。令攻最上義光于山形。義光設二十五砦待之。請援於伊達政宗。政宗發兵二萬赴之。兼續拔二十一砦。進攻長谷城。起樓櫓。鑿地道。晝夜攻擊。城將志村高治善拒。景勝又遣中村式部攻上山城。不利。義光。政宗合兵來援。兼續軍中有傳呼曰。上國軍敗矣。已而使者至自會津。傳三成敗聞。命班師。兼續曰。聞變而退。怯也。乃使人入城告故。且日鼓衆齊登。陷其外城。而返。義光。政宗與高治。尾擊之。兼續返戰二十餘次。而至米澤。政宗進攻福島。本莊繁長守城。擊卻之。六年。二月。政宗又來侵。繁長又擊卻之。政宗轉濟逢隈河。攻梁川。城將須田大炊。設四伏而與戰。破之。四月。政宗留兵備須田。而返攻本莊。本莊出拒松川。侮敵不備。政宗乘曉而濟。擊敗之。本莊走入福島。須田聞之。濟逢隈

河。破其兵。遂襲政宗軍後。與本莊夾擊走之。景勝乃自將而出。政宗驚舍其軍。獨與十餘騎。間道走白石。德川公既克石田氏。天下歸之。景勝因秀康謝罪。德川公使人來促其西上。景勝卽治行。將士皆危而止之。景勝曰。吾豈可再負乎。七月。至伏見。謁見。八月。國除。獨食米澤三十萬石。宥兼續罪。賜五萬石。

【字解】【山形】……今の羽前に在り。【砦】……音サイ。とりで。【長谷】……今の羽前に在り。【起樓櫓】……井樓を組み上げる、やぐらを組み上げる。【擊地道】……擊は穿つ也、掘る也。地道は地中の道、拔け道。拔け穴を掘り穿つ。【上山城】……今の羽前に在り。【上國軍敗】……上方の軍勢が敗戰した。美濃關原に於て石田三成、小西行長等の軍の敗れしを云ふ。【班】……かへす。班師とは、軍勢を引き返すことと。【旦日】……明くる日。【陷其外城而返】……返は一に還に作る。【二十餘次】……二十餘度。【福島】……今の岩代に在り。【逢隈河】……今の磐城に在り。【梁川】……今の磐城に在り。【須田大炊】……長義。【返攻本莊】……返は一に還に作る。【白石】……今の岩代に在り。【治行】……旅行の支度をする。【危】……あやぶむ、危險に思ふ。【可再負乎】……去年、德川氏、景勝の西上を促せしも、景勝聞かざりしが故に、斯く云ふ。【伏見】……山城に在り。【國除】……領地を取り上げられること。

【講義】九月に、景勝は、兵士四萬人を兼續に預けて、最上義光を山形に攻めさせた。すると、義光は、二十五所にとりでを設けて、兼續の來り擊つのを待ち、援兵を伊達政宗に請うた。政宗は、二萬人の兵士を繰り出して、出かけて行つた。兼續は、二十一所のとりでを攻め落し、進んで長谷城を攻め、高やぐらを組み立て、拔け穴を掘り穿ちて、夜となく晝となく、手をかへ品をかへて攻擊した。城の守將たる志村伊豆高治が善く拒ぎ戰つて、なかなか落城しなかつた。景勝は、又、中村式部を遣して上山城を攻めさせたが、勝利を得なかつた。義光と政宗とが、兵を合はせて來り援けた。この時に、兼續の軍中に、聲々に傳へ呼ぶものがあつて曰ふには、上方の軍勢は敗北したと曰つた。とかくする中に、會津からの使者が到著して、三成は關原に於て戰つて敗軍したといふ報告を傳へ、且つ、速に軍勢を引き返すことを命令した。すると、兼續が曰ふには、事變を聞いてそのまゝ退却するは、臆病であると曰ひ、そこで、人をして城に入つて其譯を告げしめ、そして、明くる日に、攻め太鼓を鳴らして衆を進め、一齊に城壁に登らしめ、その外廓を攻め落して、引き返した。義光、政宗と高治とは、兼續を追つかけて擊つた。兼續は、引き返して戰ふこと二十餘度にして、米澤に到著した。政宗は、進んで福島を攻めた。本莊繁長が、城を拒ぎ守つて居つて、擊つて政宗を退却させた。政宗は、路をかへて、逢隈河をわたつて、梁川を攻めた。城の守將須田大炊は、四箇所に伏兵を設けて置いて、ともに戰つて、政宗の軍を破つた。四月に、政宗は軍勢を弱めて須田の襲擊に備へて置いて、そして、引き返して本莊を攻めた。本莊は、城を出でゝ松川に拒いだが、敵を輕んじあなどつて、備を設けなかつた。政宗は、明け方の薄あかりに附け込んで、川をわたり、擊つて本莊を破つた。本莊は、逃げ走つて福島に入つた。須田は、此事を聞いて、逢隈河をわたつて、其兵を擊ち破り、とう〳〵政宗の軍勢のうしろを不意擊し、本莊と夾み擊ちにして、政宗の軍勢を敗走させた。景勝は、そこで、自身に太將となつて、打つて出でた。すると、政宗は、驚いて其軍勢を其儘に棄て置いて、たゞ十餘人の騎士とゝもに、裏道から白石に逃げ込んだ。とかくする中に、德川公は、既に石田氏に勝ちおほせて、天下は之に歸服したので、景勝は、秀康にたよつて、其罪を詫びた。德川公は、人をして、來つて、景勝が速に西の方に上つて來ることを催促せしめた。景勝は、卽座に、旅の用意を爲して、出立しやうとした。將士は、いづれも皆、危險に思うて之を押へ止めた。すると、景勝が曰ふには、吾は、去年も其仰に背いたのに、どうして再度其仰に背くことが出來やうぞと曰つた。かくて、景勝は、七月に、伏見に到著して、德川公に謁見した。八月に、その領地を取り上げられて、たゞ、米澤の三十萬石を領することゝなり、兼續の罪を宥されて、五萬石を賜はつた。

慶長十九年。十一月。大坂兵起。德川公率諸將攻之。景勝與佐竹義宣爲先鋒。二十四日。至大坂。景勝將杉原常陸。尙水干衣於鎧表。衆指而異之曰。彼越後宿將也。是其軍禮乎。杉原聞笑曰。吾鎧太敝惡。故尙此耳。景勝陣鷸野。義宣陣今福。間日竝進。破敵柵。景勝命植柵。設塹于大和河南。令隊將鐵某將銃手五百守之。將士竊言曰。此非戰場。不知何用。日午。城兵大出。義宣兵不利。銃手齊發。敵兵乃卻。已而城兵七隊出鷸野。我先鋒須田大炊與戰。敗走。杉原常陸。與安田上總。長尾權四郎進擊。斬其三將。德川公聞鷸野戰急。令堀尾氏。丹羽氏來代景勝。景勝以槍手三百自環爲陣。憑椅不動。使者十餘輩來傳教旨。皆不得入。景勝厲聲曰。吾在戰場。雖有教命。不能退一步。麾兵益進。遂破城兵。城兵入柵。景勝銃手又驅柵內兵入城。不使復出。須田愧敗。與五騎馳入敵中。人得一首級而返。德川

公軍監小栗又壹具狀以聞。退語同僚曰。今日戰既解。猶有宜進擊之機。吾言之。景勝辭以日暮可憾。德川公聞之。叱曰。景勝武事。若曹敢得誹議之。次日。巡視諸營。至上杉氏。親慰勞之。遂賜功狀於杉原。長尾。安田。須田。鐵。島津等。杉原伏謝曰。臣等何力之有焉。先寡君家範猶存。臣等奉以周旋焉耳。退謂人曰。吾從先公。數與武田氏戰。若今日之戰。乃兒戲耳。何足載功狀乎。

字解【尙】……加ふ、上に著ること。【水干衣】……精好の絹を用つて之を作る、其製直垂の如くにして、袖括露紐なく、其色は一定せず。【鎧表】……鎧のうへ。【異】……あやしむ、不審に思ふ。【宿將】……宿は舊なり。故老の大將。【太】……はなはだ。【敝惡】……音ヘイアク。古くなつて見にくきこと。【鷸野】……攝津に在り。【今福】……攝津に在り。【開日】……一日おいて。【柵】……音サク。矢來。【植】……たつ。【塹】……音ザン。堀。【大和河】……攝津に在り。【鐵某】……孫左衞門尉。【銃手】……鐵砲を打つ兵士。【日午】……眞晝、正午の頃。【齊】……ひとしく。【憑椅】……椅子によりかゝる。【教旨】……將軍の下知。將軍の命令。【麾】……さしまねく、指圖する。【得一首級而返】……ありし次第を逐一申し上げる。【同僚】……同役。【憾】……うらむ、殘念に思ふ。【若曹】……なんぢがともがら。若は汝、曹は輩なり。【功狀】……狀は牒なり。感狀。【島津】……玄蕃。【先寡君】……謙信を指す。すでに故人となりし故に先と云ふ。臣、君を稱するに、人に對しては、寡君と云ふ也。寡は音クワ。【家範】……音カハン。家の法度。範は式なり。【周旋】……音シウセン。はせまはる、立ち働く。【先公】……謙信を指す。【兒戲】……子供の遊戲。

講義 慶長十九年の十一月に、大坂の戰爭が始まつたので、德川公は、諸の大將を引き連れて、之を攻められた。景勝は、佐竹義宣とともに、その先陣となり、二十四日に、大坂に到著した。景勝の部下の大將なる杉原常陸は、水干の衣を鎧の上に羽織つて居つたので、人々は、之を指さして不思議に思うて語り合つて曰ふには、彼れ杉原氏は、越後の上杉氏の故老の大將であるが、鎧の上に水干の衣を羽織つて居るのは、これは、その軍の禮式であるのであらうかと曰つた。すると、杉原は聞いて笑つて曰ふには、拙者の鎧は、大層古びやぶれて見苦しいので、それ故に、これを上に羽織つて居るので御座ると曰つた。かくて、景勝は、鷸野に陣取り、義宣は、今福に陣取り、一日おいて、ならび進んで、敵の木柵を破つた。景勝は、部下に命令して、大和川の南に、木柵を植ゑならべ、堀をほり穿つて、一隊の將なる鐵某をして、鐵砲を打つ兵士五百人を引き連れて之を守らしめて置いた。すると、將士どもは、ひそかに語り合つて曰ふには、此處は戰場でも無いのに、此處にこんな用意をして置かれるのは、何の役に立つことであらうぞと曰つた。正午頃に、城兵が大に出でゝ戰つた。義宣の軍勢は勝利を得なかつたが、さきに、景勝が用意して置いた鐵砲を打つ兵が一齊に打ち出したので、敵兵は、そこで、退却した。とかくする中に、城兵の七隊が鷸野に打つて出でた。我が先鋒たる須田大炊が、之と戰つて、敗軍して逃げ走つた。すると、杉原常陸が、安田上總、長尾權四郎とともに、進み擊つて、敵の大將三人を斬つた。德川公は、鷸野の戰爭が危急であるといふことを聞いて、堀尾氏、丹羽氏をして來つて景勝に代つて戰はしめることにした。此時に、景勝は、槍を遣ふ兵士三百人を以て、自分の周圍をぐるりと取り卷いて陣を爲させ、床几に憑りかゝつて少しも動かなかつた。德川公の使者が、十餘人も引きつゞいて來つて、德川公の命令を傳へたけれども、皆、その內に入ることが出來なかつた。景勝は、擊をはげまして曰ふには、拙者は戰場に居ることで御座るから、たとひ將軍の下知があつたとしても、一歩をも退くことは出來ませぬゝ曰ひ、兵士を指圖して、ます〳〵進んで、とう〳〵城兵を擊ち破り、城兵は木柵の內に入つた。すると、景勝の鐵砲を打つ兵士が、又、木柵の內の兵を追つ立てゝ、城に追ひ込み、再び出ることの出來ぬやうにした。須田は、さきに負けたのを恥づかしく思うて、五人の騎士とともに、敵の中に馳せ入つて、銘々に一つの首を討ち取つて引き返して來た。德川公の軍目付なる小栗又壹が、ありし次第を一々言上し、退いて同役の者に向つて曰ふには、今日戰爭は既に濟んだけれども、それでも猶ほ、進み擊つべきの機會があつたので、われは、それを景勝に申したけれども、景勝は、日が暮れたから仕方が無いと云つて、それを斷つたが、殘念に思はれると曰つた。德川公は、この事を聞いて、叱り付けて曰ふには、景勝は武事に精通して居る人で、汝等が、どうして、彼れ此れと云つてそしることが出來やうぞと曰つた。次の日に、德川公は、諸の陣營を見まはり、上杉氏の陣營に至り、自身に之を慰めいたはり、とう〳〵、杉原、長尾、安田、須田、鐵、島津等に感狀を賜はつた。すると、杉原が拜伏して御禮を申上げて曰ふには、私共は、何も格別に骨折りは致しませぬ。たゞ、先殿謙信の家法がまだ殘つて居りますので、私共は之をさゞげ守つて、立ち働きましただけの事で御座りますと曰つた。杉原は、退いて人に向つて曰ふには、私は、先殿に從つて、たび〳〵武田氏と戰爭いたしましたが、それにくらべて見るときは、今日の戰爭の樣なのは、まるで、子供のたはむれ事で御座る。どうして之を感狀に書き載せるだけの價値が御座らうぞと曰つた。

元和元年。五月。再攻大坂。景勝以特命留守京師。陣八幡。凡兩役所用軍監。選練兵事者。傳命諸營。多甲斐舊臣。而眞田昌幸子幸村在城中。戰守最可觀。世以爲出武田氏遺法也。

字解【元和】……後水尾帝の時の年號。【特命】……特別の下知、特別の命令。【兩役】……二度の戰爭。卽ち大坂の冬の陣と夏の陣と。【軍監】……軍目付。【練兵事者】……兵事に熟練して居る者。【戰守】……合戰と守備。【可觀】……見事である。始終法に合ひたるを云ふ。

講義 元和元年の五月に、德川公は、再び大坂を攻めたが、其時に、景勝は、特別の命令を以て、留まつて京都を守り、八幡に陣取つた。凡そ、大坂の冬と夏との兩度の戰役に、使用せしところの軍目付は、軍事に熟練して居る者を選拔して之を用ひ、軍令を諸の陣營に傳達せしめたのであるが、其中には、甲斐の武田氏の舊臣が、多く採用されて居つたゝ、そして、眞田昌幸の子の幸村は、大坂の城中に居つたが、幸村の合戰の方や守備の術は、始終法に協つて、一番見事であつた。世間では、これは全く武田氏の遺して置いた軍法に出でたのであると云つて居る。

九年。三月。景勝病卒。年六十九。子定勝。孫綱勝。相繼襲官秩。綱勝夭。以外甥吉良義英子綱憲爲嗣。削十五萬石。

【字解】【襲】……嗣ぐ。【官秩】……音クワンチツ。官職と俸祿。弼正大弼と三十萬石。【夭】……音エウ。年若くして死するを云ふ。【外甥】……姉妹の子を云ふ。音グワイセイ。【吉良義英】……元祿年中淺野家の舊臣大石良雄等に殺されし者。

【講義】元和九年の三月に、景勝は病氣の爲めに死んだ。その年は六十九歲であつた。子の定勝、孫の綱勝が、相繼いで官位と秩祿とを相續した。綱勝は若死したので、外甥なる吉良義英の子の綱憲を以て跡嗣としたが、十五萬石を削り取られた。

上杉義春。本畠山氏。爲謙信子養。後以爲上條城主。承故上杉定實後。佐景勝。擊景虎。最有功。德川公命復畠山氏。削髮號入庵。老於京師。大坂冬役。召之二條城。問上杉氏行軍法。諸侯伯皆侍焉。義春爲人短小而善辯。陳己嘗從謙信所聞見。音辭如流。公稱善。諸將皆織田。豐臣以來。老兵豪傑。而毋敢出聲者。後病眼盲。使人讀近代史乘聽之。至武田上杉氏事。往往指其謬僞云。

【字解】【老】……隱居する。【行軍法】……陣立の法。【短小】……身の丈低きこと。【音辭如流】……言葉の滯りなきこと水の流るゝが如し。【老兵】……兵事に馴れたる。老は老練の義。【毋敢出聲者】……其說確實にして、敢て聲を出して彼れ此れと云ふ者は一人も無かつた。【史乘】……事を記したる書籍。軍物語、聞書などの類。【謬僞】……音ビウギ。誤りたる事。

【講義】上杉義春は、もと、畠山氏であつたが、謙信に取りあげられて、子として養育せられ、後に上條の城主となされて、もとの上杉定實の後を承け嗣ぎ、景勝を輔佐して、景虎を擊つて、第一番に功勞があつた。後に、德川公が、命令して、もとの畠山氏に復姓せしめ、髮を剃つて坊主姿となり、入庵と號し、京都に退隱した。大坂の冬の戰役の時に、德川公は、之を二條城に呼び寄せ、上杉氏の陣立の法を問うた。その時に、諸の大名どもは、皆、その側に侍坐して、拜聽して居つた。義春は、人となり、身のたけ低く、小男であつたけれども、辯舌が善くして、自分が嘗て謙信に從つて見たり聞いたりした事を述べ、其言葉によどみなきこと、水の流るゝが如くであつた。そこに侍坐して居つた諸の大將どもは、いづれも、皆、織田、豐臣氏以來の兵事に熟練したる、すぐれたる人々であつたけれども、誰も聲を出して彼れ是れと非難しやうとする者は無かつた。その後、眼病に罹つて盲人となつたが、人をして近世の記錄などを讀ませて、之を聽き、武田氏、上杉氏の二氏の事に至ると、往々、其あやまりたる事實を指し示したと云ふことである。

宇佐美定行之孤定興。數潛從軍。欲立功自贖。景勝以其父故不許也。流寓諸國。及關原事作。赴難會津。及徙封。終隱越後。終身。其子勝興仕紀伊。亦於越後事跡。有所綜覈。

【字解】【孤】……みなし子。【定興】……民部と稱す。【以其父故】……定興の父定行、嘗て謙信の命によりて、景勝の實父なる政景と同じく溺死せしこと、前に見ゆ。【流寓】……あちらこちらに假住居する。【作】……おこる。【徙封】……景勝が米澤に徙されたるを云ふ。【綜覈】……音ソウカク。綜は總なり、覈は事を考へて實を得る也。色々の材料を取りまとめて事實を考證すること。

【講義】宇佐美定行の孤兒なる定興は、たびたび、ひそかに戰爭に從ひ、手柄を立てゝ自ら贖ひ再び取り立てゝ家臣として貰はうと思うたけれども、景勝は、定興の父定行が自分の實父を殺した故を以て、之を許さなかつた。そこで、定興は、諸國をさまよひ假住居して居つたが、關原の事件がおこるに及んで、舊主の難に赴くために會津に出掛けて行つた。その後、景勝が其領地を米澤に移さるゝに及んで、定興は、とうとう越後に隱れて、一生を終つた。その子の勝興は、紀伊に仕へたが、この人も亦、越後の上杉氏の事蹟に於て、色々の說を取りまとめて考證したことがあつた。

初武田。上杉二家。竝務耕戰。以名法治國。政貴嚴刻。而上杉氏作事。率仗信義。是其所以獨存至今也。然世言兵法。竝稱二家云。

【字解】【務耕戰】……農耕戰略を務む。平時には耕し事あるときは戰ひ、この二者を奬勵すること。【兵法】……刑名法術。きびしき法令。【嚴刻】……嚴重苛刻。きびしく苛刻なること。【率】……おほむね。【仗】……よる。【信義】……萬事に僞なく、義俠心あること。謙信が、村上義淸を助け、上杉憲政を助け、又、朝廷幕府に對して禮を失はざりし等の事を指す。

【講義】はじめ、武田氏、上杉氏の二家は、兩氏ともに、平時には耕作し事變あるときには戰鬪すると云ふ農耕戰鬪主義を務め、きびしき政令を以て國を統治し、政治の仕方は、嚴重苛刻なることを貴んだ。しかし、上杉氏が、すべての事を行ふには、大抵信義によつて行ひ、不信不義の事を爲さぬやうにした。これが、上杉氏だけが獨り存在して今日までも殘つて居る譯である。然れども、世間にて兵法の事を言ふときは、必ず二家をならべ稱して、武田、上杉と云つて、もとより甲乙優劣無きものと致して居ると云ふことである。

外史氏曰。世傳二二家兵書一。有出二後人假託一者。不レ可二盡信一。特言二兵於我邦一。期レ乎二二公一者。不レ可レ不レ知二其由一也。

【字解】【假託】……音カタク。名前を借りてかこつける。【二公】……武田信玄、上杉謙信。【由】……理。

【講義】世間に、武田氏(甲州流)の兵法の書、上杉氏の兵法の書と云ふ者が傳はつて居るが、その中には、後世の人が、信玄や謙信の名を借りて、それにかこつけて、僞作した者もあるから、盡くそれを信用することは出來ない。しかし、唯だ取り分け、我が日本國に於て、兵法を說く者が信玄、謙信の二公を目あてとして居るに就ては、其由つて來るところの原因理由を知つて居らなくてはならぬのである。

夫勇悍趫捷。重レ恥輕レ死。我國俗所二自有一。我先王又養レ之以レ恩。結レ之以レ信。所以撫二摩鍊治一之。經二數百千年一。闔國之民。親二其上一死二其長一。如二手足之扞一頭目一。以能震二懾四鄰一。雖二魏唐之強大一。不二能加一レ焉者。恃二此俗一也。及レ至二通唐氏一。乃舍レ此學レ彼。剿レ樸爲レ文。鍥レ強爲レ弱。平時奔競。有レ急遁逃。幾レ乎舉レ朝皆婦人一矣。而先王遺民。勇而輕レ死者。皆爲二將門所一レ收。以レ此奪二王權一。營二私利一。無二所レ爲而不レ成。承久。建武之事。輒皆爲レ然。故先王所以自衞。後王所以自累。均此兵也。顧二用捨何如一耳。降至二戰國一。此兵各爲二群雄所一分領一。日淬月厲。愈用愈勁。而其撫摩鍊治教之而後戰者。莫二武田。上杉過一焉。故我邦兵之精。極レ於二此時一。而二家又精之精者矣。且源平以還。其兵皆散而自戰。將勇卒銳者勝。非二必有一二束伍結陣坐作進退之法一。有レ之。始レ於二二家一。二家兵法。傳

【字解】【勇悍】……心いさましくたけきこと。【趫捷】……音ケウセフ。身のこなし方すばやきこと。【國俗】……國の風俗。【撫摩】……音ブマ。撫でさする。なさけを掛けること。撫は安存なり。摩は相親て善くする也。【鍊治】……音レンヤ。鍊りきたへる。一に鍊治に作る。下同じ。【闔國】……音カフコク。全國。【扞】……禦ぐ。【震懾】……音シンセフ。ふるひおそらす。【恃此風俗也】……この勇悍趫捷にして恥を重んじ死を輕んずるの風俗を賴みにしてのこと也。【剿樸爲文】……剿は斷と同じ、音タク、削る也。樸は音ボク、質朴なり。質朴なる古風を削り取つて文飾の風となす。【鍥强爲弱】……鍥は音ケツ、刻む也。强は木强なり。剛强なるを切り削りて柔弱となす。素樸にして剛强なるは我が風俗なり。文飾にして柔弱なるは彼れ唐氏の風俗なり。【平時奔競】……奔競は音ホンキヤウ。先を爭ひ競ひ進みて利祿を貪る也。泰平無事の時には、先を爭うて權勢ある家を驅けまはりて榮利を事とする。【有急遁逃】……危急なる事變が生ずるときは逃げ出す。【幾】……近し。【舉朝】……朝廷に居る者殘らず。【將門】……武門。【承久】……承久年間に、北條義時、京師を攻め、三上皇を海島に遷し奉りしことを云ふ。【建武】……建武年間、北條高時、後醍醐帝を笠置に攻め、隱岐に遷し奉りし事、足利氏が叛きし事などを云ふ。【用捨】……先王は此兵を用ひて自ら衞りたまひ、後王は此兵を捨てゝ自ら累はせし也。【日淬月厲】……淬は音サイ。焠と通ず。劍刃を堅くする也、燒いて水中に入れ以て之を堅くする也。厲は音レイ、砥厲なり、とぐ也。日に月に鍊磨すること。【束伍】……伍は卒伍なり。隊を組むこと、兵士の組み方。【結陣】……陣立。【坐作】……作は起つ也。折敷となつたり、起ち上つたりすること。【極則】……此上なき規則。

【講義】元來、心勇ましく悍くして、身のこなし方すばやく、廉恥を重んずること山の如く、死を輕んずること毛の如くなるは、我が日本國の風俗が自然に有して居るところの者であつた。其上に、我が先王は、又、之を養ふに恩德を以てし、之を結合するに信義を以てせられた。之を撫でさすりてなさけを懸け、之をきたひかためて心を練らせ、そして、年を經過すること、數百千年の久しきに及んでは、全國の人民は、其上の人に親しみなつき、其長者の爲めに死することは、たとへば、手や足が頭や目を禦ぎ守るが如くであつて、それで以て、四方の隣國を震ひおそれさせ、魏や唐の如き强大なる國と雖も、我が國に對して、兵を加へることが出來なかつた譯は、我が國の固有の風俗を捨てゝ、彼の唐の風俗を取り學び、即ち素撲なる風俗を剖り取りて文飾の風俗となし、剛强なる氣風をすりへらして柔飾なる氣風となしたので、天下無事の時には先を爭ひ競ひ進んで榮利を貪ることを務め、危急の事變の生ずるときには、遁げ出すやうになつて、朝廷に在る臣下は殘らず皆婦人女子であると云つても善いやうに成つて仕舞つた。そして、先王の遺しおかれた人民の、勇氣があつて死を輕んずる者共は、皆、源氏平氏などの武家に取りあげて用ひられ、彼等源氏平氏などの武家は、此人民を用ひて、朝廷の權力を奪ひ取り、私利を營み私益を計るに、如何なる事を爲しても成就しないことは無かつたのである。承久年間の事、建武年間の事など、いつでも皆、左樣であつた。されば、先王が自ら御まもりと成されたものも、後の王が自ら厄介とせられた者も、均しく此兵士である。均しく同一の兵士であるのに、どうして此相違があるかと云へば、唯だ之を用ひたのと之を捨てたのとに因るのである。(即ち先王は之を用ひて御自身の御守護とせられ、後世の王は之を捨てて御自身の厄介物とせられたのである。)それより降つて戰國の世に至ると、此兵士は、それ〴〵、天下の群雄に分けて支配せられ、日々に堅められ、月々に磨かれ、いよ〳〵用ふれば、いよ〳〵丈夫になり、いよ〳〵戰へば、いよ〳〵强くなつたのである。そして、此兵士を撫でいたはり、ねりきたへて、訓練教導して後に戰うたものは、武田、上杉の二氏に過ぐる者は無かつた。それ故に、我が邦の兵士の精銳なることは、此戰國時代を以て、其極點に達したものとする。そして、武田、上杉の二氏は、又、其精銳中の精銳なる者であつた。其上に、源氏平氏以

爲二我邦極則一者。由レ此焉爾。

來は、其兵士が皆ちりぐに散らばつて、各自思ひ〳〵に戰つたのであるから、大將が勇氣あり士卒が鋭勇なる者が、勝利を得たのである。其時代には、必ずしも、兵士の組み立て方、陣立ての仕方、折り敷いたり起ち上つたり、進軍し退却するなどの方法の、しかと極つたものがあつたと云ふ譯では無かつた。此等の方法の極つたのは、武田、上杉の二家から始まつたのである。世間で、武田、上杉の二家の兵法をば、我が國の用兵の法則の此上も無き極點であると云ふのは、此等の理由があるからである。

然源氏。足利氏。每自東國起。其兵習騎戰。而足利氏居京畿。不恤馬政。織田。豐臣。德川。竝起侯甸。少騎多步。卽如二家。雖較多騎。亦以其國險不便騎。騎卒徒取致遠。至戰。槪舍馬步鬪。故騎戰遂廢。又用火器與長槍。以爲軍鋒。而弓矢之用稍衰。是又我邦兵體變遷。不可不知也。此時。兵農雖別。往往收漁獵者爲弓銃手。收盜賊爲間諜。以補隊伍。充斥候。二家皆是。

字解【不恤馬政】……馬を飼ふことに注意せぬ。恤は、うれふ、注意する也。馬政の語は、周禮に出づ。【侯甸】……音コウテン。五畿內の外の地。周の制に、侯は王畿の外五百里、甸は侯の外五百里を云ふ。【卽】……もし。【較】……や、。【率】……おほむね、大概。【取致遠】……遠い地方にかけ付ける爲めに役立つ。【槪】……おほむね。【火器】……鐵砲。【軍鋒】……先手。【漁獵者】……漁は魚を捕る者。獵は獸を捕る者。【弓銃手】……弓を射る兵士と鐵砲を打つ兵士。【間諜】……しのびの者。【補隊伍】……兵士の足らざるを補ひ、隊伍の中に組み入れる。【斥候】……音セキコウ。斥は度なり、候は視なり。物見。

講義　然れども、源氏や足利氏は、いつでも、東國の原野の廣い所から起つたので、其兵士は、馬に乘つて戰ふことに熟練して居つた。そして、足利氏は、成業の後には、京都畿內に居つたので、軍馬を飼ふことには心を用ひなかつた。織田氏、豐臣氏、德川氏は、並びに、畿內の外餘り遠からざる土地より起つたので、騎兵が少くして、步兵が多かつた。若し武田氏、上杉氏の二家の如きは、や、騎兵が多かつたけれども、これも亦、其領地が險阻にして馬に乘るに便利ではなかつたので、騎兵は、大概、たゞ遠方にかけ付ける爲めに用ひ、戰鬪の場合に至つては、大概、馬を棄て、步立(カチダチ)となつて鬪つた。それ故に、馬に乘つて戰ふことは、とう〳〵すたれて仕舞つた。又、鐵砲と長い槍とを用ひて、それを先手となしたので、弓矢を用ひることは、次第に衰へた。これ又我が邦の軍兵の體制の變遷であつて、知らねばならぬ事である。此時代には、兵士と農夫とが已に別々になつて居つたけれども、まゝ、漁夫や獵師を召し出して、弓手や鐵砲方とし、盜賊を取りあげて、まはし者となして、以て隊伍に組み入れて不足を補ひ、物見の役にあてたりした。武田氏、上杉氏の二家、いづれも皆、其通りであつた。

二家之陣。大約弓銃手居前。長槍步卒次之。騎士次之。牙旗鼓螺居中。左右拒夾之。輜重居後。游兵居外。每戰。交發弓銃。長槍從之。士下馬以進。或自卒傍出。或自中跳盪而出。戰酣。或以麾下乘之。雖變化無準。槪以此爲常。一時竝同此法。而群雄環視。獨畏二家。幸其噬搏不解。不敢觸犯云。

字解【大約】……おほよそ、大概。【牙旗】…大將の旗。【鼓螺】……音コラ。大鼓、法螺。【左右拒】……左右の備。拒は方陣なり。【輜重】……小荷駄。【游兵】……常に外に居りて必要に應じて不時に使用する兵。【卒傍】……兵卒の傍。【跳盪】……音デウタウ。をどりて飛び出して敵を衝き破る。【凖】…音ジュン。則、きまり。【環視】……ぐるりと取り卷いて見て居る。【幸其噬搏不解】……二氏が互に噬み合ひ、打ち合ひて、勝負いづれとも片付かず、兵陣の固く結び合つて解けずして、他國に及ぶに暇あらざるを、幸とする也。噬搏は、音ゼイハク。【觸犯】…音シヨクハン。さはりおかす。

講義　武田、上杉二家の陣の立て方は、大概、弓を持つて居る兵と、鐵砲を持つて居る兵とが、軍隊の前に居り、長き槍を持つたる步卒が、其次に居り、馬に乘つたる武士が、又其次に居り、大將旗や攻大鼓や法螺(卽ち本隊)は、其まん中にひかへ居り、右ぞなへ左ぞなへの二隊が、之を夾んで左右に居り、兵糧及び軍器を司る小荷駄は後に居り、游兵は軍隊の外にひかへて居るといふ安排で、戰ふごとに、兩方から弓や鐵砲を放ち、敵の色めくところを見て、長い槍を持つて居る者が、其あとを引き受けて進擊し、騎兵は馬を下り步立となりて進み、或は足輕のかたはらから、進み出で、或は中央から不意に飛び出し衝き進み、又戰爭のたけなはにして、閒に髮をも容れぬさはどき時には、或は旗もとの兵を以て、之に附け込んで進擊することもあつて、千變萬化して一定のきまりは無いけれども、大概此體裁を以て、常として、一時、どこでも皆、此法を用ひて居つた。しかるに、群雄は、二家の兵鋒の鋭くして用兵の精妙なるにおぢ氣つきて、ぐるりと取り卷いて視て居つて、たゞ二家を畏れ憚り、二家が互に噬み合ひ打ち合つて連年戰爭して解けずして他に及ぶの暇が無いのを幸として、敢て其れにぶつかつて喧嘩相手にならうとしなかつたと云ふことである。

夫孫武。吳起。不同世而生。饒使同世生。借人之兵。以施己之法。不能大展其力。確鬪決勝敗也。今二公挾孫吳之能。擅趙魏之甲。而比肩接踵於一時。可謂希世之遇矣。後之言兵者。觀二公相與之迹。識其形勢權之

大。然後參之其書。辨別眞僞。其法可得而詳論。余是以合敍二家焉。

字解【孫武】……支那の齊の人。春秋の時、善く兵を用ひ、吳王闔廬の將となり、西の方强楚を破り、郢に入り、北の方齊晉を威す。嘗て吳王の爲めに、婦人を以て兵を試み、王の寵姫の隊長となり一者二人を殺す。兵法十三篇を著はす、今傳ふるところの孫子是れなり。【吳起】……戰國の時の人、好く兵を用ふ。嘗て曾子に學び、魯に事へ、妻を殺し以て將たるを求む。魯侯之を謝す。去って魏の文侯の將となる。士卒と衣食を同じうし、勞苦を共にす。文侯、起が善く兵を用ひ、廉にして能く士心を得るを以て、西河の大守となし、以て秦韓を拒がしむ。文侯既に卒し、其子武侯、起を疑ふ。去りて楚に之き悼王に事へ、南の方百越を平らげ、北の方陳蔡を併せ、三晉を却け、西の方秦を伐ち、以て楚を强くせり。【不同世而生】……吳起は孫武に後るゝこと百餘年なり。【確鬬】……力のあらん限り戰ふ。【趙魏之甲】……趙魏は戰國の時の二大國。甲は兵士なり。【比肩接踵】……肩をならべ、かゝとを接す。一時に並び起りしを云ふ。踵は音ショウ。【希世之遇】……世に類稀れなる出あひ。【相與之迹】……相與に血戰奮鬬せし事迹。相對して合戰した事迹。【形勢】……地の利攻守のありさま。【機權】……機謀權略。【參】……見合はせる、參照する。【合敍】……一處に合はせ述べる、一處に合傳の體裁にする。

講義　孫武と吳起とは、時代を同じうして生れて來らず、又、たとひ、同じ時代に生れて來たとしても、他人の兵士を借りて、自分の兵法を施行するに過ぎないのであるから、十分に其力をおしのばして、力の限りきびしく打ち合つて、勝負を決することは出來ないのである。然るに、今、信玄、謙信の二公は、孫武、吳起に比すべき材能を有し、趙魏にも比すべき兵士を思ふまゝにすることを得て、そして、同じ時代に並び出でたのであつて、實に世に稀なる出合と謂ふべきである。後世の兵法を談ずる人々は、二公が相對して合戰した事跡を見て、其地の利と攻守の有樣や機變權略の絕大なることを知りて、その後、之を、所謂二家の兵書に參照して、書中載するところの眞なるか僞なるかを見分けたならば、その兵法をば、十分に詳かに論究することが出來るのである。余(山陽自ら云ふ)は、この理由を以て、二家の事蹟を一處に合はせ述べたのである。

昔者吾父嘗行過甲斐。甲斐民。飲食必稱館君。館君。信玄也。以信玄之悖逆。而能抗强敵數十年。而不相下。豈非以其敎民有素哉。謙信之事。多世所不傳。余幷考畠山氏。宇佐美氏說。又與米澤人士交游。爲余言如此。

字解【吾父】……賴春水。山陽の父にして、名は惟完、字は千秋、孫太郎と稱す、春水は其號なり。【館君】……御家形樣。【悖逆】……音ハイギヤク。悖も亦逆なり。理にもとり道にさからふこと。父を逐ひ子を殺せしなどの事を云ふ。【抗】……抵抗する。【素】……したぢ、素地。【畠山氏】義春、後に上杉氏を冐し、謙信之を養ふ、蓋し其家ならん。【交遊】……交際する。

講義　さきに、吾が父が、あるとき、甲斐を通過したが、甲斐の人民は、物を食ふにも飲むにも、必ず御屋形樣と稱へて、一旦其飲食物を神前に供へた上でなければ飲食しなかつた。そして、御屋形樣と云ふのは信玄のことである。甲斐の人民は、今でもまだ其德を忘れないのである。一體、信玄は、理にもとり道にさからひて、親を逐ひ出し子を殺害するやうな人であつたのに、謙信の如き强敵に抵抗すること、數十年の久しきに及んで、相下らなかつたのは、其の人民を敎へ導くのに十分に下地があつた爲めではあるまいか。謙信の事蹟は世間に傳はつて居らぬことが多いが、余は、畠山氏(義春)と宇佐美氏(勝興)との說を併せ考へて、其の信ずべきものを取り、又、米澤藩の人士と交際したが、その人が余の爲めに語ること、此の通りであつたので、それを以てこゝに記したのである。

日本外史講義卷之十一　終

筑摩河(日本樂府)

西條山。筑摩河。越公如虎峽公蛇。汝欲鏊。吾已瞰。八千騎。夜衝暗。曉霧晴。大旗掣。兩軍搏。山欲裂。快劍斫陣腥風生。虎吼蛇逸河噴雪。傍有毒龍待其蹙。

皮履兒(同上)

據鞍橫槊北海月。一檄姦雄膽破裂。公能得志皮履兒。北人之技公未知。竢我明春雪解南出師。出師必捷身先死。不向中原一試技。蹂踐北海却皮履。

日本外史講義卷之十二

賴襄子成原著　興文社編輯所講義

足利氏後記

毛利氏

毛利氏。出於大江廣元。廣元十一世祖曰本主。姓土師氏。爲備中介。本主生音人。音人歷仕仁明。清和之間。至從三位。左大辨。賜姓大枝氏。後更大江。與菅原氏。竝掌學政。音人生千古。千古之後七世。曰匡房。有文武才略。教源義家以陣法。匡房曾孫爲廣元。廣元佐源頼朝于關東。使之覇天下。以其薦爲安藝介。遷因幡守。至正四位下。大膳大夫。兼陸奥守。源氏。北條氏之際。爲幕府元老。數定大難。有五子。長子親廣。承久之役屬官軍。不知所終。第三子曰季光。爲左近衞將監。食相模毛利莊。因氏焉。娶三浦氏。死於其難。

字解【廣元十一世祖】……本主、音人、千古、維時、重光、匡衡、擧周、成衡、匡房、維順、維光の十一世。【仁明】……嵯峨帝の第二子。人皇第五十四世。【清和】……文德帝の第四子。人皇第五十六世。【後更大江】……更は改むる也。貞觀年中、音人の時。【學政】……學校に關する事務。【敎源義家以陣法】……事は源氏記に詳なり。【霸】……將軍となつて諸侯を統御すること。【薦】……音セン、推薦、推擧。【數定大難】……比企能員のこと、建保、承久の變などを云ふ。【聚三浦氏死於其難】……季光、三浦義村の妹を娶る。寶治中、三浦氏と北條氏と戰ふや、季光、三浦氏を援け、終に共に敗れ死せり。事は北條記に詳なり。

講義　毛利氏は、大江廣元より出でたものである。廣元の十一代前の先祖を、本主と曰ひ、姓は土師氏、備中介となつた。本主は音人を生んだ。音人は、仁明帝より清和帝に至るまで三代の天子に歷仕して、從三位、左大辨の官位にまで至り、姓を大枝氏と賜はり、後に大江と改め、菅原氏とともに相並んで、學校の事務をつかさどつて居つた。音人は千古を生んだ。千古の後七代目を匡房と曰ひ、この人は、文才武略ともに秀でた人であつて、源義家に軍陣の法を敎へた。匡房の曾孫(ヒマゴ)が廣元である。廣元は、源頼朝を關東に於て輔佐し、頼朝をして天下に霸者たらしめた。廣元は、頼朝の推薦によつて、安藝介となり、後、因幡守に遷り、正四位下大膳大夫に至り、陸奥守を兼ねた。源氏、北條氏の間に於ては、幕府の元老であつて、たびく、策を獻じて大事件を平定した。男子が五人あつた。長男の親廣は、承久の戰役のときに、官軍に附き從つて、盡力する所があつたが、何處で死んだか分らぬ。第三男を季光と曰ひ、此人は、左近衞將監となり、相模の毛利の莊を領地として居つたので、それに因つて、毛利を氏としたのである。季光は、三浦氏を娶つて妻として居つたが、三浦氏が北條氏に討ち滅ぼさるゝ大難にかゝつたときに、遂に三浦氏を援けて討死した。

季光子經光。出鎌倉。居越後南莊。經光子時親。復起爲六波羅評定衆。足利尊氏滅六波羅。加賜時親。以安藝吉田。及河内利田。時親生貞親。貞親生親茂。親茂有三子。師親。匡時。直衡。皆隷新田義顯。義顯爲足利氏將高師泰所滅。貞親以下猶屬官軍。獨師親去屬師泰。師泰之攻石見。敵阻劫川。師親與高橋某。先衆亂流。拔三城。以功盡食吉田邑。及師泰敗。屬山名時氏。迎親茂及二弟。共居焉。足利氏令武田氏。吉川氏攻降之。師親生廣房。廣房生光房。光房子熙房。嘉吉之役。攻蟹坂有功。熙房子豐元。應仁之役。與小早川氏。守相國寺。有功。

字解【劫川】……石見に在り。又、江川、鄕川に作る。【高橋某】……越後守。【武田氏】……六郎。【吉川氏】……又次郎。【嘉吉之役】……嘉吉は稱光帝の時の年號。赤松滿祐、將軍義敎を弑し、白旗城に據る。【蟹坂】……播磨に在り。【應仁之役】……應仁は後土御門帝の時の年號。細川勝元と山名持豐と、京師に戰へり。【相國寺】……京都に在り。

講義　季光の子の經光は、鎌倉を出でゝ越後の南莊に居つた。經光の子の時親は、復た起つて六波羅の評定衆となつた。足利尊氏が六波羅を亡ぼしたとき、時親に、安藝の吉田と河内の利田とを增し賜はつた。時親は貞親を生み、貞親は親茂を生んだ。親茂には三人の男子があつて、師親、匡時、直衡といつたが、いづれも皆、新田義顯に屬して居つた。義顯が、足利氏の大將高師泰に滅ぼされるに及びて、貞親以下は、それでもまだ、官軍に附き從つて居つたが、たゞひとり師親だけは、去つて師泰に附いた。師泰が石見を攻めたときに、敵は之を劫川に於て拒ぎ支へたが、師親は、高橋某とともに、衆に先だつて、河の流れを亂して押し渡り、三城を攻め落した。師親は、その手柄を以て、吉田の邑を殘らず皆領することゝなつた。師泰が敗北するに及びては、師親は、山名時氏に附き從ひ、父親茂及び二人の弟を呼び迎へて、一處に居つた。足利氏は、武田氏と吉川氏とをして攻めて師親を降參せしめた。師親は廣房を生んだ。廣房は光房を生んだ。光房の子の熙房は、嘉吉の戰役に於て、蟹坂を攻めて、手柄があつた。熙房の子の豐元は、應仁の戰役に於て、小早川氏とともに、相國寺を守つて居つて、手柄があつた。

豐元生弘元。弘元之子曰興元。次曰松壽。松壽幼有器量。其保嘗抱之。濟水而躓。溺。保惶懼謝罪。松壽曰。行道而躓。常也。庸何傷。比髫齔。詣嚴島神祠。既歸。問從者曰。汝輩何祈。曰。祈郎君主安藝也。松壽曰。汝盍祈吾主天下。夫願主天下者。能主一方。願主一方者。能主一國。今願主一國矣。其所成可知已。聞者奇之。興元既爲嫡嗣。松壽出養於丹比氏。永正八年。加首服。名元就。稱少輔次郎。居猿掛城。食邑七十五貫。養士卒三百。會明使者來聘京師。路經吉田。善相者朱良範從焉。元就往見良範。良範曰。公兼漢祖。唐宗之相。必宣威於四方。元就心自負焉。元就爲人隆準肉角。

音吐甚洪。在麾下號令士卒。聲聞於諸隊。

【字解】【保】……保傅。もり役。【賻】……つまづく。【庸何】……なんぞ、いづくんぞ。【傷】……いたむ、心に懸ける。【髣髴】……音テウシン。髣は垂れ髪。髴は齒の拔けかはること。七八歳の頃を云ふ。【嚴島神祠】……安藝に在り。宮島と云ふ。祭神は、市杵島姫命なり。【永正】……後柏原帝の時の年號。【加首服】……元服する。【猿掛城】……備中に在り。【邑七十五貫】……鈴錄に云はく、田一坪に苗一把種ゑ、百坪に百把種うるを百目と云ひ、千坪を貫と云ふ。十貫は百石、百貫は千石に當る。されば、七十五貫は、七百五十石に當る也。【吉田】……安藝に在り。【善相者】……人相を觀ることの上手なる者。【漢祖】……漢の高祖。姓は劉、名は邦、隆準にして龍顏なり、沛より起りて、七十二戰し、遂に項羽を滅し、天下を定む。【唐宗】……唐の太宗。姓は李、名は世民。幼時、書生あり、之を見て曰く、龍鳳の姿、天日の表、其年冠するに幾くして、必ず能く世を濟ひ民を安んぜん〻。乃ち其語を取りて名とす。後、高祖を輔けて、天下を定む。【自負】……自身にたのみにする。【隆準】……音リウセツ。鼻の高きこと。準の字、鼻の義なるときは、音セツなり。高祖の相に應ず。【肉角】……額の骨が隆く起りて角の如きを云ふ。太宗の相に應ず。【音吐】……音聲。【洪】……大なり。

【考證】豐元は、弘元を生んだ。弘元の子を、興元と曰ひ、次男を松壽と曰つた。松壽は、幼少の時から、器量がすぐれて居つた。その守り役が、ある時、松壽を抱いて、川をわたつたときに、つまづいて、溺れやうとした。それ故に、守り役は、おそれ〳〵て、疎忽の罪をわびた。すると、松壽が曰ふには、道を歩行してつまづくのは、平生よく有ることである。どうして心に懸けるにあたらうぞと曰つた。又、松壽は、七八歳の頃に、嚴島神社に參詣した。すでに家に歸つてから、その從者に問うて曰ふには、汝等は何を禱つたかと曰つた。從者が曰ふには、私は若殿が安藝の國の領主となられるやうにと祈りました。と曰つた。すると、松壽が曰には、汝は、どうして吾が天下に主人となることを祈らないのか。元來、天下に主人とならうと願ふ者は、一地方に主人となることが出來るのである。一地方に主人となろうと願ふ者は、一國に主人となることが出來るのである。今、一國に主人とならうと願ふといふならば、その實際成就するところの結果は、知れたものであると曰つた。此事を聞く者は、之を大層えらいと思うた。興元は長男ですでに跡取りとなつたので、松壽は、出でゝ丹比氏の養子となつた。松壽は、永正八年に、冠服して、名を元就と曰ひ、少輔次郎と稱し、猿掛城に居つて、七十五貫の土地を所領し、士卒三百人を養つて居つた。折しも、明の使者が、京都に來聘せんとし、その路、吉田を通過したが、人相を見ることの上手なる者朱良範と云ふ者が、之に從つて居つた。元就が往つて良範に遇ふと、良範が曰ふには、あなたは、漢の高祖と唐の太宗との人相を兼ね有して居られるから、屹度、威名を天下四方に伸ばすで御座りましやうと曰つた。元就は、此言を聞いて、心の中に自慢して居つた。元就の人となりは、鼻柱が高く、額骨高く突起して居つて角の如く見え、其音聲は、甚だ大きくして、旗もとに在つて士卒に號令するに、其號令の聲が、諸隊に聞えるほどであつた。

十四年。安藝守護武田元繁。據佐東銀山。矯將軍命。攻略國內。十月。攻有田城。城屬吉川經基。經基與興元善。是時皆在京師。元繁柵于中堰。使熊谷元直守焉。別遣千騎。焚猿掛城下。元就以二百人出戰。不利。吉田兵

聞急來援。元就乃分兵五百。備元繁援路。而以千人疾攻元直。破而斬之。元繁遣兵來援。不及。乃留一將當有田。自將四千騎來戰。元就令吉田將志道廣好潛兵出敵背。夾擊破之。元繁挺前濟水。我兵射洞其胸。其兵皆潰走。乃報捷京師。大內義興爲足利氏管領。爲請褒賞元就。元就遂幷領武田氏邑八千餘貫。經基妻以其孫女。元繁子光和猶據銀山不下。

【字解】【佐東】……安藝に在り。【銀山】……安藝に在り。【有田城】……安藝に在り。【吉田兵】……興元の兵なり。【志道廣好】……太郎三郎。【挺前】……ぬきんでゝ、身を拔き出でゝ進む。【洞】……とほす、射通す。

【考證】永正十四年に、安藝の守護なる武田信繁が、佐東銀山に立て籠つて、足利將軍家の御命令であるといつはつて、安藝の國內を切り取らうとして、十月に、有田城を攻めた。城は、吉川經基に附屬して居つたのである。經基と興元とは、仲が善かつたのであるが、この時には、いづれも、皆京都に居つた。元繁は、中堰に木柵を結つて、熊谷元直をして守らしめて置き、又、別に千騎の兵士を派遣して、猿掛の城下を焚き立てさせた。元就は、二百人の兵士を引き連れて、城を出でゝ戰つたけれども、勝利を得なかつた。吉田の兵は、猿掛の危急なることを聞いて、來つて援けた。元就は、そこで、兵士五百人を分つて、それを以て、元繁が援けに來るべき路に備へて置き、そして、兵士千人を引き連れて、手きびしく元直を攻めて、擊ち破つて之を斬つた。元繁は兵士を派遣して來つて元直を援けさせたけれども、間に合はなかつた。そこで、元繁は、一人の大將を留めて有田に當らせて置き、自身に、四千騎の兵士を引き連れて來り戰つた。すると、元就は、吉田の大將なる志道廣好をして、兵士をひそめて、敵のうしろに出でしめ、夾み擊ちにして之を破つた。すると、元繁は、ひとり身を拔きんで、川を渡らうとした。我が味方の兵は、其胸を射通して殺した。其軍勢は、皆、ちり〴〵になつて逃げて走つた。元就は、そこで勝利を得たることを京都に報告した。その時に、大內義興が、足利氏の管領であつたが、爲めに將軍家に請うて、元就に褒美を與へた。元就は、とう〳〵武田氏の領地八千餘貫を幷せ領することになつた。經基は、元就に妻はすに、其孫娘を以てした。元繁の子の光和は、まだ、銀山に立て籠つて下らなかつた。

十七年。興元卒。子幸松嗣。外祖父高橋久光。與元就並輔之。大永三年。久光父子。與備後三吉某。戰而死。元就赴援。撫其遺臣。幷其邑萬餘貫。六月。出雲國主尼子經久。攻大內氏將藏田信房于鏡山。元就奉幸松爲先鋒。

陰誘信房叔父某。某斬信房出降。被誅。經久本六角氏。其祖父持久。爲伯父高詮幹國事。至於經久。滅鹽治某。取富田城。轉略山陰諸國。南出兵。侵大內氏。大內氏世居周防山口。爲太宰大貳。雄長關西。是時。大內義興在京師。聞變馳歸。自是連年攻戰。石見安藝豪族。介立其間。嚮背無常。獨毛利。吉川。武田氏。常附經久。

字解【外祖父】……母方の祖父。【大永】……後奈良帝の時の年號。【三吉某】……修理亮。【鏡山】……周防に在り。【叔父某】……日向守。【持久】……上野介。【高詮】……大膳大夫。【幹國事】……幹は事を能くするなり。一國の事務を取り捌く。【鹽治】……掃部介。【富田城】……出雲に在り。【介立】……音カイリツ。介は猶ほ間の如し。はさまり立つ也。【嚮背無常】……或は味方となり或は敵となつて一定せぬこと。

講義 永正十七年に、興元が死んで、その子幸松が、跡を嗣いだ。母方の祖父なる高橋久光が、元就とともに、相ならんで之を輔佐した。大永三年に、久光父子は、備後の三吉某〻戰つて、討死した。元就は出かけて行つて援けて、その殘つて居る家來を撫で安んじ、久光の領地一萬餘貫を并せ領するとになつた。六月に、出雲の國主なる尼子伊豫守經久が、大內氏の部下の大將なる藏田信房を鏡山に攻めた。元就は、幸松を守り立てゝ、尼子氏の軍勢の先手となり、ひそかに、信房の叔父某を誘うた。すると、叔父某は、其言にだまされ、信房を斬つて降參したが、執らへて誅殺せられた。經久は、もと、六角氏であつて、その祖父なる持久は、伯父の詮高の爲めに一國の政務を引き受けて取り捌いて居つたが、經久に至つて鹽治某を滅ぼし、富田城を取り、それより路をかへて、山陰道の諸國を切り取り、南の方に軍勢を繰り出して、大內氏を侵略した。大內氏は、代々、周防の山口に居つて、太宰大貳となり、關西地方に雄長(カシラ)として威權を振うて居つた。この時に、大內義興は、京都に居つたが、尼子氏が自分の領地を侵略して來たといふ事變を聞いて、大急ぎで國に歸つて來た。大內氏と尼子氏とは、これより年々引きつゞいて、攻め戰つたが、石見、安藝の豪族どもは、大內、尼子の二氏の間にはさまり立つて居つて、背くかと思へば附き、附くかと思へば背き去つて、しつかりとした定まりは無かつたのであるが、たゞ毛利、吉川、武田の三氏は、いつでも經久に附いて居つた。

七月。幸松病卒。無嗣。家臣聚議。選於群叔。以元就爲嗣。八月。元就入吉田。元就弟就勝。與坂某。渡邊某。謀殺元就。元就覺之。襲殺就勝及坂。渡邊。坂者。桂廣澄兄。志道廣好弟也。乃使人諭廣澄。廣好曰。吾不以坂故疑汝也。廣好拜謝。廣澄弗信自殺。其子元澄。聚族。據城。元就單騎往諭。降之。四年。五月。大內義興。使其子義隆。與其將陶持長將二萬人。攻安藝諸城屬尼子氏者。七月。尼子經久遣兵援之。敗績。八月。元就。以部兵四千。夜斫大內氏營。破之。持長解去。七年。元就入京師。任右馬頭。爲幕府相伴衆。

字解【選於群叔】……數人の叔父より選び出す。【坂某】……詳ならず【渡邊某】……次郎左衞門。【覺】……さとる、感づく。【敗績】……音ハイセキ。大崩を敗績と云ふ。大敗戰すること。【斫】……きる、斬り込む。【相伴衆】……將軍に陪食する者にして、諸大名の中の才智德望ある者にて、殿中の御相伴に非ずと。

講義 この年の七月に、幸松は、病氣で死んだが、跡を嗣ぐべき人が無かつたので、家臣どもは、集り評議して、數人の叔父の中から選ぶことにし、元就を以て跡嗣となしたので、八月に、元就は、吉田に入つた。元就の弟なる就勝は、坂某、渡邊某と相談して、元就を殺して、自分が之に代らうと企てたが、元就は、此事を感づいて、不意擊ちして、就勝及び坂、渡邊を殺した。この坂といふのは、桂廣澄の兄で、志道廣好の弟である。元就は、そこで、人をして、廣澄と廣好とに說諭せしめて曰ふには、吾は、坂が吾を殺さうとした事の爲めを以て汝等を疑ひは致さぬのであるから、汝等は、安心して、もとの如く吾に事へるやうにせよと曰つた。すると、廣好は、その恩命の辱きことを拜謝したけれども、廣澄は、元就の此言を信用せずして自殺して仕舞つた。そこで、廣澄の子の元澄は、一族の者共を寄せ集めて、城に立て籠つた。すると、元就は、たゞ一騎にて、從者を連れずして出かけて行つて說諭して降參させた。大永四年の五月に、大內義興は、その子義隆をして、其部下の大將なる陶持長とゝもに、二萬人の兵士を引き連れて安藝の國に在る諸城の尼子氏に附き從つて居る者を攻めさせた。七月に、尼子經久は、兵士を派遣して來り援けさせたが、大內氏の兵と戰つて、大に敗北した。八月に、元就は、部下の兵士四千人を引き連れて、夜に乘じて、大內氏の陣屋に斬り込み、之を破つた。そこで、持長は、陣を解いて立ち去つた。七年に、元就は、京都に入つて、右馬頭に任ぜられ、幕府の相伴衆となつた。(元就の家の格式が、大分上つたのである。)

享祿二年。熊谷信直以事怨武田光和。以高松城來歸元就。光和怒。攻之。不利。憂憤死。香川光景亦以八木城屬元就。將攻銀山。銀山餘衆。終奔

若狹。天文四年。元就率光景。信直等二千騎。東略備後。攻高野城。城將乞援於播磨赤松晴政。未至。元就急攻拔之。幷其兵。又徇下數城。

【字解】【享祿】……後奈良帝の時の年號。【高松城】……備中に在り。【八木城】……安藝に在り。【銀山】……武田光和の據りし所。【天文】……後奈良帝の時の年號。【高野城】……備後に在り。

【講義】享祿二年に、熊谷信直は、ある事件の爲めに、武田光和を怨んで、高松城を以て、來つて元就に附き從つた。すると、光和は大に腹を立てて之を攻めたけれども、負けたので、憂へ憤つて死んだ。又香川光景も亦、八木城を以て、元就に附き、まさに銀山を攻め立てやうとしたが、銀山に殘つて居る兵士どもは、到底守ることが出來ぬことを知つて、とうく若狹に逃げ奔つた。天文四年に、元就は、光景、信直など二千騎の軍勢を引き連れて、東の方備後を切り取り、高野城を攻めた。城の主將は、援兵を播磨の赤松晴政に乞うたが、その援兵が未だ到著しないうちに、元就は、手きびしく攻め立てゝ之を攻め落し、其軍勢を併せ、又、數城を觸れまはつて下した。

先是。尼子經久。逐子興久。殺之。立孫晴久。晴久遇元就亡狀。大內義興病卒於享祿元年。遺言義隆曰。元就與晴久有郤。宜以是時。奪爲我援。愼勿失其驩心。吾嘗德彼。彼豈不記之。陶持長奉遺命。百方通好。元就終應之。攻下國內諸城屬晴久者。晴久大怒。欲親來討之。經久曰。元就材武善用兵。未可以力取也。不若先定備後。石見。以形勝制之。經久弟義勝亦諫止之。晴久皆弗聽。吉田城東北有冑山。元就患敵陣山上。以瞰城也。會出雲間來入。元就覺之。乃議曰。敵陣冑山。吾與宍戶隆家夾擊之。陣三猪口。則非我利也。隆家。元就女婿。守五龍城者也。間者走。報晴久。

九月。晴久將騎卒五萬。來陣于三猪口。助武田氏餘黨。復銀山。四近將帥怖。晴久兵威。不敢援我。獨宍戶。竹原。小早川諸族。遣兵數百入城。城兵凡三千人。北軍焚掠。城兵輒出擊。走之。晴久叔父國久。部屬精勁。稱新宮黨。忿北兵數衂。以萬騎來挑戰。元就設二伏而出戰。敵覩我寡單。縱兵而進。路狹。不得齊進。伏兵夾擊。破之。晴久乃作三柵于宮崎。以逼城。大內義隆遣陶隆房等。將兵來援。陣天神山。十年。正月。元就請隆房備晴久。而自與長子隆元。攻宮崎。元就進破二柵。隆房與尼子義勝戰于三猪坂。義勝死。晴久夜遁。城兵尾擊。多斬獲。銀山兵聞之亦遁。

【字解】【遇】……待遇する。【亡狀】……亡は無と同じ。行ふところ善狀なきを云ふ。無禮なること、無作法なること。【郤】……音ゲキ。隙と通ず。すきま、仲の惡きこと。【愼勿失其驩心】……驩は歡と同じ。氣を付けて、元就の機嫌を損ずることの無いやうにせよ。【吾嘗德彼】……さきに、義興、元就の爲めに褒賞を請ひしことあり、故に斯く云ふ。【記】……記憶する、覺えて居る。【百方】……色々樣々として。【以形勝制之】……地形の勝れたる所を以て敵を制御する。地形の勝れたる土地を以て、手出しの出來ぬやうに押へつける。【冑山】……安藝に在り。【瞰】……音カン。うかゝふ、覗おろす也。【間】……間者、まはし者。尼子氏の間諜なり。【三猪口】……備後に在り。【五龍城】……備後に在り。【四近】……四方の近傍。【竹原】……安藝守。【小早川】……又太郎。【精勁】……音セイケイ。すぐつて強い。【新宮黨】……新宮は國久の居る處。黨は組の義。【北兵】……一に北軍に作る。【衂】……音ヂク。刀傷なり、きずつき負ける也。【寡單】……音クワタン。軍勢が少くして且つ續く軍勢の無きこと。【齊進】……一齊に進む。【宮崎】……備後に在り。【天神山】……備後に在り。

【講義】これより先に、尼子經久は、その子の興久を放逐して、之を殺し、孫の晴久を立てたが、晴久は、元就を待遇することが無禮であつた。又、大內義興は、享祿元年に病氣で死んだが、その時に、義隆に遺言して曰ふには、元就は、晴久と仲が惡いのであるから、汝はこの仲の惡い時につけこんで元就を奪ひ取つて味方の援とするが宜しい。よく氣を付けて愼んで、元就の機嫌を損じては成らぬ。吾は、以前に、彼れ元就に恩惠を施したことがある。彼れ元就は、之を心に覺えて居らぬことはあるまいと曰つた。陶持長は、義興の遺言の命令を奉じ、色々樣々として元就に好みを通じた。元就は、とうく之に應じて、大內氏に味方して、國內の諸城の晴久に附き從つて居る者を攻め下した。そこで

晴久は、大に怒つて、自身に出掛けて來て元就を征伐しやうとした。すると、經久が曰ふには、彼の元就は材幹武勇にして、戰爭をすること が上手であるから、未だ力づくで之に勝つことは出來ないのである。それよりも、先づ備後、石見を平定して、形勢の勝れたる土地を得て、彼れが手出しの出來ぬやうに押さへ付ける方が善いと曰つた。經久の弟の義勝も、亦、諫言して之を止めた。けれども、晴久は、皆聞き入れなかつた。吉田城（元就の居城）の東北に、冑山と云ふ山がある。元就は、敵尼子氏が此山の上に陣取つてそして城を見おろすことを心配して居つた。折しも、出雲の尼子氏の間者が入り來つて居つたが、元就は、之を感づいて、そこで、わざと之の間者に知れるやうに、評議して曰ふには、敵尼子氏が若し冑山に陣取つたならば、吾は、宍戸隆家とともに、之を夾み擊ちにしやう。敵が若し三猪口に陣取るときは、これは實に我が軍の利益では無いのであると曰つた。隆家といふのは、元就の娘の婿で、五龍城を守つて居る者である。尼子氏の間者は、此評議を聞いて、之を信じて、走り歸つて、之を晴久に報告した。晴久もまた之を信じたので、九月に、晴久は、騎兵歩卒五萬人を引き連れて、來つて三猪口に陣取り、武田氏の殘黨を助けて、銀山を取りかへした。四方の近傍の諸大將は、晴久の兵威のすばらしいのを怖れて、敢て來つて我が毛利氏を援けやうとはしなかつた。たゞ、宍戸、竹原、小早川の諸族だけが、兵士數百人を派遣して吉田城に入らしめ、城兵は、およそ三千人であつた。北軍（卽ち尼子氏の軍勢）は、人家を焚き立て民物を掠め取つたが、城兵は、すぐに城外に出で、擊つて之を走らした。晴久の叔父なる國久の部下に附屬して居る兵士どもは、皆、すぐり拔いたる剛强なるものであつて、新宮黨と稱して居つたが、北兵（卽ち尼子の軍）がたび〳〵敗北するのを忿怒し、一萬騎の兵士を引き連れて來つて戰をしかけた。すると、元就は、伏兵を二箇所に設けて置いて、そして城を出でゝ、戰つた。敵は、我が軍勢の少數にして且つ續く兵無きを見て、兵を縱つて進んだけれども、路が狹かつたので、一齊に進むことが出來なかつた。すると、我が伏兵が、兩方から夾み擊ちにして、之を破つた。晴久は、そこで、三つの木柵を宮崎に作り設けて、城の間近に逼つて來た。大內義隆は、陶隆房等を派遣して、兵士を引き連れて、來り援けしめ、天神山に陣取つた。天文十年の正月に、元就は、隆房に請うて晴久の來襲に備へ、そして、自身は、長男の隆元とともに、宮崎を攻めた。元就は、進んで攻めて二つの木柵を破つた。隆房は、尼子義勝と三猪坂に戰つたが、義勝は敗れて討死した。晴久は、敵することの出來ないことを知つて、夜の間に、遁れ去つた。吉田の城兵は、其あとを追つかけて擊つて之を破り、斬り殺した者や生捕りにした者が多くあつた。銀山の軍勢も、之を聞いて、亦、遁れ去つた。

十二年。正月。義隆大擧攻富田。元就以兵二千從。與周防將秋山某。夾川陣。四月。河水大漲。城兵急攻秋山。元就曰。吾祖騎渡劫川。況此一衣帶水乎。亂流援擊。走之。七月。義隆敗走。元就整隊。徐退南還。是役也。吉川興經與北軍將十餘人。叛晴久。導周防兵。已而復附之。義隆以故敗。

【字解】【秋山某】……信濃守。【吾祖】……師親を指す。【騎渡】……馬に乘りて渡る。【一衣帶水】……一筋の帶の如き細き川の義。錦字箋に云ふ、陳の後主荒淫度なし。隋の文帝曰く、豈に限るに一衣帶水を以てして之を拯はざるべけんやと。乃ち陳を伐つと。【徐】……おもむろに、ゆつくりと。【北軍】……尼子氏の軍。

【講義】天文十二年の正月に、義隆は、大軍を引き連れて、出雲の富田を攻めた。元就は、二千人の兵士を引き連れて、之に從ひ、周防の大內氏の大將なる秋山某と、富田川を夾んで陣取つた。四月に、富田川の水が大に漲ぎつた。富田の城兵は、手きびしく秋山を攻め立てた。これは、大水であるから、元就が秋山を助けるとは出來まいと思うたからである。すると、元就が曰ふには、吾が先祖の師親公は、劫川を馬に乘つて渡られたことがある。まして、帶の如く細き此川は、何でもないことであると曰つて、水流を押し切つて渡つて、秋山を援けて、城兵を擊ち走らせた。七月に、義隆は、敗れて逃げ走つたけれども、元就は、隊伍を整頓し、しづくと退却して、南の方に向つて引き返した。この戰役に於ては、吉川興經が、北軍（卽ち尼子氏の軍）の大將十餘人と、晴久にそむいて、周防の大內氏の兵を案內したが、とかくする中に、また晴久に附くことに成つたので、義隆は、それ故に、敗北したのである。

吉川氏。出於駿河人吉川友兼。友兼誅梶原景時。子孫以功食安藝大朝。後十二世爲興經。興經嬖大鹽某。其下皆怨。殺大鹽。廢興經。議曰。毛利右馬。與先公婚。其子皆先公外孫。可養以爲嗣。乃請元就次子元春。入新莊城。奉以爲主。元春弟隆景。亦出爲小早川氏後。

【字解】【吉川友兼】……小次郎、左衞門尉と稱す。鎌倉武鑑には、吉河に作る。源氏記には、吉香に作る。【嬖】……音ヘイ。身分の卑しき者を寵愛すること。【大鹽】……右衞門尉。【毛利右馬】……元就を指す。元就、右馬頭たり、故に斯く云ふ。【與先公婚】……經基が嘗て其孫女を以て元就に妻はせしこと、上に見ゆ。【新莊】……安藝に在り。

【講義】吉川氏は、駿河の人吉川友兼から出でたものである。友兼は、梶原景時を誅戮したので、子孫は、その手柄を以て、安藝の大朝を領地とした。その後十二代目が、興經である。興經は、大鹽某といふ者を寵愛して居つたので、其臣下たる者は、皆、之を怨んで、大鹽を殺し、興經を廢し、そして評議して曰ふには、毛利右馬頭元就は、先殿（經基）と緣組せられたから、元就の子は、皆先殿の外孫に當るのであるから、それを養つて跡嗣とすべきであると曰ひ、そこで、元就の次男の元春を請ひ受けて、新莊城に迎へ入れ、奉じて主君となした。元春の弟の隆景も亦、出でゝ小早川氏の跡取となつた。

小早川氏之先。出於伊豆人土肥實平。實平仕源氏。食安藝豐田。後十六世曰正平。正平子繁平。幼失明。其族黨議。請養隆景。妻以正平女。居沼田城。於是。吉川。小早川。竝爲毛利氏羽翼。人呼曰兩川。

【字解】【土肥實平】……次郎。【失明】……盲目となる。【沼田】……安藝に在り。【羽翼】……左右の輔佐。

【講義】小早川氏の先祖は、伊豆の人土肥次郎實平から出でたものである。實平は、源氏に仕へて、安藝の豐田を領地とした。其後十六代目を正平と曰つた。正平の子の繁平は幼少の時に盲目となつたので、その一族徒黨の人々が相談して、隆景を養子とし、之に妻はすに正平の娘を以てし、沼田城に居らしめた。こゝに於て、吉川、小早川の兩氏は、相ならんで、毛利氏の羽翼とも云ふべき輔佐となつた。世間の人々は、之を呼んで、兩川と云つた。

元春稱治部少輔。豪爽善用兵。隆景稱左衞門佐。美姿儀。沈斷有謀慮。皆類元就。元就以元春未有伉儷。使兒玉就忠密問其意所嚮。元春曰。吾欲得熊谷信直女。就忠曰。郎君得無謬聞其美乎。彼女醜惡無匹。君必悔之。元春哂曰。然。吾素知其醜也。抑古名將多以女色失其勇。所以人不取而吾取之。人不取而吾取之。信直必感喜。爲吾出死力。此間將卒孰出信直右者。吾與之聯鋒。以爲家君之先。所向無不摧破耳。就忠慚服。告元就娶之。信直果大喜。毛利氏兵鋒益銳。

【字解】【豪爽】……音ガウサウ。氣象人なみにすぐれて且つさつぱりとしたること。【善用兵】……兵士の進退懸引の上手なること。【美姿儀】……容貌風采の美しきこと。【沈斷】……落ち著いて決斷が善い。【謀慮】……謀計思慮。【伉儷】……音カウレイ。配耦なり、妻を云ふ。【其意所嚮】……これならば妻としても善いと思ふ婦人。【謬聞】……あやまりきゝ。聞き違へる、聞違へて聞く。【醜惡】……音シウアク。容貌の見にくきこと。【無匹】……無類。【出死力】……一生懸命になつて働く。【此間將卒】……此地方の大將士卒。【聯鋒】……聯は連なり。ほこをつらぬ、切先をそろへる。【家君】……父君、卽ち元就を指す。【摧破】……音サイハ。ひしぎ破る。【慚服】……音ザンプク。面目なく思うて、其言の理あるに服す。

【講義】元春は、治部少輔と稱し、氣象人並にすぐれて、さつぱりとして居つて、兵士の進退懸引が上手であつた。隆景は、左衞門佐と稱し、容貌風采が美しく、落ち著いて決斷が善く、謀略思慮があつた。元春、隆景は、いづれも皆、元就に似て居つた。元就は、元春がまだ妻の無いのを見て、兒玉就忠をして、ひそかに、これならばと思ふ女は無いかと問はしめた。すると、元春が曰ふには、吾は熊谷信直の娘を得たいと思ふと曰つた。就忠が曰ふには、若殿は、信直の娘が美人であると、聞違つて御聞きになつたのでは御座りませぬか。彼れ信直の娘は容貌の見にくいことは、實に比類の無いほどで御座ります。若しこれを御貰ひなさつたならば、あなたは、屹度、御後悔なされるで御座りましやうと曰つた。すると、元春が笑つて曰ふには、左樣だ。吾は、もとよりその見にくいことを承知いたして居るのである。そも〳〵、古の有名なる大將の中で、女色の爲めに其勇氣を失つて仕舞つた者が澤山にある。それ故に、あまり見にくゝして人が娶らうとしない者を、吾は娶らうと思ふのである。又、人が娶らうとしないものを、吾が之を娶つたならば、其父の信直は、屹度、有がたがり喜んで、吾が爲めに、一生懸命になつて働いてくれるであらう。此地方の大將士卒の中で、誰が信直よりもすぐれて居る者が有らうぞ。吾若し信直とゝもに、切先を揃へて、父君の先鋒となつたならば、如何なる所に向つても、くだけ破れぬ所は無いであらう。是れ等の譯を以て、吾は信直の娘を貰ひたいと思ふと曰つた。就忠は、之を聞いて、己の失言に慚ぢ、元春の言の理あるに感服して、元就に告げて、之を娶ることにした。信直は、案の通り、大に喜んで、爲めに力を盡したので、毛利氏の兵鋒は、ますゝ強く鋭くなつた。

十七年。元就携隆元。元春。隆景。赴山口。義隆養內藤興盛女妻於隆元。使陶隆房與元春約爲兄弟。義隆性文弱。山口多廷臣避亂者。而明人常互市焉。義隆耽詠歌。學梵譯。不復問武事。陶持長嘗憂之。持長子義淸。幼聰敏。常誹義隆曰。是墮落沙門。流竄公卿耳。持長視其有不臣之志。藥殺之。更養妹壻問田某子。是爲隆房。隆房悍厲。頗得士心。持長已死。隆房與義隆嬖臣相良武任有郤。結杉重政。靑景隆時。內藤興盛。謀殺武任。武任怖而遁逃。冷泉隆豐勸義隆速誅隆房。不聽。隆房佯乞骸骨。歸其邑若山。日謀反逆。家臣深野康澄。宮川房勝。引持長遺囑。大諫。弗聽。二臣交刺死。二十年。八月。隆房遂反。攻山口。義隆走法泉寺。其兵皆潰。前關白藤原尹房爲講和。隆房不肯。義隆航赴筑紫。阻風。還入大寧寺。賊兵來圍。九月。義隆自

殺隆豐等死之。義隆子義尊。及尹房以下公卿十餘人。皆爲所殺。

【字解】【攜】……たづさふ、連れる。【文弱】……文藝におぼれ、武事を忘れて、柔弱なること。【山口】……周防に在り。【廷臣避亂者】……前關白尹房、前左大臣公賴、中納言基賴、右兵衛督親世等。【互市】……音ゴシ。互は交互なり、市は貿易なり。相互の有無を通じ貿易すること。【耽】……ふける。【梵譯】……音ボンヤク。梵語を譯せし佛經。釋氏の書。【聰敏】……聰明英敏、極めて怜悧なること。聰は、耳徹する也、耳ときこと。敏は捷なり。【誹】……謗なり、そしる。【墮落沙門】……僧の守るべき戒律を破り俗におつるを墮落と云ふ。沙門は音シャモン、僧のこと。義隆、佛經を學ぶは僧なれども、肉食妻帶なる故に、俗人に墮落したる坊主と云ひて謗る也。【流竄公卿】……流竄は音リウザン。流罪にする。義隆、歌詠に耽ることは公卿の爲す所なれども、其の居る所は、公卿の居るべき京都に非ずして、西陲の周防なるが故に、遠地に遷謫された公卿と云ふ也。【不臣】……臣たる道を守らぬこと。【藥殺】……毒殺する。【問田某】　紀伊守。【悍厲】……音カンレイ。悍は性急なり、厲は猛なり。氣强くして手荒きを云ふ。【嬖臣】……音ヘイシン。氣に入りの家來。【乞骸骨】……退隱することを乞ふ。君に事ふるものは、一身を捧げて君に任せたるものなるが故に、退身を願ふときは、骸骨を乞ふと云ふ。身と骨とを御返へ下されよとの意なり。史記、漢書等に見ゆる語。【若山】……安藝に在り。【遺囑】……遺言の囑託。遺言のたのみ。【交刺】……こもごもさす。刺しちがへる。【法泉寺】……長門に在り。【藤原尹房】……二條關白。【不肯】……うけがはず、がへんぜず、承知せぬ。【阻風】……風にへだてらる、風に妨げらる。【大寧寺】……長門に在り。

【講義】天文十七年に、元就は、隆元、元春、隆景を引き連れて、山口に出かけて行つた。大内義隆は、内藤興盛の娘を自分の養女として、隆元に妻はし、又陶隆房をして元春と兄弟の約束をなさしめた。義隆は、その性質として、文事にふけりて武事を忘れ、弱々しくあつた。山口には、朝廷の臣下(卽ち公卿)の亂を避けて寄寓して居る者が多く、そして、支那の明の商人が、常に來て交易して居つた。義隆は、歌を詠むことに耽り、佛書を學び、また武備に關係せることをば詮議しなかつた。陶持長は、かつて此事を心配して居つた。持長の子の義清は、幼少の時から極めて怜悧であつたが、常に義隆を誹謗して曰ふには、かれは、墮落せる坊主、島流しにされた公卿のやうな者であると曰つて居つた。持長は、義清が臣下たる道を守らない志あるを見て之を毒殺し、更に妹むこなる問田某の子を養子としたが、是れが隆房である。隆房は、氣强くしてたけしく、きかぬ氣の男であつて、よほど、侍どもの人望を得て居つた。持長がすでに死んで仕舞つて後、隆房は、義隆の氣に入りの家來なる相良武任と仲が悪かつたので、杉重政、青景隆時、內藤興盛と結托して、武任を殺さうと企てた。武任は、恐れて遁れ逃げた。冷泉隆豐は、義隆に、速に隆房を殺して仕舞ふが宜いと勸めたけれども、義隆は承知しなかつた。隆房は、いつはつて、退隱せんとを請ひ、其領地の若山に歸つて、日々に、同志を會して、反逆を謀つて居つた。すると、隆房の家來なる深野康澄、宮川房勝の二人は、持長の遺言のたのみを引いて、大に其不心得を諫めたけれども、隆房は聞き入れなかつたので、康澄、房勝の二臣は、刺しちがへて死んで仕舞つた。天文二十年の八月に、隆房は、とう〳〵、義隆にそむいて、山口を攻めた。義隆は、法泉寺に逃げ走り、その軍勢は、皆ちり〴〵になつて崩れた。前の關白藤原尹房が、義隆の爲めに、和睦することを周旋したけれども、隆房は、承知しなかつた。義隆は、舟に乘つて海を渡つて、筑紫(九州)に行かうとしたが、風の爲めに妨げられて、引き返して、大寧寺に入つた。賊兵(卽ち陶隆房の兵)が來り圍んだ。九月に、義隆は自殺して仕舞ひ、隆豐ども、そこで死んだ。義隆の子の義尊及び尹房以下の公卿十餘人は、皆殺された。

【參考】左に武將感狀記の一章を錄して以て參考に資す。

武將感狀記

大內左京大夫義隆は、九州の管領に補し、防長豐筑備藝石七州の太守なり。其家老陶尾張守隆房、三萬貫を領して、威を張り權を專にす。又老中に相良遠江守武任と云ふ者あり。文武の才藝人にすぐれ、智略雄道他に異なり。これによつて義隆の優寵尤甚しく、遲々たる春の晨に櫻花閒の宴に侍り、清々たる秋の夕は殿上に文を奉る。國中の事、大小となく、相良が門に出でずと云ふことなし。是れによつて士庶人みな手をもみ膝を屈め敬せざるものなし。陶隆房、寵をねたみ權をあらそひ、其心を君に失することを憤り、不意に陰謀を企て、夜中に相良を襲ひ急に討ち殺さんとす。相良、のがれて筑前國花尾の城に栖籠り、陶が逆心を挾むよしを義隆へ告ぐ。義隆も、陶が恣に相良を責め君をないがしろにすることを怒るといへども、群臣にはかに志を變じ、昨日は相良が門に立ちしやからも、今日は隆房が庭に賀す。上となく下となく皆陶が猛威にしたがふ。是れより隆房、王莽董卓が威をふるひ、曹操が孤をさしはさむに齊し。忠臣も目を張り胸をさするといへども、如何ともすることなし。剩へ群兵を率し君を襲ふ。義隆、一生萬死にのがれ、長州に出走し、居を大寧寺に移さる。陶尾張守隆房、諸人に下知して曰く、凡そ軍の法は、北ぐるを追ひ急にとりひしぐにしくはなし。餘すな、漏すな、ものどもとて、大寧寺に押し寄せ、つひに義隆を弑す。ここに侍臣笠井帶刀左衞門尉正盛は、義隆の命を請ひて、公方義輝へ奉使す。中國のさわぎ陶が叛逆のこと早打を以て急をつげしかば、義輝煖爐となり、土荒れ人希れにして、咸陽阿房の三月の火、保元平治の亂後も、かくやと思ふばかりなり。たまくことふるのとては、曉の風、殘月花清の舊跡を照すにひとし。正盛、悲歎の泪を流し、あなあさましし、關西管領累代弓馬の名をあらはしたる名家、一朝夕にかくならせたまふものの哉。此日何の日ぞや、嗚呼かなしいかな、天か命かとて、手をかへ胸を打ち、天道ものしる事あらば、我が志をかんがみ、逆臣を亡し君の御憤をやすめ、冥土黃泉までも臣が忠功を感ぜしめたまへとて、歎くに泪つき、叫ぶに聲をうしなふ。且は我が妻子の行末をさへ聞かねば、先づ我が領地をさして歸りぬ。毛利右馬頭、これを聞きて、密に招きて相かたらはれける。然れども、正盛は、元就と志を通じて、わざと毛利家に服せず、陶に從ひて元就に內通し、籌策を以て隆房を嚴島へおびき出し、元就大勝を得たまひ、陶氏を擊ち亡し、つひに主君の讐を報じける。

隆房更名晴賢。削髮號全薑。迎豐後國主大友義鎭弟義長爲主。曰。重政。隆時妬武任。勸吾行大事。乃發兵誅二人。初晴賢之圖難。使人來說元就黨己。嗤以佐東郡。元就卻之。義隆臨終遺書。囑元就曰。吾不幸爲賊臣所弑。呑恨入地。非卿誰能復我仇。元就覽書流涕曰。吾受大貳恩眷。雖無所囑。猶欲爲復仇。況有是乎。諸將曰。彼凶焰方熾。未可與爭衡。宜內

養威力。外示柔弱。觀釁而動。元就從之。

【字解】【卻】……しりぞく、はねつける、拒絶する。【囑】……賴む。【呑恨入地】……遺恨を含んで死ぬる。【大貳】……義隆を指す。太宰大貳たり。故に云ふ。【恩眷】……音オンケン。恩愛眷顧。恩を加へて目をかける。【凶焰方熾】……凶は惡逆なり、焰は威焰なり、熾は盛んなり。凶徒の勢威まさに盛んにして、火の燃ゆるが如くなるを云ふ。凶暴を火の熾なるに喩ふる也。【爭衡】……衡は音カウ、秤なり。輕重勝敗を爭ふ。戰國策に見ゆる語。

【講義】かくて、隆房は、名を改めて晴賢と曰ひ、髮を剃つて坊主姿となつて、全薑と號し、豐後の國主なる大友義鎭の弟の義長を迎へ入れて、主君となした。そして晴賢が曰ふには、重政隆時の二人が、武任の君寵盛んなるを妬んで、吾を說き勸めて、此の如き弑逆の大事を行はしめたのであると曰ひ、そこで、兵士を繰り出して、二人を誅殺した。はじめ、晴賢が、騷動を起すことを企てたときに、人をして、來つて元就に說いて、自分に味方するやうにと勸め、且つさうするときは佐東郡を與へやうと曰つたけれども、元就は之をはねつけた。義隆は、死せんとするときに臨んで、書き置きをして、元就に賴んで曰ふには、吾は不幸にして賊臣隆房の爲めに弑害せられ、遺恨を含んで死ぬることである。御身でなければ、誰か我が仇をかへして此遺恨を晴らしてくれる人があらうぞと曰つた。元就は、其書面を見て、涕を流して曰ふには、吾は大貳義隆殿の厚き恩顧を受けたのであるから、たとひ何等の御賴みが無くても、それでも猶ほ、大貳の爲めに仇をかへさうと思うて居つたのである。まして、此御賴みがある上は、此まゝにして置くわけには行かぬと曰つた。すると、諸の大將どもが曰ふには、彼れ晴賢の凶惡なる威勢は、今や方に火の燃ゆるが如く盛んで御座りますから、未だ與に立て付きて勝負を爭ふことは出來ませぬ。されば、內に威勢兵力を養つて充實せしめ、外面は柔弱に見せかけて置いて、そして敵のすきまを觀てから動くやうにするが宜しう御座りますと曰つた。元就は、其言に從つた。

二十一年。秋。元就攻拔槌山。志和諸城。是歲備後江田隆貫叛。歸尼子氏。元就攻之。至泉橋。尼子國久將數萬騎。來救隆貫。元春以部兵二千。擊走之。會霖雨川漲。國久。隆貫退。入山內。元就亦歸。備中人三村家親來屬。二十二年。以家親爲鄕導。攻穗田爲資。降之。

【字解】【槌山】……周防に在り。【志和】……周防に在り。【泉橋】……備後に在り。【山內】……備後に在り。【霖雨】……音リンウ。長雨。三日以上降りつゞくを霖と云ふ。

【講義】天文二十一年の秋に、元就は、攻めて、槌山、志和などの諸の城を攻め落した。この歲に、備後の江田隆貫は、毛利氏にそむいて、尼子氏に附いた。元就は、之を攻めて泉橋に至つた。すると、尼子國久が、數萬騎の軍勢を引き連れて、來つて隆貫を救うたが、元春は、部下の兵士二千人を引き連れて、擊つて之を敗走させた。折しも、長雨で川の水が漲つたので、國久と隆貫とは、退却して、山內に入つた。元就も亦國に歸つた。備中の人三村家親が來り附いたので、二十二年に、家親を以て案內者として、穗田爲資を攻めて、之を降參させた。

初我將井上元兼。以豪宗不奉法令。竊言曰。主公欲誅陶氏。陶氏嘗救我。恩可背乎。元就以計族誅之。於是會諸族屬。議討晴賢之計。隆景進曰。宜請之天子。仗大義討之。則人心所嚮。無不克矣。元就曰。善。乃上書曰。太宰大貳義隆。承父祖遺業。存心於王室。而爲賊臣晴賢者所弑。臣元就奮微力。圖討伐。未得成其功。伏冀得討晴賢。一行詔。糾合徒屬。以靖西陲。初朝廷聞晴賢作難。命將軍。管領西伐。莫敢奉詔。及元就書至。卽制可之。元就得詔感喜。移書遠近。津和城主吉見正賴。世與陶氏讎。首應之。晴賢怒。攻津和。元就遣兵援之。二十三年。五月。元就與諸子。將兵西出。取銀山。草津。櫻尾諸城。遇陶氏兵于折敷畑。擊破之。陶氏骨鯁將有江良興房。守琥珀城。元就縱反間。言興房送款。晴賢族誅興房。遂檄周防。長門。豐前。筑後。石見。發兵東下。

【字解】【豪宗】……勢力盛んなる一族。【法令】……法度命令。【主公】……元就を指す。【族誅】……一族殘らず誅殺する。【族屬】……一族と臣屬。【仗大義】……大義による、君臣の大義をたよりとする。【一行詔】……一くだりの詔。【糾合】……音キウガフ。寄せ集める。【靖】……安んず、しづめやすんずる。【西陲】……音セイスヰ。西の方のはて。【制可】……天子の言を制書と云ふ。可は許可なり。勅許。【移書遠近】……廻文を遠近の大名に寄せる、あちこちの諸大名に奉勅の廻文をまはして加勢協力をたのむ也。【津和】……石見に在り。卽ち津和野なり。【草津】…

…安藝に在り。【櫻尾】……安藝に在り。【折敷畑】……安藝に在り。【骨鯁】……音コツカウ。正直剛毅なるを云ふ。一説には、直言の義なり。鯁は魚の骨なり。骨が喉中に留まりふさぐこと、直言の受け難きに似たり、故に喩ふ。史記の刺客傳に云はく、方今吳は外、楚に困んで、内空しく骨鯁の臣なし、是れ我を如何ともするなしと。【琥珀城】……安藝に在り。【反間】……敵の間者を利用して、敵を計るの策を施して、我が用を爲さしむる也。

【講義】はじめ、我が毛利氏の大將なる井上元衆は、勢力ある家柄なるを恃んで、法度命令に從はなかつたが、ひそかに言つて曰ふには、主公元就殿は陶氏を誅しやうとして居られるけれども、陶氏は、以前に我を救つてくれたことがあるから、此恩には、背くことが出來やうぞと曰つた。元就は、計略を運らして、其一族を殘らず誅殺した。こゝに於て、元就は、諸の一族臣屬を寄せ集めて、晴賢を征伐するの計策を相談した。すると、隆景が進み出でゝ曰ふには、これは、天子に奏上請願して、勅許を得て、大義明分によつて之を征伐するが、宜しう御座ります。さうするときは、人心は必ず之に嚮ふに相違ない。人心の嚮ふ所は、勝利を得ぬと云ふことは御座りませぬと曰つた。元就が曰ふには、大に善いと曰つた。そこで、朝廷に上書して曰ふには、太宰大貳大内義隆は、父祖の遺して置いた事業を受け繼いで、王室の事に心を碎めて一意國家に忠誠を盡さんとして居りました。然るに、賊臣晴賢と云ふ者に弑害せられました。臣元就は、少しばかりの力を奮つて、之を征伐しやうと企てましたけれども、未だ其功を成し遂ぐることが出來ませぬ。伏して願はくは、晴賢を征伐せよとの一くだりの詔勅を下賜せられることを得まして、部下の者共を寄せ集めまして、西方の邊陲を鎮め安んじたいと思ひますと曰つた。はじめ、朝廷は、晴賢が騷動を起したといふことを聞かれ、將軍や管領などに命令して西の方に出掛けて征伐せしめやうとせられたけれども、敢て詔命を奉じて征伐に出掛けやうとする者が無かつた。元就の上書が到著するに及びて、即時に、之を御裁許になつた。元就は、詔書を得て、感銘喜悅し、廻文を遠近の將士にまはし、勅命を受けて晴賢を征伐せんとすることを通じた。津和の城主なる吉見正頼は、代々、陶氏と仇讐の間柄であつたから、元就の廻文を見て、第一番に之に味方した。晴賢は怒つて津和の城を攻めた。元就は、兵士を派遣して、津和を援けさせた。天文二十三年の五月に、元就は、子供等と、もに、兵士を引き連れて、西方に出陣し、銀山、草津、櫻尾などの諸の城を攻め取り、陶氏の軍勢に、折敷畑に出合ひ、擊つて、之を破つた。陶氏の直言をなす剛毅なる大將に、江良興房といふ者があつて、琥珀の城を守つて居たが、元就は、敵の間者をうまく利用して、興房は毛利氏に内通して居ると言はしめたので、晴賢は、淺はかにも之を信じて、興房をば一族殘らず誅戮し、遂に、周防、長門、豐前、筑後、石見の五國に檄文をまはして、兵士を繰り出して、東方に下向した。

元就聞之。與諸子密謀曰。彼兵不下三萬。必首攻櫻尾。草津。我悉衆援之。不過五千人。勢力懸絶。與戰平地。不可克也。爲今計者。宜城嚴島。誘而蹙之。弘治元年。五月。城于島之有浦。諸宿將皆諫其不可。元就弗聽。諸將皆相言曰。此公常不拒諫。今何乃爾。六月。城成。命己斐。新里二氏。以兵數百守之。使草津。櫻尾。仁保諸城互爲策應。既而聲言。吾悔不聽老將言。嚴島地形。難守難援。即爲敵有。諸城從陷。吾計莫失於此。九月。晴賢留其子長房于若山。而自統騎卒二萬。戰艦千餘艘。至岩國。議戰所嚮。大和興武曰。先拔櫻尾。則諸城不攻而陷。弘中隆包曰。請分兵。一攻櫻尾。一備其援路。彼不敢出。出則與之相持。而遣輕兵擣吉田。彼進退失據。不血刃而可取。晴賢曰。吾欲先取嚴島。城脆將孱。而不便於援。聞元就甚悔之。吾取以爲根據。分兵攻諸城。是萬全策也。隆包曰。彼眞悔之。必不宣言。宣言者。得非以餌我乎。晴賢猶豫未決。故櫻尾城主降在賊軍中。與己斐。新里相識。元就令二人貽書。指陳順逆。暴晴賢罪惡。極其醜詆。晴賢覽之。大怒。元就又令桂元澄詐送款。約。俟元就渡海赴援。翻城爲內應。晴賢乃決意攻嚴島。

【字解】【懸絶】……かけはなれる、甚しく相違して居ること。【蹙】……ちゞむ、追ひつめる。【弘治】……後奈良帝の時の年號。【宿將】……故老の大將。【己斐】……豐後守。【新里】……式部少輔。【策應】……策は謀なり、應は答なり、物の感ずる也。互に謀を通じて助け合ふこと。【聲言】……言ひふらす。【卽】……もし。【岩國】……周防に在り。【議戰所嚮】……いづれの方より攻めかゝるべきかと相談する。【輕兵】……輕裝したる兵。【擣吉田】……擣はつく、衝く也。吉田は毛利氏の本城なれば、空虛なるに乘じて不意に衝き入る。【城脆】……城もろし、城が堅固なちざること。【孱】……弱し。【根據】……音コンキヨ。據は依なり。根城。【萬全】……萬々安全にして失敗すること無きこと。【餌我】……我を釣りよせる。【貽】……贈る。【指陳順逆】……主君を弑害せし賊に一味するは逆にして、之を征伐せんとする者に一味するは順なりとの道理

を指し示し述べる。【暴】……あらはす、顯はし示す也。【極其醜詆】……醜詆は音シウテイ、惡言毀辱する也。此上も無き惡口雜言をなこと。言はれるだけの惡口誹謗を言ふこと。【翻城】……城を以て反く也。

【講義】元就は、此事を聞いて、子供等と、ひそかに相談して曰ふには、彼れ晴賢の軍勢は、いくら少く積もつても三萬人よりも少いことは無いが、必ず、先づ櫻尾、草津を攻めるであらう。味方は、殘らずの兵士を繰り出して之を援けるとしても、五千人よりも多くは無い。かく、三萬人と五千人とでは、勢力が甚しく相違して居るから、平坦なる土地に於て合戰するときは、とても勝利を得ることは出來ないのである。今の計を爲すには、城を嚴島に新築して、敵をおびき出してこゝに入らしめ、そして之を押しつめるが、宜しいのであると曰ひ、弘治元年の五月に、嚴島の有浦に城を築いた。すると、諸の故老の大將どもは、いづれも皆、其の宜しくない旨を陳べて、之を諫めたけれども、元就は承知しなかつた。諸の大將どもは、いづれも皆、語り合つて曰ふには、此殿(卽ち元就を指す)は、いつも、諫言を拒まれることは無いのに、今は、どうして、あのやうに、言ふことを聞き入れられないのであるかと曰つた。かくて、六月に、城が出來上つたので、己斐、新里の二氏をして、數百人の兵士を引き連れて、之を守らせて置き、草津、櫻尾、仁保などの諸の城をして、互に謀を通じて助け合ふやうにさせて置いた。とかくする中に、わざと言ひふらすには、吾は、故老の大將どもが嚴島に城を築くことなかれと諫めた言葉を聞き入れなかつたことを後悔する。嚴島の土地の形勢は、防ぎ守ることも六かしく、之を援けに行くことも六かしいのである。若し此城が敵に取られるときは、他の諸城も、之に從つて落城すること、成るであらう。吾が計略の中で、これよりも大なる失策は無かつたと言ひふらした。(これは、實は元就の策略である。)九月に、晴賢は、其子の長房を若山に留めて置いて、そして、自身には、騎兵歩卒二萬人、戰船千餘艘を統率して、岩國に到著し、先づいづれに向つて攻めかゝるべきかといふ事を相談した。すると、大和興武が曰ふには、先づ一番に櫻尾を攻め落したならば、他の諸城は攻めずとも落城するで御座りましやうと曰つた。弘中隆包が曰ふには、どうぞ、軍勢を分けて、二隊となし、一隊は櫻尾を攻め圍み、一隊は敵の援兵の來るべき路に備へて置きますときは、彼れ元就は、きつと出て來ないで御座りましやう。それでも彼れが出て來ましたならば、之と對陣して睨み合つて戰はぬことにし、そして輕裝せる兵士を派遣して、不意に、その本城なる吉田城を衝いたならば、彼は、進むにも退くにも、根據とすべき所を失ひまして、及に血ぬらずして、打ち取ることが出來るで御座りましやうと曰つた。晴賢が曰ふには、吾は、第一番に嚴島を取らうと思ふのである。嚴島の城は堅固ならず、之を守つて居る大將は弱く、そして之を援けるのにも便利が惡い。聞くところによれば、元就は、嚴島に城を築いたことを大層後悔して居ると云ふことである。吾は、之を取つて以て根據地となし、それより兵士を手分して、諸城を攻めやうと思ふ。これは、萬々安全にして、決して失敗することの無い計策であると曰つた。すると、隆包が曰ふには、彼れ元就が本當に之を後悔して居るものならば、必ず、後悔して居ることを言ひふらしは致しませぬね。然るに、後悔して居ることを言ひふらすのは、これは、左樣にして我を釣り寄せるのでは御座りますまいか。どうも、我を釣り寄せる謀らしく思はれますと曰つた。晴賢は、隆包の言を聞いて、疑ひ惑ひ、くづ〳〵して、未だ決定することは出來なかつた。もとの櫻尾の城主が、降參して賊軍の中に在つたが、己斐、新里の二人と、知り合ひの間柄であつたので、元就は、己斐、新里の二人をして、もとの櫻尾の城主に手紙を贈らしめて、主君を殺し奉る賊徒に味方するは逆にして王命を奉じて賊徒を征伐する者に味方するは順なりとの道理を指さし示し述べ、晴賢の大罪惡逆を言ひあらはし、此上も無いほどの惡口雜言をした。晴賢は、此手紙を見て、大に怒つて、前後の思慮も無くなるほどであつた。元就は、又、桂元澄をして、いつはつて、晴賢に內通せしめ、元就が海を渡つて嚴島に赴き援くるを待つて、城をひるがへして裏切りいたしましやうと約束させた。晴賢は、そこで、いよ〳〵決心して、嚴島を攻めることにした。

十月。建牙塔岡。燒民舍。布陣舟艦櫛比。喊聲震海。城兵嬰壁堅守。賊有烏銃七口。櫓楯不支。積土豚扞之。晴賢遺書元就曰。公爲先大貳。欲見加誅。不敢逃避。聊以水陸軍三萬。陣之嚴島。公能來乎。元就聚將士示之。將士皆有懼色。元就笑曰。使賊所言信。則吾大克矣。衆問故。曰。其地迫狹。彼側肩躡足。不便進退。兵愈衆。而鋒愈鈍。我以死士數千衝之。克可必也。乃使宍戸隆家留守吉田。而自率精兵三千餘人。南行至草津。與晴賢隔海而陣。國內諸豪。意其必敗。多稱病不從。初伊豫有能島。來島二族。閑水戰。晴賢。元就竝招之。二族以三百艘來屬元就。元就勞之。往問城中消息。賊四鑿地道。樓櫓殆覆。以大索維持之。元就移陣火立山。晦日。盡返老弱輜重于草津。累累不絕。賊望見以爲我收兵也。

【字解】【建牙】……牙は音ガ、大將旗なり。大將旗を建てる、本陣を置くこと也。【櫛比】……音シツピ。櫛の齒の如く密接して相ならぶ也。【喊聲】……音カンセイ。ときの聲。【嬰壁】……壁にかゝる、城壁の中に立て籠る。【烏銃】……鐵砲。【七口】……七挺。【櫓楯】……音ロジユン。大楯と楯。櫓は大楯なり。【土豚】……音ドトン。土墩、土俵。【扞】……ふせぐ。【先大貳】……大內義隆を云ふ。【陣之】……一に陣于に作る。【迫狹】……音ハクケフ。兩方から迫り合つて狹きこと。【側肩躡足】……側は、そばだつ。躡は、ふむ。側肩とは、橫身になる有樣。兵士の多くして込み合ふこと。【能島】……掃部介。【來島】……出雲守。【閑】……ならふ、習ふ、熟練する。【水戰】……水上の戰、舟いくさ。【勞】ねぎらふ、慰勞する。【消息】……おとづれ、樣子。【地道】……地中の道、拔穴。【樓櫓殆覆】……樓は、高どの。櫓は、やぐら。地下に穴を掘りし故、根石がゆるみて、高殿や、やぐらが、今にも顚覆せんとする也。【大索】……音タイサク。太き綱。【輜重】……物を載する車。小荷駄車。【累累】……音ルヰ〳〵。引きつゞく貌。

【講義】十月に、晴賢は、本陣を塔岡に置き、百姓家を燒き拂つて、陣營を布き、舟は澤山あつて、薗の齒の如く、ひし〳〵と相並び、ときの聲は海水を震ひ動かすほどであつた。嚴島の城兵は、城壁に立て籠つて、堅く守つて居つた。賊軍には、鐵砲が七挺あつて、之を發射して、城兵を射立て、我が大楯も楯も、なか〳〵支へきれなかつたので、そこで、土俵を積み立てゝ、之を拒いだ。晴賢は、手紙を元就に送つて曰ふには、貴殿は、先の太宰大貳の爲めに、仇を復さうと云ふので、拙者に誅を加へられやうとして居るが、貴殿は、此處まで來ることが出來るかと曰つた。元就は、諸將士を かながら水陸の軍兵合せて三萬人を引き連れて、嚴島に陣取つて居るが、拙者は、敢て逃げ避けやうとは致さず、聊 寄せ集めて、此手紙を見せた。諸將士は、皆、恐懼して居ることが、顏色に見えた。元就は笑つて曰ふには、賊晴賢の言ひよこした所の事が、 信實の事であるならば、吾は大勝利を得ることであらうと曰つた。人々は、其譯を問うた。すると元就が曰ふには、嚴島の土地は、甚だ狹い から、彼れ敵軍が、そんなに多勢であることならば、大層込み合つて、肩をなゝめにすぼめ、足をふみ合ふほどで、進退かけ引きに不便であ る。軍勢が多ければ多いほど、其鋒さきが鈍〳〵なるのである。我は、決死の士數千人を引き連れて、之を衝いたならば、必ず勝ちおほせること が出來るのであると曰つた。そこで、元就は、宍戸隆家をして、吉田に留まり守らしめて置いて、そして、自身に、すぐり拔きの兵士三千餘 人を引き連れて、南の方に向つて行き、草津に到著し、晴賢の軍と、海を隔てゝ對陣した。安藝の國內の諸の豪族どもは、元就が屹度負ける だらうと思うたので、多〳〵は病氣であると云つて、元就に從はなかつた。はじめ、伊豫に、能島、來島の二氏族があつて、舟軍に熟練して居つ たが、晴賢と元就とが、並に此二族を招いて、味方にしやうとした。二族は、舟三百艘を引き連れて、來つて元就に附いた。元就は、之をいた はり慰め、人をして往いて嚴島の城中の樣子を問はしめた。この時に、賊は、四方から、地中に拔道を掘り穿つたので、物見や、やぐら等は、 ほとんど、ひつ〳〵りかへらうとし、そこで、大なる繩を以て、之を維ぎ止めて居ると云ふ有樣であつた。元就は、移つて火立山に陣取つた。晦 日(月の末日)に、老人や少年や小荷駄をば、殘らず、皆草津に送り返したが、そろ〳〵長く引きつゞいた。賊軍は、之を遙に望み見て、我が 毛利氏が兵士をまとめて退却するのであると思うた。

於是。元就令諸將士。人以二條布約袖。佩一日糧。約暗號。比暮上船。會大風雨。士卒震怖。請俟風定。元就曰。天助我也。令皆滅篝火。揭一灯于牙船。諸軍認之。破浪而渡。既濟。返舟北岸。以示必死。遂上博尾崎。直出塔岡背。隆景別率伊豫船兵。出其面。賊恃風雨。無警邏者。穿賊艦而入。賊或誰何。浦宗勝大聲答曰。筑前兵應徵來矣。辟船而達。稍稍上岸。兩隊皆陣。天將明矣。元就命吹螺鼓譟。乘高下擊。賊諸軍大驚。爭萃其牙營。營塡咽。自相擊刺。元就大呼曰。進。諸將士破柵而入。賊兵終大潰。晴賢咄嗟遏走者。不能遏也。賊爭舟而遁。溺死數千人。晴賢肥大不便行步。從者扶掖至海岸。求船。不復覩一隻。遂自殺。隆包以殘兵百餘。棲宮洞中。元就惜其才。使人說降之。不肯而死。已而獲晴賢首。元就嚴建旗鼓。奮鞭指其首曰。弑逆之報。乃嬰天誅。今何如也。諸軍揚凱。元就留嚴島十一日。引兵返小潟。葬晴賢首于洞雲寺。

【訓讀】【二條】……二筋。【約袖】……袖を〳〵りつけて。【暗號】……合言葉、前以て定め置きて相圖に用ふる言葉。【篝火】……音コウクワ。かゞり火。【揭】……高く揚ぐる。かゝぐ。【揭一灯于牙船】……灯は一に燈に作る。牙船は音ガセン、大將の乘つて居る舟。【認】……見とめる。辨識する也。【警邏者】……警は戒むる也、邏は音ラ、游偵なり。見まはりの者。【穿賊艦】……賊の繫ぎ置きし軍艦の間を通り拔ける。【誰何】……音スヰカ。何者ぞといつてとがむるなり。【辟船而達】……辟は避と同じ。賊船をよけさせて岸に到達する。賊は、味方の舟と思うて、自らも避けて、通らしめしなるべし。【稍稍】……ぽつ〳〵とだん〳〵に。【螺】……音ラ。法螺貝。【萃】……集まる。【牙營】……本陣。【營塡咽】……塡咽は音テンエツ。塡は滿る也。咽は塞がる也。陣營中に、人數が一ぱいになりて息も出來ぬほどなること。【擊刺】……音ゲキセキ。自相擊刺とは、味方同士互に擊ち合ひ刺し合ふ也。【咄嗟遏走者】……咄嗟は音トツサ。やあ〳〵と聲を掛けるなり。掛け聲をして、逃げ走らうとする者を止める。【肥大】……肥え太る。【扶掖】……音フエキ。掖は挾持なり。傍に在つて之を扶ける、世話する。【嚴洞】……岩の洞穴【不肯】……うけがはず、承知せぬ。【嬰】……かゝる。【揚凱】……凱は音ガイ。兵樂なり。勝ちどきを揚げること。

【講義】こゝに於て、元就は、諸の將士どもをして、銘々、二筋の布を以て袖をくゝりつけて味方のしるしとなし、一日分の兵糧を腰につけしめ、合ひ言葉を約束し、日が暮れかゝる頃に、船に乘つた。折しも、大風大雨であつたので、士卒は皆震ひ怖れ、風が靜まるのを待ちましやうと 請うた。すると、元就が曰ふには、此大風が吹き大雨が降るのは、これ、天が我を御助けになるのであると曰つて、皆、かゞり火を消さしめ、 たゞ一つの燈を大將の本船に揭げて置き、諸軍は、之を目じるしとして、波を破つて押し進んだ。すでに海をわたつて仕舞ふと、舟を北の岸 に返して仕舞つて、必死の覺悟なることを示し、とう〳〵、博尾崎に上陸し、たゞちに、塔岡の後に出でた。隆景は、別に伊豫の水兵を引き連 れて、其正面に向つた。賊は、風雨のはげしきを恃みとし、こんな夜には敵が來り襲ふことはないと安心して、見まはりする者も無かつた。 隆景の引き連れて居る舟は、賊の船と船との間を通り拔けて入つた。賊の中に、そこを通るのは何者ぞと問ふ者があつた。すると、浦宗勝が

大きい聲で答へて曰ふには、筑前の兵が徵發に應じて來たのである」曰ひ、賊船をよけさせて、岸に到著した。ぼつ〳〵とだん〳〵に岸に上陸し、元就の隊も、隆景の隊も皆陣取つた。かくて、夜が將に明けやうとすると、元就は、命令して、法螺を吹き、攻め太鼓を鳴らし、大さわぎして高い處から下つて賊を擊つた。すると賊の諸の部隊は大いに驚いて、先を爭うて、その本陣に集まつたので、本陣の中は、それが爲めに一杯にみち塞がつて、身動きもならぬほどで、味方同士、互に擊ち合ひ刺し合つた。そこで、元就は、大に呼ばゝつて、進めと曰つた。諸の將士は、木柵を破つて討ち入り、賊の軍勢は、とう〳〵大に崩れ亂れ、晴賢は、あはやと掛け聲して、逃げ走る者を止めやうとしたけれども、止めることが出來なかつた。賊兵は、先を爭うて舟に乘つて遁れ、海に落ち入つて溺れて死んだ者が數千人あつた。晴賢は、肥え太つて居つて、歩行することが不便であつたので、從者が介抱して、海岸に至つて、船をさがしたけれども、もはや一艘も見あたらなかつたので、とう〳〵自殺して仕舞つた。隆包は、殘つて居る軍勢百餘人を引き連れて、岩穴の中に隱れひそんで居つたが、元就は、其才を惜んで、人をして說諭して降參させやうとしたけれども、隆包は承知せずして死んだ。とかくする中に、晴賢の首が見つかつたので、元就は、嚴重に、旗や太鼓を押し立て、勢揃を爲し、鞭を振り上げて晴賢の首を指して曰ふには、弑害の報として天誅にかゝつた。今如何であるぞと曰ひ、諸軍は、ときの聲を揚げた。かくて、元就は嚴島に留まること十一日にして、軍勢を引き上げて、小潟に引き返し、晴賢の首を洞雲寺に葬つた。

【參考】左に中國治亂記の數節を抄錄して以て參考に資す。

中國治亂記

陶尾張守入道は、安藝の境、周防の岩國へ申す處に在陣あり。其頃陶が領分の中より座頭一人、安藝に來りて久しく在國せり。其頃かの座頭毛利方の軍の方法謀など聞き及び、事悉く陶方へ通じけり。元就は嚴島の城普請も弱々として、何とぞ陶が自身此島へ渡海ありて責められよかし、敵を則ちくひ留め、元就後詰して陶を討ち取るべしと念願ありければ、謀に、或時、かの周防より來る座頭の聞く所にて、元就が老臣ども竊にさゝやきしは、もし陶殿今時など嚴島の城を責められば即時に落ちぬべし。哀れ城普請丈夫に無レ之内に陶出勢なき樣に存ずる計なり。是こそ當方の一難儀たる由、元就仰せらるゝと、座頭この由を陶殿へ通じけゝ。陶是を聞き大に悅び、弘中三河守が方へ、嚴島へ渡海して切り崩すべきや否やを、使者を以て評定す。三河守申すやう、味方大勢なれども、防長の兵は長々しくして、城急に落ち難し。もし其中に元就渡海して後卷あらば、味方の安否たるべし。唯思召し止り給へと申されけれども、陶入道天運盡きけるにや是を用ゐず、防、長、豐、筑四ケ國の人數船數五百艘にて、宇賀島を先手に嚴島へ押し渡る。次第々々に岩國の勢渡海して、陶入道も塔の岡といふ處に陣取り、もし後卷もやあらんと、晝夜の境もなく、人衆を立て替へ〳〵攻めける故に、水の手を掘り切られ、城中難儀、是非なく檐の下へも金はりて入れ、既に落さんとする事度々なり。此由を元就方へ城中より注進ありしかば、元就は二十日市といふ處に陣取り、夫より嚴島の向、火立岩へ打ち出でらる。先づ軍評定とり〴〵也。其時元就の三男小早川隆景を呼び出し、其方何とぞ謀りて嚴島の城に籠り、城中の兵に今三日城落ちざる樣に持ち詰めて防ぐべし。三日の中必ず後卷有るべしと申すべしと有りしかば、隆景一言の辭退も無く、則ち陣所に歸り、網船を誘ひ、船に心得たる侍二人獵師釣人に仕立て、我は船底に隱れて、數百艘の周防の兵船の間をゆる〳〵と魚うりて通りて磯近く成りければ、隆景も櫓を押して城の岸際へ付いて、則ち城に走り入りける。城中には是に力を得て悅ぶ事限無し。其頃伊豫國河野彈正方へ陶よりも加勢兵船給はるべしとの使者再三なり。元就方より河野通直へ使者あり、大船を一日御貸し給はるべし。嚴島へ渡海致して、則ち船を指し戻し申すべし。子細は軍に勝ち候へば、勿論船は不レ入候。唯嚴島へ渡海の中計り借り申すべし〻有りしかば來島の通康、河野殿に申しけるは、船の借りやう面白く候條、軍は元就の勝になるべし。唯元就方へ加勢あるべしと勸めける間、來島、村上、大和守、能島を始として三百餘艘加勢あり。元就大に悅び、弘治元年十月十日に、以ての外大風吹き大雨降りければ、元就吉日は今夜なり、渡海あるべしと觸れらる。風荒く大雨にて、諸船頭も船出し難しと頻に申しけれども、承引無く渡海あり。嚴島のぱくち尾の麓、鼓浦と云ふ處に船を付けゝれば、隆元申しけるは、鼓浦も打ち道具、ぱくち尾の麓も、博奕を打つといへば、敵を討つべき事疑なしと申せば、皆之を聞いて大に勇みける。かゝる所へ、元就の陣の前へ鹿一匹走り來りける。見よ大明神御加護の瑞相とて、甲を脫ぎて禮拜ある。扨諸軍には一日の食計り持つべし。船をば皆人數上りて悉く二十日市へ乘り戻し候へと下知す。諸船頭も、加勢の船も、當島に相詰め御用承るべしと申す。元就、いや〳〵左にあらず、十死一生の軍なれば、勝ちては船はたやすかるべし。萬一に負けば、二度戻るべからずと存じ、手船どもをもつき戻し候とて、皆戻されける。さて諸軍兵糧つかひて、則ち敵陣の上の山へ旗を指し上げ、貝を吹かせ、戊亥の刻に、自身時がしらを上げ、敵の本陣へ切つてかゝる。敵陣には今宵寄すべしとは思はぬ所に、不意に攻められて、塔の岡の尾張守が本陣へ寄る。尾張守も手合すべきやうもなく、船に乘らんと思ひ、大もとの谷へ引き退き、船を尋ねければ、周防の船頭ども、今朝能島、來島が大船共乘り廻り追つ掛けゝれば、驚いて悉く逃れける間、尾張守、手を失ひて、あをのりへ退かれけれども、船頭大濱を始め是も皆返しける間、叶はずして、山々谷々へ逃げかくれけるを、爰に追ひ詰め、かしこに追ひ込み、討たるゝ兵、數を知らず。城中よりも隆景を始め切つて出で、陶が兵大將三浦越中守と隆景と鎧を合せ、三浦越中を討ち取りける。弘中三河守隆包、同子息中務少輔百人計りにて、龍が馬場といふ處にありしを、元就押し寄せ一人も不レ殘討ち取りける。尾張守全姜も叶はずして自害したりしを、首をば小袖に包み、岩の間に押し入れ、其後郎等ども自害しけるを搜し出し、供の侍七人と以上首は八つ有りしを、生捕の者に見せければ、朽葉の小袖に包みしは全姜の首と申し、泪を流しければ、則ち供御に据ゑ、實檢の後、七日市の洞雲寺にて拜禮あり、石塔を立てられける。討死の首三萬と記しける。同十一月朔日より十一日まで嚴島に在陣し、同十二日、小方へ元就歸陣なり。防州方には大内左京大夫義長は、吉見押へに渡川に在陣、内藤隆世は右田嶽、陶中務權大輔隆房は富田の若山に在陣す。玖珂郡の蓮花山には杉杜、倉掛には杉治部大輔隆春在陣也。杉と杉杜とは元就へ降參して人質を遣しけるが、杉は亦富田へ内通しけるを、杉杜差川にて内通の狀を奪ひ取り、元就に見せければ、元就大に悅び、倉掛の城へ押し寄せて攻め落し、杉治部大輔を始めて八百餘人を討ち取り、岩國へ歸陣ありける。今度尾張守が一類不思議に亡びし事、偏に義隆を是非なく討ちし酬なりと人申しける。尾張守討死しけれども、義長方には、陶五郎中務權大輔隆房を尾張守に移任して、富田若山に在陣す。山口には内藤隆世、其外吉見正頼も山口に詰めらる。更に異議ある間敷に、杉七郎正重被レ申しは、伯耆守は陶隆房に討たれ候間、父の敵を討ち申度と義長へ申し入れ、内々毛利へ内通もや有りけん、義長より御返答もなき間に、富田若山へ押し寄せ責めければ、隆房一戰に打ち負け、龍門寺と云ふ會下に入り、終に腹を切り給ふ。是皆主君の天罰なり。

元就既誅晴賢。威震關西。周防人相驚曰。毛利軍至矣。陶長房教義長乞援於大友氏。大友氏弗敢應。十二月。元就進陣岩國。遣隆景徇玖珂郡。至上關。杉重輔爲内應。攻殺長房。將士相疑。皆送款元就。元就聞尼子晴久

窺備後。石見。未敢深入也。乃招降備後豪族山内隆通。又命元春守石見。而自引軍向山口。陶氏故黨以萬人拒煤間城。隆元攻之。城帶泥淖。我兵不利。三年。三月。元就將萬騎發岩國。令士卒人持簀與席。以傳城下。投簀於淖。布席其上。踐以登城。鏖殺其兵。山口騷擾。悉甲拒右田岳。元就與隆元。合兵二萬攻降之。使一將守之而進。吉見正頼來會焉。義長怖。走勝山。於是。元就整諸軍入山口。内藤隆春等迎降。元就遣六千騎。扼長府。下關。以絶大友氏援路。而令福原貞俊攻勝山。殺義長及晴賢季子鶴壽。周防。長門士民。雲集山口。豐前。筑後諸城。又多送降者。元就盡除弊政。免租賦。分邑賞諸將。置戍于下關。門司。三尾。鵠峯四處。四月。凱旋安藝。是時。晴久入備後。數攻隆通。不能下。轉向石見。不敢入而去。十一月。陶氏餘黨起。攻鵠峯。元就將萬人往平之。轉攻周防故將益田藤包于三角城。元春。隆景說曰。藤包勇智不下。正頼。而與之有郤。宜兩存之。使相鈐制。乃招降藤包。

【字解】【玖珂郡】……周防に在り。【上關】……周防に在り。【山口】……周防に在り。【故黨】……もとの一味の者。【煤間城】……周防に在り。【泥淖】……音デイタウ。どろ沼。城の壕の泥深くして沼の如くなるを云ふ。【簀】……音サク。すのこ、竹又は葦を編みたるもの也。【席】……藁なり、むしろ。【傳】……至る、著く、せまる。【鏖殺】……音アウサツ、皆殺しにする。【騷擾】……音サウジヤウ、さわぎ亂れる。【悉甲】……甲をつくす、兵士を殘らず引き連れる。【右田岳】……周防に在り。【勝山】……周防に在り。【扼】……音ヤク、せき止める、くひ止める。【長府】……長門に在り。【下關】……長門に在り。【大友氏】……義鎮なり、豐後に在り。【雲集】……人の多く集ること。【送降】……一に迎降に作る。【戍】……音ジュ、守備兵。【門司】……豐前に在り。【鵠峰】……周防に在り。【三尾】……長門に在り。【鵠峯】……周防に在り。【三角】……石見に在り。【兩存之】……兩家とともに其まゝに保存して置く。【鈐制】……鈐は音ケン、車轄(クサビ)なり。車轄が車を制ずるが如く自由にさせぬを云ふ。三角城の益田藤包と津和城の吉見正頼とを、兩方ともに其まゝに殘しおきて、互におさへあはす。

【講義】元就は、すでに、晴賢を誅戮し、其威勢は、關西地方に震ふた。周防の人々は、相驚いて曰ふには、毛利氏の軍勢が來たと曰つた。陶長房は義長をして援兵を大友氏に乞はしめたけれども、大友氏は敢て之に應じやうとしなかつた。十二月に、元就は進んで岩國に陣取り、隆景を派遣して、玖珂郡をふれ下さしめ、ついで、上の關に至つた。杉重輔が、裏切をなし、長房を攻め殺した。諸の將士どもは、相互に心中を疑ひ合つて、皆、元就に内通した。元就は、尼子晴久が備後、石見を窺つて之を取らうとして居るといふ事を聞いたので、いまだ敢て深く攻め入ることをしなかつた。そこで、元就は、備後の豪族山内隆通を招きて降參させ、又、元春に申し附けて、石見を守らせて置き、そして、自身に軍勢を引き連れて、山口に向つた。陶氏のもとの徒黨どもが、一萬人を以て、煤間城に於て之を拒いだ。隆元が之を攻めたが、この城は、泥沼を以て四方をぐるりと取り卷いて居つて、攻むるに大層不便利であつたので、我が毛利氏の軍勢は、勝利を得なかつた。弘治三年の三月に、元就は、一萬騎の兵士を引き連れて、岩國を出發し、出發するに臨んで、士卒をして、一人ごとに簀(スノコ)と藁(ムシロ)とを持つて行かしめ、以て城下にせまり近づくと、簀を泥沼の上に投げ込んで、藁を其上に敷き、之を踐んで沼をわたり、以て城に攀ぢ上らしめ、其軍勢を皆殺しにした。すると、山口は、爲めに騷ぎ亂れて、甲兵のあらん限りを以て、右田岳に拒いだ。元就は、隆元とともに、兵士二萬人を合はせて、攻めて降服せしめ、一人の大將をして之を守らしめて置いて、進んだ。吉見正頼も、來り會した。義長は、怖れて、勝山に逃げ走つた。こゝに於て、元就は、諸の軍勢を整頓して、山口に入り込んだ。内藤隆春等は、元就の軍を迎へて降參した。元就は、六千騎の兵士を派遣して、長府、下關をくひとめて、大友氏が來り援くべき路を絶ち切り、そして、福山貞俊をして、勝山を攻めしめ、義長及び晴賢の末子なる鶴壽を殺した。周防、長門、兩國の士民は、雲の如く澤山に、山口に來り集まり、豐前、筑後の諸城も、亦降參を申し込む者が多かつた。そこで、元就は、もとの大内氏の施行せる惡しき政治を取り除き、年貢賦役を免じ、領地をそれ〳〵に分ち與へて、諸將を賞し、守備兵を下關、門司、三尾、鵠峯の四箇處に置いて、これを鎮撫せしめ、四月に、安藝に凱旋した。この時に、晴久は、備後に入り、たび〳〵隆通を攻めたが、攻め落すとが出來なかつたので、路を轉じて、石見に向つたけれども、むざとは攻め入らずして、立ち去つた。十一月に、陶氏の殘つて居る徒黨が起つて、鵠峯を攻めた。元就は、萬人の兵士を引き連れて、出かけて往つて、之を平定し、それより道をかへて、周防のもとの大將なる益田藤包を三角城に攻めた。すると、元春と隆景とは、元就に說き勸めて曰ふには、藤包の武勇にして智慮あることは、正頼に劣りませぬ。しかるに、今、正頼と仲が善くありませぬ。されば、藤包と正頼とを兩方ともに其儘に殘して置いて、相互に抑へつけ合はせる樣にするが、宜しう御座りますと曰つた。そこで、元就は、此言葉に從つて、藤包を招き降した。

元就於是盡取大内氏地。遂圖尼子氏。而患尼子國久強悍。謀除之。尼子

經久娶吉川經基女。而元就亦爲其孫女壻。是以託姻戚。數通使幣於國久。晴久頗疑之。義勝之死。其子經貞猶幼。國久攝其邑。及長不返與。經貞啣之。於是。元就令死囚懷書入出雲。殺之道上。行人聚觀。取其書。乃元就與國久約內應者也。晴久獲書大驚。召經貞。問曰。聞新宮黨陰通安藝。汝豈知之乎。經貞媒蘖之曰。臣數見其密使往來。晴久乃伏甲。要殺國久父子。殲其黨。北兵自是弱矣。

【字解】【强悍】……つよくたけし、豪强勇悍。【元就亦爲其孫女壻】……經基嘗て其孫女(國經の女)を以て元就に妻はす。【攝】……總持なり、兼なり、兼ねて治むる。【啣】……ふくむ、怨む也。【死囚】……死刑に處すべき罪人。【行人】……道を行く人。【新宮黨】……國久の黨。【媒蘖】……音バイケツ。媒は酒醪なり、蘖は麴なり。その罪を構成すること。かうじにして酒を釀すが如く、人の罪をこしらへなし、人を惡に陷らしむること。【要殺】……道に待ち受けて殺す。【殲】……つくす、殘らず殺し盡す。【北兵】……尼子氏の兵。

【講義】元就は、こゝに於て、殘らず、大內氏の領地を取り、とうく、尼子氏を打ち滅さんことを圖つた。けれども、元就は、尼子國久の、豪强勇悍なることを氣遣ひ、之を殺し除かんことを巧んだ。尼子經久は、吉川經基の娘を娶り、そして、元就も亦、經基の孫娘の壻(ムコ)であつたので、卽ち經久の妻は元就の妻の叔母に當つて居つたので、それ故に、元就は、緣類の間柄たるにかこつけて、たびく、國久に使者を送り幣物を贈つた。晴久は、そこで、餘程、之を不審に思うて居つた。又、義勝が三猪口に討死したときには、その子の經貞が、まだ幼少であつたので、國久が、其領地を預つて居つたが、經貞が成長するに及んでも、返し與へなかつたので、經貞は、之を怨んで居つた。こゝに於て、元就は、死刑に處せらるべき囚人をして、手紙を懷に入れて、出雲の國內に入らしめ、之を道の上に於て斬り殺した。道行く人々が、寄り集まつて之を觀、その懷に入れて居る手紙を取り出して見ると、それは、元就が國久と裏切を約束した手紙であつた。(これは、言ふまでもなく、元就の僞作である。)晴久は、其手紙を手に入れて、大に驚き、經貞を呼び寄せて、之に問うて曰ふには、新宮の黨がひそかに安藝に內通して居ると云ふ事を聞いたが、貴樣は、之を知つて居るかと曰つた。すると、經貞は、兼て恨ある國久の事なれば、ますく、其罪をこしらへ成して曰ふには、私は、其密使が往來するのを、たびく見ましたと曰つた。晴久は、之を信じて、そこで、兵士を伏せ置きて、國久父子を待ち受けて殺し、其徒黨(卽ち新宮黨)を殘らず殺して仕舞つたので、尼子氏の兵は、これから弱くなつて、振はぬやうになつた。

永祿元年。二月。元就使元春陣出羽。與尼子氏將小笠原長雄。本莊常光戰。未決。神邊城主杉原盛重。來援破之。五月。元就攻降長雄。晴久來救。不及。三年。二月。攻取松山。八月。誘降常光。定石見。是歲。正月。天子行卽位禮。元就獻金助資焉。詔以元就敍從四位下。任大膳大夫。賜菊桐章。尋遷陸奥守。而隆元代之。

【字解】【永祿】……正親町帝の時の年號。【出羽】……石見に在り。【神邊】……備後に在り。【天子】……正親町天皇。【助資】……資は御入用の費用なり。御入費の幾分の御補助をなす。【菊桐章】……章は紋なり。菊桐は、天子の御紋。【尋】……ついで。

【講義】永祿元年の二月に、元就は、元春をして出羽に陣取らしめ、尼子氏の將小笠原長雄、本莊常光と戰つたけれども、未だ勝負が決しなかつた。神邊の城主なる杉原盛重が、來り援けて、之を破つた。五月に、元就は攻めて長雄を降服させた。晴久は、來り救うたけれど、間に合はなかつた。三年の二月に、元就は、攻めて松山を取つた。八月に、元就は、常光を誘ひて降服せしめ、石見を平定した。この歲の正月に、天子樣が御卽位の儀式を行はせられたが、元就は、金を獻上して、其御入費の御補助をいたした。詔して、元就を以て、從四位下に敍し、大膳大夫に任ぜられ、菊桐の御紋章を賜はつたが、間もなく陸奥守に遷され、そして、隆元が、之に代つて大膳大夫に任ぜられた。

十月。入出雲。軍于赤穴。迎降者十餘族。常光爲先鋒。縱火岩坂。常光負功汰虐。元就與元春。隆景。謀曰。彼服可用。而叛不可制。叛於尼子。何有於我。不若速除。十一月。襲殺之。降將因是多叛。五年。十月。元就由白潟入。城于洗合山。去富田七里。建爲本營。築連珠砦。以漸逼富田。迎京師公卿文儒。講書于軍中。以示據久之意。因幡山名氏。伯耆南條氏。嘗爲尼子氏所逐。元就復之。使收其義故。以助攻尼子氏。山名祐豐亦以伯耆來屬。

【字解】【赤穴】……出雲に在り。【負功】……功をたのむ、手柄を鼻にかける。【汰虐】……音タイギヤク。汰は奢る也、虐は殘ふ也、おごりて物をし

へたげそこなふ。【服可用】……降服するときは我が用に立てることが出來る。【制】……制御、おさへつける。【何有於我】……尼子にも叛きしはどなれば、我に何の遠慮があらうぞ、必ず我にも叛かんと也。【白潟】……出雲に在り。【富田】……出雲に在り。【連珠砦】……音レンジユサイ。〳〵さりとりで。砦の連續すること、數珠の珠の如くなるを云ふ。【文儒】……學者。【據久】……長陣。據は一に持に作る。【山名氏】……源十郎豐數。【南條氏】……豐後守宗勝。【義故】……恩義を忘れざる舊臣。

講義 十月に、元就は、出雲に入つて、赤穴に陣取つた。出で迎へて降伏する者、十餘族の多きに及んだ。常光が、先鋒となつて進み、岩坂に火を放つて攻め立てた。常光は、手柄を鼻にかけて、身分不相應なるおごりを爲し、暴虐にして人をしへたげる行爲があつた。そこで、元就は、元春・隆景と、相談して曰ふには、彼れ常光は、服從して居るときは、我が用に立てることが出來るけれども、若し叛き去るときは、容易に制御することの出來る人物では無い。已に尼子氏に叛いて、我に降服したほどの者であるから、我に對して何の遠慮があらうぞ、屹度、我に叛くことがあるに相違ない。速に除き去つて仕舞ふが一番善いと曰ひ、十一月に、不意擊して、之を殺した。是れが爲めに、降參して來た他の諸將は、自ら疑ひ危ぶんで、叛き去るものが多かつた。永祿五年の十月に、元就は、白潟より攻め入つて、洗合山に城を築いた。此處は富田を去ること七里である。此處を本陣とし、〳〵さりとりでを築いて、そしてだん〴〵に富田城に逼ることにし、京都の公卿や學者を呼び迎へて、書籍を陣中に講釋せしめ、久しい閒滯陣する覺悟であると云ふことを示した。因幡の山名氏、伯耆の南條氏は、かつて、尼子氏に逐ひ拂はれたが、元就は、之をもとの領地にかへしてやり、その恩義を忘れぬ舊臣どもを寄せ集めさせて以て自分を助けて尼子氏を攻めさせることにした。山名祐豐も亦、伯耆を以て、來り附いた。

十二月。晴久病卒。其子義久嗣。大友義鎭與義久通好。數攻門司。乃遣隆元。隆景。以蒐餘人赴援。取神田城。留天野隆重守之。隆元留屯岩國。六年。二月。義鎭以二萬人攻神田。不能下。會天使二人至自京都。令我與義鎭和弭兵。隆元乃爲其子輝元約娶義鎭女。又令與義久和。元就疏不可和者十條。辭之。

字解 【門司】……豐前に在り。【神田城】……豐前に在り。【屯】……音トン。屯營す。【天使二人】……勅使二人。將軍足利義輝、奏し請うて、聖護院法親王道澄を安藝に遣はし、久我大納言通興を豐後に遣はし、媾和せしむ。【弭兵】……兵をやむ、戰爭をやめる。【疏】……箇條書にして申し述べる。

講義 十二月に、晴久は、病氣で死んだ。其子の義久が、跡を嗣いだ。大友義鎭は、義久と好みを通じ、たび〳〵門司を攻めた。そこで、元就は、隆元・隆景を派遣し、一萬餘人を引き連れて、出かけて行つて援けしめ、神田城を攻め取り、天野隆重を留めて之を守らしめて置き、隆元は、留まつて岩國に駐屯して居つた。永祿六年の二月に、義鎭は、二萬人の兵士を引き連れて、神田を攻めたけれども、攻め落すことが出來なかつた。折しも、勅使が御二人、京都から到著せられ、我が毛利氏をして義鎭と和睦して戰爭を止めしめられた。隆元は、そこで、その子輝元の爲めに義鎭の娘を娶ることを約束した。勅使は、又、我が毛利氏をして義久と和睦せしめんとせられたけれども、元就は、和睦することの出來ない理由十箇條を述べ立てゝ、之を斷わつた。

七月。隆元撤守歸覲。過吉田。將士勸入城休息。隆元曰。家君衰老。櫛風沐雨。吾何忍休乎。八月。至舟木。和智隆實要而饗之。病作。卒。年四十一。隆元性仁孝。元就嘗罹疾。祈以身代之。其在岩國。大友氏陰招周防。長門將士。將士皆不忍叛焉。元就得訃。慮軍氣沮。出令曰。欲弔亡兒者力戰。自將攻白鹿城。城將松田兵部能拒。乃使銀山礦卒鑿地道。城兵亦鑿而迎之。鬬于穴中。城兵遂塞穴而卻。乃截其汲路。松田盛米于斗。灌注馬足。我軍士視之。以爲水不乏也。九月。義久聞白鹿急。遣弟倫久將萬騎援之。欲動我兵決戰。平旦。來挑戰。元就不應。日晡。倫久將去。元就乃鼓而進。敵敗走。

字解 【撤】……音テツ。除き去る、取りのける。【歸覲】……音キキン。覲は見る也。歸りて父母の安否を問ふ也。【家君】……我が父。元就を指す。【衰老】……年老いて衰弱する。【櫛風沐雨】……音シツプウモクウ。風にくしけづり雨にかみぶす。櫛は髮を理むる也、沐は髮を濯ふ也。奔走して艱苦を受くること。【舟木】……周防に在り。【要而饗之】……無理に引きとめて、之をもてなす。【病作卒】……和智隆實の爲めに毒せられしなりと云ふ。【罹】……遭ふ也、かゝる。【訃】……音フ、喪を告ぐる也。死去の報知。【軍氣沮】……沮は、はゞむ。軍勢の氣力が衰へる。【白鹿城】……出雲に在り。【銀山】……石見の大森に在り。【礦卒】……坑夫、かねほり。山を穿ちて礦を取る者。金玉の未だ器と成らざるものを礦と云ふ。【鑿地道】……地中に抜け穴を掘り穿つ。【截其汲路】……その水を汲む路を絶ち切る。【斗】……ます、升。【灌注馬足】……灌注は、

音クワンチウ。そゝぎかける也。馬の足に米を注ぎかけるに、遠方より見るときは、米の白きが水のやうに見えたるが故に、水に乏しからずと思ひし也。【動我兵】……我が軍勢を動搖させる。【平旦】……夜あけ。【日晡】……音ニッポ。日暮。

講義　七月に、隆元は、岩國の守備を除き去って、歸って父元就に面謁して安否を問はうとして、その路すがら、吉田を通過した。將士どもは、一時城内に入って休息せられよと勸めた。すると、隆元が曰ふには、我が父上は年老い衰弱せられて居るのに、風雨にさらされて、骨折って居られる。之を思へば、吾は、どうして休息して安逸を貪るに忍ばれやうぞと曰った。かくて、八月に、隆元は、舟木に到著すると、和智隆實が、強ひて引きとめて、之をもてなした。そして、隆元は、病氣が起って死んだ。その年は四十一歳であった。隆元は、その性質、仁愛の情に厚く、父母に事へて至孝であった。元就が、あるとき、病氣に罹ったことがあったが、隆元は、自分の身を以て父の病氣に代らんことを祈った。隆元が岩國に居ったときに、大友氏は、ひそかに、毛利氏に屬して居る周防、長門の諸將士を招いたが、將士どもは、皆、隆元の仁孝なるを思うて、叛き去るに忍びなかったと云ふことである。元就は、隆元の死去の報知を得て、軍勢の志氣の衰へんことを心配して、命令を出して曰ふには、わが死んだ子供（即ち隆元）を弔はうと思ふ者は、力を盡して戰（よと曰ひ、自身に、大將となって、白鹿城を攻めた。城の守將なる松田兵部は、なか〳〵巧に拒ぎ戰った。そこで、元就は、銀山の坑夫を引き連れて來て、地下に拔け道を掘らせた。城兵は、之を悟って、亦拔け道を掘って之を迎へ、穴の中に於て鬪ったが、城兵は、とう〳〵、穴を塞ぎ止めて退却した。そこで、元就は、城兵の水を汲むべき路を絶ち切った。すると、城將松田は水の乏しからざるとを敵軍（即ち毛利氏の軍）に示さうと思うて、米を斗（マス）に一ぱい盛って、馬の足に注ぎかけた。我が毛利氏の軍士は、之を見て、城中は水に乏しくないと思うて、水汲みの路を絶ち切ることを止めた。九月に、義久は、白鹿城の危急なることを聞いて、弟の倫久を派遣して一萬騎を引き連れて、之を援けしめた。倫久は、我が軍勢を動搖させて、勝負を決しやうと思うて、夜明け頃に、來って戰を仕掛けた。けれども、元就は、應戰しなかった。日暮れんとする頃に至って、倫久は、將に兵を引き上げて去らうとした。元就は、其すきまに附け込んで、攻大鼓を鳴らして進擊した。敵軍は敗れて逃げ走った。（是れは、敵の立ち去らうと思ふ虛に附け込んだので、容易く勝利を得たのである。孫子の所謂鋭氣を避けて惰歸を擊つ者である。）

先是元就遣香川光景助三村家親。略備中。滅吉田氏。七年。三月。入伯耆。幷南條。行松氏兵。絶富田糧道。會行松死。杉原盛重受命攝其家事。初盛重爲杉原忠興家臣。忠興據神邊。拒我兵。終降。及其死。元就命盛重爲之嗣。盛重嘗製陣法。以弓翼槍。與富田兵。戰湖上。再克之。又收盜賊爲兵。有佐田某焉。妙於間諜。故盛重善知敵情。數有功。後徙八橋城。八年。二月。隆元子輝元。與元春子元長。共來洗合。四月。熊谷信直擁元長。進擊走龜井安綱。八月。盛重拔江美。九月。家親拔大江。元就乃起石原。龍山等十二寨。以環富田。謀竭其糧也。置關四外。榜曰。必殲之。毋使一人遁。已而度糧盡。則撤關叟。榜曰。降者釋之。城兵逃降相踵。當是時。義久寵臣大塚某。與義久嬖姬相結。以讒諸將通款於我。九年。正月。卯山久信被誅。諸將皆懼。出降。獨河副。森脇等三百人不降。元就有疾。招降義久。七月。義久遂致城降。賞之安藝長田。元就圍富田。前後七年而降之。擇其守將。衆推天野隆重。乃命隆重守焉。振旅而還。

字解　【南條】……左衞門尉元次。【行松】……左兵衞盛正。【翼】……輔く。【湖上】……出雲の宍道（シンヂ）湖。【佐田某】……彦四郎。【妙於間諜】しのびの上手。敵陣にしのび入りて内情を探るに妙を得て居る。【八橋】……伯耆に在り。【江美】……出雲に在り。【大江】……出雲に在り。【石原】……出雲に在り。【龍山】……出雲に在り。【環富田】……四方より富田城を取り卷く。【四外】……城外の四方。【榜】……音バウ。標榜なり、かけ札。【殲】……つくす、殘らず殺し盡す。【撤】……音テツ。除き去る。【更榜】……榜をあらたむ。かけ札をかへる。【釋】……ゆるす。【踵】……接ぐ也、引きつゞく。【河添】……美濃守。【森脇】……長門守。【眞】……置く。【振旅】……振は整なり、旅は衆なり。勢揃へする。

講義　これより先に、元就は、香川光景を派遣して、三村家親を助けしめて、備中を切り取り、吉田氏を滅ぼした。永祿七年の三月に、元就は、伯耆に入り、南條、行松氏の軍勢を合はせて、富田城の兵糧運送の路を絶ち切った。折しも、行松氏が死んだので、杉原盛重が、元就の命令を受けて、行松家の事務一切の事を兼ね行うた。はじめ、盛重は、杉原忠興の家來であったが、忠興が神邊に立てこもって、我が毛利氏の軍勢を拒いだけれども、仕舞には降參し、忠興が死ぬるに及んで、元就は、盛重に命令して、忠興の跡嗣としたのである。盛重は、かって、陣立ての法をこしらへて、弓手の兵を以て槍の隊を助けることにし、富田の軍勢と、宍道湖のほとりに戰って、二度、之に勝利を得た。又、盛重は、盜賊を召し寄せて兵士としたが、佐田某といふ者があって、敵中に忍び入って敵の事情を知って、たび〳〵手柄があったのである。盛重は、後に、八橋の城に徙された。八年の二月に、隆元の子なる輝元は、元春の子な

る元長と、もに、洗合に來つた。四月に、熊谷信直は、元長をもり立てゝ、進擊して、龜井安綱を敗走させた。八月に、盛重は、江美を攻め落した。九月に、家親は、大江を攻め落した。元就は、そこで、石原、龍山などの十二のとりでを築き上げて、富田城をぐるりと取り卷き、早く其兵糧を無くして仕舞はうと巧んだので、關所を城外の四方に設けて、かけ札をかゝげて曰ふには、城兵をば屹度之を皆殺しにせよ。一人を遁れしめては相成らぬぞと曰つた。とかくする中に、城中の兵糧が竭きた頃であると思うて、そこで、關所を取り除き、かけ札を改めて曰ふには、降參する者は赦してやらうと曰つた。そこで、城兵の逃げたり降つたりするものが、引きつゞいた。この時に當りて、義久の氣に入りの臣下なる大塚某は、義久の氣に入りの妾と結託して、諸將が我（卽ち毛利氏）に內通して居ると讒言した。九年の正月に、卯山久信が誅せられたので、諸將は、皆、おそれ危んで、出でゝ降參した。たゞ、河副、森脇など三百人の者が、降參しなかつたゞけである。元就は病氣に罹つて滯陣することが出來ぬやうになつたので、そこで、義久を招き降した。七月に、義久は、とう〳〵、城を明け渡して、降參した。元就は、義久を安藝の長田に置いた。元就が、富田城を圍むこと、前後七年にして、之を降參させたのである。そこで、元就は、その守備の大將を擇ぶと、皆々は、天野隆重を推擧したので、そこで、隆重に命じて、富田城を守らしめて置き、軍隊の勢揃をして凱旋した。

元就既幷大內。尼子二氏地。定山陰。山陽十三州。命元春掌山陰。隆景掌山陽。遂令二將略地於南海。西海。當是時。南海有長曾我部。宇都宮。河野氏。西海有大友。島津。龍造寺氏。十一年。宇都宮豐綱攻河野通直。通直來乞援。二月。元春。隆景將兵數萬。入伊豫。拔一城。圍豐綱于大津。長曾我部元親將萬人來援豐綱。軍于柳原。乃令宍戶隆家當之。而諸軍攻降豐綱。元親引去。元春。隆景以六旬定伊豫。還。誅和智隆實于嚴島。以隆元之死有蹤跡也。當是時。筑紫豪傑高橋。宗像。秋月諸族。皆屬元就。大友義鎭數攻之。十一月。元春。隆景。與元長。將五萬人赴援。拔三岳。

【山陰山陽十三州】……十六國の內、丹波、丹後、播磨を除く。【掌】……つかさどる。【南海】……土佐に長曾我部元親、伊豫に宇都宮豐綱、河野通直あり。【西海】……豐後に大友義鎭、薩摩に島津義久、肥前に龍造寺隆信あり。【大津】……伊豫に在り。【柳原】……伊豫に在り。【六旬】……六十日。【以隆元之死有蹤跡】……蹤跡は音ショウセキ、跡方。隆實嘗て隆元を饗し、隆元病起つて卒したれば、蓋し毒殺せしとの嫌疑あるが故に、かゝる云ふ。【高橋】……三河守鑑種。【宗像】……重綱。【秋月】……長門守種實。【三岳】……筑前に在り。

【參考】元就は、すべて、大內、尼子の二氏の領地を合併し、山陰道、山陽道の內十三箇國を平定し、元春に命令して、山陽道の事を掌らしめ、隆景に命令して、山陽道の事を掌らしめ、遂に此二人の大將をして、南海道、西海道の土地を切り取らしむることにした。是の時に當りて、南海道には、長曾我部氏、宇部宮氏、河野氏があるし、西海道には、大友氏、島津氏、龍造寺氏があつて、勢力があつた。永祿十一年に、宇都宮豐綱が河野通直を攻めたので、通直は、來つて援兵を毛利氏に請うた。二月に、元春と隆景とは、兵士數萬人を引き連れて、伊豫に打ち入り、二城を攻め落し、豐綱を大津に圍んだ。長曾我部元親は、一萬人の兵士を引き連れて、來つて豐綱を援け、柳原に陣取つた。そこで、味方は、宍戶隆家をして元親に當らしめて置き、そして、我が諸軍は、攻めて豐綱を降參させた。そこで、元親は、引きあげて立ち去つた。かくて、元春、隆景は、六十日を以て伊豫を平定して引き返し、和智隆實を嚴島に於て誅殺した。これは隆元の死んだのに隆實が毒殺したらしい跡方があつたからである。この時に當りて、筑紫の豪傑なる高橋、宗像、秋月の諸族は、皆、元就に附き從つたので、大友義鎭は、たび〳〵之を攻めた。十一月に、元春、隆景は、元長とともに、兵士五萬人を引き連れて、出かけて行つて之を援け、三岳を攻め落した。

十二年。四月。遂圍立華城。義鎭方攻龍造寺隆信于佐賀。聞之。與隆信和。五月。使其二將將兵七萬援立華。我軍作塹壘。再戰破之。元就攜輝元。往長門。遙爲聲援。尼子氏遺臣山中幸盛。立原之綱等。在京師聞之。索故尼子誠久子爲僧者。爲主。冠名勝久。糾但馬海賊。入隱岐。六月。入出雲。取新山。末次。攻富田。天野隆重有兵三百。佯降。誘其兵二千于城下。擊破之。七月。敵設伏而誘隆重。隆重諜知。雨射伏中。又破之。元就聞浮田氏應勝久。遣香川光景定美作。令元春。隆景疾攻下立華。送致城兵于西軍。西軍猶與我相持。九月。故大內義興庶兄輝弘。寓大友氏。借兵五千。海路入周防。攻鵠峯。元就命班外師。十月。置戍班師。以吉見正賴爲殿而

退。至若松渡。取土人質。使具船以濟。乃令戍兵致城而還。遣兵援鵠峯。逐輝弘。殺之。

【字解】【立華城】……筑前に在り。【佐賀】……肥前に在り。【塹壘】……音ザンルヰ。塹濠(ホリ)と壘寨(トリデ)。【擊援】……はるかに加勢する。西海へ攻め込むと風聞して援けとする也【山中幸盛】……鹿之助。【立原之綱】……源太兵衛。【索】……もとむ、さがす。【誠久子爲僧者】……南禪寺に在りしと云ふ。【糾】……音キウ。寄せ集める。【諜知】……音テフチ。間諜(シノビノモノ)によりて之を知る。【雨射伏中】……伏兵の中へ雨の降るが如く矢を射る也。【西軍】……大友氏の軍勢。【故大内義興庶兄輝弘】……校刻本に云ふ、陰德太平記等の書には、輝弘は政弘の子、義興に於て義弟となす。逸史には義興の季父に作る。是とす。西國太平記には、義興の孫に作る。蓋し誤ならんと。【寓】……寄寓する。【班】……還す。【外師】……國外に在る軍勢。元春、隆景が筑紫に引き連れ居るものも云ふ。【戍】……音ジュ。守備兵。【殿】……しんがり。【若松渡】……筑前に在り。【取土人質】……質は音チ、人質なり。土地の人々より人質を取り置く。これば、舟に計略あらんことを疑ひたればなり。【戍兵致城而還】……渡をわたし終れば、心がゝりなき故に、城を敵にかへさせし也。

【講義】永祿十二年の四月に、我が毛利氏の軍は、遂に立華を圍んだ。義鎭は、其時に丁度、龍造寺隆信を佐賀に攻めて居つたが、此事を聞いて、隆信と和睦し、五月に、その部下の大將二人をして、兵士七萬人を引き連れて、立華を援けしめた。我が軍は、堀をほり、とりでを築いて、二たび戰つて之を破つた。元就は、輝元を召し連れて、長門に出かけて行き、はるかに加勢をなした。尼子氏の遺つて居る家臣なる山中鹿之助幸盛、立原源太衞之綱等は、京都に居つて、此爭亂を聞き、故の尼子誠久の子にして坊主となつて居る者をさがし出して、之を主人と仰ぎ、名を勝久と改めしめ、但馬の海賊を寄せ集めて、隱岐に打ち入り、六月に、出雲に打ち入り、新山、末次を攻め取り、富田を攻めた。富田の守將なる天野隆重は、僅に兵士が三萬人あつたが、いつはり降參して、尼子氏方の軍勢二千人を富田城下に誘ひ寄せて、之を擊ち破つた。七月に、敵(尼子氏方)は、伏兵を設けて置いて、隆重をおびき寄せやうとしたが、隆重は、聞者をはなつて之を知つたので、伏兵の匿れて居る所に向つて、雨の降るが如くに矢を射かけて、又、之を破つた。元就は、浮田正家が勝久に味方したといふことを聞いて、香川光景を派遣して、美作を平定せしめ、元春隆景に命じて、急速に攻めて立華城を降さしめ、城兵をば西軍の方に送り屆けしめた。西軍は、それでも猶ほ、我と對陣して引き取らなかつた。九月に、もとの大内義興の妾腹の兄なる輝弘は、大友氏に厄介になつて居つたが、五千人の兵士を借り、海路を舟に乘つて、周防に打ち入り、鵠峯を攻めた。すると、元就は、命じて、國外に出征して居る軍勢を引き返さしめた。十月に、元春、隆景等は、立華城に守備兵を置いて、軍勢を引き返し、吉見正頼を以て、しんがりと爲して、引き退き、若松の渡に至り、土地の者共から人質を取つて、そして、舟を用意させて、以て軍勢を濟し、そこで、守備兵をして、立華城を敵に引き渡して還らしめ、そして、兵士を派遣して、鵠峯を援け、輝弘を逐ひ拂つて、之を殺した。

元龜元年。正月。元春。隆景將兵一萬五千。輔輝元。攻勝久。恐其城守也。宣言兵寡將納糧富田而還。山中幸盛聞之。悉甲五千。出于布辨山。我兵擊大破之。元春攻末次。夜列炬其面。而自背襲之。勝久。幸盛走新山。諸城連陷。

【字解】【元龜】　正親町帝の時の年號。【城守】　城に立てこもつて守る。【炬】……音キョ、たいまつ。【連】……しきりに、引きつゞいて、つゞけざまに。

【講義】元龜元年の正月に、元春、隆景は兵士一萬五千人を引き連れて、輝元を輔佐して、尼子勝久を攻めた。元春、隆景は、勝久が城に立てこもつて守ることを氣遣つたので、我が兵士は少數であるので、兵糧を富田城に送り込んで置いて、引きかへさうとするのであると、言ひふらした。山中幸盛は、之を聞いて、甲兵五千人を殘らず引き連れて、布辨山に出で、陣取つた。我が毛利氏の兵は、擊つて大に之を破つた。元春は、末次城を攻めたが、夜、其前面に松明をともし列ねて、我が軍勢が其處に居るやうに見せ掛けて置いて、そして、城の背面から、之を不意擊ちした。勝久、幸盛は、新山に走つた。尼子氏に附いて居つた諸城は、引きつゞいて、落城した。

八月。元就患瘍。輝元。隆景歸省之。二年。六月。病篤。輝元請遺言。元就曰。汝視二叔猶我。勿違其言。則可以守我業矣。吾復何言。遂卒。元就善歌詠。有遺集若干卷。嘗酒酣。慨然言曰。凡英雄以身繫天下治亂者。求友於千載之上。即同世而生。志合則天下治。志不合則天下亂。嘗問左右曰。吾於前世人主。可比於誰。有一儒士。對曰。可比周文武。元就笑曰。吾乃今知不若文武也。文武之臣。豈有面諛如汝者哉。元就得一州則擇守將。輒誡之曰。吾聞侮其人者。不有其土。汝服膺此言。故新附士民少倍畔者。

【字解】【瘍】……音カク。癌と同じ。食物の咽を通りかぬる病なり。【歸省】……家に歸つて親を見舞ふこと。【病篤】……病氣が危篤なること。【二

叔】……二人の叔父、卽ち元春と隆景。【繫】……かゝる、關係する。【周文武】……周の文王、名は昌、聖德あり、太公望を擧げて師となし、殷の紂王に事ふ、紂王、昌を以て西伯となす、昌德政を修め、天下を三分して其二を有つて、猶ほ殷に服事す。周の武王、名は發、文王の子、能く文王の志を繼ぎ、遂に紂王を滅し、以て天下を有てり。【面諛】……音メンユ。口諛うて心然らざるを面諛と云ふ。眼の前にて へつらふこと。【服庸】……音フクヨウ。服は著くる也、庸は胸なり。之を心胸の間に著けて能く守るを云ふ。しかと心にかけて大切に守ること。【倍畔】……そむく。

訓義 八月に、元就は、稿といふ病氣にかゝつたので、輝元、隆景は、國に歸つて之を見舞うた。元龜二年六月に、元就の病氣が危篤になつた。輝元は、何か御遺言は御座りませぬかゝ問うた。すると、元就が曰ふには、汝は、二人の叔父を視ること、丁度我を視るが如くにして、その言葉に背かぬやうにせよ。さうするときは、汝は、我が此事業を守つて行くことが出來るのである。吾は、その外に、何も申し遺すべきことは無いと曰つた。かくて、とう〳〵死んだ。元就は、歌を詠むとが上手であつて、遺稿の歌集が若干卷ある。元就は、あるとき、酒宴の最中に、慨然として嘆息して曰ふには、すべて、英雄にして、其身が天下の治亂に關係あるところの者は、友とすべき人が今日に無いときは、友を千載の上に求めて、古人を友とするのである。若し友とすべき人が、同時代に生れて居つて、我と彼との志が一致するときは、力を合はせて天下を經營する故に、天下が治つて泰平となるけれども、若し彼と我との志が一致せぬときは、相爭ふ故に、天下は亂れるのであると曰つた。又、元就は、あるとき、左右に侍坐して居る者に問うて曰ふには、吾は、前代の人の主君たる者に於ては、誰にくらぶべきものであるかと曰つた。一人の儒者があつて、答へて曰ふには、周の文王、武王にくらぶべきで御座りますと曰つた。すると、元就が曰ふには、吾は、今にして、自分が文王武王にとても及ばぬことを承知した。文王、武王の臣下には、どうして、人の面前に於て諛ふこと汝の如き者があらうぞ、汝の如き面諛の臣があるのは、吾が文王、武王に如かざる證據であるとの意と曰つた。又、元就は、一つの國を取るときは、其國の守將たるべき人を擇び、すでに其人を得るときは、いつでも、之を誡めて曰ふには、吾聞くに、其土地の人民を輕んじ侮るものは、其土地を所有することは出來ぬといふことであるが、汝は、よく〳〵氣を著けて、此言を大切に守れと曰つた。それ故に、新に附き從つた將士人民中に、叛き去る者は、至つて少かつた。

元春得レ訃哭泣。謂二將士一曰。葬奠之任隆景在焉。吾當二剿レ敵以慰二靈魂一。是時。幸盛在二末石一。元春乃稱レ攻二大山僧徒一。而急還攻二末石一。幸盛出降。僞レ疾。自厠中逃。八月。元春攻二新山一。走二勝久一。勝久匿二京師一。幸盛爲二盜但馬。因幡間一。遂與二勝久一偕歸レ於二織田信長一。

字解 【訃】……音フ、死去の報知。【葬奠之任】……葬奠は音ヲウテン。葬つたり祭つたりする役目。【剿】……音セウ。絕つ、殺し絕やす。【末石】……出雲に在り。【大山】……伯耆に在り。【厠中】……音シチウ。便所の中。【偕】……ともに。

訓義 元春は元就死去の報知を得て、大層悲しみ泣いて、さて曰ふには、葬をなし祭を爲すの役目は、隆景が居るから、彼が引き受けて くれるであらう。吾は、軍を進めて敵を討ち滅ぼし、以て父上の靈魂を慰め奉るべき筈であると曰つた。この時に、山中幸盛は、末石に居つたので、元春は、そこで、大山の坊主を攻めるのであると稱へ、敵に油斷させて置き、そして、急に引き返して、末石を攻めた。幸盛は、出で來つて降參したが、病氣であると僞つて、便所の中から逃げ出して仕舞つた。八月に、元春は、新山を攻めて、勝久を敗走させた。勝久は、京都に隱れひそんで居り、幸盛は、但馬、因幡の間に於て、盜賊をなして居つたが、遂に、勝久とともに、織田信長の所に往きて身を寄せた。

初信長起二尾張一。略二取近畿一。武田信玄。上杉謙信。割二據其東一。皆通二使於一元就。欲レ夾二攻信長一。謙信特勸二將軍義輝一。召二致元就一。元就羅レ疾不レ答。三年。二月。元春。隆景。遣二使答一之。天正元年。信長攻二將軍義昭一。輝元與二二叔一議。遣二安國寺僧惠瓊一。爲和二解之一。義昭免。走二紀伊一。二年。正月。尼子勝久借二織田氏兵一。入二因幡一。陷二鳥取城一。城本屬二山名豐國一。爲二武田氏所一奪。豐國欲レ復レ之。因黨二勝久一。其部將大坪一之諫レ之。不レ聽。一之乃來奔。八月。元春。隆景。大擧入二伯耆一。降二豐國一。逐二勝久一。義昭之奔二紀伊一。逐西依二浮田直家一。直家弗レ禮。乃來二備後一。自託於二輝元一。輝元謀レ於二二叔一。遂與二織田氏一絕。計レ納二義昭於京師一。

字解 【近畿】……音キンキ。畿內の近傍。【割據】……音カツキヨ。土地をさき取りて立てこもる。【遣使答之】……承知の旨を答へしなり。【天正】……正親町帝の時の年號。【二叔】……二人の叔父。元春と隆景。【浮田直家】……備前に在り。

訓義 はじめ、信長は、尾張から起つて、畿內の近傍の諸國を切り取つた。武田信玄と上杉謙信とは、其東の國々に割據して居り、いづれも皆、使者を元就の所に遣つて、信長を東西より夾み攻めやうとした。謙信は、特別に、將軍義輝に勸めて、元就を京都に召し寄せやうとした。その時に、元就は、病氣に罹つて居つたので、何等の返答をもしなかつた。元龜三年の二月に、元春、隆景は、使者を遣つて、承知の旨を返答した。天正元年に、信長は、將軍義昭を攻めた。すると、輝元は、二人の叔父卽ち元春、隆景と相談して、安國寺の僧惠瓊を派遣して、義昭の爲めに之を仲直りさせた。義昭は、難をさけがれて、紀伊に逃げ走つた。二年の正月に、尼子勝久は、織田氏の軍兵を借りて、因幡に打ち入り、

鳥取城を攻め落した。鳥取城は、もと、山名豐國に附屬して居たものであるが、武田氏に奪ひ取られたので、豐國は、これを取り返さうと思うて居つたので、因つて勝久に一味した。其部下の大將大坪一之が、之を諫めたけれども、豐國は聞き入れなかつたので、一之は、そこで、我が毛利氏の所に逃げ込んだ。八月に、元春と隆景とは、大兵を引き連れて、伯耆に入り、豐國を降參させ、勝久を逐つ拂つた。義昭は、紀伊に出奔したけれども、意の如くならなかつたので、遂に、西に行つて、備前の浮田家にたよつたが、直家は義昭を禮遇しなかつたので、そこで、義昭は、備後に來り、自身に輝元に遇うて、萬事を賴み込んだ。そこで、輝元は、二人の叔父に相談して、とう〳〵織田氏と絶交して、義昭を京都に入れることを工夫した。

先是。三村家親爲盜所殺。蓋直家所使也。直家爲浦上氏將。終篡其備前。美作。浦上宗景。與家親子元親。皆請我兵。討直家。直家懼。亦因僧惠瓊。請滅二氏。約以備中賂我。元親族親成。告元親通織田氏。宍戸隆家勸隆景討之。三年。夏。圍元親于松山。滅之。元親宗家穗田氏。前爲直家所滅。於是。使元就第五子元清爲穗田氏後。居中山城。以鎭備中。

【字解】【篡】……奪ふ。【宗家】……本家。

【語釋】これより先に、三村家親は、賊の爲めに殺された。これは、直家が賊を使嗾して殺させたのだと云ふことである。直家は、浦上氏の部下の將であつたが、仕舞に、浦上氏の領地なる備前、美作を奪ひ取つた。そこで、浦上宗景と、家親の子なる元親とは、いづれも皆、我が毛利氏の兵を請うて、直家を討つた。直家は懼れて、これも亦、安國寺の僧惠瓊によつて、三村、浦上の二氏を滅ぼさんことを請うて、備中を毛利氏に賄賂として差し出さうと約束した。元親の一族なる孫兵衞親成は、元親が織田氏に內通して居ると告げた。宍戸隆家は、隆景に勸めて、元親を征伐することにし、三年の夏に、隆景は、元親を松山に圍み攻めて、之を滅ぼした。元親の本家なる穗田氏は、以前に、直家に滅ぼされて仕舞つたが、こゝに於て、元就の第五男なる元清をして、穗田氏の後嗣とならしめ、中山城に居つて、そして備中を鎭撫せしめた。

信長方攻一向僧徒于大坂。大坂來乞援。元春。隆景遣兵援之。又餽糧船六百。以兵艦三百。護送之。七月。至木津川。能島。來島氏。與織田氏水軍戰。破之。奪其二大艦。納糧而返。先是。讚岐香川氏。淡路菅氏。皆來屬我。五年。香川氏與國人戰。來乞援。七月。遣穗田元清。浦宗勝赴之。破土佐援師。宗勝還。掠播磨海濱。與國人黑田孝高戰而還。

【字解】【一向】……淨土眞宗。【餽】……おくる。【木津川】……大坂に在り。【香川氏】……中務少輔。【菅氏】……平右衞門。【黑田孝高】……如水と號す。

【語釋】信長は、其時に丁度、一向宗の坊主共を大坂に攻めて居つた。その大坂の坊主共は、使を我に遣して援兵を乞うた。そこで、元春、隆景は、兵士を派遣して之を援けしめ、又、兵糧を積んだる船六百艘を贈り、兵艦三百艘を以て、之を護衞して送つたが、七月に、木津川に到著し、能島氏と來島氏とは、織田氏の舟いくさと戰つて、織田氏の大船二艘を奪ひ取つて、無事に兵糧を大坂に入れて引き返した。これより以前に、讚岐の香川氏、淡路の菅氏は、いづれも皆、來つて我が毛利氏に附いた。天正五年に、香川氏は、その國の人（卽ち讚岐の國人）と戰つて、我が毛利氏に援兵を乞うたので、七月に、穗田元清と浦宗勝とを派遣して、援けに行かしめ、土佐の長曾我部氏よりの敵の救援軍を破つた。宗勝は引き返しながら、播磨の海濱の民家を掠奪し、播磨の國人黑田孝高と、戰つて引き返した。

孝高導織田氏將羽柴秀吉。攻別所氏于三木。尼子勝久爲先鋒。出山陽道。取上月城。城屬浮田直家。直家乞援於隆景。欲復之。當是時。丹波。但馬豪傑。使使請元春來襲。京師。元春遣兒玉春種。先往詗之。會隆景書至。欲與俱赴上月。元春答曰。卿合直家兵。可得四萬。不必須我。我收管內。亦可得三萬。留其五千備大友氏。以其餘援丹波。但馬兵。上愛宕山。以瞰京師。信長與吾相持。不能援上月。上月陷。則荒木村重。別所長治。必助我以逐秀吉。於是。卿輔輝元。直入大坂。與我夾攻京師。以納將軍。隆景

曰。是危道也。村重意未可必。而兄弟相離。夾之而東。恐變起其間。先戮力陷上月。然後分道東上。爲未晚也。因敎輝元召元春。元春從之。六年。二月。元春。隆景合兵圍上月。直家稱疾。出其兵一萬五千會師。四月。秀吉與村重。合兵四萬來援。陣高倉山。我軍作塹柵自守。杉原氏間。夜入秀吉陣。獲首級者數。東軍懼。五月。信長欲自來援。先遣長子信忠及諸將。援秀吉。兵凡十萬人。元長請元春曰。信長自來。則兵衆令一。不可敵。今秀吉。村重等爭功不和。天雨月黑。宜夜襲之也。元春使之謀隆景。隆景曰。擧信長全兵。不過二十萬。東備武田。上杉。西備大坂。雜賀。減六七萬焉。而見在此者十萬。卽自來二三萬而已。我以七萬當之。何必恐也。且我自北路襲。地形不便。自南路襲。浮田氏心難測。皆非萬全之策。不若固壁毋戰。彼兵衆而糧不繼。將自去矣。乃止。

【字解】【別所氏】……小三郎長治。【三木】……播磨に在り。【上月】……播磨に在り。【詗】……うかゞふ、樣子をうかゞひさぐる、偵候する也。【須】……まつ。【愛宕山】……京都の西に在り。【瞰】……うかゞふ、見おろす。【意未可必】……その心底は未だ十分にあてにすることは出來ぬ。【兄弟相離】……元春の策なる、元春と隆景と相離るゝこと。【戮力】……力をあはす。【晚】……おそし。【高倉山】……播磨に在り。【塹柵】……音ザンサク。塹濠と木柵。はり、矢來。【十萬人】……一に人の字無し。【令一】……號令一途に出づる也。【大坂雜賀】……共に一向の賊なり。雜賀は紀伊に在り。【見】……現在。【卽】……もし。

【講義】孝高は、織田氏の大將羽柴秀吉を案内して、別所氏を三木に攻めた。尼子勝久が、先陣となつて、山陽道に討つて出で、上月城を攻め取つた。その城は、浮田直家に附屬して居つたものであつた。そこで直家は、援兵を隆景に乞うて、之を取りもどさうと思うた。この時に當りて、丹波、但馬の豪傑どもは、使を遣はして、元春に、來つて京都を襲ひ攻めるやうにと請うた。そこで、元春は、兒玉春種をして、先づ京都に行つて其樣子をうかゞひ探らしめた。折しも、隆景よりの手紙が到著したが、その手紙の趣意は、ともに上月に出かけて行きたいと云ふことであつた。すると、元春は、返事をして曰ふには、御身は、直家の軍勢を一處にするときは、四萬の軍勢を得ることが出來るであらうから、上月に赴くのに、是非とも我が援を必要とするでもありますまい。われも、管轄内の兵士を取りまとめるときは、三萬人の軍勢を得ることが出來るだらう。そこで、われは、其内の五千人を留めて、大友氏の來襲に備へ、その餘の兵を以て、丹波、但馬の豪傑どもの兵を援けて愛宕山に上つて京都を見おろすときは、信長は、われと、對陣して睨み合つて居ることに成つて、上月を援けに出かけることは出來ぬであらう。上月城が落城するときは、荒木村重、別所長治は、屹度、味方を助けて、秀吉を逐ひ拂ふであらう。そこで、御身は、輝元を輔佐して、直に大坂に打ち入り、我と、京都なる織田氏を夾み攻めて、そして將軍義昭公を京都に御入れ申すことに致さうと曰つた。すると、隆景が曰ふには、これは、危險なる仕方である。村重の心底は、未だ十分にあてにすることは出來ぬ。然るに、我等兄弟が東西に相離れて、この十分にあてにすることの出來ぬ者を力と恃みて東に向つて進んだならば、恐らくは、事變が其中間に起るかも知れない。されば、先づ力をあはせて上月を攻め落し、然る後に道を分つて東に向つて上り進むとも、未だ遲くはないのであると曰ひ、因つて、輝元をして元春を召し寄せしめたので、元春は之に從つた。天正六年の二月に、元春、隆景は、兵を合はせて上月を圍んだ。直家は、病氣であると申し立てゝ、其兵士一萬五千人を繰り出して、元春、隆景の軍勢に會合せしめた。四月に、秀吉は、村重と、兵士四萬人を合はせて、來つて上月城を援け、高倉山に陣取つた。我が毛利氏の軍は、はりを掘り、矢來を結つて、自ら守つた。杉原氏の間者が、夜、秀吉の陣屋の中に入り込んで、敵兵の首級を斬り取つて來たこと、度々であつたので、東軍（織田氏の軍）は恐れた。五月に、信長は、自身に來つて援けやうと思うて、先づ長子信忠及び諸將を派遣して、秀吉を援けしめ、その兵士は凡そ十萬人であつた。元長は、元春に請うて曰ふには、この後、信長が自身に來るときは、兵數も多くなり、號令も一途に出でゝ統一せられることに成つて、とても敵することは出來ぬで御座りましやう。しかるに、只今では、秀吉、村重等が、互に手柄を爭うて和合して居りませぬし、且つ又、空は雨が降つて月は暗う御座りますから、夜に乘じて之を不意擊するが、宜しう御座りますと曰つた。すると、元春は、元長をして此事を隆景に相談せしめた。隆景が曰ふには、信長の全部の軍勢を擧げても、二十萬人よりも多くはあるまいと。その中で、東の方は、武田氏、上杉氏に備へ、西の方は、大坂、雜賀に備へるので、六七萬人を減ずるであらう。そして、現在此處に居る者が十萬人である。されば、若し信長が、自身に來るとも、二三萬人に過ぎぬだらう。我は七萬人を以て之に當るのであるから、何も必ずしも恐れるには及ばぬのである。その上、我は、北の路から之を不意擊するとせば、浮田氏の心底が、未だ測り知られぬところがあるので、いづれも皆、萬々安全にして危險の無い計策では無い。それよりも、城壁を固くし戰爭をしないのが、宜しい。さうするときは、彼れ敵軍は、兵士が衆くして兵糧の運漕がなかなかつゞけられまいから、やがて自分の方から立ち去らうとするであらうと曰つた。そこで、夜襲をば思ひ止まつた。

六月。美作。出雲兵。與東兵鬬于熊川。秀吉自中軍。遣二萬騎出援。元長

與弟元氏廣家。以萬人亂流逆戰。東軍皆騎兵。馳突而來。元長令士卒曰。跪。東兵不能入。逡巡而退。元長令曰。起。如此者再三。追北二十餘町。荒木氏不敢援東兵。浮田氏不敢援西兵。西兵深入。難於退。天野隆重引手兵。上高岡而陣。西兵乃引還。秀吉知我不可力爭。請信長。棄城而去。城陷。勝久自殺。山中幸盛復降。殺之甲部川上。

【字解】【東兵】……織田氏方の兵。【熊川】……播磨に在り。【逡巡】……音シユンジユン。卻退の貌、あとしさりする。【北】……にゞる。乖背の名、故に敗走を以て北となす也。【西兵】……毛利氏方の兵。【手兵】……手勢、自分の部下の兵。【甲部川】……備中に在り。又、河邊川に作る。

【講義】六月に、美作、出雲兩國の軍勢が、東兵と、熊川に於て闘つた。秀吉は、中軍より、二萬騎の兵を派遣して、出で、援けさせた。元長は、弟元氏、廣家と、もに、一萬人の兵を引き連れて、熊川の流を押し渡つて、迎へ戰つた。東軍は、皆騎兵であつて、馳せて突き進んで來ると、元長は士卒に命令して曰ふには、跪けと曰つた。其兵は、皆長槍を突き出し、片膝を折つて身構へしたので、東兵は、突き入ることが出來ず、しりごみして退却した。すると、元長が命令して曰ふには、起ち上れと曰つた。此の如くすること兩三回にして、敵の逃げ走るを追ふこと二十餘町であつた。荒木氏は、敢て東兵を援けやうともせず、浮田氏は、敢て西兵を援けやうともしなかつた。かくて、西兵は、餘り敵地に深入りしたので、引き上げて退軍することが六かしかつた。すると、天野隆重が、手勢を引き連れて、高き丘陵の上に登つて陣取つた。西兵は、そこで引き返すことが出來た。秀吉は、我が毛利氏は兵力を以てしては爭ふことが出來ないことを知つたので、信長に請うて、城を棄てゝ立ち去つた。そこで、城は落城し、勝久は自殺して仕舞ひ、山中幸盛は、また降參したが、之を甲部川のほとりに於て、殺して仕舞つた。

直家已潛通信長。於是。稱疾愈。來見。元長白元春曰。直家有異圖。兒請即席誅之。杉原盛重又請之。隆景曰。彼無證。而我啓釁。縱得誅之。其國人皆立嗣以抗我。無爲也。乃止。已而直家因惠瓊。請一帥乘勢徇播磨。將軍義昭亦促之。元春。隆景乃進。陣黑澤山。直家享一帥于八幡山。欲伏甲擒之。直家弟忠家潛來告之。元春。隆景乃使人言直家曰。聞公欲以我兄弟首獻織田氏。我兄弟竝輔少主。未能順尊意。必欲獲之。請以旗鼓。所不敢辭也。日日。分路西歸。直家不敢追。

【字解】【異圖】……音イト。謀叛の心。【即席】……其席に於て。【啓釁】……釁は音キン、すきまゝ。啓は開く也。仲たがひすべき隙間をひらく。【無證也】……役に立たぬ、何にも成らぬ。【二帥】……二人の大將、即ち元春と隆景。【黑澤山】……播磨に在り。【享】……音キヤウ。饗應する。【八幡山】……備中に在り。【少主】……年若き主人、輝元を指す。【請以旗鼓】……戰場に於て渡すべしとの意。

【講義】直家は、すでに、ひそかに、信長に內通して居つたが、こゝに於て、病氣が全快したと稱して、來つて元春、隆景に會見した。すると、元長は、元春に申して曰ふには、直家は、謀叛の心がありますから、私、どうぞ、其席に於て之を誅殺したいと思ひますと曰つた。杉原盛重が、又、此事を請うた。隆景が曰ふには、御前等の言ふが如く、彼れ直家に謀叛の心があることは事實であるかも知れぬけれども、今、彼れには何等の證據が無いのに、我より、仲たがひすべきすき間を啓きて、彼れを殺すときは、たとひ之を誅殺することが出來たとしても、其國の人々は皆、我の爲す所を以て不德義の事として、後嗣を立てゝ我に抵抗するであらうから、今彼を殺すことは何の役にも立たぬのであると曰つた。そこで、中止することにした。とかくする中に、直家は、惠瓊に因りて、二人の大將即ち元春、隆景に、この勢に乘じて播磨國を徇へ下されんことを請うた。將軍義昭も亦、之を催促された。元春、隆景は、そこで、進んで、黑澤山に陣取つた。直家は、元春、隆景の二人の大將を、八幡山に招待して、之を饗應し、甲兵を伏せ置きて之を生け捕りにしやうと思うた。直家の弟の忠家が、ひそかに、來つて此事を二人に告げた。元春、隆景は、そこで、人をやつて、直家に言はしめて曰ふには、聞くところによれば、貴殿は、我々兄弟の首を以て織田氏に獻上したいと思うて居られると云ふことであるが、我々兄弟は、相ならんで、年若き主人を輔佐して居るもので御座るから、未だ貴殿の思召に從つて此首を差し上げることは出來ません。若し是非とも此首を得たいと思はるゝならば、どうぞ、旗を推し立て太鼓を鳴らして合戰をしての上の事に致したう御座る。それは、我々が敢て辭退せざるところで御座ると曰つた。明くる日に、元春、隆景は、別々の路を取つて西に歸つた。けれども、直家は、敢て追っかけやうとはしなかつた。

十月。荒木村重叛。信長據兵庫。華隈諸城。與別所長治。皆乞援於我。我方患浮田氏。又聞南條元續通東軍。未暇赴援。獨餽糧助之。築丹生。淡河二城。西達三木。東達華隈。七年。二月。秀吉遣弟秀長。夜襲取丹生。淡河定

範穿レ塹布二渠苔一以待。秀長至レ梗不レ得レ進。定範募二得牝馬數十匹一。驅入二敵軍一。軍馬爭レ牝相踶。什伍大亂。定範縱レ兵乘レ之。擊走二秀長一。其從子說曰。秀吉必レ怒而來。窮而走。不レ若二勝而退一。乃收入二三木一。秀吉來不レ見二敵而去一。

字解【兵庫】……攝津に在り。【華隈】……攝津に在り。【丹生】……攝津に在り。【渠苔】……音キヨタフ。鐵蒺藜、はまびし也。蒺藜は、草の名、子に三角ありて人を刺す。鐵蒺藜は、鐵を以て三角形を作りたる者にして、之を水中に布き、人馬の足を刺す。宋人、始めて鐵蒺藜を造る。襄陽の圍に、扈再興、之を布き、佯り遁る。金人、之を逐ふ。中たる者十に七八を踣す。是より競うて兵備となす。凡そ、經戰の場、遍沙皆鐵蒺藜あり、故に戰場を蒺藜沙と云ふ。【梗不得進】……梗は音カウ、塞ぐ也。行くさきがさはりて進むことを得ず、渠苔ある を以て也。【牝馬】……音ヒンバ。めうま。【踶】……音テイ。踏む。【什伍】……兵士の組み合はせ、隊伍。【從子】……甥、江見又四郎。【窮而走】……敵に攻め立てられて困窮して逃げ走る。

講義 十月に、荒木村重は、信長に叛いて、兵庫、華隈などの諸城に立て籠り、別所長治と、もに、皆、援兵を我が毛利氏に請うた。我が毛利氏は其時に丁度、浮田氏の反覆するを患へて居つたし、又、南條元續が東軍に內通して居ると聞いたので、未だ出掛けて行つて援ける暇が無く、たゞ、兵糧をおくつて之を助け、丹生、淡河の二城を築いて、西の方は三木に達し、東の方は華隈に屆きて、連絡せしめる樣にした。天正七年の二月に、秀吉は、弟秀長を遣はし、夜に乘じて、不意擊ちして、丹生を取つた。淡河定範は、堀を掘り、濱菱を敷きつめて、以て秀長の攻めるを待つて居つた。秀長は、攻め寄せて來たけれども、道が塞がつて進むことが出來なかつた。定範は、牝馬數十匹を募集して、之を追つ立てて敵軍の中に入れた。すると、敵軍の馬は、牝馬が來たので、牝を爭ひ合つて、互に踏み合ひ、兵士の隊伍は大に亂れた。定範は、兵士をはなつて、此騷動につけ込んで、擊つて秀長を敗走させた。そこで、定範の甥が定範に說いて曰く、秀吉は、屹度、怒つて攻め寄せるで御座りましやう。攻め立てられて困窮して逃げ走るよりは、勝つたのをしほにして引き退くが宜しう御座りますと曰つた。そこで、定範は、兵を取りまとめて、三木に入つた。秀吉は折角來たけれども、敵兵は一人も見えなかつたので、立ち去つた。

是歲。二帥輔二輝元一東伐。取二美作五城一。直家不二敢出一。四月。南條元續叛。通二東軍一。其族山田直重諫レ之。元續不レ聽。欲レ殺レ之。直重來奔。八月。直家攻二升形一。祝山二城一。不レ能レ下。元春將レ兵赴援。聞二其去一。轉攻二元續種石城一。杉原盛重爲二先鋒一。與二敵將南條信正一。夾二長瀨川一陣。分レ兵爲レ三。渡レ川大戰。斬二信正一。元春乃環二種石一。砦レ之。元續出戰。輒敗。

字解【升形】……美作に在り。【祝山】……美作に在り。【種石】……伯耆に在り。【杉原盛重】……毛利氏の臣。【長瀨川】……伯耆に在り。

講義 この歲に、元春、隆景の二人の大將は、輝元を輔佐して、東方を征伐し、美作の五城を攻め取つた。直家は、敢て出でなかつた。四月に、南條元續は、叛いて、東軍に內通した。その一族なる山田直重が、之を諫めたけれども、元續は聞き入れずして、直重を殺さうとしたので、直重は、逃げて我が毛利氏に奔り込んだ。八月に、直家は、升形、祝山の二城を攻めたけれども、攻め落すことが出來なかつた。元春は、軍勢を引き連れて出かけて行つて、升形、祝山の二城を援けやうとしたけれども、直家が立ち去つたといふ事を聞き、路をかへて、元續を種石城に攻めた。我が杉原盛重は、先陣となり、敵の大將南條信正と、長瀨川を夾んで陣取り、兵を分けて三隊となし、川を渡つて大に戰ひ、信正を斬つた。元春は、そこで、種石をぐるりと取り卷いて、とりでを築いた。元續は、城を出でゝ戰つたが、いつでもすぐに敗軍した。

十一月。元春。隆景。復輔二輝元一東伐。拔二備中忍山一。十二月。我餽二饟三木一者。襲二殺敵壘將谷衞好一。長治出レ兵應レ之。大敗。淡河定範死レ之。八年。春。三木陷。長治自殺。直家以二秀吉令一。城二于八濱一。以二一弟忠家一。基家守爲。二月。隆景遣二元清一。攻レ之。殺二基家一。

字解【餽饟】……餽は賂る、おくる。饟は餉と同じ、音シャウ、軍糧なり。兵糧を送る。【八濱】……備前に在り。

講義 十一月に、元春、隆景は、ふたゝび、輝元を輔佐して、東方を征伐し、備中の忍山を攻め落した。十二月に、我が毛利氏方なる、兵糧を三木に送り込む者が、敵のとりでの大將谷衞好を不意擊して殺した。長治は、兵士を繰り出して、之に應戰したけれども、大いに負けて、淡河定範は、そこで討死した。天正八年の春に、三木は落城して、長治は自殺した。直家は、秀吉の命令を以て、八濱に城を新築し、二人の弟なる七郎兵衞忠家、與太郎基家をして之を守らしめたが、二月に、隆景は、元清を派遣して、之を攻めしめ、基家を殺した。

四月。秀吉侵二但馬一。因幡。陷二鹿野、城一。取二山名氏質一。元春赴援。不レ及。七月。荒木村重來奔。是月。秀吉圍二山名豐國鳥取城一。縛二質城外一。以レ槍擬レ之。以誘二降之一。城兵曰。我數叛二毛利氏一。而不レ被レ誅。今可二復叛一乎。秀吉怒。殺レ質。次至二豐國

女。豐國遂降。秀吉削其邑而去。城兵皆叛。豐國奔播磨。城兵請我一將。遣吉川經家守之。又城于丸山。

【字解】【鹿野城】……因幡に在り。【質】……音チ。人質。【鳥取】……因幡に在り。【擬之】……槍先を之にあてがふ。【丸山】……因幡に在り。

【講義】四月に、秀吉は、但馬、因幡を侵略し、鹿野城を攻め落し、其處に來て居つた山名氏の人質を取つた。元春は、出かけて援けたけれども、間に合はなかつた。七月に、荒木村重は、其城を守ることが出來ずして、我が毛利氏の方に逃げ込んで來た。この月に、秀吉は、山名豐國を、鳥取城に圍んで、城外に於て、山名氏の人質を縛りつけ、槍の穗先を之にあてがひ、降服せぬときは之を殺して仕舞ふぞと云つて、豐國を誘ひ降參させやうとした。城兵が曰ふには、我々は、たび〳〵毛利氏に叛いたけれども、それにもかゝはらず、誅戮せられなかつたのである。之を思ふときは、今、どうして、また叛かれやうぞと曰つた。秀吉は、怒つて、その人質を殺し、次第に豐國の娘の順番になると、豐國は、とう〳〵降參した。そこで、秀吉は、其領地を削り減らして、立ち去つた。しかるに、鳥取の城兵は、皆、豐國に叛いたので、豐國は播磨に逃げ走つた。城兵は、そこで、我が毛利氏に一人の大將を請ひ受けて、其指揮を仰がんと申し出でたので、そこで、吉川經家を派遣して之を守らしめ、又、丸山に城を築いた。

九年。七月。秀吉以數萬騎圍鳥取。丸山絕其糧道。吉岡質休在吉岡城。夜襲敵營。又迎擊敵兵。走之。奪秀吉馬標。獻之輝元。秀吉遣使。招降丸山城。城將斬其使者。投屍城外。秀吉大怒。攻之益急。輝元欲援之。而國兵四戍疆上。在者甚寡。隆景至富田。召募數日。未進。元春曰。鳥取吾管內也。吾不可以待。九月。以六千人馳至伯耆。則城已陷矣。秀吉欲誅國人。免經家。經家弗聽。與丸山。鳥取將領。皆自殺。以免其兵。元春得報。切齒曰。吾猶往爲經家一戰。將發。又有報。曰。秀吉入伯耆矣。乃留陣于馬山。十月。秀吉至。稱八萬騎。陣種石城後。下視馬山。馬山左右湖山。後迫大川。纔通一橋。人人無不震怖。元春命絕橋。毀舟楫。自絕走路。三澤爲虎。益田藤包私議曰。敵衆新勝。不若避其銳。而再擧。請入說之。乃與俱謁元春。元春方釋甲而坐。曰。天大雪。諸君且留飲。因圍爐命酒。醉而鼾睡。二人不敢說。元長。廣家以父命。巡視諸陣。穿塹植柵。曰。敵明日必來。比曉。敵數千騎。納糧於種石。元春遣銃手。斃其一將。敵繼出者萬餘。元長。廣家以二千人馳之。秀吉急收其兵。南條元續請曰。盍一戰擒之。秀吉哂弗答。明日引兵而去。元春請尾擊之。元春不許。

【字解】【吉岡質休】……入道。【吉岡城】……鳥取に在り。【馬標】……標は表なり。馬じるし。【四戍疆上】……戍は音ジュ、守る也。疆は音キャウ、境なり。四方の國境を守備して居る。【不可以待】……召募の兵の集るを待つことは出來ぬ。【將領】……大將首領、將校。【切齒】……齒をくひしばる。【爲經家一戰】……弔ひ合戰する。【馬山】……伯耆に在り。【毀】……こぼつ。【舟楫】……音シウシフ。舟、かぢ。【釋甲】……鎧をぬぎすてる。【且】……しばらく。【爐】……圍は環繞なり、爐は火爐なり。いろりを取り卷く。【鼾睡】……音カンスヰ。いびきの音高く睡る。落ちつきたる有樣なり。【哂弗答】……哂は微笑なり。此掛引は元續などの知るところに非ずとの樣子なり。

【講義】天正九年の七月に、秀吉は、數萬騎の軍勢を引き連れて、鳥取と丸山とを攻め圍み、その兵糧運搬の道を絕ち切つた。吉岡質休は、吉岡城に居つたが、夜に乘じて、敵（織田氏方）の陣營を不意擊ちし、又、敵兵を迎へ擊つて、之を敗走させ、秀吉の馬じるしを奪ひ取つて、之を輝元に獻上した。秀吉は、使者を派遣して丸山城を招きて降參させやうとしたが、城將は、怒つて、其使者を斬り殺して、その屍骸を城外に投げ出した。秀吉は、大に怒つて、ます〳〵手きびし〳〵之を攻め立てた。輝元は、之を援けやうと思うた。けれども、國內の兵士は、四方の國境を守備して居つて、現在居る者は大層少數であつたので、隆景は、富田に至つて、兵士を徵集すること數日であつたが、未だ進行しなかつた。すると、元春が曰ふには、鳥取は、吾が管轄內の土地である。されば、吾は、隆景が兵士を徵集するのを待つて居ることは出來ないと曰ひ、九月に、六千人の軍勢を引き連れて馳せて伯耆に至つたが、その時には、鳥取城は、すでに落城して仕舞つた。秀吉は、國人を誅戮して經家を救さうと思うたけれども、經家は聞き入れずして、丸山、鳥取の諸の將校たちとともに、いづれも皆自殺して仕舞ひ、それで以て其兵士を救

してもらふやうにした。元春は、此報知を得て、齒をくひしばつて曰ふには、城は落城して仕舞つても、吾は、それでも猶ほ、行つて、經家の爲めに弔ひ合戰を致さうと曰ひ、將に出發しやうとしたが、又、報知があつて、秀吉は、伯耆に入つたと云ふことであつたので、元春は、そこで、盡まつて、馬山に陣取つた。十月に、秀吉は、到著し、同勢八萬騎と稱へて、種石城のうしろに陣取り、馬山を見おろした。馬山の左と右とは、湖水と山とであつて、うしろは、大川に迫られて居り、わづかに、橋一つを以て其往來を通ずるばかりであつて、人人は、震ひ怖れぬものは無かつたが、元春は、命令して、橋を絕たしめ、舟や桴をば打ちこはさせて、自分から、逃げ走るべき道を絕ち切つて仕舞つて、必死の覺悟をした。三澤爲虎、益田藤包は、ひそかに相談して曰ふには、敵織田氏方の軍勢は、新に勝利を得たのであるから、其勢に乘じて攻め寄せて來るときは、之を拒ぎ止めることは容易の事では無いから、しばらく敵の鋭鋒を他に避けて、再度の擧兵を計るが、宜しい。內に入つて、此旨を說いて見やうでは無いかと曰ひ、そこで、一處に元春に謁見した。元春は、丁度其時に、鎧を脫ぎ棄てゝ、坐つて居つたが、二人を見て曰ふには、大層雪が降つて居るから、諸君は、しばらく、留まつて酒を飲めよと曰ひ、因つて、いろりを取り圍んで、酒を申し附けて飲み、元春は醉うて高いびきをかいて睡つて仕舞つた。爲虎、藤包の二人は、思つて居つたことを說き出すことをせずして、退いた。元長、廣家は父元春の命令によつて、諸の陣營を視まはり、堀を掘り、矢來を立てゝ曰ふには、敵軍は、明日、屹度、寄せ來るであらうと曰つた。夜の明けんとする頃に、數千騎の敵の軍勢は、兵糧を種石に納れやうとした。元春は、鐵砲組を造ほし、其一人の大將を射たふした。之に引きつゞいて出で來る敵は一萬餘人あつた。元長、廣家は、二千人の軍勢を引き連れて之に馳せ向つた。すると秀吉は、急に令を傳へて其軍勢を引き上げた。南條元續は秀吉に請うて曰ふには、どうして一戰爭して之を生捕りになされぬので御座りますかと曰つた。秀吉は、微笑して、何とも答へなかつた。秀吉は、明日、軍勢を引き上げて立ち去つた。すると、元長は、之を追ひ擊たんことを請うたけれども、元春は許さなかつた。

十年。正月。元春欲復因幡。二月。將兵攻大崎。時杉原盛重既死。其子元盛先登。元春遂復二城。攻鳥取。四月。秀吉將兵八萬。入備中。攻高松城。引甲部川灌之。守將清水高治募城內染戶。收板數百枚。造舟出戰。隆景聞急。乞援於元春。元春卽欲發。山陰將士皆曰。上月之役。佐公牽我師自援。馬山之役。留富田不來。今鳥取幾復。何棄此赴彼爲。元春曰。隆景不來馬山。必有以也。吾坐視其危。獨如宗家何。諸君不欲往。吾寧獨身赴之。與隆景共死。將士皆謝願從。乃留杉原元盛。當鳥取城。而南會隆景。合兵四萬。軍于廂山。輝元陣其西三里。相持未戰。

【字解】【大崎】……因幡に在り。【先登】……第一番に登る。【灌】……そゝぐ、水攻めにする。【染戶】……染物屋、紺屋。【上月の役】……天正五年に在り。【佐公】……隆景。時に左衞門佐たり、故にかく云ふ。【幾】……ほとんど。【棄此赴彼】……此は鳥取を指し、彼は高松を指す。【以】……故。【獨如宗家何】……獨の字義廣し。隆景のことは兎も角も、本家を何としやうとの意。【謝願從】……前の言葉を詫びて、從はんとを願ふ。【廂山】……備中に在り。

【講義】天正十年の正月に、元春は、因幡を取りかへさうと思うて、二月に、軍勢を引き連れて、大崎を攻めた。この時には、杉原盛重は、既に死んで仕舞つて、その子の元盛が、一番登りをして、功名を立てた。かくて、元春は、とうく、二城を取りもどし、鳥取を攻めた。四月に、秀吉は、八萬の軍勢を引き連れて、備中に討ち入り、高松城を攻め、甲部川の水を引きて、之にそゝぎかけて、水攻にした。高松城の守將清水高治は、城內の染物屋より募集して、張り物に使用する板數百枚を取りまとめ、舟を造つて出でゝ戰つた。隆景は、高松城の危急なることを聞いて、援兵を元春に請うた。すると、元春は、卽座に出發しやうと思うた。山陰道の將士ども、皆曰ふには、先年、上月の戰に於ては、佐殿(卽ち隆景)は、わが軍勢を引き寄せて、御自分の援けとせられたのに、馬山の合戰には、御自分は、富田に留まつて居つて、來られなかつた。今や鳥取は、ほとんど取りもどされやうとして居るのに、貴殿は、此處を棄てゝ、彼の高松に御出かけなさるには及びますまいと曰つた。すると、元春が曰ふには、隆景が馬山に來つて我々を援けなかつたのは、屹度、譯のあることであらう。吾、居ながらにして、其の危急に逼つて居るのを見て、之を救ひ助けなかつたならば、隆景の事は兎に角とするも、第一、本家たる毛利氏をどうしやうぞ。本家に對して相濟まぬことになる。諸君が、若し出かけて行くことを好まぬならば、吾は、むしろ、たゞ一人にて出かけて行つて、隆景と一處に討死しやうと曰つた。諸將士は、皆、前の言葉の過失を詫びて、從はんことを請うた。元春は、そこで、杉原元盛を留めて、鳥取城の敵に當らしめて置き、そして、南に進んで、隆景に會合して廂山に陣取り、輝元は、其西方三里の所に陣取り、かくて、敵と味方と、相對陣して睨み合つて居つて、未だ戰はなかつた。

五月。日幡城叛。隆景遣兵攻之。走東將木村隼人。秀吉不敢出援。加茂城亦叛。納東兵。元長。廣家以萬人赴之。秀吉復收兵。我兵數獲利。而高松旦夕將沒。元春聞信長將自來也。欲一戰。隆景曰。阿兄何自輕。乃做一隊將之爲乎。元春曰。家君以一夜克陶氏。以七年滅尼子氏。蓋小敵宜緩困之。而大敵宜急挫之也。我以北兵夜襲其北。而卿應其南。必克之。浮

田氏觀望。不戰走耳。隆景曰。然。會軍中流言三澤爲虎通款秀吉。六月。三日。一帥與元長。密會廂山絶頂。議曰。諸將意皆不可測。爲今之計。宜柵于牙營。迎敵決戰。既罷。元長徑詣爲虎。迫其膝坐。曰。聞卿與秀吉通款。信乎。信則斫吾頭。以送秀吉。爲虎惶駭曰。是出讒口耳。乃獻誓書。衆情稍定。終期再明襲秀吉。

【字解】【日幡】……備中に在り。【東將】……織田氏の將。【加茂】……備中に在り。【旦夕將沒】……高松は間も無く落城して仕舞はうとして居る。【阿兄】……元春を指す。【做】……ならふ、眞似る。【一隊將之爲】……わづか一組の將校の仕業。【家君】……元就を指す。【挫】……摧折、くじく、取りひしぐ。【觀望】……樣子を見合はせ居る。【流言】……言ひふらす。【牙營】……音ガエイ。本陣。【徑】……たゞちに。【迫其膝】……その膝もとに詰め寄る。【再明】……明後日。

【講義】五月に、日幡城が叛いて、敵に附いた。隆景は、兵士を派遣して之を攻め立て、織田氏の大將木村隼人を敗走させた。けれども、秀吉は、敢て出で、日幡城を援けやうとしなかつた。加茂の城も亦、叛いて、織田勢を引き入れた。元長、廣家は、萬人の軍勢を引き連れて、出かけた。秀吉は、また、軍勢を引き上げた。我が毛利氏の軍勢は、たび〳〵戰つて勝利を得たけれども、高松城は、日々に危急に逼り、開も無く落城しやうとして居る有樣であつた。元春は、信長が將に自身に出かけて來て秀吉を援けやうとして居るといふ事を聞いたので、一戰爭しやうと思うた。すると、隆景が曰ふには、わが兄上は、どうして、自ら身を輕んじて、一隊の將校のしわざを眞似しやうとなさるので御座るかと曰つた。元春が曰ふには、われ等の父上は、わづかに一夜にして、陶晴賢に打ち勝ち、又、七年の長い歲月を以て、尼子氏を打ち滅ぼされた。それは、大體、小弱なる敵兵をば、ゆるやかに之を困しめるが、宜しく、そして、强大なる敵軍をば、急劇に之を取り挫くが宜しいからである。我は、山陰道の兵士を引き連れて、夜に乘じて、敵軍の北より不意擊し、御身は、其南に居つて應援したならば、屹度、勝利を得るに相違ない。浮田氏は、兩方の形勢を見合はせて居つて、勝ちさうな方に味方しやうとして居ること故、これは、戰はずして逃げ走ることであらうと曰つた。隆景が曰ふには、いかにも左樣で御座ると曰つた。折しも、軍中に、誰言ふとなく、三澤爲虎が秀吉に內通して居ると言ひふらした。六月の三日に、元春、隆景の二人の大將は、元長とともに、ひそかに、廂山の頂上に會合して相談して曰ふには、諸將士の心底は、いづれも皆、測り知ることが出來ない。今日の計略としては、我が本陣に木柵を立て列ねて、敵の來るを迎へて決戰するが、宜しいのであると曰つた。既に相談が濟んで後、元長は、たゞちに、爲虎の陣に詣り、其膝もと近く詰め寄つて坐つて、そして曰ふには、聞くところによれば、御前は、秀吉に內通して居ると云ふことであるが、眞實の事で御座るか。若し眞實の事ならば、拙者の頭を斬り取つて、秀吉に送られよと曰つた。すると、爲虎は、大に恐れ駭いて曰ふには、左樣なる事は決して御座ちぬ。それは、讒者の口から出でたもので御座ると曰ひ、そこで、誓文を差し出して、左樣な事は無いことを誓つた。衆くの人々の心は、やうやく鎭定した。そこで、我が軍は、明後日を期日として、秀吉の本陣を襲ひ擊たうといふ事に決定した。

僧惠瓊素歸心於秀吉。爲講和議。秀吉曰。苟使高治自殺。則我可以藉手而去。惠瓊以告一帥。一帥弗肯。明日。惠瓊自入城諭高治。高治曰。我一死可以和兩國。何不敢死。乃與兄月清。軍監末近。乘舟出城。自裁舟中。以出城兵。惠瓊還報。一帥爲之發哀。遂爲盟約。割地講和。南界甲部川。北界馬山。送輝元季父元綱爲質。秀吉送森高政答之。卽日東軍解去。元長在山頂。視之曰。彼無故講和。必有內變。既而有告。曰。信長爲明智光秀所弑。元長曰。果然。吾不與盟。請追擊之。秀吉可生擒也。浮田直家亦請爲援。一帥曰。乘喪背盟。不義莫大焉。終弗許。後秀吉遺我將士款書數通。有三澤氏臣雲波書。爲虎乃誅之。輝元既與秀吉和。猶領八州。歲入百二十萬石。

【字解】【惠瓊】……安國寺惠瓊は、安藝の沼田郡銀山の城主武田刑部少輔信末の季子なり。幼名は竹若、京師東福寺の弟子となり、才學殊絶なれども、寺法を犯し、放逐せらる。是に於て、京師に賣卜す。秀吉の微賤の時、重瞳にして天下を領するの相あるを觀て、卜を投じて之を歎ず。秀吉喜び、之と親み善し。後、惠瓊、安藝に歸り、小舍を得て之に居る、安國寺と云ふ。毛利の諸將と、相往來せり。故に高松の役に和議を講ずと云ふ。【高治】……高松城の守將清水高治。【藉手】……藉は薦なり。手をつけたるしるしにする。【月清】……入道。【末近】……左衞門。【自裁】……自殺する。【發哀】……死去を發表して葬祭を修む。【甲部川】……備中に在り。【馬山】……伯耆に在り。【季父】……一番末の叔父。【質】……音チ。人質。【乘喪】……不幸のあつたところに附け込む。【款書】……內通の手紙。【三澤氏】……爲虎。【八州】……安藝、周防、長門、

石見、備後、因幡、出雲、隱岐、の八國。【歲入】……一年の收入。

【講義】惠瓊と云ふ坊主は、平素から、心を秀吉に寄せて居つたので、爲めに和睦の相談を取り計らつて、戰爭をやめさせやうとした。すると、秀吉が曰ふには、若しも高治をして自殺せしめたならば、我は、それを、折角手をおろして高松城を攻め立てたしるしとして、立ち去つても宜しいと曰つた。惠瓊は、此事を元春、隆景の二人の大將に告げたけれども、二人の大將は、高治を惜んで、承知しなかつた。明くる日に、惠瓊は、自身に、高松城に入つて、高治に此旨を諭した。すると、高治が曰ふには、我一人死んで、それで兩國を和睦させることが出來ることならば、われは、どうして死なゝいで居りましやうぞと曰ひ、そこで、兄の月清入道、軍目附の末近左衞門とゝもに、舟に乘つて城を出で、舟の中に於て自殺して、以て城兵を出でさせた。惠瓊は、引き返して、此事を報告した。元春、隆景の二人の大將は、高治の爲めに死去を發表し葬祭をなし、かくて遂にちかひを立てゝ約束を結び、土地を割き與へて和睦をなし、南の方は甲部川を境界とし、北の方は馬山を境界とすることにし、輝元の末の叔父なる元綱を送つて人質となした。秀吉は、森高政を送つて、之に答へて人質となした。かくて、其日に、東軍は、軍備を解いて立ち去つた。元長は、山の頂上に在つて之を視て曰ふには、彼れ秀吉が、故無くして和睦をなしたのは、屹度、內に何か異變があつたに相違ないと曰つた。すでにして、來つて告ぐるものがあつて、曰ふには、信長は、其臣明智光秀に殺害せられたと曰つた。すると、元長が曰ふには、案の通りであつた。吾は、ちかひを致した仲間では無いから、どうぞ之を追ひ擊ちたいもので御座る。さうするときは、秀吉をば生捕にすることが出來るで御座りましやうと曰つた。浮田直家も亦、元長の援を致したいと請うた。元春、隆景の二人が曰ふには、彼れの喪中につけ込んで、ちかひに背くのは、この上も無い不義であると曰つて、とう〳〵、之を許さなかつた。後に、秀吉は、我が毛利の將士の內通の書面數通を送り來つたが、その中に、三澤氏の家來雲波の手紙があつたので、爲虎は、そこで、之を誅殺した。輝元は、すでに、秀吉と和睦して地を割いたけれども、それでも猶ほ、八箇國を領地とし、一年の收入は、百二十萬石あつた。

【參考】左に太閤記の二章を抄錄して以て參考に資す。

吉川小早川軍議評定

此時、西國には羽柴筑前守秀吉、毛利の三家と對陣し、去る五月の始より、備中高松の城を圍まれけり、此時、高松の城は、鄉中に有りて、小き平山の上に築き、四面に池沼を湛へたりしを、さしも名を得し甲部川に、血水川、大堰川の流を合せ、此鄉中に堰き入れたれば、今五月の末に至りては、水彌高く森へ上り、山を浸し丘を越し、浩々として一大湖水をなし、今五尺計も水增さば、高松の城水底に沈み、城中の男女老少生くべき者一人もなく、死を旦夕に待つのみなり、秀吉、城の形勢既に難儀に及びぬと見給ひ、大船數十艘に櫓をあげ、城中を眼下に見おろし、大筒小筒の鐵砲を夥しく放しかけ、熊手を以て塀を破り乘り入らんと下知しけれど、城中の士卒十分死地に陷りたれば、活くる心は露程もなく、責口を固く守り防戰する事更に疼みたる氣色なし、中にも中島大炊介、荒木が一黨は、秀吉の攻口を防ぎ、林與三郎、片山勘兵衞、鳥越又兵衞等は、浮田勢に當つて爰を破られじと、鐵砲を打ち出し、火箭を放ち、汗は漿を流して戰ふ程に、寄手多勢なりといへども、塀一重だに破り得ず、されども水は次第に倍さり來て、今十日を經るものならば、戰はずして城中の兵、皆水屑と成りぬべく、哀なりし次第なり、是に依て、後詰の大將吉川元春、小早川隆景、いかにもして塘を切つて落さばやと、さま〳〵計議評定有りけれ共、寄手大軍にして、しかも軍令甚嚴しく、陣の構堅固なれば、切り落すべき手術もなく、只用もなき長詮議のみして、はかゆくべくもあらざりけり、時に吉川元春の嫡子治部少輔元長、進み出でゝ宣ひけるは、かく徒に評議のみして敵軍を隔て守り居たらんには、後詰したる詮もなく、殊更信長大軍を率し、下向せらるゝよし風聞すれば、敵の勢は愈增り、信長爰に到りなば、二十萬騎には減ずべからず、渠が軍は益々機に乘じ、味方の兵士は心屈し、高松の城落つるのみか、終には毛利家惣敗軍に及ぶべし、されば、信長いまだ出張せざる前に、烈しき一戰仕るべく存じ候へ、隆景は御勢も多く候へば、秀吉の旗本へ切つて懸り給ふべし、某は雲州、伯州、石州の勢を以て、羽柴七郎左衞門を切り崩し、透なく押し詰めて、秀吉が勢に突き入り、隆景が御勢と挾んで責め討ちなば、勝利一時に是れ有るべし、備前の浮田勢は、從來表裏第一の弱兵なれば、味方合戰に利を得なば、强き方に屬せんと、時の勝負を見合せ、一圖に討つて懸る事は候まじ、家の浮沈、身の安危、唯此一擧の中に定め、十死一生の合戰せられ候べしと席を打つて申されける、小早川隆景は、智惠深く、謀を先にし戰を後にする大將なれば、卒然に答をなさず、目を閉ぢ手を拱きて、思惟しておはしけるを、元春苛ちて席を進み寄り、如何に隆景、今元長が申す所一理ありと存ずる也、元長に前を討たせ、某後陣に續いて戰ひなば、敵を切り崩さんこと、掌の中にあり、用なき對陣いつまでかはあらんずべからず候、時に隆景うなづいて、仰の趣實に理に當りて覺え候、敵の後陣續かざる先に、興亡の合戰宜しく候べしと同心せられけるにぞ、さらば明日烈しき一戰をなし、敵味方の目を驚かさんと、內評定一決したりける所に、三澤爲虎といふ毛利の家臣、秀吉へ志を通はし、裏切すべき謀計有りと告ぐる者有る程に、味方の諸士、互に疑心を生じ、誰某こそ敵に一味し、寄手を引きて味方の陣を討たしむるといひ、何某は秀吉に賴まれ、兩將を斬つて敵に降るなどいひ騷ぎ、心を措き合ひける程に、先づ一戰も行ひ難く、暫く延引したりける、かゝりしかば國々の兵共、敵には信長後陣に續き、近日二十餘萬の大軍にて押し來るよし、味方は輝元の旗本の外は、援兵に來るべき勢もなく、却て逆心の者多く、所詮對陣叶ふまじく、元春、隆景も陣を拂うて歸國せらるべしなどさゝやきあひ、何とやらん總軍浮足になりて、始終こちへ難くぞ見えにける、(中略)治部少輔元長、血氣の若將なれば、途より直に三澤爲虎が陣所に至り、只一人陣內へずんと通り、爲虎が膝の脇にむずと坐り、いかに爲虎、秀吉に一味して、味方の陣をおびやかさんと計るよし承る、其實否を糺し聞かん爲め、態と是迄參りて候、汝實にかくの如くならば、今我頭を斬りて秀吉に送るべし、爲虎是を聞いて大に驚き、色を失ひ、頭を地に附け、こは思ひもよらざる仰にてこそ候へ、不肖の某に候へ共、先祖より毛利家の臣として、君恩山海に等しければ、何ぞ猥に逆心をさし挾み申すべきや、是は讒者の我を失はん爲めに、あられぬ事を申上候と覺え候、かく思召し候上は起誓文を書きて呈し申すべし、夫れにても御心解け難く候はゞ、いかゞはせん、只今御前にて切腹致し、赤心を顯し申べしと云ふ、元長、實に野心之なくば、誓紙を認め候へとて、頓て熊野の牛王を翻し、天地神祇を驚かし、盟書を認め捧げゝる、元長、此上は强ひて疑ふべきにあらずとて、盟文を懷中し、陣所へこそは歸りけれ、又久代修理介も逆心の企ありといひ雖しけるにぞ、先づ是が押へとして、元春が令弟元氏、渠が陣の上なる山に打ち出で、陣を取りたり、扨廂山の四方には、俄に下知して柵を結ひ廻し芝土手を築き、弓鐵砲を構へ、陣の備へ堅固に成就しければ、今はやは味方の中に少しく叛心の者ありとも、輒く責め崩さるべしとは見えざりけり、是に依つて諸卒鳴を鎭め、陣中やゝ平和に成りしかば、さらば以前の計議の如く、羽柴七郎左衞門が陣へ切り懸るべし、日限は明後六月五日の夜たるべしと相定め、銘々其の用意を成したりける、然るに其の翌日六月四日、早天、秀吉より使者を以て小早川が陣に居りける安國寺惠瓊といへる僧を、只今急に來らるべし、申し入れ度き心事の候とて招かれける、(中略)惠瓊何事やらんと、急ぎ隆景に此事を申し、從者を引具して秀吉の陣へ到りける、秀吉、惠瓊を陣中に請じ入れ、席を前めて申されけるは、近年秀吉、元春、隆景と所々に於て對陣せし事、全く本意にあらず、其故は信長公、輝元と水魚の盟約をなし、天下を泰平ならしめんと思しける所に、前將軍義昭公、備後へ御下向有りてより、兩家忽ち兄弟の盟を破り、槊を橫へ矢を飛ばし、吳越に等しき間と成れり、某、信長公の代官として、輝元、元春、隆景等と鋒先を爭ひ、萬死を顧みず、身骨を粉碎す、是に於て、關東、四國、九州、北國の將士等、此潰に乘じ、邪威を恣にして、攻戰更に止む時なし、爰に萬民困窮し塗炭の中に苦しむ事久し、されば信長公の本心は、私の讐を以て天下泰平の功を妨げんや、早く和睦して、信長は陸奧、出羽の夷夷を退治し、輝元は大友、島津を討つて西戎を靜謐ならしめば、忽ち天下平定し、四民太平を謳ふべし、是れ信長が常に願ふ所也と、某にも兼々

仰せ含められ候ひつれ、されば悉く秀吉が私の意を以て申す所にあらず、此旨和僧、元春、隆景に申し達し、和平の儀相調ふに於ては、北は伯耆半國を境とし、南は當國甲部川を切つて引き分ち申すべし、其故は伯州の南條、小鴨、近年味方に忠勤を抽んず、渠が本領を宛行ふべきの爲めなり、又甲部川を境とするは、我爰に出陣して高松の城を責めながら、清水長左衞門が首を見ずして和睦せんは、信長公の恩し給はん所もいかゞ也、爰を以て、清水宗治には、切腹致させ申すべし、此旨、元春、隆景へよきに披露せらるべしと仰せらる、安國寺、委細領承し、退きて毛利の陣へ歸り、元春、隆景兩將に對面し、云々の由申しければ、元春、隆景案外の事なれば、暫くものの言はず思惟して有りけるが、やや有りて、元春申されけるは、約無うして和を乞ふは謀也と孫子が金言也、今敵と味方との形勢を考ふるに、彼が兵は多く、我が勢は少し、其上信長近日出張といへば、又幾萬の勢を重ぬべし、味方は外に見繼ぐべき援兵なく、眼前高松の落城日を算へて待つべし、敵は大軍心一致に軍令を守り、味方は反心を抱き、惣軍一に和することなし、敵に萬分の勝利有つて、味方又十分の敗體あり、爰を以て思ふに、未だ戰はざる以前に、勝敗損利歷然たり、秀吉又智勇の將也、何ぞ此理を知らざらんや、然るに今故なくして和を請ふ事、是れ不審の第一也、努々此扱を聞くべからずと、時に隆景申されけるは、元春の意見一々我心と合へり、然しながら我々軍馬を發し爰に出張せるは、高松城の難儀を救ひ城主清水を助けんが爲め也、秀吉堤を切つて洪水を落し、宗治を始め、城中の軍民を助け置るゝに於ては、望に任せ和平すべし、是れ後卷として爰に向ひし詮要なり、宗治切腹と候はゞ、和睦の儀思ひもよらず、戰うて死を倶にすべしと、爰に於て評議これに一定し、再び安國寺を以て此旨秀吉に答へしむ、

清水長左衞門尉自害

扨も安國寺の惠瓊は、再び秀吉の陣に到り、兩川の返答しかくゝの通申し上げゝれば、秀吉是れを聞き給ひ、清水を助けば和平すべし、渠を殺さば和平なるべからずとの申條、義將の致す所、尤に覺え候、然れども秀吉が身に於ては、責め懸りたる城を落さずして、和平を爲さん事、永き弓箭の恥辱なるべし、先年播州上月に於て、尼子勝久、山中鹿之介を捨てゝ軍を引き上げ、毛利家に對し、我が面目を失ひしに似たり、然れば今清水宗治自害したりとて、元春、隆景の恥也とも言ふべからずとて、再三理義を分けて申し給へども、兩川更に承引なし、秀吉、かく此事延引せば、京都の變敵陣へ聞え、味方勇々敷大事なりと思ひ給へば、先づ安國寺に種々の引出物を贈り、汝此扱宜しく取繕ふものならば、信長公に能く申し上げ、拔群の所領を申し下し得さすべし、勢を厭はず我が計を行ふべきやと問はれけるに、安國寺、元來秀吉の天下を掌握し給ふべき器ある事は、藤吉郎の昔より知りたる事なれば、何ぞ仰を背き、後の患を需むべき、いかなる御下知候とも、身に替へて相勤め申べしと領承しければ、秀吉近く居よりて申されけるは、高松の城主清水長左衞門宗治は、高義忠臣雙なき武士なり、汝小船に取り乘り、城中に到り、我が言と兩川の言とを併せ說いて、宗治に切腹なさしむべし、然る時は兩家の和議忽ち整ひ、中國一時に平均すべし、是れ又汝が功なるべし、構へて辭する事有るべからずと申し給ふ、安國寺委細承り、直に小船に打乘りて、城中へ赴きけり、此時城主清水長左衞門、雜波傳兵衞、近松左衞門尉等、甚不審し、安國寺の爰に來るは、究めて故こそ有りつらめ、先づ召し出して聞くべしとて、城門を押し開くに、城中とても水深く、船の儘にて本丸に漕ぎ付けたり、時に清水長左衞門、安國寺を近く招きて、其來れる趣意を問ふ、惠瓊謹んで申しけるは、此度秀吉、某を以て和議の事を取扱はしめ給ふに、吉川、小早川の兩將、足下の生命を助け候はゞ和平すべし、左なきに於ては戰うて俱に死なんと宣ふ、秀吉又、足下を殺さずんば、武門の恥辱たるべき條申し給ふに依り、此扱事行ふべう見えず候、我は只此合戰和睦調ひなば、中國忽ち平均し、萬民其苦しみを免れん事を希ふが故に、あはれ成就せよかしと、一向兩家に往來して事を計れども、此一事に至りて和平の儀破れんとす、故に來りて足下の計議を借らんとす、願くは我に示し敎へ給へといふ、宗治、熟々是を聞いて、先づ涙をはら〳〵と流して申けるは、元春、隆景の如き義將、又世に有るべしとも覺えず、今兩陣の勝敗を計るに、敵は多勢、しかも信長近日に出頭と聞ゆれば、其勢甚大なるべし、中國は小勢にして、見繼ぐべき勢もなく、味方大敗、毛利家の存亡只此時とこそ覺え候へ、然るに適々敵方より和睦せんといひ送りなば、此清水如き者五人十人捨て給ひても、喜んで和平有るべき事なるに、却て我等をかばひ給ひ、和睦領承し給はぬこそ、返すゞも難し有事に侍らずや、我假令詮なき命を暫く長らへ有り之とも、迚も助るべき命にあらず、只今自害して此和平調ひなば、死期の面目何事か是れにしかんや、未だ武運に盡さずして、惜しからぬ命一つ捨つるが故に、中國の危亡を救ひ、諸民の苦しみを助くる事、此上の悅びや是れ有るべき、(中略)清水兄弟、雜波、近松、秀吉より送りたる小船を清げに飾り、與十郎といふ郎等一人、介錯の役と共に此船に打乘り、城門を開き漕ぎ出でたり、是やこの弘誓の船に慈悲の風を受け、生死の此岸を出でゝ、娑羅の廳に赴くちんもかくこそあらめと哀れ也、增して妻子眷屬は、此世の別れ今暫くと、舷にすがり纜を控へ、泣き悲しむ形勢は、理過ぎて餘所の袂を濡しけり、秀吉の本陣よりも、宗治已下の自害を見んとて、並び居て見物す、兩方の船近くなれば、宗治聲かけ禮をなし、是れは毛利家に於て、厚恩に浴せられし清水長左衞門、同入道月清、彼は輝元の旗本鐵砲の將雜波傳兵衞、近松左衞門尉、四人只今切腹仕るべきにて候、我々生害の後、筑前守殿と右馬頭との和睦の儀宜しく執りなし偏に願ひ候と慇懃に相述ぶれば、堀尾近く船さしよせ、是れは筑前守が近習堀尾茂助吉晴にて候、何事にても御望の事あらば仰せ聞けられ候べし、筑前守、各御存分の結構深く感じ申され、約諾の旨一事も相違有るまじく候、心靜かに生害遂げらるべきに候と言ふ、四人の者欣々然として悅の色を顯し、長左衞門宗治立ち上り、いで最期の一曲奏でんとて、腰刀引き拔き頭にかざし、清き聲して、「河船を止めて逢瀨の涙枕、浮世の夢を見習はしの、驚かぬ身ぞはかなけれ、」と謠ふ聲と諸共に腹十文字に搔き切れば、郎等與十郎、太刀振り上ゞると見えければ、卽ち首は落ちたりけり、月清入道是れを見て、「道のべの清水流るゝ柳陰、しばしが程の世の中に、心止むるぞ愚なる、」と聲をかしく打ち謳ひ、續いて切腹したりけり、時に近松左衞門尉、船ばたの板敷を丁々と踏み鳴らし、「敵と見えしは群れ居る鷗、関の聲と聞えしは浦風なりけり、高松の朝の露とぞ消えにける、」と末を少し謳ひ替へ、雜波傳兵衞諸共に、腹搔き切つて伏したりける、與十郎は四人の死骸を取り收め、首に姓名の札を付け、檢使堀尾に相渡し、其後已も腹かき切り、自ら咽押し切つて終に空しく成りにけり、數萬の軍兵是れを見て、哀れ大剛の兵哉と、感ずる聲しばしは鳴りも止まざりけり、

七月。隱岐經清弑其叔父清家。初清家代兄領隱岐。養兄子經清。出己子甚五。質于吉田。經清欲通款信長。清家弗聽。及信長死。經清誘殺之。以滅口。因啓清家通敵。臣誅之。元春不信。甚五訴冤。請自復仇。許之。隱岐士民爲內應。終誅殺經清。八月。山田重直誘殺南條氏精兵數百。九月。伯耆人相驚曰。秀吉戰死上國。重直且來襲矣。元續怖。走入京師。其子小鴨

元清亦走。秀吉笑曰。元春設蜚語。不戰而走之耳。元春之智。元續之怯。皆無雙者也。因請元春復之。

【字解】【滅口】……口止めをする。【啓】……申し上げる。【山田重直】……毛利氏の屬。【上國】……上方（カミガタ）。【蜚語】……音ヒゴ。蜚は飛。根無し言。

【講義】七月に、隱岐經清は、その叔父なる清家を弑害した。はじめ、清家は、其兄に代つて隱岐を領したが、兄の子なる經清を養子となし、自分の子なる甚五をば出して、吉田城に人質に遣つて置いた。經清は、信長に內通しやうと思うたけれども、清家は承知しなかつた。その後、信長が死するに及んで、經清は、清家をあざむき殺して、そして、自分が曾て信長に內通せよと曰つた事が世に知れないやうにしやうとした。因つて、申し立てゝ曰ふには、清家は、敵に內通しましたので、私は之を誅殺しましたと曰つた。けれども、元春は信用しなかつた。清家の實子なる甚五は、その無實の罪なることを訴ひ出で、自から仇を復さんことを請うたので、之を許した。すると、隱岐の士民も、經清の行爲を憎み、內から應援をしたので、とう〳〵經清を誅殺した。八月に、山內重直は、兩條氏のすぐり拔きの兵士數百人を、おびき寄せて殺した。九月に、伯耆の國の人々は、相驚いて曰ふには、秀吉は上方地方で討死し、重直がまさに來り襲はうとして居ると曰つたので、元續は、怖れて、京都に逃げ込み、其子なる小鴨元清も亦、逃げ走つた。秀吉は之を聞いて笑つて曰ふには、これは、吉川元春が、根無し言をこしらへ設けて世間に觸れまはらせて、戰爭をせずして、元續を逃げ走らせたのである。元春の智略あること、元續の臆病なることは、いづれも皆、天下に二つとない者であると曰ひ、因つて、元春に請うて、元續を本國にかへらせるやうにしてやつた。

秀吉誅明智光秀。遂代織田氏。居大坂。元春羞屈下之也。居常怏怏不樂。讓家元長而老。十一年。九月。隆景遣弟秀包及廣家赴大坂。尋去歲之盟。秀吉悅秀包有姿容。留之。先是。杉原景盛殺兄元盛。誣以叛。事覺。七月。隆景遣三弟元秋。元政。元康。攻殺景盛。以其弟次郎承杉原氏後。十三年。四月。秀吉伐南海。令隆景。元長入伊豫。元長稱疾歸。廣家代之。七月。定伊豫。秀吉徙河野通信于三原。令隆景代領其國。賜僧惠瓊。來島某各萬石。十月。隆景。元長如大坂。秀吉令諸將郊迎。曰。向使兩川變約。則吾豈得至此。因饗之。

【字解】【羞】……はづ、愧づる也。【屈下】……腰をかゞめて之が下となる。【居常】……平生。【怏怏】……音アウアウ。不平なる貌。【老】……退隱する。【尋】……かさぬ。鄭玄曰く、尋は溫なり。諸の尋盟と云ふものは、皆、前の盟已に寒きを以て、更に之を溫めて熱からしむるなり。溫は重ぬるの義あり、故に尋を「重ぬ」と訓ず。左傳の哀公十二年の條下に見ゆ。【三原】……備後に在り。【來島某】……助兵衞。【郊迎】……城外まで出迎へる。【兩川】……吉川元春、小早川隆景。【使兩川變約】……吉川、小早川をして和睦の約束を變ぜしめなば。信長の變に乘じて和議を易へたならばとの意。【得至此】……此とは、今日の地位の義。秀吉時に關白たり。

【講義】秀吉は、明智光秀を誅殺し、後に遂ゝ織田氏に代つて、天下の權を取り、居城を大坂に構へた。元春は、腰を屈めて秀吉の下に立つことを恥づかしく思うて、平生、不快の念を抱いて、樂しまず、家を元長に讓つて、隱居して仕舞つた。天正十一年の九月に、隆景は、弟の秀包、及び廣家を遣はして、大坂に出かけて行かしめ、去年取り結びたる盟約をあたゝめた。秀吉は、秀包が風采容貌のうつくしきを悅んで、之を留めて、大坂に居らしめた。これより先に、杉原景盛は、兄の元盛を殺して、其家を奪はうとし、元盛が謀叛の企をなしたからであると云つて、其罪を誣ひた。その事が發覺したので、七月に、隆景は、三人の弟なる元秋、元政、元康を派遣して、景盛を攻め殺し、其弟の次郎をして杉原氏の後を嗣がせた。十三年の四月に、秀吉は、南海道を征伐し、隆景、元長をして伊豫に討ち入らしめた。元長は、病氣であると稱して國に歸つた。弟廣家が之に代つた。七月に、伊豫を平定した。秀吉は、河野通信を三原に徙し封じ、隆景をして代つて其國を領せしめ、僧惠瓊と來島某とに各々一萬石づゝを賜はつた。十月に、隆景、元長は、大坂に往つた。すると、秀吉は、諸將をして城外に出迎へしめて曰ふには、さきに、吉川、小早川の二人が和睦の約束を變ずることがあつたならば、吾は、どうして今日の此位地に至ることが出來やうぞ。二人は、われに大恩あるものであると曰ひ、因つて、之を饗應した。

時秀吉將伐島津氏。囑元長。請元春爲先鋒。約封之筑前。元春羞爲秀吉所驅使。弗肯。是歲。秀吉奏請。以輝元敍從四位下。任侍從。遣黑田孝高促元春。元春不起。輝元曰。公爲我一出。元春不得已。乃與隆景俱發。攻拔小倉城。將移陣松山。疽發背。不得行。隆景與孝高。攻拔閏津。下障子岳。進攻賀春岳。元春瘥。將發。黑田氏饗之。供鮭。瘡復劇。乃遣囑二子。

以後事言不及私。終卒。年五十七。元長使廣家奉喪歸安藝。而自從隆景。降賀春守將高橋種元。

【字解】【驅使】……音クシ。追ひ使ふ。【侍從】……拾遺補闕の官なり、天子の御前に侍り從ふの義を以て、侍從と稱す。【不起】……命に應ぜぬこと。【小倉】……豐前に在り。【松山】……豐前に在り。【疽】……音ソ。癰の深き者、はれ物。五臟不調の致す所なりと云ふ。【閏津】……豐前に在り。【障子岳】……豐前に在り。【加春岳】……豐前に在り。【瘥】……いゆ。病愈ゆる也。【鮭】……さけ。【二子】……元長、廣家。

【講義】その時に、秀吉は、將に島津氏を征伐しやうとして居つたが、元長にたのんで、元春に其軍の先鋒となつてくれよと請ひ、そして、元春を筑前に封ずることを約束した。けれども、元春は、秀吉に迫ひ使はれることを愧ぢて、承知しなかつた。この歳に、秀吉は、朝廷に奏上し請うて、輝元をば從四位下に敍し、侍從に任ぜられることにし、又黑田孝高を派遣して、元春を催促して島津征伐軍の先鋒たらしめやうとした。けれども、元春は、なか〳〵其命に應じなかつた。すると、輝元が曰ふには、いやでは御座らうけれども、どうぞ、貴殿、我が爲めに一たび出でゝ下さいと曰つたので、元春は致し方なくして、そこで、隆景とともに、出發し、小倉城を攻め落し、將に陣營を松山に移さうとせしときに、疽といふ腫物が、脊中に出來たので、行くことが出來なかつた。隆景は、孝高とともに、攻めて、閏津を攻め落し、障子岳を下し、進んで賀春岳を攻めた。元春は、腫物が直つたので、將に出發しやうとしたが、黑田氏が之を饗應して、鮭を出したのに、その鮭が、直りかけて居る腫物に障つたと見えて、瘡が再びひどく痛み出したので、そこで、元春は、二子の元長、廣家に、死後の事を遺言してたのみ置いたが、其言葉は一家の私の事には及ばなかつた。かくて、元春は、とう〳〵死んだ。其年は、五十七歳であつた。そこで、元長は、廣家をして、父の遺骸を奉じて、安藝に歸らしめ、そして、自分は隆景に從つて、賀春の守將なる高橋種元を降參させた。

十五年。三月。豐臣秀長至。合我兵入日向。抵耳川。進圍高城。島津家久夜襲其營。秀長畏其兵慓悍。不敢出。元長欲逆戰。弗許。秀吉至。龍造寺氏以下皆降。五月。島津氏請和。秀吉徙隆景于筑前。治名島。賜秀包筑後三郡。治來目。元長道病。六月。遂卒。元長倔強類父。爲秀吉所畏惡。常有退去之志。見於歌詠。遺命立廣家。黑田孝高素悅廣家色美。與之親善。爲言秀吉立之。襲食隱岐。廣家初名經信。於是。改今名。是歳冬。肥後。豐前盜起。隆景。廣家受命。討而平之。筑前士民稔聞隆景賢聲。人人相慶。隆景務闊其禁網。漸修治教。倣下野足利學校。建黌舍。釋奠先聖。時亂離日久。人始聞絃誦之聲。

【字解】【抵】……至る。【耳川】……日向に在り。【高城】……日向に在り。【島津家久】……義久の弟なり。【慓悍】……音ヘウカン。強くたけきこと。【治】……鎭城を置く。【倔强】……音クツキャウ。梗戾の貌。柔服せざるを云ふ。强情にして人に屈服せざること。【畏惡】……音ヰヲ。おそれにくむ。【見于歌詠】……詠んだ歌の中に其心が見えて居る。【襲食】……襲は繼ぐ也。繼いで領地とする。【經信】……一に繼信に作る。【稔聞】……稔は音シン、熟なり。久しく聞き及ぶ。【賢聲】……賢明なりといふ評判。【闊其禁網】……闊は寛なり。禁網は音キンマウ、禁令なり。禁制法度をゆるやかにする。【漸修治教】……だん〳〵に政治教育の事を整頓する。【足利學校】……足利は地名、古への國學の遺跡となし、或は小野篁の建立となし、諸説一定せず、後、上杉憲實之を中興し、學領を寄附し、書籍を納め、學徒を養ふと云ふ。【黌舍】……音クワウシヤ。學校。【釋奠】……音セキテン。禮の最も重きものにして、幣帛あり、牲牢あり、合樂あり、三獻あり、先づ其采帛を釋置して、神位の前に奠安す、故に之を釋奠と云ふ。禮記に見ゆ。【先聖】……孔子を云ふ。【亂離】……世亂れて人民離散する。【絃誦之聲】……讀書の聲。禮記に、春誦夏絃とあり、古は琴瑟に和して詩を歌ひ書を誦す、後世に其事なしといへども、之を假用して、書生の讀書のことゝす。

【講義】天正十五年の三月に、豐臣秀長が到著し、我が毛利氏の兵士を合はせて、日向に打つて入り、耳川に至り、進んで高城を圍んだ。島津家久が、夜に乘じて其陣營を不意擊した。秀長は、島津氏の兵士の强く武勇なることを畏れて、敢て出でやうとしなかつた。元長は、出でゝ迎へ戰はうと思うたけれども、秀長は、許さなかつた。そのうちに、秀吉が自身に到著したので、龍造寺氏以下は皆、降參した。五月に、島津氏は、和睦を請うた。秀吉は、隆景を筑前に徙し封じ、居城を名島に置き、秀包には、筑後の三郡を賜ひ、來目に鎭城を置かしめた。元長は、道で病氣にかゝつて、六月にとう〳〵死んだ。元長は、强情にして人に屈服せざることは、父元春に似て居つて、秀吉に畏れられ憎まれて居つたので、常に退隱して世を避けやうとの志があつて、その事は、元長の詠んだ歌に見えて居る。元長は、遺言の命令をなして、廣家を立てゝ跡嗣とした。黑田孝高は、平生から、廣家の容貌の美なるを悅んで、之と仲が善かつたので、廣家の爲めに、秀吉に申し上げて、廣家を立てゝ跡嗣とし、隱岐の領地を相續させることにした。廣家は、はじめの名は經信といつたが、是に於て、今の名に改めた。この歳に、肥後、豐前に賊が起つたので、隆景、廣家は、命令を受けて、征伐して之を平定した。筑前の士民は、隆景の賢明なることの評判を、久しく聞き及んで居つたので、人々は、賢明なる主君を得るに至つたことを相賀した。隆景は、筑前に在つて、つとめて禁令法網を寛大にし、だん〳〵に政治教育のことを修理し、下野の足利學校にならひて、學校を建て、先聖孔子を祭るの儀式を行つた。その時に、世亂れて人民離散すること、まことに久しい間であつたが、こゝに於て、人々、始めて絃歌誦讀の聲を聞いた。

十六年。輝元任參議。隆景。廣家。秀包。皆爲四位侍從。九月。秀吉養浮田秀

家女。妻廣家。初廣家父兄皆死於西海之役。秀吉曰。吾許之以筑前。會其死不果。當以西海一州恤其孤。石田三成。大谷吉隆。說秀吉曰。輝元所領。已跨中國。而隆景。秀包。各領一國。備前浮田氏素與之惡。以爲可使相禁也。而亦婚於吉川。吉川今又受封矣。天下無事則已。苟有事則關以西皆歸毛利氏。爲今之計。莫若就輝元封內割予一二州。是名賜封。而實分其勢也。秀吉然之。乃令輝元以出雲。伯耆數郡加賜廣家。治富田。

【字解】【廣家父兄】……元春、元長を指す。共に島津氏を討つの役に死せり。【西海之役】……西海道の役、卽ち島津氏征討の役。【恤其孤】……孤は孤兒、廣家を指す。その孤兒を引き立てゝ目をかける。【隆景秀包各領一國】……隆景は筑前を、秀包は筑後を領す。【使相禁】……相互に抑へ合つて勢をとめる。浮田氏をして毛利氏の勢を禁格せしめ、毛利氏をして浮田氏の勢を抑制して、互に自由ならしめざるを云ふ也。【割予】……さき與ふ。

【講義】天正十六年に、輝元は、參議に任ぜられ、隆景、廣家、秀包は、皆、四位の侍從となつた。九月に、秀吉は、浮田秀家の娘を養女として、之を廣家に妻はした。初め、廣家の父元春、兄元長は、皆、西海道の島津征伐の戰役に於て死んで仕舞つたので、秀吉が曰ふには、吾は元春に筑前國を與へると云つて約束しておいたが、元春が死んだので、之を果さなかつたのである。されば、西海道の中の一箇國を以て、其孤兒たる廣家にめぐんでやるべき筈であると曰つた。すると、石田三成、大谷吉隆が、秀吉に說き勸めて曰ふには、輝元が領地は、すでに、中國（山陰、山陽の二道）に跨つて居りまするし、そして、隆景、秀包は、それ〴〵、一箇國づゝを領地として居りまするが、備前の浮田氏が、平素より之と仲が惡う御座りまするので、毛利氏と浮田氏とをして互に抑へ合はせることが出來ると思うて居りました。而るに、浮田氏も亦吉川氏と緣組し、吉川氏が今又た領地を貰ふとしますると、天下が泰平無事のときは、それで宜しう御座りますけれども、もし事變が起りますときは、關西地方は、皆、毛利氏に附き從ふで御座りましやう。されば、今日の計策としましては、輝元の領地の中に於て、廣家に一二箇國を割いて與ふるよりも、勝れたる事は御座りませぬ。これは、名目は封邑を賜ふのでありますけれども、內實は毛利氏の勢力を分けるので御座りますと曰つた。秀吉は、之を成程と思うて、そこで、輝元をして、出雲、伯耆の數郡を割いて、廣家に加增せしめ、出雲の富田に其鎭城を置いた。

十八年。秀吉東伐北條氏。使輝元守京師。隆景守清洲。廣家守岡崎。北條氏不降。召隆景謀之。對曰。先人圍富田。休攻戰。示持久。多縱反間。使其君臣相疑。索其妻孥。而招降之。秀吉曰。吾師之也。遂以其計。平北條氏。先是。輝元患吉田隘狹。城于己斐。十九年。成。徙焉。更名廣島。

【字解】【清洲】……尾張に在り。【岡崎】……參河に在り。【先人圍富田】……元就が尼子義久を攻むるを指す。【示持久】……公卿文儒を迎へ書を陣中に講ずる等。【反閒】……敵の閒者を利用して味方の用を爲さしむる也。【索其妻孥】……城中に居る者の妻子をさがしもとめる。【秀吉曰吾師之也】……豐臣氏記を參看せよ。【隘狹】……音アイケフ。隘は狹窄なり。土地の狹きこと。【己斐】……安藝に在り。

【講義】天正十八年に、秀吉は、東の方北條氏を征伐したが、輝元をして京都に留まり守らしめ、隆景をして清洲を守らしめ、廣家をして岡崎を守らしめて置いた。しかるに、北條氏が、なか〳〵降參しなかつたので、秀吉は、隆景を呼び寄せて、之と相談した。すると隆景が曰ふには、わが亡父元就が、尼子氏の富田城を圍みましたときには、攻め戰ふことを休止し、久しい閒滯陣して居ると云ふ意を示し、多く反閒をはなち行つて、敵の君臣をして相互に疑ひ合はせる樣に致し、城中の將士の妻子の隱れ居る者をさがし求めて、之を招き降さしめるやうに致しましたと曰つた。秀吉が曰ふには、吾は、此計略を師として、見習ふことに致さうと曰ひ、とう〳〵其計略を以て北條氏を平定した。これより先に、輝元は、吉田城の構內が手狹なることを心配し、己斐と云ふ所に城を新築したが、天正十九年に、出來上つたので、こゝに徙り住んで、そして名を廣島と改めた。

文祿元年。秀吉發兵伐朝鮮。毛利。吉川。小早川氏。爲後隊。諸將在朝鮮。連署稟事。隆景花押點畫甚繁。福島正則傍觀。謂之曰。押字宜疏。不宜密。不然則臨死作遺狀。不能速成也。隆景笑曰。大丈夫當橫尸原野。何以遺狀爲。正則有愧色。當此時。浮田秀家。石田三成等諸將。在國都。小西行長爲先鋒。進據平壤。平壤以南至國都。城砦相屬。二年。正月。明將李如松率大兵來援朝鮮。陷平壤。行長敗走。大友義統亦棄城走。秀包與黑田長政。

將兵迎行長。殿而退。如松乘勝南下。秀家等令諸城砦皆解還。萃於國都。隆景守開城。獨不肯還。曰。諸君皆去。吾當獨留。吾受命外征。固不期生。吾老矣。願與明人一戰。使明人知日本有小早川隆景者也。即敗死。喪一老翁。何損於國哉。秀家等促之再三。隆景不得已而還。與秀包。元康。及立花宗茂三將。合兵二萬。未至國都三十里而陣。數日。候騎報曰。如松兵既至碧蹄驛。蓋十餘萬騎矣。隆景曰。足以試我武矣。乃分兵爲六隊。迎戰。前軍二隊不利。郤。隆景揮槍大呼而進。士卒皆奮。莫不一當百。三將自左右夾擊之。明軍遂大敗。如松墮馬。隆景將井上某鎚之。不中。與其將李有聲。鬬而斬之。如松僅以身免。逐北至臨津。斬首萬餘級。而我兵死者僅百餘人。如松入開城。視其所失亡。痛哭徹曉。遂退軍三次。明軍大沮。明之乞和於我。本於此戰也。四月。和成。國都諸將欲撤還。恐虜兵追躡。群議不決。隆景倚柱而睡。石田三成喚起問計。隆景曰。縱火焚城。更殿而退。何虞之有。從之。全軍而還。

字註【文祿】……後陽成帝の時の年號。【連署】……連名連判。【稟事】……稟は音リン、白す。事を申し上げる。【花押】……音クワアフ。書き判。【點畫甚繁】……書き判の筆數が大層多くして〳〵だ〳〵しい。【押字】……書き判の文字。【疎】……字畫の少きこと。【密】……字畫の多きこと。

【遺狀】……遺言狀、書置。【何以遺狀爲】……原野で討死すれば書置をするとは無し、點畫のまばらなるも此場合には不用なりと也。【國都】……朝鮮の都、即ち京城。【殿】……しんがり。【萃】……聚まる。【固不期生】……もとより生存することをあてにしては居らぬ。【何損於國哉】……我が日本の損には成らぬ。【候騎】……斥候の騎兵、もの見の騎兵。【井上某】……五郎兵衛。【鎚】……音ショウ。鎗にてつくこと。【痛哭徹曉】……夜の明けるまで、夜どほし、ひどく歎き悲む。【退軍三次】……次は宿なり。三とまりする路程だけ退軍する。【大沮】……沮は喪なり。大にひるむ。【撤還】……陣を引き拂つて還る。【追躡】……音ツヰセフ。あとを追つかけて擊つ、追擊する。【更】……かはる〴〵。

講義　文祿元年に、秀吉は、軍勢を繰り出して朝鮮を征伐した。毛利、吉川、小早川氏の軍勢は、あと備への隊となつた。諸將が朝鮮に居つて、連判して事を申し上げるのに、隆景の書判は、その字畫が大層繁雜であつた。福島正則が、傍に居つてそれを觀て、隆景に向つて曰ふには、書き判の文字は、字畫の少いが宜しくして、字畫の多いは宜しく御座らぬ。字畫が少くないときは、死なうとするときに遺言狀を書くのに、速に出來上らぬもので御座ると曰つた。隆景は、笑つて曰ふには、大丈夫たる者は、まさに討死して屍骸を原野に横たふべき筈で御座る。どうして遺言狀などが入りましやうぞと曰つた。正則は、愧ぢ入つた樣子であつた。この時に當りて、浮田秀家、石田三成などの諸の大將は、朝鮮の都即ち京城に居り、小西行長は、先鋒となつて、進んで平壤に立て籠り、平壤より南の方、京城に至るまでは、城や砦が、引きつゞいて居つた。二年の正月に、明の大將なる李如松が、大軍を引き連れて、來つて朝鮮を援け、平壤を攻め落したので、行長は、負けて逃げ走り、大友義統も亦、守つて居つた城を棄てゝ、逃げ走り、秀包と黑田長政とが、兵士を引き連れて、行長を出で迎へ、しんがりして退却した。如松は、勝つた勢に乘じて、南の方に向つて攻め下つて來た。秀家等は、諸の城や砦に命令して、皆、守備を解いて引き返し、京城に集まらせることにした。隆景は、開城を守つて居つたが、ひとり、引き返すことを承知せずして曰ふには、諸君は皆立ち去られよ。吾は、たゞひとり此處に留まつて居りましやう。吾は、秀吉公の命令を受けて、外國に打つて出でたからには、もとより一生きて還ることを心あてにしては居りませぬ。願はくは、明の人々と一合戰して、明の人々に、日本に小早川隆景と云ふ者が居るといふ事を知らせたいと思ひます。もし不幸にして敗戰して死んだとても、たゞ一人の老人を失つただけのことで、我が日本國の爲めに、何の損にも成りませぬと曰つた。けれども、秀家等が、隆景の退軍を催促すること、兩三度にも及んだので、隆景は、致し方なくして、引き返し、秀包、元康、及び立花宗茂の三人の大將とともに、兵士二萬を合はせ、京城の手前三十里の所に陣取つた。數日立つと、物見の騎兵が報告して曰ふには、如松の軍勢は、もはや碧蹄驛に到著いたしまして、其軍勢は十餘萬騎もあらうと云ふことで御座ると曰つた。すると、隆景が曰ふには、それほどならば、我が武勇の如何をためすに十分であると曰ひ、そこで、軍勢を分けて六隊となし、出で迎へて戰つたが、前軍二隊は、負けて退却した。すると、隆景は、槍を揮つて、大に呼ばゝつて進んだ。士卒は皆奮戰して、味方の一人にして敵の百人に當らざるものは無く、秀包、元康、宗茂の三人の大將が、左右から明軍を夾み擊ちにした。かくて、明軍は、遂に大に負けて、如松は馬から落ちたので、隆景の部下の大將井上某が、槍を以て之を突いたけれども、中らず、如松の部下の大將李有聲と戰つて、之を斬り殺し、如松は、やつとの事で、其身を以て免れ去つた。我が軍は、明軍の逃げ走るを逐つかけて臨津まで至つた。敵の首を斬ること、一萬餘級であつた。そして、我が軍勢は死んだ者が僅に百餘人であつた。如松は開城に入り、其軍の失ひ無くしたところの兵數を視て、夜どほし、ひどく歎き悲み、遂に三とまりの路程だけ軍勢を退郤し、明軍は、大に落膽した。明が和睦することを我が日本國に乞うたのは、此合戰に原因したのである。四月に、和睦の相談が纏つたので、京城に居る我が國の諸大將は、守備を取り拂つて引き返さうとしたが、敵兵が其あとを追つかけて擊たんことを恐れ、大勢集まつて評議したけれども、決定しなかつた。其時に、隆景は、柱に倚りかゝつて居睡りして居つたが、石田三成が呼び起して、退却の計略を問うた。すると、隆景が曰ふには、火を附けて城を燒き拂つて、其さわぎに乘じて、かはる〴〵、しんがりして引き退くことに致すときは、何の心配も御座るまいと曰つた。そこで、隆景の意

見に從つて、軍勢を全〳〵して引き返した。

六月。輝元義子秀元濟レ海。與諸將俱攻晉州。拔レ之。秀元。元清子也。其幼。元春。隆景目レ之。相語曰。何酷肖先君也。時秀吉欲以其外甥秀秋。爲毛利氏後。或以告隆景。隆景素知秀吉畏忌。且不屑受其封。欲返致之。及聞是言。竊度曰。不可使他人汨我宗家。且秀秋妄庸人。養之是養禍也。吾寧任其弊。已而秀吉從容問之曰。參議齡强而無嗣。何如。隆景卒對曰。既養穗田氏子矣。秀吉憮然曰。吾未之知也。隆景使人馳告輝元。使立秀元。遂請秀秋爲己子。秀吉喜許之。乃讓與之筑前。而自老于三原。秀吉始伐韓之年。自肥前航歸大坂。過大浦。舟人謀逆。故觸舟于礁。殆溺。秀元以走舸救之。秀吉梟舟人。挈秀元入京師。奏爲四位侍從。報其德也。遂有外征之命。年甫十五。

【字解】【義子】……養子。【元清】……元就の第五子。【酷肖先君】……酷は甚だ。骨肉相似たるを肖と云ふ。先君は、元就を指す。容貌が大層父上に似て居る。【不屑】……いさぎよしとせず、有り難く思はぬ。【汨】……音コツ、亂なり、沒なり、不意に外物の入り込んで亂れること。【宗家】……本家。【汨我宗家】……本家へ他人を入れて筋目を亂す。【妄庸人】……なみ〳〵の人、役に立たぬ人。【吾寧任其弊】……吾、むしろ其弊をうけ、宗家をして禍を免れしめん。秀秋の惡弊は、自分に引き受けて、宗家をして禍を免れしめんとの意。【參議】……輝元を云ふ。【齡强】……四十歲を强といふ。【卒】……音ソツ。急遽の貌、あはたゞしき也。【穗田氏子】……秀元なり。秀元の父元清、穗田氏を冒せり、故にかく云ふ。【憮然】……音ブゼン。失意の貌、がつかりする。【始伐韓之年】……文祿元年なり。【大浦】……肥前に在り。【舟人謀逆】……與二兵衞の事を云ふ也。清正、秀吉に從ひ、備中の冠山城を攻め、之を拔く。はじめ、城中に黑崎傳右衞門と云ふものあり、本と備中の海濱に在りて、兄弟漁獵を業となす。城將松田傳九郎、大に之を嘲る。黑崎、火を放つて出で降る。城之が爲めに陷る。秀吉議すらく、黑崎降るといへども、私意を以て公義を害す、其罪大なりと。終に之を梟す。其弟與二兵衞之を怨み、遂に身を變じて籍師となり、秀吉を害せんと欲し、朝鮮の役の時に、秀吉の船を離破せしめたり。然れども遂に志を得ずして害せらる。今に至るまで與二兵衞灘と稱すと云ふ。その詳なることは、太閤記を參看すべし。【礁】……音セウ。海中の暗礁。【走舸】……音サウカ。早舟。【挈】……ひつさゞ、たづさふ、引き連れる。

【講義】六月に、輝元の養子の秀元は、海をわたつて朝鮮の地に入り、諸將とともに、晉州を攻めて、之を攻め落した。秀元は、元清の子である。秀元の幼少なるときに、元春と隆景とが、之を見て、語り合つて曰ふには、なんと父上に善く似て居るでは御座らぬかと曰つた。時に、秀吉はその外甥(ヲヒ)なる秀秋を以て毛利氏の後嗣となさうと思うた。ある人が、此事を隆景に告げた。隆景は、はじめより、秀吉が自分を畏れ憚り忌み嫌つて居ることを知り、其上に、秀吉より領地を貰ひ受けることを、こゝろよしと思はず、之を返して仕舞はうと思うて居つたが、此言葉を聞くに及んで、ひそかに思ひ度るには、他姓の人をして我が本家をかき亂さしめては成らぬ。其上に、秀秋は、なみ〳〵の人であるから、之を養子とするのは、禍を養ひ育つるのである。いつその事、吾れ自ら其弊を引き受けて、本家をして禍を免れしめるやうにしやうと思うた。とかくする中に、秀吉は、ゆつくりとして、隆景に問うて曰ふには、參議(輝元)は、年すでに四十にも成るのに、跡を繼ぐべき子が無いが、どうしたものかと曰つた。すると、隆景は、あはたゞしく答へて曰ふには、すでに穗田元清の子を養子といたしましたと曰つた。秀吉は、がつかりして曰ふには、吾は未だ其事を知らなかつたと曰つた。隆景は、人をして馳せて輝元に告げしめて、秀元を立てゝ跡嗣となさしめた。そして、隆景は、遂に、秀秋を自分の養子としたいと請うたが、秀吉は喜んで之を許したので、そこで、秀秋に筑前國を讓り與へて、そして、隆景自身は、三原に退隱した。秀吉が始めて朝鮮を征伐した年に、肥前から、舟にて海を渡つて、大坂に歸らうとして、大浦を通過した。その時に、船頭が逆謀を企て、ことさらに舟を暗礁に衝きあたらせて、難船させたので、秀吉は、ほとんど溺死しやうとしたが、其時に、秀元が、早舟を飛ばして、之を救ひ助けた。秀吉は、その船頭を誅して獄門にかけ、秀元を引き連れて京師に入り、朝廷に奏上して、四位侍從となした。これは、己を助けた恩德に報いたのである。かくて、秀元は、遂に海外征伐に出掛けよとの命令を受けたが、其年は、やつと十五歲であつた。

慶長二年。輝元。隆景並爲從三位中納言。與秀家皆修淀川堤。秀元襲輝元官爵。爲秀吉女壻。是年。復伐朝鮮。以秀秋。秀元。統諸將。六月。隆景病卒。年六十二。隆景爲秀吉所重。參其大計。而持己愼密。讒間不入。秀吉嘗欲徙封毛利氏于九州。隆景辭曰。八州已多。況增一乎。恐不能勝也。且先

人所二百戰而取。不レ忍レ棄レ之。秀吉乃止。及二退老一。以二誦吟一自適。以至レ於沒。

【字解】【慶長】……後陽成帝の時の年號。【襲】……繼ぐ。【參其大計】……其重大なる事件の相談にあづかる。【持己愼密】……自分の身の持ち方は、極めて愼しみ深くして、何事にも能く念を入れて、手落の無きやうにすること。【讒閒】……讒言して其仲を惡くすること。【不能勝】……其任に堪へることは出來ぬ。【先人】……元就を指す。【誦吟】……書を讀み詩歌を吟詠す。【自適】……自分の心にかなふやうにする。

【講義】慶長二年に、輝元と隆景とは、竝に、從三位中納言となり、秀家とともに、皆、淀川の堤防を修繕した。秀元は、輝元の官職位階を繼ぎ、秀吉の娘の壻となつた。この年に、秀吉は、ふたゝび、朝鮮を征伐し、秀秋、秀元の二人をして、諸大將を統轄させた。六月に、隆景は、病氣にかかつて死んだ。年は、六十二歳であつた。隆景は、秀吉に重んぜられ、其重大なる計策の相談にあづかつた。けれども、自分の身の持ち方は、極めて愼みぶかくして、物事に手落ちなく、能く念を入れた。そこで、讒言をして其仲を惡くしやうとする者も、入り込むべきすきが無かつた。秀吉は、嘗て、毛利氏を九州に所換へしやうと思うた。隆景は辭退して曰ふには、今の山陰・山陽兩道の八箇國でさへも、已に多過ぎる位で御座りますのに、まして、九州になれば、一箇國を增すので御座りますから、恐らくは其任に堪へることが出來ぬで御座りましやう。其上に亡父元就が百たびも戰爭して得たところで御座りますから、之を捨て去るに忍びませぬと曰つた。秀吉は、そこで、其議を中止した。隆景は、隱居するに及んで、書史を讀み、詩歌を吟詠して、呑氣に自分の氣まかせにして樂み、死ぬときまで、其通りであつた。

十二月。明兵圍二我將加藤清正于蔚山一。三年。正月。秀秋。秀元赴援。廣家謂二其騎一曰。明兵衆而不レ整。汝注視其後軍。今將レ走也。既而果走。廣家以二千餘騎一。先追レ之。明騎將吳惟忠。茅國器返戰。廣家縱橫奮擊。二將皆奔逃。清正望見之曰。彼以二蒲穗一爲二背幟一者誰。左右對曰。吉川也。清正曰。勇哉。恨二其幟之不一レ較著一也。當贈二吾號一。乃手取二其背幟馬藺一贈レ之。廣家驍名益著。秀吉欲二大賞一之。僧惠瓊素惡二於吉川氏一。乃與二石田三成一。俱廢二沮其議一。

【字解】【注視其後軍】……注視は屬なり。注視とは、目をつけ見る也。後軍は、あと備なり。あと備に善く目をつけ見る。注は、一に往に作る。【蒲穗】……音ホスキ。蒲(カマ)と云ふ草の穗。【背幟】……音ハイシ。さしもの。【不較著】……較著は音カウチョ、はつきり分る、目に立つ也。不較著とは目立たぬ。【號】……しるし。【馬藺】……音バリン。ほそね、とうしんぐさ、蕊に似て細く席とすべきもの。【廢沮】……邪魔をして止めさせる。

【講義】十二月に、明の軍勢は、我が軍の大將加藤清正を蔚山に圍んだ。慶長三年の正月に、秀秋、秀元は、赴き援けた。吉川廣家は、その騎士に向つて曰ふには、明の軍勢は、衆多なれども、整頓して居らぬ。汝、其あと備を注意して見よ。今將に逃げ走らんとして居るのであると曰つた。すでにして、明の軍勢が、案の通り逃げ走つた。廣家は、千餘騎の兵士を引き連れて、先づ第一番に之を追っかけた。明の騎兵の大將吳惟忠、茅國器が、引き返して戰つた。廣家は、縱橫十文字にかけめぐつて、奮擊突戰したので、明の二將は、皆、奔り逃げた。清正は、その戰爭のありさまを望み見て曰ふには、彼の蒲の穗を差し物として居る人は誰であるかと曰つた。左右の人が答へて曰ふには、吉川氏で御座りますと曰つた。すると、清正が曰ふには、勇壯なることである。その差し物がはつきりとして目立たぬのが殘念である。吾がしるしを贈つてやらうと曰ひ、そこで、手づから、その差し物なる馬藺を取つて、廣家に贈つた。廣家の武勇の名は、益々あらはるゝやうになつた。その後、秀吉は大いに廣家を賞與せんゝ思うれども、僧の惠瓊は、はじめより吉川氏と仲が惡かつたので、そこで、石田三成とともに、廣家に賞與しやうとの評議を邪魔して止めにした。

八月。秀吉薨。子秀賴嗣。毛利氏。德川。前田。上杉。浮田氏。竝稱二五大老一。共輔翼之。三成等離間諸老。五年。二月。輝元饗二德川公一。于二其第一。修レ好交盟。四月。德川公伐二上杉氏一。輝元遣二廣家一。惠瓊。將レ兵助レ之。三成使二惠瓊一言二輝元一曰。德川氏將レ不二利嗣君一。嗣君憂焉。將倚二公之力一。以討レ之。輝元乃將二兵四萬一。守二大坂一。增田長盛副レ之。三成自引レ兵。進入二美濃一。秀元諫二輝元一曰。秀賴幼騃。何辨二臧否一。大人愼勿レ惑二其言一。且君與二德川一盟。未幾背レ之。可乎。不レ聽。秀元曰。然則大人擁二秀賴一。以東伐。兒請爲二先鋒一焉。則諸將從二德川一者。皆來屬レ我。我勝必矣。坐守二此地一。非レ計也。又不レ聽。命與二廣家一。陣二瀨田一。徇二伊勢一。攻拔二津城一。聞二東西之軍會一。美濃一。則北。屯二南宮山一。惠瓊與二長曾我部盛親一。長束正家一。陣二山下一。兵凡三萬。

【五大老】……德川内大臣家康・前田大納言利家、上杉中納言景勝、毛利中納言輝元、浮田中納言秀家。【交盟】……互に誓文を取りかはす也。【嗣君】……秀頼を指す。【幼騃】……音エウガイ。騃は無知なり。幼少にして事理を知らぬこと。【臧否】……音ザウヒ。臧は善なり。善悪。【津城】……伊勢に在り。【南宮山】……美濃の垂氷驛の南に在り。

講義 八月に、秀吉薨去し、その子の秀頼が跡を嗣いだ。毛利氏、德川氏、前田氏、上杉氏、浮田氏が、相竝んで、五大老と稱し、相共に秀頼を輔佐することにした。然るに、三成等は、諸大老の親密なるは自分等に不利益であるから、之を仲惡くするやうにした。慶長五年の二月に、輝元は、德川公をその屋敷に招いて御馳走し、好情を修め、誓文を取りかはして、盟を爲した。四月に、德川公は、上杉氏を征伐した。輝元は、廣家と惠瓊とを派遣して、軍勢を引き連れて、德川公の東伐を助けしめた。すると、三成は、惠瓊をして輝元に言はしめて曰ふには、德川氏は、將に秀頼公に對して不利益なる事を致さうとして居るので、秀頼公は、之を心配して居られ、まさに貴殿の力にたよつて德川氏を征伐しやうとして居られますと曰つた。輝元は、そこで、軍勢四萬人を引き連れて、大坂を守り、增田長盛が、その副將であつた。三成は、自身に、軍勢を引き連れて、進んで美濃に入つた。秀元は輝元を諫めて曰ふには、秀頼公は、幼稚にしていまだ物事の道理を知られませぬから、どうして事の善惡を辨へ知られましやうぞ。されば、父上には、愼しんで、彼等の善い加減な言葉に御迷ひなされてはなりませぬ。且つ又、あなたは、德川と御盟ひなされてから、未だ幾日もたゝざるに、之に御背きなされるのは、善い事で御座りましやうかと曰つたけれども、輝元は聞き入れなかつた。すると秀元が曰ふには、左樣ならば、父上には、秀頼公を御連れ申し上げて、東方に向つて征伐に御出かけなされよ。私は、どうぞ、先鋒となりたいと思ひます。さうするときは、諸大將の、德川に附き從つて居る者は、皆、來つて我が味方に附き從ふとになりましやうぞ。さうすると、味方が勝利を得るに極つて居ります。坐ながらにして、何事をも爲さずして、此地を守つて居りますのは、得策では御座りませぬと曰つた。けれども、輝元は又聞き入れずして、秀元に命じて、廣家と與に、瀨田に陣取り、伊勢をふれまはつて下さしめた。かくて、秀元等は、津の城を攻め落し、東軍（德川方）と西軍（石田方）とが美濃に於て會戰するといふことを聞き、そこで、北に向つて進み、南宮山に屯營した。惠瓊と長曾我部盛親、長束正家とは、山の下に陣取つた。その兵は、凡そ三萬人であつた。

秀秋會西軍。首送款於德川氏。約爲内應。廣家亦與福原越後定議。勸秀元送款。秀元曰。吾家受託於幼弱人。棄之歸强國非義也。且無家君之命。安可自肆乎。廣家曰。豐臣氏恩澤侯。且叛歸東軍。況於我家乎。宜速決去就。是利納言也。秀元未決。廣家密因黑田長政納款。送福原某。粟屋某爲質。長政使之率衆來屬。擊西軍。以爲信。秀元曰。我山下軍。非從我降者。吾亦不忍擊之。唯當按甲不動。輝元在大坂。聞京極高次以大津應東軍。遣元康。秀包。與立花宗茂等。攻之。使人說曰。諸將爲嗣君擧義。公嗣君姻戚。何獨不從。高次不肯曰。今日之事。毛利與德川。爭雌雄耳。嗣君何關焉。於是。攻擊益急。高次遂致城而去。諸將將遂會美濃。當是時。西軍俟輝元。東軍俟德川公。相持未戰。

【幼弱人】……秀頼を指す。【强國】……德川氏を云ふ。【自肆】……みづからほしいまゝにする、自分の思ふやうにする。【恩澤侯】……恩澤を受けて諸侯となりし者。蓋し秀秋等を指すなり。侯の上に一に諸の字あり。【況於我家乎】……我が家は君臣の分なく又恩澤を受けたることなし。【去就】……豐臣氏を去り德川氏に就くなり。【利納言也】……輝元の爲めになる。輝元時に中納言たり、故に納言と云ふ。【質】……音チ、人質。【爲信】……僞なきのしるしとなす。【山下軍】……南宮山下の軍。長曾我部、長束、惠瓊等を指す。【按甲不動】……按甲は按軍と云ふが如し。按とは、じつとおさへて居ること。軍勢を止めて打つて出でぬこと。【嗣君姻戚】……高次は、秀頼の庶母松城君の弟なり、淀君の妹を娶れり。姻は、外親なり。【雌雄】……勝負。【關】……關係なり、あづかる。

講義 秀秋は、西軍の石田方に會合したが、第一番に、德川氏に内通し、裏切をすることを約束した。廣家も亦、福原越後と、評議を決定して、秀元に勸めて、德川氏に内通せしめやうとした。すると、秀元が曰ふには、吾が家は、幼少なる人（卽ち秀頼）から御頼みを受けたのであるのに、之を振り棄てゝ、强大なる國（卽ち家康）に附くのは、不義である。其上に、父上（輝元）よりの御命令も無いことである。どうして、自分勝手に思ふやうにすることが出來やうぞと曰つた。すると、廣家が曰ふには、豐臣氏から厚き恩澤を受けた大名たちでさへも、叛いて東軍に從つたぐらゐで御座る。まして、我が家の如く格別恩澤を受けたことのないものに於ては、猶ほ更のことである。速に去るか就くかを決定するが宜しい。これは、中納言殿の御爲めにも成るので御座ると曰つた。けれども、秀元は、未だ決定しなかつた。しかるに、廣家は、ひそかに、黑田長政に因つて内通し、福原某と粟屋某とを送つて、人質となした。長政は、之をして衆兵を引き連れて來り附き、西軍を攻擊して、以て内通したことの僞ならぬ證據となさしめやうとした。すると、秀元が曰ふには、我が山の下に陣取つて居る軍勢は、われに從つて降服する者では無く、そして、吾も亦、これまで味方であつた者をいきなり攻擊するには、忍びないから、吾は、唯だ、軍勢を引き止めて打つて出でぬことに致すべきであると曰つた。輝元は、大坂に居つたが、京極高次が大津を以て東軍の德川方に味方したといふことを聞いて、元康と秀包とを派遣し、立花宗茂等とともに、之れを攻めしめた。輝元は、又、人をして城に入り說き諭さしめて曰ふには、諸大將は、秀頼公の爲めに、義兵を擧げられましたが、貴殿は秀頼公の緣者でありながら、どうして、ひとり、之に從はれませぬぞと曰つた。高次は承知せずして曰ふには、今日の事たるや、毛利と德川とが勝負を爭ふので御座る。秀頼公は、どうして關係があらうぞと曰つた。こゝに於て、高次を攻擊することゝ、ますます手きびしかつたので、高次は、とうとう支へ切れずして、城を引き渡して立ち去つた。かくて、諸將は、將に遂に美濃に會合

しやうとした。この時に當りて、西軍は輝元の來るを待ち、東軍は德川家康の來るを待ち、對陣して睨み合つて居つて、未だ戰爭を始めなかつた。

九月。德川公至。而輝元未至。三成等。遂聚議于大垣。推浮田秀家爲將。以秀元爲先鋒。正家。惠瓊往參其議。還報。廣家怒曰。宰相代納言統師。不能爲秀家前驅。已而三成自來。請曰。毛利。浮田分將前後。豈有輕重乎。廣家終不聽。三成曰。然則公止軍於此。見我擧烽。則直襲東軍後。明日。兩軍皆陣關原。德川公猶疑我意。分兵當南宮。而進陣桃配野。惠瓊來見秀元曷之。秀元曰。軍事委廣家矣。惠瓊曰。公太閤義子。不可斯須忘秀賴。何得此推諉之言乎。秀元曰。吾必如約。惠瓊去。秀元使人謂廣家曰。東軍諸將。其質皆在大坂。棄而不顧。吾亦欲棄福原輩以應西軍。如何。廣家不肯。已而兩軍大戰。石田氏陣烽起。正家促秀元。秀元欲應之。廣家與宍戸元繼。爲先鋒。其兵皆免冑而坐。秀元不得進。乃託傳餐。故失戰期。世人傳笑。遂謂不得已之計。曰宰相傳餐。

【大垣】……美濃に在り。【參】……まじはる、あづかる、關係する。【宰相】……秀元を指す。秀元時に參議なり、故にかく云ふ。【納言】……輝元。中納言を略言する也。【前驅】……先がけ。【烽】……燧なり。のろし。【關原】……美濃に在り。【桃配野】……關原の東南に在り。【曷】つと。【推諉】……音スヰヰ。諉は委なり。推して他人に委する也。事を他人に推しまかせて、自分は其の責任を免れんとすること。【如約】……烽を擧ぐるを見ば東軍の後を襲はんとの約束の如くせんとなり。【促秀元】……約束通りにせよとむ、はげましいましむ。【斯須】……しばらく。

せり立てる也。【免冑而坐】……戰ふ心なき樣子なり。【託傳餐故失戰期】……傳は遞傳、順々におくると。辨當を使ふにかこつけてわざと合戰の時刻をはづす。朝に饗と云ひ、晩に餐と云ふ。

【講義】九月に、德川公(家康)は到著した。けれども、輝元は未だ到著しなかつた。そこで、三成等は、遂に、大垣に聚まり相談して、浮田秀家を推したゞきて大將となし、秀元を以て先鋒とするとにした。正家と惠瓊とが、行つて其相談にあづかり、引き返して來て、報告した。すると、廣家は怒つて曰ふには、宰相殿(秀元を云ふ)は中納言殿(輝元を云ふ)に代つて、軍勢を統轄する筈であるから、秀家の爲めに先懸となることは出來ぬと曰つた。とかくする中に、三成が、自身に來つて請うて曰ふには、毛利氏と浮田氏との兩氏が分れて前後に大將となるので御座れば、どうして、其間に權力の輕いと重いとの相違が御座らうぞと曰つた。けれども、廣家は、とう〳〵承知しなかつた。すると、三成が曰ふには、左樣ならば、貴殿は止まつて此處に陣取つて居られて、我がのろしを擧げて相圖をするのを見て、直ちに東軍のうしろ備へを不意擊ちせられよと曰つた。其明くる日に、東西の兩軍は、皆關原に陣取つた。德川公は、まだ、我が毛利氏の心底を疑つて、兵を分つて南宮山の軍に當らしめ、そして進んで關原の東南なる桃配野に陣取つた。惠瓊は、來つて秀元に面會して、之をすゝめはげました。すると、秀元が曰ふには、軍事はすべて廣家に任せて置いたと曰つた。惠瓊が曰ふには、貴殿は、太閤(秀吉)の義理ある子でありますから、しばらくも秀賴公の事を御忘れなされてはならぬ。どうして、此の他人に推しつけまかせるやうな言葉を吐かるゝことが出來ましやうぞと曰つた。秀元が曰ふには、吾は、屹度、約束の通りに致すであらうと曰つた。惠瓊は立ち去つた。すると、秀元は、使者を遣して廣家に向つて謂はしめて曰ふには、東軍の諸大將は、其人質が皆大坂に居るのに、それを棄てゝ顧みないやうである。吾も亦、さきに東軍に遣はせし福原、粟屋などを棄てて、西軍に應援しやうと思ふが、如何であるかと曰つた。廣家は、承知しなかつた。とかくする中に、東西の兩軍が大に戰ふと、石田氏の陣中に、のろしが上つて、毛利氏の軍に進めよと相圖した。すると、正家が秀元を催促したので、秀元は、之に應じやうとした。しかるに、廣家が、宍戸元繼とともに、先鋒たるべき筈であつたのに、其軍勢は、皆、冑を脱いで坐つて居つて、進み戰はうとの心が無かつたので、秀元は進むことを得ず、そこで兵糧をつかふのにかこつけて、わざと合戰の期會を失ふやうにした。そこで、世間の人は、言ひ傳へて笑ひ合つて、遂に、已むことを得ざるの苦計をば、宰相殿の兵糧使ひと曰ふに至つた。

是時。秀秋在松尾山。觀望兩端。德川氏促之。乃自後襲西軍。其家老松野主馬怒曰。主公何爲此不義之擧。小早川氏所未曾有也。終不肯戰。西軍大敗。我山下軍不戰而潰。廣家因長政謝德川氏曰。秀元宜速謁。顧輝元在大坂。不敢先也。乃下山西歸。長政與福島正則。欲止秀元爲質。馳出其前路。設帳。要而饗之。秀元有膂力。佯醉拗正則手曰。近日見公於大

坂矣。奮袂而去。一人不敢止。立花宗茂至草津。得關原敗聞。返至大坂。欲助輝元城守。輝元不聽。秀包亦返至。宗茂欲與俱歸東軍。秀包曰。吾從納言者也。乃入大坂。以疾歸安藝。尋卒。

字解 【松尾山】……關原の西南に在り。【觀望多端】……勝ちさうな方に味方しやうと思うて、樣子を見合はせて居る。【顧】……おもふに。【不敢先】……敢て父輝元に先だつて拜謁せざる也。【設帳】……幔幕を張り設け食膳の支度を爲す。【膂力】……音リョリョク。腕力。【拗】……音アウ。ねぢあげる。【草津】……近江に在り。【尋】……ついで、間も無く。

講義 この時に、秀秋は、松尾山に居つたが、どちらに附かうかと、双方の樣子を見くらべて居つた。德川氏が、之を催促したので、そこで、秀秋は西軍の後から不意擊した。すると、其家老の松野主馬が、怒つて曰ふには、わが殿は、どうして、此不義非道なる振舞をなされるか。わが小早川氏には、從來無かつたことで御座ると曰ひ、とう〳〵戰ふことを承知しなかつた。しかし、西軍は、大に敗戰し、我が山の下に陣取つた軍勢(卽ち長曾我部、長束など)は、一戰にも及ばずして、崩れ亂れた。廣家は、長政に因つて、德川氏に詫びて曰ふには、秀元は早速拜謁いたすべきで御座るが、ふりかへつて考へて見れば、父輝元は大坂に居つて、未だ拜謁いたさぬので御座ると曰ひ、そこで、山を下つて、西に向つて歸つた。長政は、福島正則とともに、秀元を止めて置いて人質としたいと思うたので、馳せゆきて、其前路に出で、食膳の用意などを爲し、待ち受けて强ひて之を饗應した。秀元は、元來、腕力が强かつたが、伴つて醉うたふりをして正則の手をねぢ上げて曰ふには、近日の內に、貴殿と、大坂に於て御目に懸りましやうと曰ひ、袂を振りきつて立ち去つた。長政、正則の二人は、敢て之を止めやうとしなかつた。立花宗茂は、草津に到著し、關原の合戰に味方が敗北したとの報告を得て、引き返して大坂に至り、輝元を助けて大坂城に立て籠らうとしたけれども、輝元は、聞き入れなかつた。秀包も亦返つて來た。宗茂は、一處に東軍に付かうとしたが、秀包が曰ふには、吾の進退は、中納言の意見に從ふもので御座るから、我が意に任せませぬと曰ひ、そこで、大坂に入つたが、病氣の爲めに、安藝に歸り、間もなく死んだ。

輝元避城居于木津川別第。削髮稱宗瑞。請降德川公。德川公與其親信井伊直政。密議曰。毛利氏右族。不可遽加讓削。而廣島其治所也。不奪此。莫以正典刑焉。議未決。會輝元使者來。曰。生死唯命。若垂大仁。得領周防。長門。望外之幸也。德川公大喜。許之。盡收其餘六州。惠瓊匿伊吹山。出依秀元。聞其通東軍。去匿鞍馬。聞吉川氏來索。又出匿本願寺子院。近江僧樂鎭。素與之惡。以告東將奧平信昌。信昌遣兵捕之。從者輿載。走東寺。追兵已迫。從者度不可脫。隔輿刺之。返鬪皆死。惠瓊未殊。遂就縛。十月。朔。與石田。小西。長束等。皆梟首京師。輝元徙長門。治于萩城。食三十萬石。不與公役。送其子秀就爲質。

字解 【木津川】……大坂に在り。一に川の字無し。【右族】……家柄、名族。【讓削】……音ジャウサク。罪を責め領地を削る。【治所】……居城のある所。【正典刑】……仕置を正しくする。【生命唯命】……生きるも死ぬるも唯だ御命令のまゝに從ふ。【伊吹山】……近江、美濃の界に在り。【鞍馬】……京都の西に在り。【子院】……附屬の末寺。【輿載】……かごに載せる。【隔輿】……かご越しに。【未殊】……殊は絕なり。未だ息の絕えざること。【不與公役】……軍役金穀普請などの徵發に關係せぬ。

講義 輝元は、大坂城を避けて、木津川の別第に居つたが、髮を剃つて宗瑞と稱し、降服することを德川公に請うた。德川公は、その親密にし信用して居る家來井伊直政と、ひそかに相談して曰ふには、毛利氏は天下の名族であるから、遽に罪を責め領地を削り減らすことは出來ない。しかし、廣島は其居城にして、其領地の政治の出づる所であるが、之を奪ひ取らぬときは、仕置を正しくすることが出來ないのである。さて如何したものであらうかと曰つて、評議が未だ決定しなかつた。折しも、輝元の使者が來つて曰ふには、生きるも死ぬるも、唯だ御命令のまに從ひまするが、若し大いなる御仁惠を垂れ賜ふことを得て、周防、長門の二國を領地とすることが出來ますならば、まことに、希望以上の幸福で御座りますと曰つた。そこで、德川公は、大に喜んで、之を許し、其他の六箇國をば殘らず取り上げて仕舞つた。惠瓊は、伊吹山に匿れて居つたが、出で、秀元にたよらうとしたけれども、秀元が東軍に內通したといふ事を聞いたので、去つて鞍馬山に匿れ、吉川氏が來つて搜しもとめて居ると聞いたので、又、出で、本願寺の末寺に居つた。近江の坊主の樂鎭は、平素から、惠瓊と仲が惡かつたので、此事をば、東軍の大將奧平信昌に告げた。信昌は、兵を遣はして之を捕へやうとしたので、從者は、惠瓊を輿(カゴ)に載せて、東寺に逃げ走らうとしたが、追つかけて來る兵が、已に追ひつかうとしたので、從者は、とても免れることは出來ないと思ひ、かご越しに惠瓊を刺し殺して置いて、自分等は、引き返して鬪つて皆死んで仕舞つた。惠瓊は、未だ息が絕えなかつたが、遂に捕縛せられ、十月の朔に、石田、小西、長束等とともに、皆、首を京都に於て獄門にかけられた。輝元は、長門に徙り、萩城を治所と定め、三十萬石を領し、軍役、金穀、土木等の徵發には關係ないことにし、其子の秀就を送つて人質となした。

輝元既養秀元。而生秀就及就隆。德川氏欲分長門于秀元。秀元辭之。退

居長府。以攝國政。會其室卒。德川公養松平康元女繼之。十三年。又以其孫女妻秀就。秀就時爲四位侍從。十九年。冬。德川公攻大坂。留二壻于江戸。秀元因水野忠元請曰。既辱姻婭。猶何見疑。願爲先鋒効力。許之。兵解歸國。元和元年。夏。兵再起。秀元先西道諸將。至大坂。斬首三百級。有賞。秀就取海道。阻風後至。無罰。

【字解】【長府】……長門に在り。【室】……内室、夫人。【繼之】……後妻とする。【二婿】……二人のむこ、卽ち秀元、秀就。秀元、秀就の二人を江戸に留めしは、亦大坂方を援けんかと疑ふ也。【姻婭】……音インア。姻は外親なり。婭は兩壻相謂つて婭と云ふ。【効力】……力をいたす、盡力する。【元和】……後水尾帝の時の年號。

【講義】輝元はすでに秀元を養子としたが、其後、秀就及び秀隆を生んだ。德川氏は、秀元に長門を分ち與へるやうにしやうと思うたけれども、秀元は、之を辭退して、退いて長府に居つて、國の政事を後見した。その内に、その妻が死んだので、德川公は松平康元の娘を養女として、その後妻となさしめた。慶長十三年に、德川公は、又、其孫娘を秀元に妻はせた。秀就は、その時に、四位の侍從であつた。十九年の冬に、德川公は、大坂を攻めたが、その時に、二人の壻卽ち秀元、秀就を江戸に留めて置いた。すると、秀元は、水野忠元に因りて請うて曰ふには、私共は、すでに壻舅の間柄となつて居りますのに、それでもなほ、如何して疑はれるので御座りますか。何卒、先陣となつて力を盡したいと思ひますと曰つたので、之を許した。やがて、德川と大坂との和睦が出來たので、兵備が解けて、國に歸つた。元和元年の夏に、兵が再び起つた。秀元は、西の方の諸大將に先だつて、大坂に到著し、かくて、その戰爭中、首を斬ること三百餘級であつて、賞與を受けた。秀就は、道を海に取つて進んだが、風波の爲めに妨げられて、期日に後れて到著したけれども、何等の罰も無かつた。

寛永元年。秀元在江戸。輝元使使告之曰。我以二國新封。養十州舊臣。上下共困。不得給公役。念受封無益。欲返致二國。汝善計之。使我家不至滅亡。秀元大驚。因土井利勝。白之台德公。公令秀元計之。秀元檢二國田。得七十八萬石。輝元聞之大喜。一年。輝元卒。次年。秀就爲左近衛少將。八年。秀元還政於秀就。大猷公曰。秀元成童爲外征元帥。門望皆隆。眞我老友也。數延與語。子孫仍居長府。食五萬石。就隆居周防德山。亦食五萬石。秀元次子元知。居長門清末。食一萬石。豐臣氏質森高政。以森與毛利國音相近。遂冒毛利氏。居豐後佐伯。食六萬石。關原之役在大坂。削四萬石。此四家。與宗家皆存至今。宗家世任侍從。還少將。而從四位下。大膳大夫。爲其常銜。襲廣元。元就故事也。吉川氏以存宗家之功。世食岩國六萬石。秀秋以內應之功。食備前。美作。松野主馬羞食其祿。去匿京師。無何。秀秋卒。無嗣。國除。小早川氏遂不祀。

【字解】【寛永】……後水尾帝の時の年號。【十州舊臣】……毛利氏もと十三州を領す、後、削られて二國となる。【台德公】……二代將軍德川秀忠公。【還政】……後見を辭する也。【大猷公】……三代將軍德川家光。【成童】……十五歲以上二十歲以下をいふ。【成童爲外征元帥】……秀元、征韓の役、大將となり、幾んど李如松を獲んとしたり。【門望】……家柄と人望。【老友】……年老いたる友人。猶ほ忘年の友といふが如し。【森高政】……もと尾張の人。【此四家】長府、德山、清末、佐伯。【常銜】……音ジヤウガン。官の位階を銜と云ふ。家の格式、世襲の官位。【襲】……繼ぐ。【廣元】……大江廣元。從四位下大膳大夫たり。【存宗家之功】……廣家が秀元を勸めて東軍に歸せしめ、これによりて本家を保存せし功勞。【松野主馬】……關原の役に於て、秀秋の松尾山の觀望を怒りし者。【遂不祀】……先祖を祭るもの無し。家名斷絶したるを云ふ。

【講義】寛永元年に、秀元は、江戸に居つたが、輝元は、使者を遣して之に告げしめて曰ふには、われは、新に封ぜられたる周防、長門二國を以て、もとの十箇國の舊臣を養ふことであるから、上も下もともに困窮して、公役を供給することも出來ない有樣である。念ふに、此の如くであるならば、封邑を受けて居つても無益のことであるから、周防、長門の二國を返上しやうと思ふ。汝善く之を取り計らひ、我が毛利家をして滅亡することの無いやうにせよと曰つた。秀元は大に驚いて、土井利勝に因りて、之を台德公に申し上げた。すると、公は、秀元に命じて、二國の歲入を計算せしめられた。そこで、秀元は、二國の田地を撿査せしに、七十八萬石あつた。輝元は之を聞いて大いに喜んだ。二年に輝元は死んだ。その次の年に、秀就は左近衛少將となつた。八年に、秀元は、秀就に國政を還した。大猷公が曰はれるには、秀元は、十五六歲の成童の頃に、海外征伐の總大將となり、家柄も人望も、皆な高く、まことに、我が年老いたる友人であると曰ひ、たび〳〵召し寄せて、與に

物語られた。かくて、秀元の子孫は、やはり、長府に居つて、五萬石を領して居つた。就隆は、周防の德山に居つて、これも亦五萬石を領した。秀元の次男の元知は、長門の清末に居つて、一萬石を領した。豐臣氏の人質なる森高政は、森と毛利とは日本の讀方が似て居るので、遂に毛利氏と名乘り、豐前の佐伯に居つて、六萬石を領して居つたが、關原の役に、大坂に居つたので、四萬石を削られた。此四家は、本家とともに皆、今日まで存在して居る。本家は、代々、侍從に任ぜられ、それから少將に遷される。さうして、從四位下大膳大夫は、その世襲の官位であるが、これは、大江廣元、毛利元就の先例を繼いだのである。吉川氏は、毛利の本家を存した手柄を以て、代々、岩國の六萬石を領地とした。秀秋は、裏切をした手柄を以て、備前、美作を領した。松野主馬は、秀秋に事へて其祿を貰ふことを恥づかしく思うて、去つて京都に隱れた。いくばくも無くして、秀秋は死んだが、跡嗣が無かつたので、領地は取り上げられ、小早川氏は、とう〳〵斷絶して仕舞つた。

元春臨終遺書。戒輝元曰。往日吾兄弟竝爲先鋒。推子爲元帥。今天下已有主矣。子愼勿自視如往日。隆景之將沒也。亦戒之曰。天下將亂。子第退守。勿進取。使我家有雄資如先君者。則可。否而爭權於天下。是自速禍也。輝元忘二叔言。毛利氏以故削黜云。

字解【天下已有主】……秀吉を指す。【勿自視如往日】……自分の身を視ること、むかし戰亂の時と同樣に思ふことなかれ。【第】……たゞ。【退守】……退いて其國を守る。【雄資】……雄武なる材資。すぐれてたけき生れ附。【先君】……元就を指す。【否】……しからず。【速】……まねく。【忘二叔言】……二叔は二人の叔父、卽ち元春、隆景を云ふ。忘二叔言とは關原の役に德川氏と衝を爭はんとせしを云ふ。【削黜】……音サクチユツ。黜は、降なり。領地を削りへらされ官位をしりぞけられる。

解説　元春は、死せんとするときに、書置をして、輝元を戒めて曰ふには、むかし、吾が兄弟は、ならびに、先鋒の大將となり、あなたを推し戴いて、總大將となして、所々に於て戰爭をしたのである。けれども、今日は、天下に已に主があるから、あなたは、愼しみ愼しんで、御自分のことを見ること、むかしの戰亂のときと同樣に思うてはならぬと曰つた。隆景が將に死なんとするときにも、亦、輝元を戒めて曰ふには、天下は將に騷動が起らうといたして居るから、あなたは、だゞ退いて御自身の國を守つて居つて、決して、進んで切り取らうとしては成らぬ。我が毛利家に、すぐれたる天分あること、父君の樣な者があつたならば、進んで切り取らうとするのも、先づ〳〵宜しいけれども、左樣でなくして、權力を天下に於て爭はうとするのは、これは、自分から災禍を招き寄せるのであると曰つた。輝元は、二人叔父、卽ち元春、隆景の言葉を忘れて、霸を天下に爭はうとしたので、毛利氏は、それ故に、領地を削られ官位をしりぞけられるに至つたと云ふことである。

外史氏曰。余安藝人也。俯仰其都邑城池。輒懷毛利氏盛時。每觀嚴島。亦未嘗不想見元就之鏖賊也。夫室町之時。天下紛紛。日事兵爭。如群兒鬬暗中。喧呶毆擊。一仆一起。誰知其曲直。孟子所謂無義戰者。是已。唯元就之於陶賊。與北條早雲之於堀越。羽柴秀吉之於明智。其事皆可稱道。故其功効皆致如此。而元就最其難者也。

字解【余安藝人也】……山陽先生は、安藝の竹原の人。【俯仰】……音フギヤウ。或は俯し、或は仰ぐ。【其都邑城池】……其とは廣島を指す。【鏖賊】……賊とは陶晴賢を指す。【室町之時】……室町將軍足利氏の時。【紛紛】……亂れたる貌。【喧呶】……音ケンダウ。喧は囂なり。呶は讙なり。聲高くがやゝとかまびすしきこと。【毆擊】……音アウゲキ。たゝき合ひ打ち合ふ。【無義戰】……義戰とは、義理にかなひし戰爭。諸侯ほしいまゝに相戰伐し、義理に合ふ者無き也。孟子の盡心篇に、春秋無義戰の語あり。【陶賊】……陶晴賢。【北條早雲之於堀越】……足利政知の長子茶茶丸、繼母に讒せられ、幽囚せらるゝこと數年、出でゝ繼母を殺し、遂に父政知を弑す。早雲、堀越を伐つて茶茶丸を誅す。後北條記を參看せよ。【羽柴秀吉之於明智】……明智光秀、信長を弑す。秀吉、時に備中に在り、馳せ歸つて光秀を山崎に誅す。織田記及び豐臣記を參看せよ。【稱道】……擧め立てゝ言ふ。【功效】……功は、手柄。效は、しるし。手柄の結果。

解説　外史氏論じて曰く、余は安藝の人であつて、其處に居つたので、安藝の廣島の都のありさまを、或は俯し或は仰いで見ると、いつでも、毛利氏の盛大であつた時を思ひ出し、又、嚴島の景色を觀るたびごとにも、亦、未だ曾て、毛利元就が賊陶晴賢の兵を皆殺しにしたことを想ひやらぬことは無いのである。さて、室町將軍の時代、卽ち足利氏の時代には、天下は、紛々と亂れ〳〵て、日ごとに兵器を用ひて戰爭することを仕事として居ることは、大勢の子供等が、闇の夜にたゝき合ふやうなものであつて、大聲をあげて、がやぐとさけび合ひ、たゝき合ひ打ち合つて、一人が仆れるかと思へば、一人が起き上り、起き上るかと思へば、又仆れなどして、この間に、理も非理も無く、まるで、めちやくで、誰が其爭の是非曲直を判斷して之を知ることが出來やうぞ。孟子が言はれたる、義理に適つて居る戰爭が無いゝ言はれたのは、此時代の有樣である。其內にて、唯だ、元就の陶賊に於けるは、北條早雲の堀越の足利茶茶丸に於ける、羽柴秀吉の明智光秀に於けるとともに、其事跡は、皆、褒め立てるべきことである。それ故に、その手柄の結果は、皆、此の如く立派なものと成つたのである。そして、元就の陶氏に於けるのが、其中で、一番六つかしいものであつたのである。

夫亂臣賊子。人得討之。然戰國之俗。唯見利而不聞義。如陶賊之事。四隣牧伯。熟視莫敢齟齬。甚至相率歸之。以爲倚賴。獨元就以微力圖誅討。

而又請之天子。名正言從。義旗所指。無堅不破。如揭炬暗室。衆目駭觀。足以伸大義於天下。使天下響應歸之。而何十三州之足圖也哉。

【字解】【四隣】……四方の近隣。【牧伯】……音ボクハク。諸侯、大名。牧は養ふなり、伯は長なり。【齟齬】……音ソゴ。くひちがふ、妨げること。莫敢齟齬とは、之を非難して妨げやうとする者も無かつたとの意。【名正言從】……卽ち義戰なり。言從とは、言葉の順當なること、いふところの道理にかなへること。【何十三州之足圖也哉】……山陰山陽の十三州ぐらゐは、まことにくゝ雜作も無く圖られることであるとの意。

【講義】さて、君を弑するの亂臣や、父を弑するの賊子は、誰でも、之を討伐することが出來るのである。然しながら、戰爭のみを仕事として居る戰國時代の風俗としては、唯だ私利私益のみを見て、義理の如何なる者なるかを聞き知らないので、陶賊の事件の如きも、四方近隣の諸大名は、彼れが惡事を爲したのを、ぢつと見て居つて、敢て之を非難して妨げやうとするものは無く、甚しきに至つては、互に引き連れ合つて之に歸服し、之をたのみとして、私利私益を計らうとする者もあるほどであつた。たゞひとり、元就は、微弱なる力を以て之を誅戮し討伐せんと企だて、そして、又、之を天子に請ひ奉つた。されば、其の事を擧ぐるの名も正しく、言葉も道理にかなへる、義戰なるが故に、その義の爲めに擧げし軍旗の指し向ふところは、如何なる堅陣といへども、破壞せられざるは無かつた。其義理の明なることは、ちやうど、松明を暗黑なる室の中にかゝぐるに、衆くの人々の目は、驚き視ないものは無い如くで、其公明正大なる義戰の光の爲めに、衆くの人々は驚いて目を醒ましたのである。されば、これ、以て大義を天下に伸ばし天下をして響の聲に感ずるが如くこれに從はしめるに十分である。して見れば、山陰、山陽の十三州位は、どうして圖るに足るだけのことであらうぞ、其位は、何でも無い無雜作なる事である。

大凡英雄成事。皆以爲其智畧所致。而其事之合義。有能服人心者。而不自知也。後之追論者。亦徒視其成敗。謂盡成於其智慮。而不知天下之事有出智慮所不及。況當夫危疑之際。機會之來。間不容髮。苟以區區計算。要之萬全。吾見其終身而不及事耳。故彼治世之論。不可以揣亂世英雄也。吾論元就。不言其智畧。而言其果斷。不言其果斷。而言其事之合義。至於請之天子。又義之大者矣。且觀其效貢賦。助擧朝儀。則存心王室。非一日也。

【字解】【追論】……音ツキロン。あとから議論する。【智慮所不及】……事意外に出でゝ、思ひも寄らざることを云ふ。【夫】……かの。【危疑之間】……事危ふむべきの際。【區區】……小なる貌、こまぐゝとしたる。【計算】……勘定、見積り。區々計算は、卽ち智畧の末より出づる也。【吾見其終身而不及事耳】……機會を失つて終身事に及ばず。【揣】量なり、はかる。【果斷】……決斷の善きこと。【效貢賦助擧朝儀】……永祿三年、元就、

【講義】大凡、英雄の大事を成し遂げるのは、皆、英雄其人の智謀才畧から爲したことゝ思うて居つて、そして、其仕事が義理にかなつて、天下の人心を心服させることの出來る者があるのに、それをば、英雄自身にも知らないのである。又、後世の人の、英雄の事迹を、あとから彼れ此れと評論する人も、亦、たゞ、其事の成就せると失敗せるとの迹のみを視て、それは、すべて、その智謀才畧から出來たことゝのみ思うて居つて、そして、天下の事は、智謀思慮の到底屆くことの出來ぬ、案外のところから出づることが有るものである事を知らない。ましてや、人々互に危ぶみ疑ふ心を抱いて居る場合に當りては、都合の善い機會の來ることは、實に微妙にして、其間に、一筋の毛髮をも入れることの出來ぬやうな次第であるのに、此の如き場合に在りながら、苟くも、こまぐゝとしたる見積りを以て、是非とも萬全にして失敗のないやうにしやうとして居るときは、一生涯、機會を失つて、事の間に合はぬであらう。それ故に、かの太平無事の時代の議論を以ては、戰亂の時代の英雄の心事を推し量り知ることは出來ないのである。吾の元就を評論するには、その智謀才畧あることを言はずして、其の事を處するに果斷なることを言ひ、その事を處するに果斷なることを言はずして、その仕事が義理にかなつて居ることを言ふのである。（元就の智畧より も、元就の果斷を尊び、又、元就の果斷よりも、元就の行爲の義に合へるを尊ぶとの意。）元就が陶賊誅伐のことを天子に請うた事は、又義理の大なるものである。且つ又、元就が領地の貢賦をさし上げて、朝廷の御儀式を擧行せらるゝ手傳をしたのを見れば、元就が朝廷を尊敬するの心は、平生の心掛であつて、一朝一夕にふと起つたものでは無いのである。

昔者。孫堅以英雄之姿。志嚮漢室。奮討強賊。出身不顧。又有策權之子。遂能據有江東。以魏武之勢。而不能取焉。毛利氏之以關西抗織田氏。庶幾類之矣。元春之善戰也類策。而隆景之善謀也類權。皆絕人之才。而戮力協心。臣事輝元。使之不失舊業。是其義最爲不可及焉。輝元雖無孫皓之虐。而不量力度德。而爭衡於中原。宜乎其削弱也。然其封土屹然。猶雄西陲者。豈非由元就父子之高義哉。

【字解】【孫堅】……吳の人。後漢の靈帝、獻帝の時に、長沙の太守となり、豫州の刺史を領す。兵を起し、董卓を討じ、劉表を擊つ。其子に策、權あり。【英雄之姿】……人にすぐれたる天資。【强賊】……董卓等を指す。【寇】……孫策。孫堅の子、父に繼ぎ、威名江東に振ふ。【權】……孫權。孫堅の子、孫策の弟。自ら皇帝と稱し、武昌に都し、後、建業に遷る。【江東】……吳の地。【魏武】……魏の武帝、卽ち曹操。【庶幾】……ちかし。【絕人】……衆人にかけ離れて遙にすぐれたる。【舊業】……元就の成せし大事業。【孫皓】……吳の最後の君にして、暴虐甚だしく、晉に降りて、吳亡ぶ。【爭衡】……衡は音カウ、秤なり。天下と强弱を爭ふこと、猶ほ輕重をはかる者が衡の低昂を爭ふが如し、故に以て喩ふる也。【封土】……周防、長門の二國。【屹然】……音キツゼン。卓出の貌、きつとして居ること。【西陲】……音セイスヰ、西方の邊境。【高義】……道義のすぐれたること。

【大意】昔、後漢の末にあたりて、吳の孫堅は、千人萬人にすぐれたる生れ付を以て、漢の帝室を輔けて王業を再興しやうとの志を持つて居つて、力を奮つて强賊董卓などを討伐し、國家の爲めに我身を投げ出して、少しも惜しいと思はず、又、孫策、孫權の二人のすぐれたる子供があつて、遂に能く江東の地に立て籠りて、之を占有し、吳國を建て、蜀魏と三方に鼎立して、負けず劣らずの勢力を有つて居り、魏の武帝の强き勢力を以てしても、取ることが出來なかつた。毛利氏が關西十三州を以て織田氏に抵抗したのは、ちやうど之と似寄つて居る。吉川元春の戰の上手なるは、孫策に似て居るし、そして、小早川隆景の謀の上手なるは、孫權に似て居つて、これ等は皆、かけはれて遙に人にすぐれて居る才能であるのに、力を合はせて、元就の孫なる輝元に臣とし事へて、輝元をして、元就の成して置いた舊業を失はしめない樣にしたのは、これ、二人の義の最も高く大なる所であつて、最も及ぶことの出來ないものである。輝元は、孫堅の子孫なる孫皓の如き暴虐なる點は無いけれども、自分の力の如何なるか德量の如何なるかを、はかり極めずして、身分不相應にも、中原に出で、勝負輕重を爭うたので、輝元が領國を削り減らされ勢力をそぎ弱められたのは、尤千萬なることである。然れども、其領地は、それでも猶ほ、きつとして、西の邊陲の地方に於て一雄藩たることを得るのは、これは、なんと、元就父子三人が當世にすぐれたる高き義理あるに由る故であるまいか。

日本外史講義卷之十二　終

日本外史講義卷之十三

賴襄子成原著

興文社編輯所講義

德川氏前記

織田氏上

外史氏曰。封建之成勢於我邦也。其來遠矣。在昔王家。郡縣七道。治以守介。田以口分。四徵租調。而朝之職位。皆有田。有食封。有功田。其食封。多者不過三千戶。功田四等。世襲之者。止於大功。當此時。未有封建之勢也。自相門世權。所在封戶日多。不輸之地。不課之民。半於天下。後三條帝欲矯其弊。而不能遂。自是以後。各國莊園。居其十九。守介所治僅一焉。甚則國司終不赴任。而權延其地方豪族武人以自代。謂之目代。而至源氏起。國司置守護。莊園置地頭。分領糧粟。以備盜賊。則嚮所謂目代之類者。碁峙六十州。而封建之勢始矣。北條氏因其遺制。守護之任。猶得考課

易置。如古之國司。然往往因襲。傳之子孫。漸成封建之勢。而至建武中興之時。朝廷欲以特恩收武臣之心。以新田。足利諸族。充諸國守護。概以一姓連二三州。雖名爲守護。其實封建之也。及足利氏叛。奪其成績。而與之其子弟功臣。仍稱守護。而世襲之。土地兵馬。儼然諸侯。而封建之勢成矣。

【封建】……土地に封じて諸侯を建つる也。語は左傳に出づ。【郡縣七道】……東海、東山等の七道を郡縣の制となす。郡縣の制は、朝廷にて天下を直轄するの制度なり。封建制度とは、大名小名を置いて土地人民を專有せしめ、朝廷にては別に其政治に關係せられざる制度を云ひ、郡縣制度とは、今日の如く、縣知事郡長町村長などの類を置きて、全國を統治する制度を云ふ。【守介】……朝廷より諸國に置きたる地方長官。介は守の次の官なり。【田以口分】……一家の人口を計りて田を分ち與ふ、之を口分田（クブンデン）と曰ふ。六年ごとに、戶籍を撿査して、男には二段、女には其の三分の二を與ふ。【四徵】……四方より徵集する。【租調】……租は田稅、調は戶稅。【職位皆有田】……職田、位田を云ふ。職田は、官職に依りて授けらるゝものにして、太政大臣は四十町、左右大臣は三十町、大納言は二十町等なり。位田は位階に依りて授けらるゝものにして、一品及び正一位は八十町、二品及び正二位は六十町の類なり。【倉封】……ジキブ又はショクホウと讀む。凡そ田、戶數を以て給するを食封と云ふ。大抵戶ごとに錢二百文を出す。一品八百戶より四品三百戶に至り、正一位三百戶より從三位一百戶に至り、太政大臣三千戶より大納言八百戶に至る等。【功田】……勳功ある者に賜はる田を云ふ。大功、上功、中功、下功の四等に分ち、大功は世々絕えず給し、上功は三世に、中功は二世に、下功は子に傳へしむ。【相門】……藤原氏を指す。【不輸之地】……朝廷に租調を出さゞる土地。藤原氏の食封なれば藤原氏に出す故なり。【不課之民】……夫役を課せざる人民。これも藤原氏より課せらるゝを以つてなり。【後三條帝】……冷泉帝の第二の皇子、人皇第七十一世。帝、立つて後冷泉の儲貳となる。壺切劍あり、例として東宮に傳ふれども、藤原頼通、之れを一劍を用ゐることを爲んと。又嘗て、闕白教通、南圓堂を作り、大和守をして役を督せしむ。任滿つ。教通爲めに再任を請ふ。許さず。固く請ふ。帝鬚を奮つて曰く。攝關の憚るべきは、其の國戚たるを以てなり。朕の如きは、則ち何か有らんと。帝の母は、禎子、源氏なり。又、不明の公文を收むる等の事あり。帝、藤原氏の權を回復せんとすること、此の如くなりしが、惜しいかな、在位僅に五年、其志を遂げたまふを能はず。【矯其弊】……矯は、たむ、曲れる者を直からしむること。惡弊を矯め直す。【不能遂】……成し遂げることが出來なかつた。【莊園】……音シヤウヱン。千朝時代以後、勢力ある寺社及び人々の私有地にして莊號ある土地を云ふ。【權】……かりに。【分領糧粟】……公私の別なく、定格の外に、一反ごとに米五升を課して、以て兵糧に充つる也。【碁峙】……音キジ。碁石を敷きならべたるが如く、數多く散在するを云ふ。【六十州】……日本全國なり。【考課易直】……其功を考へて其職を課し、易ふべきは易へ、置くべきは置く。【建武中興】後醍醐帝、隱岐より還幸し、王政を中興したまひしを云ふ。【特恩】……特は猶ほ殊のごとし。格別の恩賞。【以一姓連二三州】……義貞は、上野、播磨の守護、正成は、河內、攝津の守護、長年は、因幡、伯耆の守護、高氏は、武藏、下總、常陸の守護となりし等なり。【其成績】……中興の成業。【儼然】……矜莊の貌、きつとしたること。

【講義】外史氏論じて曰く、封建制度が、我が邦に行はれねばならぬやうな勢を成したのは、其の由來する所は、實に遠く久しいことである。むかし、我が帝室に於ては、吾が全國七道の國々を、郡縣に分ち、之を治むるには、守や介と云ふ官を以てせられ、又、田地を人民に配當するには、一家ゝ人口を計つて、一人に付き男は二段、女は其三分の二といふやうに、分ち與へて、之を口分田と稱し、地租と家屋稅とを四方より取り立てられた。そして、朝廷の官職位階には、それに應じて、職田、位田とて、それ〳〵一定の田地を授けられ、戶數を以て給與せらるゝ食封があり、有功のものに與へらるゝ功田があつたが、その食封の最も多い者も、三千戶に過ぐることはなく、その功田には、大功田、上功田、中功田、下功田の四等があつて、之を子孫代々に傳へるとの出來るのは、たゞ大功田だけであつた。されば、此時に當りては、まだ封建の勢は無かつたのである。宰相たる家柄即ち藤原氏が代々天下の政權を握るやうになつてから、何處にも彼處にも、封戶（即ち官職位階ある人人の食封）が日々に多くなり、地租を朝廷に納めぬ土地、課役を割りあてられぬ人民が、天下に半分もあるやうになつた。後三條帝は、英明なる君主であらせられたから、此惡弊を矯め直さうと致されたけれども、御在位の年數が短かくて、其御目的を成し遂げなされることは出來なかつた。これより以後は、各國の莊園（即ち人々の私有の土地）は、その國の十分の九にも及び、朝廷より派遣せられし守、介の支配する所は、わづかに十分の一となつた。甚しきに至つては、國司（守、介など）は、仕舞まで、其任地に赴かずして、かりに、其地方の豪族武人を召し出して、之を自分の代理となし、之を目代といつた。かくて、源頼朝が起るに至つては、國司の治め居る所（即ち朝廷の直轄地）には守護を置き、莊園（即ち私有地）には地頭を置き、公私の區別なく、定格の外に、一段に米五升づゝを納めさせて、兵糧米とするに付き、之を取り立てることを分け司らしめ、以て盜賊に備へた。そこで、さきに謂はゆる目代の如き類の者が、日本全國六十餘州の內に、碁石を並べたるが如く多數に散在した。そして、封建の勢が始まりかゝつた。北條氏は、源氏に代つて天下の實權を取るに及んで、源氏の遺し置ける制度に因つたが、守護の任は、まだ、其功績の如何を考へ調べて、其職を課し、或は之を取り換へたり、或はその儘に置いたりすること、ちやうど、古の國司を交代するが如くすることが、出來た。然れども、やゝもすれば、其儘に、これを子孫に相續させて、之を親より子に傳へ、子より孫に傳へなどして、だん〳〵に、封建制度が行はるゝやうになる勢を成して來た。さうして、後醍醐帝の建武中興の時に至りては、朝廷は、特別の恩德を施して武臣共の歡心を取り收めやうと思はれ、新田、足利の諸の武族を以て、諸國の守護にあてられるのに、大概、一姓にて、二箇國三箇國を連らね領する有樣であつた。これは、其名目は守護であるけれども、其實際は、土地を割いて之を封じて諸侯となされたのである。足利氏が後醍醐帝に叛くに及びて、帝の成し遂げられた功績を奪ひ取つて、そして之を甘子弟や手柄ある家臣に與へ、やはり守護と稱したが、之を子孫代々に相續せしむるやうにした。こゝに至つては、其守護たるものは、土地を專有し兵馬をたくはへて居つて、儼然として立派なる大名達であつた。そして、封建の勢は、こゝに於て、全く出來上つた。

足利氏初務以大封啗將士。得以撓朝廷之權。既得天下。而勢不可削。及其政既衰。其權臣構難京師。而所謂諸侯。群起爲之黨援。又互相呑滅。

益成二強大一。而最後織田氏。以二其陪臣一。崛起幷レ之。部下皆一時英豪。攻擊四出。取レ城畧レ地者。因而賞レ之。其志在レ於盡鋤二天下故國一。而以二其功臣一代レ之。未レ成而踣。而豐臣氏以二其將校一踵起。見二織田氏所一志甚難一而不レ成也。是以舊國之降附者。存而撫レ之。大者或蟠踞八九州。而不レ加二殺削一。是以得二速致一於混一。而沒而未レ幾。海內分崩。由レ此觀レ之。封建之勢。始レ於二源氏一。而成レ於足利氏。足利氏未レ享二其利一。而不レ勝二其弊一。織田。豐臣承二其弊一。而不レ知レ裁レ之之術。蓋皆有レ待レ於二我德川氏一也。

【字解】【大封】……廣大なる領地。【昭】……くらはす。【攙】……屈なり、たわます、たわむる。【其權臣構難京師】……後土御門帝の應仁年中に、細川勝元、山名持豐等が連年京都に戰ひしを云ふ。【群起爲之黨援】……八諸侯、十六國を以て山名氏に屬し、七諸侯、十一國を以て細川氏に屬す。【吞滅】……音ドンメツ。併合して滅亡さす。【其陪臣】……陪臣は、家臣、また家來なり。織田氏は、足利氏の臣なる斯波氏の家臣なり。故にかく云ふ。【崛起】……音クツキ。勃然として起る、むつくと起きる。【部下皆一時英豪】……柴田、丹羽、羽柴、瀧川等。【因而賞之】……其の略取するところの城地を以て其まゝ之を賞する也。【鋤】……すく、すきのぞく、磯を去り苗を助くる所以なり。【未成而踣】……踣は仆と同じ、たふる。光秀に弑せられしを云ふ。【踵起】……ついで起る。踵は接なり、つゞく。【大者或蟠踞八九州】……蟠踞は音バンキョ。蟠は曲なり、屈なり。踞は物に據つて坐する也。わだかまりすはる。毛利氏を指す。【殺削】……音サイサク。そぎけづる。【混一】……混合して一となす、つきまぜて一つにする。【蓋皆有待於我德川氏也】……利を享けずして弊に勝へざるは、足利氏なり。弊を承けつゞて之をきりもりする術を知らざるは、織田、豐臣氏なり。德川氏は、其弊を承けて之を裁す、故に弊なくして全く利を享く。其弊を裁して利を享くるは、皆德川氏を待ち合はす也との意。

【講義】足利氏は、最初は、務めて大國の餌を與へて、將士を味方に釣り込み、以て朝廷の權力を撓めゆるめて、之を奪ひ取ることが出來た。既に天下の政權を奪ひ取ることが出來てからは、一時便宜の爲めに諸將士に與へし大國をば取り上げたいと思つたであらうけれども、其自然の勢として、遽に削り取ることは出來なかつた。足利氏の政法が既に衰へるに及びては、其權臣たる山名、細川の輩は、京都卽ち將軍の旗下に於て、互に難をかまへ爭を起し、そして、いはゆる諸侯どもは、むらがり起つて、二氏に徒黨して之を援け、又互に併呑し合ひ滅ぼし合つて、強大なる者はますく強大となつたが、しかし、最後に、織田氏が、足利氏の又家來の身分を以て、むつくりと起つて、之をあはせて統一せんとし、その部下の將士は、いづれも皆、一代の英雄豪傑であつて、これ等の將士が、攻擊して四方に打つて出で、城を攻め落し土地を切り取つた者には、そのまゝ、其土地を與へて之を賞した。織田氏の志は、天下の今までの諸侯を殘らず根こそげ鋤き除いて、自分の手柄ある臣下を以て、今までの諸侯に代へやうと云ふのであつたが、織田氏は、未だ其志を成就せずして倒れて仕舞つた。そして、豐臣氏は、織田氏の將校たる身を以て、つゞいて起つたが、織田氏の志望は甚だ六つかしい事で、容易に出來上らないことであると見て取つたので、それ故に、舊諸侯の降服し附き從ふ者は、其まゝに存在せしめて、之を撫で安んじ、其大なる者は其領地が八九箇國にも跨つて居る者があつたけれども、格別之をそぎけづらうともしなかつたので、それ故に、天下の諸侯も、悅んで降服し、速に天下諸國を混合して一統することを得たのである。けれども、豐臣氏が沒すると、間も無く、海內の諸國は、また崩れ分れて仕舞つた。これに由つて考へて見ると、封建の勢は、源氏の時代に始まつて、足利氏の時代に至つて出來上つたのであるが、足利氏は、未だ封建の利益を受けぬうちに、其惡弊に堪へ得ずして、遂に天下を失ふに至り、織田氏、豐臣氏は、其惡弊のあとを承けついで、天下の政權を取つたけれども、其弊害をうまく處置するの手だてを知らなかつた。蓋し、これは、皆、我が德川氏が、之に代つて天下の實權を執るの時を待つところあつたものであらう。（德川家康に至つて、始めて、其弊害をうまく處置し、容易には再び動搖することの無き政策を立てゝ、封建制度の利益を享け樂むことを得たのである。）

夫有二外諸侯一。有二內功臣一。內功臣之封。不レ能レ抗二外諸侯一。然後足レ以レ親二戴衞護一其內一。而折二衝禦侮一其外一。否則功臣亦與二諸侯一等耳。無二戴一我之心一。而有二爭我之意一。是織田氏所二以被一禍也。雖二能存一外諸侯一。而不レ知二斷一長補一短。使二勢力畧敵一。又不レ知二大封一宗族一。據二其扼塞一。犬牙相制。以鎭二壓其邪心一。是豐臣氏所二以絕一嗣也。織田氏。唯難レ於レ取レ之。故重レ於レ分レ之。豐臣氏。唯易レ於レ取レ之。故輕レ於レ分レ之。輕レ之與レ重レ之。其情雖レ異。其不レ能レ收二天下英雄之心一。一耳。故曰。二氏承二封建之弊一。而不レ知二裁レ之之術一也。至二我德川氏一。鑑二二氏之失一。而秉二其衷一。矯レ之以漸。權二其內外輕重之際一。以維二持於萬世一。封建之勢。於レ是。一定而不レ可二復撼一焉。

【字解】【外諸侯】……外樣大名。【內功臣】……譜代の功臣。【折衝禦侮】……音セッショウギョブ。敵人の衝突し來るを折き止め其侮を禦ぐ。【斷長補短】……大國を削りて小國に足すこと。【勢力略敵】……權勢兵力が相匹敵する。【扼塞】……音ヤクサイ。要害の場所。【犬牙相制】……制は牽制なり。諸侯の領土の相接すること、犬の上下の牙が正に相合はずして、くひちがふが如くにして、互におさへつけ合はすること。【鎭壓】……音チンアツ。しづめおさへる、おさへつける。【邪心】……謀叛の心を云ふ。【絕嗣】……子孫斷絕する。【二氏】……織田氏、豐臣氏。【秉其衷】……秉は、とる、把る也、衷は中なり。はどよき所を取る。【矯之以漸】……之をためぬ直すに、早急にせずして、そろ〳〵とする也。【內外】……內功臣、外諸侯。【撼】……動かす。

【講義】一體、封建の諸侯には、外樣の大名もあり、家臣から立身した譜代の大名もある。その譜代の領地が、外樣の大名の領地に匹敵することが出來ぬやうであつて、然る後に、始めて、其內なる主君を親しみ戴き衛り護りて、其外からの衝突を〳〵じき止めその輕侮を禦ぎて之を服せしむるやうにすることが出來るので、譜代には決して餘りに大なる領地を與へてはならぬのである。然らずして譜代を大諸侯とすると、きは、譜代も外樣の諸侯と同じ〳〵して、我を推し戴いて君主と仰ぐの心なく、却つて我に向つて權力を爭ふの心が起るのである。これが、織田氏が其臣明智光秀の爲めに弑害せらるゝの禍を被つたわけである。能く外樣の諸侯を其儘に存在させて置いたが、その大なる領地を削りへらして譜代の小なる領地に補ひ足して、その勢力が大略相匹敵するやうにすることを知らず、又、大に一族の者共を封じて、要害善き場所に據らしめ、犬の牙の上と下とがくひちがふが如く、外樣の大名の領地と一族譜代の領地とが入りまじるやうにして、互におさへつけあはしめ、その野心を推しつけ取り鎭めるやうにすることを知らなかつたのが、これ、豐臣氏が滅亡して子孫斷絕したわけである。織田氏は、唯だ、之を攻め取ることが困難であつたから、それ故に、之を人に容易に分ち與へなかつたのである。豐臣氏は、たゞ、之を取ることが容易かつたので、それ故に、之を人に分ち與へることを何とも思はなかつたのである。之を人に分ち與へることを何とも思はなかつたとは、其心は大に異なつては居るけれども、其の天下の英雄の心を取りまとめることの出來ないのは、同一である。故に余は、織田、豐臣の二氏は、封建の弊害のあとを承けついで、之を程よく處置するの手だてを知らなかつた、と曰ふのである。我が德川氏が之についで天下の政權を執るに至りては、織田、豐臣二氏の失策を手本として、其中ほどの尤も能く時勢にかなへる所を取り用ひ、その弊を矯め直すには、早急にせずして、次第順序を追うて之を矯め直し、其譜代と外樣の諸侯との間柄をはかり、輕重其宜しきを失はぬやうにし、以て萬世の後までも持ちこたへられるやうにした。封建の勢は、こゝに至つて、一定して、もはや動かすことが出來ない樣になつた。

唐柳宗元論封建曰。勢也。余曰。封建勢也。制勢人也。彼生郡縣之世。而揣利弊於千載之上。使其目我邦之今日。以爲何如哉。蓋德川氏之致太平。雖由參遠勳舊之力。而新附將帥之功與焉。今之外藩列國。成邦於足利氏以前者。如島津。佐竹。伊達。上杉。毛利。鍋島。是已。其餘皆由二氏興家者。雖慶長庚子以後。定賜封土。與之更始。而猶彼漢侯王之於陳項。唐將相之於周隋。不原其前代。其建置本末。不可得而詳也。余故先敍二氏。而論其勢之所從來如此。

【字解】【柳宗元】……字は子厚。官、禮部員外郎に至る。王叔文に附き、坐して永州司戶に貶せられ、後、柳州刺史に徙さる、文集あり。【勢也】……勢とは自然の成りゆきにて、人力の及ばざること也。柳宗元の封建論中に、封建は古聖王堯舜禹湯文武を更て能く之を去る莫し。蓋し之を去るを欲せざるに非ざる也、勢不可なれば也云々とあるを云ふ。封建論は、唐宋八家文の中にも收めらる。詳細を知らんと欲せば、參看すべし。【彼生郡縣之世】……彼は柳宗元を指す。支那は、秦漢以後を郡縣の世と云ふ。【揣】……はかる、量る也。【利弊】……利益と弊害。【以爲何如哉】……彼れは郡縣の世に生れて、封建のことを詳にせず。我が邦の今日に生れしならば、封建の利益を知るなるべしとの意。【參遠勳舊】……三河、遠江より出でし勳功ある譜代の舊臣。【新附將帥】……淺野、細川、黑田などを指す。【慶長庚子】……慶長五年、卽ち關原の大勝利の年。【更始】……ふるきを改め新しきを始める。改革する。【漢侯王之於陳項唐將相之於周隋】……漢の諸侯王は陳勝、項羽によりて家を興し、漢に仕ふ。唐の將相は、宇文周と隋とによりて家を興し、唐に仕ふ。以て、織田、豐臣二氏によりて家を興し以て德川氏に仕ふるの諸侯あるに比する也。【原】……もとづく、本を推し究む。

【講義】唐の柳宗元は、封建の事を議論して曰ふには、封建は、これ時の勢の自然と左樣にならしめたものであると曰つた。余は曰ふには、封建は、宗元の言ふが如く、時の勢の自然と左樣にならしめたものであるが、けれども、この自然と左樣になりしめる時の勢を、抑制して、うまく之を取りまはすものは、人間である。(人の力によりて、此自然の勢をうまく取りまはして、無事太平の世界ともすることが出來るのであるとの意を含む。)と曰ふのである。彼れ柳宗元は、唐の代郡縣制度の世に生れながら、封建の利益弊害を千年以前の時代に洞りて、之を推し量り論じたのであるが、若し宗元をして、我が日本の今日の有樣を見せたならば、何と思ふであらうか。定めて、封建制度にも、こんな長所利益があることを知つたであらう。大體、德川氏が泰平無事の時運を致したのは、三河、遠江より出でたる功勞ある舊臣の力に由つたのではあるけれども、新に附き從つた諸大將の功勞も、それに與かつて居るのである。今日現存して居る外樣大名の中で、足利氏以前より國を成して居つた者は、島津、佐竹、伊達、上杉、毛利、鍋島などである。其他の諸の外樣大名は、皆、織田、豐臣の二氏に由つて、家を興し身を立てゝ、諸侯となつた者であつて、慶長五年以後、それ〴〵領地を一定して下賜され、之とともに改めて始まつたのではあるけれども、しかし、丁度、彼の漢の諸侯王が陳勝、項羽に於ける、唐の諸將相が周の世宗、隋の高祖などに於けるが如き關係が有るので、故に、その前代の事を推し究めぬときは、その諸侯となりし本末を、十分詳に知ることは出來ないのである。余は、それ故に、先づ、織田、豐臣二氏の事跡を叙述して、そして、封建の勢の由つて來るところを論究すること、上の如くである。

織田氏出於平重盛。重盛次子曰資盛。元曆中。平氏。與源氏。戰于西海。

大敗。舉族死亡。資盛有孤兒。其母懷之。匿于近江津田鄉。鄉長悅其母色。納之。兒從育其家。會越前織田莊祝人數入京師。每過鄉長宿焉。嘗謂之曰。吾老無子。願得公一子養之。鄉長乃與以平氏孤兒。兒終冒織田氏。名親眞。稱權大夫。子孫世爲祝人。及足利氏定天下。越前。尾張爲斯波氏管國。斯波義重嘗出遊。見織田祝人之子。美之。載歸。以爲近臣。義重有大吏六人。其一人有罪放流。乃以織田氏代之。於是。織田氏終爲斯波氏重臣。徙於尾張。自親眞而後十五世。曰敏定。敏定之時。斯波義敏。與族義廉爭立。敏定居間講和。請義敏養義廉子義良。而自輔之。居清洲城。尾張凡八郡。分爲上下。各四郡。敏定領下四郡。使族信安居岩倉城。領上四郡。敏定生敏信。敏信生常祐。相繼居清洲。敏定庶子信定。稱彈正忠。信定子曰信秀。稱備後守。信秀以支庶降居勝幡城。與族二人竝爲宗家吏。分治四郡。信秀嗜武喜士。士多歸之。

【語釋】【元暦】……後鳥羽帝の時の年號。【擧族】……一族殘らず。【鄉長】……今日の村長の如きもの。【母色】……母の容貌美なること。【祝人】……神官のこと。邦語にては「ハフリ」と讀む。【過鄉長宿】……過は、立ち寄る。宿は、とまる。【平氏孤兒】……資盛の孤兒。【管國】……管轄の國。【載歸】……かごに載せて歸る。【大吏】……重要なる役人。【重臣】重要なる官職に居る家來。【自親眞而後十五世曰敏定】……親眞、親基、親行、行廣、末廣、基實、廣村、眞昌、常昌、常勝、敎廣、常任、勝久、久長、敏定。【敏定】……三郎と稱す、後大和守。【義敏】……治部大輔。【義廉】……右衞門佐。【義良】……治部大輔。【清洲】……尾張に在り。【尾張凡八郡】……中島、葉栗、丹羽、春日部、愛智、知多、海東、海西。【信安】……伊勢守。【敏信】……左馬助。【常祐】……因幡守。

【解說】織田氏は、平重盛から出たものである。重盛の次男を資盛と曰つた。元暦年中に、平氏は、源氏と、西海に於て戰つて、大に負けて、一族殘らず死亡して仕舞ひ、言ふまでもなく、資盛も討死した。資盛に、みなし兒があつて、其母が之を懷に入れて、近江の津田の鄉にかくれて居つた。ところが、鄉長が、其母の容貌の美なるを見て、氣に入つて、之を引き納れて妻とし、その兒も母に從つて其家に於て養育せられた。折しも、越前の織田の莊の神官が、たび〳〵京都に上り、その度毎に鄉長の家に立ち寄つて其處にとまつたが、あるとき、鄉長に向つて曰ふには、吾は年寄つたけれども跡を嗣ぐべき子が無いが、どうだ、貴殿の子供を一人貰ひ受けて養子といたしたいと思ふと曰つた。鄉長は、そこで、之に、平氏のみなし兒を與へた。かくて、その兒は、とう〳〵織田氏と名乘り、親眞と名つけ、權太夫と稱し、その子孫は、代々、其處の神官となつた。足利氏が天下を平定するに及んで、越前と尾張とは、斯波氏の管轄の國となつた。斯波義重が、あるとき、出で、遊び、織田の神官の子を見て、その容貌を美なりとし、かごに載せて連れ歸つて、それを、近侍の家來とした。義重には、重役が六人あつたが、其內の一人が罪があつて、追放せられたので、そこで、織田氏を以て之に代らしめた。こゝに於て、織田氏は、とう〳〵斯波氏の重職に居る家來となつて、尾張に從り住んだ。親眞より後十五代目を敏定と云つたが、敏定の時に、斯波義敏は、その一族なる義廉と、家督を爭うたので、敏定は、仲裁して和睦せしめ、義敏に請うて、義廉の子の義良を養つて、養子とせしめ、そして、自分が之を輔佐することにし、清洲城に居つた。尾張は、すべて八郡であるが、それを上下各四郡づゝに分けて、敏定は下四郡を領地とし、一族の信安をして岩倉城に居らしめ、上四郡を領地とせしめた。敏定は、敏信を生み、敏信は常祐を生んで、引きつゞいて清洲に居つた。敏定の妾腹の子なる信定は、彈正忠と稱して居つた。信定の子を信秀と曰ひ、備後守と稱して居つた。信秀は、織田の支族たる故を以て、降つて勝幡城に居り、一族の者二人とともに、本家の役人となつて、四郡を分けて治めて居つた。信秀は、武事を嗜み、士を喜んだので、四方の士は多く來つて之に從つた。

時齋藤氏在美濃。今川氏在駿河。與織田氏。日相攻擊。信秀徙居古渡城。天文十一年。八月。今川義元將兵來攻。軍于小豆坂。信秀逆戰。衆寡不較。日暮將退。敵兵尾擊甚急。信秀弟信光。與死士六人返戰。卻之。十六年。九月。信秀從常祐。攻齋藤秀龍于稻葉山。縱火城下。將還。秀龍出戰。我兵大敗。常祐以下八人皆死之。十一月。秀龍遂攻大垣城。信秀卽赴援。擊走秀龍。秀龍者山城西岡人。善歌謠。東游美濃。仕土岐賴藝將長井某。遂殺長

井。直仕二頼藝一。終爲二其重臣一。稱二山城守一。削レ髪更二名道三一。遂逐二頼藝一。十七年。頼藝來奔。信秀善遇レ之。因招二美濃將士一。將士多應者。八月。信秀往討二秀龍一。縱二火多藝口一。秀龍請レ和。信秀以二比年兵興上下疲弊一。遂許レ之。秀龍乃復二頼藝一。以レ女妻二信秀子信長一。是歳。信秀徙二末盛城一。二十年。三月。信秀患レ疫卒。

【古渡城】……尾張に在り。【天文】……後奈良帝の時の年號。【小豆】……三河に在り。【信光】……津田孫三郎。【不較】……くらべものにならぬ。相違の甚しきを云ふ。【稻葉山】……美濃に在り。【大垣】……美濃に在り。【善歌謠】……うたひが上手なり。【土岐頼藝】……美濃の守護、大桑城に在り。【長井茅】……藤左衞門俊盛。【多藝口】……美濃に在り。【比年】……連年、年々引きつゞいて。【末盛城】……尾張に在り。【疫】……音エキ。疫癘、えやみ、流行病。

時に、齋藤氏は、美濃に在り、今川氏は、駿河に在つて、織田氏と、日々に相互に攻め合つて居つた。信秀は、從つて古渡城に居ることにした。天文十一年の八月に、今川義元は、軍勢を引き連れて、來つて織田氏を攻めんとし、小豆坂に陣取つた。信秀は、迎へ戰つたが、多勢に小勢で、くらべものにならぬほどの相違であつたので、日が暮れて、將に退却しやうとした。すると、敵今川氏の軍勢は、之を追つかけ擊つこと甚だ手きびしかつたが、信秀の弟信光は、決死の兵士六人とともに、引き返して戰つて、之を退却させた。十六年の九月に、信秀は、常祐に從ひ、齋藤秀龍を稻葉山に攻めて、火を放つて城下を燒き拂つて、將に引き返さうとした。すると、秀龍は城を出でゝ戰ひ、我が織田氏の軍勢は、大に負けて、常祐以下八人の者は、皆、そこで、討死した。十一月に、秀龍は、遂に大垣城を攻めた。信秀は、直ちに出かけて行つて大垣城を援け、擊つて秀龍を敗走させた。秀龍は、山城の西岡の人で、謠をうたふことが上手であつて、東の方美濃に遊び、土岐頼藝の部下の將長井某に仕へ、終に長井を殺し、直接に頼藝に仕へ、終に其重要なる家來となり、山城守と稱し、髪を剃つて坊主姿となつて、名を道三と改め、遂に頼藝を逐つ拂つた。十七年に、頼藝は我が織田氏のところに逃げ込んで來たが、信秀は、善くこれを待遇し、因つて美濃の將士を招き寄せると、將士の之に味方する者が多かつた。八月に、信秀は、往きて秀龍を征伐し、火を放つて多藝口を燒き拂つた。秀龍は、和睦せんことを申し込んだ。すると、信秀は、年々引きつゞいて戰爭があつて上も下も共に疲弊して居るので、遂に之を許した。秀龍は、そこで、頼藝を呼び戻してもとの樣にし、又、自分の娘を以て、信秀の子の信長に妻はせた。この歳に、信秀は、末盛城に徙つた。二十年の三月に、信秀は、流行病にかゝつて死んだ。

信秀有二十二男四女一。庶長子信廣。其次爲二信長一。信長幼字吉法師。信秀自居二古渡一。別城二那古野一。置二吉法師一焉。令二林通勝。平手政秀等傅一之。甫十三。加二首服一于二古渡一。命名信長一。字三郎。明年。信長始將レ兵。入二參河一。攻二今川氏屬城吉良一。大濱。縱レ火而還。信長幼跌蕩。喜武事。被服奇偉。喜帶二大刀一。其出行二街市一。或憑二人肩一。餡二餅菓一。傍若二無人一。常調レ馬。習二弓銃一。學泅。聚二近士一。令以二竹槍一。鬬。曰。槍利レ於レ長。乃造二一丈槍一。及二嗣立一。稱二上總介一。次弟信行。稱二勘十郎一。嘗爲二信秀一。設二法會一。信長與二信行一偕往。拜二位前一。觀者甚衆。信長先進。攫レ香投二鑪內一。一拜而出。信行整レ容拈レ香。拜伏久之。觀者竊譽二信行一。有二西海僧一。在二衆中一。相二信長一曰。此子乃英雄也。然信長放縱日甚。平手政秀驟諫レ之。政秀之子有二名馬一。信長請レ之。辭弗肯獻。信長怒。遂惡二政秀一。不聽二其言一。政秀憂懣曰。吾受二保傅之託一。而不レ能二匡救一焉。何以視息於人間哉。二十二年。正月。政秀遂自殺。信長驚惋。自咎。屏居不レ出。爲建二佛院一。名曰二政秀寺一。忌日必詣。輒自矢曰。吾徒悔無レ益。當改レ過厲レ行。立二大功於天下一。以償二前失一耳。於レ是。益講二武事一。警備鄰國。

【十二男四女】……信廣、信長、信行、信包、信治、信時、信興、信孝、秀成、某、長益、長利、初め淺井長政の妻にして後に柴田勝家の妻たるもの、神保長純の妻たるもの、犬山鐵齋の妻たるもの、飯尾隈岐守の妻たるもの。【幼字】……幼時の名。【那古野】……尾張に在り。【傅】……音フ。もりの役。【甫】……はじめて、やつと。【加首服】……元服する。【跌蕩】……音テツタウ。不行儀にして氣まゝなること。【喜】……このむ。【奇偉】……奇は異なり、偉は大なり。並はづれの大仕立。【懣】……依る。【餡】くらふ。昭と通ず。【調馬】……馬をとゝなふ、馬を乘りならす。

調は揉伏なり。【泅】……音シウ。水をおよぐこと。【位前】……位牌の前。【擾】……つかむ、撮なり。【鑪内】……音ロナイ。香鑪の内。【整容拈香】……拈は、音ネン、ひねる、指にて物を取るなり。容貌をきちんとして、香をひねる。信長の疎暴なると正に相反す。【相】人相を見る。【放縱】……勝手氣儘なること。【驟】……しば〳〵。【憂懣】……音イウモン。うれへもだゆる、心配して胸苦しき也。【託】……委託、たのみ。【匡救】……音キヤウキウ。たゞし救ふ。【視息】……視は目視なり、息は氣息なり。生きて居ると。【驚惋】……惋は音ワン、歎く也。おどろきなげく。【屏居】……引きこもつて居る。【佛院】……御寺。【矢】……誓ふ、行く先を心にきめて誓ふ。【厲行】……行をはげます。厲は勤勉なり。

講義　信秀には、十二人の男子と四人の女子とがあり、妾腹の長男は、信廣で、その次が信長である。信長の幼少の時の名は、吉法師と云つた。信秀は、自身は、古渡に於て元服し、名を信長とつけ、字を三郎と云つた。その明くる年に、信長は、始めて兵士を引き連れて、三河に討つて入り、今川氏に附いて居る城なる吉良、大濱を攻めて、火を放つて引き返した。信長は、幼少の時より、無作法にして氣儘であつて、武事をひどく好んで居り、その著て居る衣服は、並はづれたる大なるものを用ひ、このんで、大なる刀を佩びて居つて、其の出で、町中を歩行するときには、あるひは、人の肩によりかゝつて、餅や菓を食べながら歩行くこともあつて、實に傍に人なきが如く、我がまゝ勝手なる振舞をすることが多く、常に馬を乘りならし、弓を射ることや鐵砲を打つことを稽古し、水練を稽古し、近侍の者共を寄せ集めて、竹槍を以て仕合をなさしめて曰ふには、槍は長いものほど利益があると曰つて、そこで、長さ二丈の槍を造つた。信長は、信秀に嗣いで立つに及びて、上總介と稱した。次の弟行は勘十郎と稱した。あるとき、父信秀の爲めに、法事を營んだが、信長と信行とは一所に行きて、位牌の前に禮拜した。其時、親て居る者が甚だ多かつたが、信長は、先づ進んで、香を一握つかんで、香鑪の中に投げ入れ、一度禮拜して立ち出でた。信行は容態をとのへて、香をひねつて、禮拜し平伏して居ること、やゝ暫くであつた。親て居つた人々は、ひそかに、信行を褒めた。西海道地方の坊主があつて、其人々の中に居つて、信長の人相を見て曰ふには、この子は英雄であると曰つた。けれども、信長は、わが儘勝手が日增しに甚しく、平手政秀は、たび〳〵之を諫めた。政秀の子が、名馬を持つて居つたが、信長は、之をくれろと請うたけれども、其子は、斷わつて、獻上することを承知しなかつたので、信長は、怒つて、とう〳〵其親なる政秀を憎み、政秀の言葉を聞き入れなかつた。政秀は、憂へもだえて曰ふには、吾、先君よりも役の委託を受けて居りながら、信長公の過失を正し救ふことが出來ないのであれば、どうして、人間の内に生きて居られやうぞと曰つた。かくて、天文二十二年の正月に、政秀は、遂に自殺して仕舞つた。すると、信長は、大に驚き歎きて、自分で自分の行爲を咎め、引き籠りて外に出でず、政秀の爲めに御寺を建築して、政秀寺と名づけ、政秀の命日には、必ず御寺に參詣し、自ら心に誓つて曰ふには、吾、今日となつて徒らに後悔したとても、何の益も無いことである。過失を改め直し、行をはげまし勤めて、大なる功績を天下に立てゝ、そして、前の失策をつぐなふべきであると曰ひ、こゝに於て、ますます、武事を講究し、近隣の諸國に對して用心して兵備を嚴重にした。

齋藤秀龍。以其婦翁欲一見四月。會于富田正徳寺。秀龍豫使將士盛服列坐。欲延信長過其前。以試其動止也。至期。秀龍微行。潛道傍民舍。以覘信長過。信長爲茶筅髻。著闊袖。穿虎皮袴。佩縄縏刀及大瓢。健士八百人。弓銃朱幹槍。各五百。從其前後。秀龍以爲信長麤野。命其行人。以草具供之。信長至寺。入屏風中。結髮更衣而出。儀容閑雅。雖從者皆驚。秀龍使其二宰春日。堀田出迎。信長不與言。過群士前。上堂倚柱而坐。頃焉。秀龍出。信長如不見者。堀田進曰。是山城守也。信長乃顧秀龍曰。適在道傍民舍中所見者。何酷類公也。乃接目見之。於是。秀龍復命具酒饌如儀。既畢。自送信長者數里。既別。目送久之。曰。吁乎。美濃一國。吾終不得不爲之贄幣也。信長時年二十。

字解　【婦翁】……しうと、妻の父。【富田】……尾張に在り。【盛服】……立派なる服裝。【動止】……擧動、樣子、立振舞。【覘】……うかゞふ、物の陰より見て居る意。【茶筅髻】……髻は音ケイ。髮の結、もとゞり。ちやせんなりのもとゞり。【闊袖】……音クワツシウ。濶は廣き也。廣き袖の浴衣。【縄縏刀】……縄縏は音ジヨウコウ、縄の柄絲、なはのつかいと。縄を柄絲としたる刀、縄を以て柄を卷きたる刀。【健士】……强さうな侍。【朱幹槍】……朱塗の柄の槍。【麤野】……音ソヤ。麤は又粗に作る。野は鄙なり。粗陋に野卑なる樣子。【行人】……命を行ふ人、接待係。【草具】……草は粗なり。粗末なる料理。【儀容閑雅】……儀は威儀なり。閑は習なり。雅は正なり。威儀容貌しとやかにしてみやびなること。【二宰】……宰は家臣の稱。【春日】……丹後守。【堀田】……道空。【頃焉】……しばらくありて。【適】……さきに。【酷】……はなはだ。【類】……似る。【酒饌】……音シユセン。膳部。【如儀】……本式通りにする。【目送】……見送る。【吁乎】……あゝ、嘆息の辭。【贄幣】……音シヘイ。初めて女婿に送る幣物。むこひきでもの。【美濃一國吾終不得不爲之贄幣也】……美濃一國をば仕舞には婿引出にせねばなるまい。實は美濃を取られることを云ふ也。

講義　齋藤秀龍は、信長のしうとであるので、是非とも一度遇ひたいと思うて、四月に、富田の正德寺に於て會見することにした。秀龍は、前以て將士に命じて、立派なる服裝をなさしめ、之をずらりと列坐せしめ置き、信長を案内して其前を通らしめ、以て其起居動作を試みやうと思うた。其期日に至りて、秀龍は、微服してしのび行き、道の傍の百姓家に潛みかくれて、信長が通り過ぎるのをのぞいて居つた。すると、信長は、茶筅まげと云ふ髮の結ひ方をなし、ひろき袖の衣服を著、虎の皮にて作れる袴を穿き、縄を柄絲としたる刀と大なる瓢簞とを腰にさげ、屈强なる武士八百人、弓や鐵砲を持つて居る者五百人、朱塗の柄の槍を持つて居る者五百人が、信長の前後に從つて、通り過ぎた。秀龍は、其風采を見て、信長は粗雜野卑なる人間であると思うて、其接待役に命令して、粗末なる料理を信長に供へさせやうとした。信長は、寺

に到著して、屏風の中に入り、髪を結ひ直し、衣眼を著換へて立ち出でると、其威儀容貌は、禮儀になれて、みやびやかに奥ゆかしきところがあつたので、信長の隨從者といへども、皆驚いた。(秀龍等美濃の人々の驚いたことは、勿論である。)秀龍は、其二人の家老春日丹後、堀田道空をして、出で迎へしめた。信長は、之に向つて物をも言はず、列坐して居る群士の前を通り過ぎて、堂に上り、柱にもたれて坐つた。しばらくすると、秀龍が出でたが、信長は、少しも見ない振りをして、挨拶をもしなかつた。すると、堀田が進み出で、曰ふには、是れが山城守で御座りますと曰つた。信長は、そこで、秀龍を振り向いて見て曰ふには、先刻道傍の百姓家に於て見た人が、まことにあなたによく似て居ると曰ひ、そこで、挨拶をした。こゝに於て、秀龍は、また言ひ附け直して、酒や食物を具へること、本式の通りにした。既に會見の禮も畢りて後、秀龍は、自身に信長を見送ること、數里に及び、すでに別れて後、その後姿を見おくること、やゝ暫くであつた。そして曰ふには、あゝ、この美濃一國をば、吾は、仕舞には、信長の智引出としなければならぬであらうと曰つた。信長は、その時に、二十歳であつた。

先是。常祐死于戰。其遺臣織田三位。坂井大膳。河尻左馬等。擁常祐子彦五郎。與信秀。信長。構兵。斯波義統者。義良孫也。居清洲城中。竊右信長。彦五郎等覺之。不自安。二十三年。七月。坂井。河尻等襲義統。弑之。毛利秀高以義統孤兒。脫走。來那古野。信長奉之于天王坊。謂將士曰。清洲。我宗家也。而弑我累世之主。不可不誅。乃遣柴田勝家等七將。攻清洲。與三位。左馬。戰于城外。斬之。大膳使人乞援於守山城主織田信光。信光陰謀之信長。信長使佯許之。弘治元年。四月。大膳延信光於城內。自與兄大炊來見。信光率兵而往。及見大炊。立拔刀斬之。大膳出奔。信長馳至。圍彦五郎。數其弑逆。誅之。終取清洲。徙居焉。令信光居那古野。食河東郡。已而信光家內變。爲其下所害。信長以林通勝爲那古野留守。

【彦五郎】……信豐。【右】……たすく。【秀高】……一に秀孝に作る。【守山】……尾張に在り。【弘治】……後奈良帝の時の年號。【大炊】……義宗。【數】……責む。【河東】……恐らくは海東の誤ならんか。

【考證】これより先に、織田氏の本家の常祐は、美濃の稻葉山の合戰に討死したが、其遺りたる家臣織田三位、坂井大膳、河尻左馬等が、常祐の子彦五郎を擁立てゝ、信秀、信長と、兵を構へて爭うた。斯波義統は、義良の孫であるが、清洲の城中に居つて、ひそかに信長を助けたが、統のみなし兒を引き連れて、自ら安心が出來ないので、天文二十三年の七月に、坂井、河尻等は、義統を襲うて、之を弑した。毛利新助秀高は、義清洲の織田氏は、我が本家である。けれども、わが代々の主君を弑害せし以上は、之を誅戮しないわけには行かぬと曰ひ、そこで、柴田勝家等七人の大將を派遣して、清洲を攻め、三位、左馬と、清洲の城外に戰つて、之を斬つた。すると、大膳は、使者を遣はして援を守山の城主なる織田信光に乞はしめた。信光は、ひそかに、此事を如何に處置すべきかを信長に相談した。信長は、佯つて之を承諾せしめた。弘治元年の七月に、大膳は、信光を清洲の城內に引き入れ、自ら、兄の大炊とともに來つて面會した。信光は、兵士を引き連れて行き、大炊に面會するに及んで、卽座に、刀を拔いて之を斬つた。大膳は、出で奔つた。そこで、信長は、馳せて清洲に至り、彦五郎を圍み、其弑逆の罪を責めて、之を誅殺し、終に清洲を取り、徙つてこゝに居り、信光をして那古野に居らしめ、河東郡を領地とした。とかくする中に、信光の家に、內輪の騷動があつて、其部下の者の爲めに殺害せられた。そこで、信長は、林通勝を以て、那古野の留守居役となした。

通勝患信長慓悍。與弟光春。柴田勝家。謀弑之而立信行。信長覺之。二年。五月。信長獨與四弟信時。卒往那古野。詗之。光春耳語通勝曰。是天幸也。宜速行大事。通勝不忍。信長還。砦于名家。令佐久間大學守之。八月。勝家。光春各將千騎。急攻名家。名家告急於清洲。信長卽率見兵七百。赴援。使織田造酒丞等當勝家。而自與光春戰。我兵不利。隊將森可成謂信長曰。今日之戰。我軍克矣。信長問何以知之。曰。光春有驕色。信長欲馳。可成曰。少俟之。已而光春愈乘勝縱其麾下兵。可成曰。可以馳矣。信長乃馳。擊破之。手揮槍鎗殺光春。遂轉赴勝家軍。大呼曰。我已獲光春矣。勿使勝